

上 信 越 自 動 車 道
埋蔵文化財発掘調査報告書18

—佐久市内その4・小諸市内その2—

しばみやいせきぐん
芝宮遺跡群

なかほらいせきぐん
中原遺跡群

1999.3

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上 信 越 自 動 車 道
埋蔵文化財発掘調査報告書18

—佐久市内その4・小諸市内その2—

しばみやいせきぐん
芝宮遺跡群

なかはらいせきぐん
中原遺跡群

1999.3

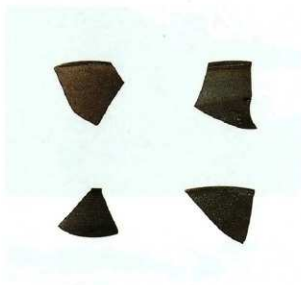
日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



芝宮遺跡群全景



中原遺跡群全景



芝宮：越州窯系青磁



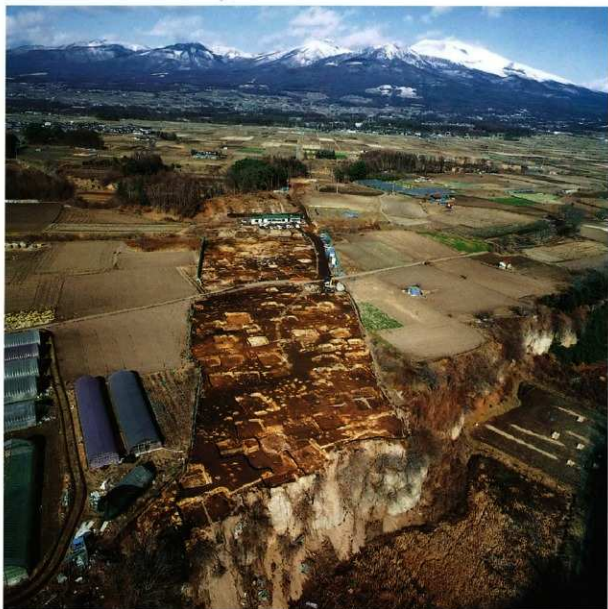
芝宮：3号溝出土海獸葡萄鏡



中原：112号住居跡カマド周辺



中原：4号住居跡出土鉄鏢



中原遺跡群 上空から浅間山を望む



芝宮遺跡群 遠方に中原遺跡を望む

序

上信越自動車道は群馬県藤岡ICから長野県を縦断し新潟県境までのび、現在ではなくてはならない高速交通網のひとつとなりました。第18回冬季オリンピック長野県大会において、長野新幹線とともに一翼を担ったのは記憶に新しいところです。

上信越自動車道の建設に係る発掘調査は昭和61年から開始されましたが、佐久インター以北の発掘調査については平成4年度から6年度にかけて実施し、本格的な整理作業も平成7年度から開始しました。自動車道で群馬県側から長野県に入ると、まず眼下には佐久平が一望されます。本書で報告する遺跡群はその佐久平の北部、浅間山麓の南に広がる台地上に立地しています。その同じ立地条件の台地には長土呂・鉢師屋・宮ノ反A・周防畑などの広大な遺跡群が存在し、それらの発掘調査では多数の墨書土器・八稜鏡・石製印「伯万私印」・緑釉陶器・軒丸瓦や布目瓦の出土など官衙・仏教的な要素が色濃く、古東山道通過点や郡衙比定の論拠にもなっている遺跡群です。芝宮・中原遺跡群はそれら遺跡群の一角を形成するものであります。

発掘調査の結果は、古墳時代後期から平安時代にわたる長期間営まれた生活や生産活動を示す集落跡で、それに伴う多種多様な遺物が出土しています。芝宮遺跡群からは海獣葡萄鏡や帯金具、中原遺跡群からは鉄鐔や円面硯などが出土し、単に農業を主体に営まれた集落とはいえない一面が見えています。また、住居跡のカマドの分析から海産のマイワシの可能性のある魚骨や貝類が確認されたことも、当時の流通の一端を解明する上で貴重な資料を提供することができたと思われます。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで、深い御理解と御支援を賜りました日本道路公団、佐久市・小諸市、同教育委員会、地元対策委員会、ならびに適切な御指導と御助言を賜りました長野県教育委員会文化財保護課、また、発掘作業や整理作業に従事され献身的な御尽力を賜りました多くの方々に、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成11年3月26日

長野県埋蔵文化財センター
所長 佐久間 鉄四郎

例 言

- 1 本書は、上信越自動車道建設工事に伴い発掘調査された、佐久市内（芝宮）、小諸市内（中原）に所在する二遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、日本道路公団東京第二建設局の委託を受けた長野県教育委員会が（財）長野県埋蔵文化財センターに委託して実施した。
- 3 実際の業務は、平成4年度から6年度にかけての発掘調査は佐久調査事務所が担当し、同事務所が開所となったため、平成7年度から10年度にかけての整理作業は上田調査事務所が担当した。
- 4 上記遺跡の調査概要は、すでに『長野県埋蔵文化財センター年報9～11・14』で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 5 本書で掲載した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道線路平面図（1：500）・建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000および1：50,000）関係市町村発行の基本図（1：2,500）を使用した。
- 6 航空写真は、協同測量社・新日本航業に撮影を委託したものをを使用した。
- 7 自然科学分析・鑑定関係では次の方から玉稿を賜り、該当遺跡の記述の中に掲載した。
古代の森研究舎 吉川純子 第5章第1節
早稲田大学 樋泉岳二 第5章第2節
バリノ・サーヴェイ 第5章第3～7節
このほかの自然科学分析結果については、分析報告書の一部を引用もしくは参考とした。
- 8 本書の作成に係る執筆分担および担当業務は下記のとおりである。
白田武正 第3章第1節・第4章第1節
上沼由彦 第3章第2節(6)・第4章第2節(6)
藤原直人 上記以外の第1～6章および編集
田村 彬 遺物写真（撮影・現像・焼付け）
興水太伸 金属製品保存処理 石器石材鑑定
白鳥喜一郎 金属製品保存処理
- 9 発掘調査および報告書作成にあたって、次の諸氏に御指導・御支援を賜った。（敬称略、順不同）
茂原信生 桜井秀雄 興水太伸 寺島俊郎 堤 隆 林 幸彦 花岡 弘 峯村今左夫
三石宗一 富沢一明 藤沢平治 鈴木素行 大坪聖子 大村浩司 手塚直樹 河合 修
田代郁夫 杉山博久 佐藤仁彦 戸塚和美 山田真一 大川勝宏 上村安生 兼康保明
宇河雅之 森内秀造 内堀信雄 佐野康雄 大熊茂弘 渡辺博人 沖本 弘 渡辺 晶
城ヶ谷和広 樺原功一 寺田兼方 小林公治 西山克己
- 10 本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。
- 11 付属のフロッピーについては、巻末に説明してある。

凡 例

1 遺構番号は遺構種ごとに付してあるが、原則として発掘調査時の番号を変更しなかったため、欠番がある。

遺構番号は内容に応じ、遺構別の通し番号または遺構ごとの通し番号となっている。

2 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として以下のとおりである。

(1) 遺構実測図

調査区域図		遺構配置図	1:125
遺構図		S B (竪穴住居跡)	1:80
カマド等住居施設	1:40	S T (掘立柱建物跡)	1:80
S K (土坑)	1:80	S D (溝状遺構)	1:80
S X (性格不明遺構)	1:80	S A (柵列)	1:80

(2) 遺物実測図

土器・陶磁器	1:4		
小型石器・金属器	1:2	大型石器	1:4
銭貨拓影	1:1		

(3) 遺物写真

土器	1:3	大型土器	1:4
石器 (図面に同じ)			

3 個別遺構の実測図では、原則として新旧の新しい遺構のみ上場線で示してある。

4 遺物遺構図中の遺構名の表記は、一部記号を用いた (上記参照)。

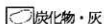
5 遺構個別図中のPit内の数値は、床面からの深さを示す。

6 実測図中のスクリーン・トーンは、下記のとおり示した。これ以外の場合は、該当項目で説明した。

(1) 遺構実測図



火床・焼土



炭化物・灰



カマド構築 (粘土)



柱痕



石断面

(2) 遺物実測図

土器の断面は、土師器は白ヌキ、須恵器は黒ヌリ、国産・輸入陶磁器は網点とした。

土器の器面は、黒色処理・赤色塗彩は網点、煤等の付着は粗い模様網点とした。

石器の断面は白ヌキ、金属器の断面は斜線とした。



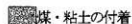
国産・輸入陶磁器



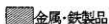
黒色処理



赤色塗彩



煤・粘土の付着



金属・鉄製品

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査の経過	(1) 発掘調査委託契約 (2) 調査体制
第2節 調査の方法	(1) 発掘調査の方法 (2) 整理の方針と報告書の構成
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	(1) 地形の概観 (2) 遺跡の立地
第2節 歴史的環境	
第3章 芝宮遺跡群	9
第1節 遺跡と調査の概要	9
(1) 遺跡の概要	(2) 調査の概要
第2節 遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 溝 (4) 土坑 (5) 粘土探掘坑	
(6) 鉄・金属製品 (7) 石製品 (8) その他	
第4章 中原遺跡群	241
第1節 遺跡と調査の概要	241
(1) 遺跡の概要	(2) 調査の概要
第2節 遺構と遺物	242
(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 溝 (4) 土坑 (5) 粘土探掘坑	
(6) 鉄・金属製品 (7) 石製品 (8) その他	
第5章 科学分析の結果	393
第1節 芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の動物遺体	393
第2節 芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の炭化種子	400
第3節 芝宮遺跡群の炭化樹種・植物珪酸体分析	406
第4節 芝宮遺跡群のリン酸・カルシウム分析	408
第5節 中原遺跡群の植物珪酸体分析	411
第6節 中原遺跡群のカマド構築材鉱物分析	416
第7節 中原遺跡群の炭化木器の樹種	418
第6章 考察	428
第1節 煮沸具の搬入土器について	428

附表

芝宮遺跡群	堅穴住居跡一覽
中原遺跡群	堅穴住居跡一覽
芝宮遺跡群	掘立柱建物跡一覽
中原遺跡群	掘立柱建物跡一覽
芝宮遺跡群	出土鉄・金属製品
中原遺跡群	出土鉄・金属製品
芝宮遺跡群	出土石・土製品台帳
中原遺跡群	出土石・土製品台帳
芝宮遺跡群	出土炭化樹種
中原遺跡群	出土炭化樹種
芝宮遺跡群	出土動物骨
中原遺跡群	出土動物骨

報告書抄録

写真図版目次

1	芝宮遺跡群	PL	1~68
2	中原遺跡群	PL	69~115

第1章 序説

第1節 調査の経過

1 発掘調査委託契約

上信越自動車道の建設計画は、昭和62年8月に高岡―更埴間約84kmの工事実施計画が認可され、工事概要が示された。これを受け、建設予定地内の埋蔵文化財の取扱いについては、日本道路公団東京第二建設局（以下、道路公団）・長野県土木部高速道路建設局・長野県教育委員会（以下、県教委）（財）長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の関係機関が協議を重ね、記録保存の措置をとることになった遺跡の発掘調査計画と自動車道建設工事工程の調整が図られた。

上信越自動車道建設事業地内の埋蔵文化財の発掘調査委託契約については、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、長野県の場合、道路公団が県教委に委託し、県教委では埋文センターに再委託する方式をとっている。

実際の発掘調査は、埋文センターが設置した調査事務所が業務を担当し、佐久管内の場合、平成4年度から6年度までの発掘調査は佐久調査事務所が管轄し、その後、6年度末をもって同事務所が開所となったため、7年度から9年度までの整理作業と一部追加調査ならびに報告書刊行については上田調査事務所が管轄した。発掘調査遺跡の年度別契約面積は下記のとおりである。

芝宮遺跡群 総面積15,990㎡ 平成4年度8,745㎡ 平成5年度5,745㎡ 平成6年度1,500㎡

中原遺跡群 総面積12,360㎡ 平成4年度7,360㎡ 平成5年度5,000㎡

2 調査体制

(1) 調査組織

平成4年度

理事長	宮崎和順	佐久調査事務所長	青沼博之		
副理事長	伊藤万泰雄	庶務課長	玉井昌二		
事務局長	峯村思司	主任	古川英治		
総務部長	神林幹生	調査課長	白田武正		
調査部長	小林秀夫	調査研究員	木内英一	白鳥喜一郎	近藤尚義
			征矢野安政	田村 彬	
			桜井秀雄	藤原直人	
		調査員	興小太伸	屋台 昇	

平成5年度

理事長	宮崎和順（10月15日）	佐久調査事務所長	青沼博之
理事長	佐藤善虎（10月16日～）	庶務課長	玉井昌二
副理事長	伊藤万寿雄	主任	古川英治

第1章 序説

事務局長	峯村思司	調査課長	白田武正		
総務部長	神林幹生	調査研究員	五十嵐敏秀	白鳥喜一郎	飯田吉隆
調査部長	小林秀夫		近藤尚義	征矢野安政	田村 彬
			藤原直人	桜井秀雄	山岡英一
			上沼由彦		
		調 査 員	尾台 昇		

平成6年度

理事長	佐藤善虎	佐久調査事務所長	青沼博之		
副理事長	田村治夫	庶務課長	玉井昌二	事務職員	小島きみ手
事務局長	峯村思司	調査課長	白田武正		
総務部長	神林幹生	調査研究員	白鳥喜一郎	征矢野安政	
調査部長	小林秀夫		藤原直人		

平成7年度

理事長	佐藤善盧	上田調査事務所長	小林秀夫(兼)		
副理事長	田村治夫	庶務課長	山口栄一		
事務局長	峯村思司	主 事	石坂 裕		
総務部長	西尾紀雄	調査第一課長	白田武正		
調査部長	小林秀夫	調査第二課長	広瀬昭弘		
		調査研究員	山岡英一 藤原直人		

平成8年度 整理作業中断

平成9年度

理事長	戸田正明	上田調査事務所長	小林秀夫(兼)		
副理事長	佐久間鉄四郎	庶務課長	山口栄一		
事務局長	青木久	主 任	小岩一男		
総務部長	山崎悦雄	調査第一課長	白田武正		
調査部長	小林秀夫	調査第二課長	広瀬昭弘		
		調査研究	藤原直人 上沼由彦		

平成10年度

所 長	佐久間鉄四郎	調査部長	小林秀夫		
副所長兼管理部長	山崎悦雄	調査第三課長	広瀬昭弘		
管理部長補佐	宮島孝明	調査研究員	藤原直人 田村 彬(写真撮影)		
主 任	池田浩之 小岩一雄				
主 事	宮澤 弘				

(2) 整理作業参加者(順不同)

待井明美 三石恵子 宮川美津枝 岩田あさ江 片桐ゆかり 柳沢尚美 増沢ふさえ
 佐々木勲美 土屋由美子 藤木正枝 三井美津子 大塚利枝 小山内玲子 倉島恵子
 竹内優子 小林尚子 小山千恵子 清子まゆみ 菅沼かよこ 松井礼子 宮原豊子
 尾島平一 大西啓子 雲井博子 宮島珠子 摺田伸子 丸山公子 丸山すみ子
 丸山ひろ子 今井美枝子 西東千佳子 飯田和子 田島富子 梅原祝

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査に当っては、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に基づき、各遺跡ごとに具体的な実施計画を策定し、発掘調査を行った。

(1) 遺跡名称と遺跡記号 遺跡名は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を用いた。3文字の1番目は、県内を9地区に分けた地区記号であり、2・3番目は遺跡名の頭文字である。芝宮遺跡は、佐久地区の地区記号「D」と遺跡名SIBAMIYAの「S」と「Y」を組み合わせ、「DSY」・中原遺跡群は「DNH」とした。各種の記録類や遺物の注記はこの記号を用いている。

○芝宮遺跡群（しばみやいせきぐん）－DSY

○中原遺跡群（なかはらいせきぐん）－DNH

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構名称は検出時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合がある。そのため遺構の形状および特徴で区分し、遺跡記号と同様に記録の便宜を図るため、記録類・注記には次の記号を用いた。

ただし、本報告書では、原則として図版内の遺構は記号を使用した。記述は「1号竪穴住居跡」は押図中では「SB1」のように略して遺構名称を表記した。略称には「SB」竪穴住居跡、「ST」掘立柱建物跡、「SD」土坑などを用いてある。

遺 構 記 号

記号種類 ・ 性 格

SB 竪穴住居跡

ST 掘立柱建物跡

SD 溝状遺構

SK 土坑（ゴミ穴・貯蔵穴・粘土探掘坑など）

SA 柱穴列・棚列跡

SX その他、性格不明遺構（中原では粘土探掘坑にも用いている）

(3) 調査区の設定

ア 調査区は、遺跡ごと、国土地理院の平面直角座標系の第Ⅷ系（ $X=0.0000$ $Y=0.0000$ ）を基点に2000mの倍数値で200×200mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査範囲をカバーする最小限に抑え、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・・のローマ数字を与えた。

イ 大々地区を40×40mの25区画に分割し、大地区とする。大地区は、北西から南東へA～Yのアルファベットを与えた。

ウ 大地区を8×8mの25区画に分割し、中地区とする。中地区は、北西から南東へ1～25の番号を与え、遺構測量の基準線とした。

第1章 序説

エ 大地区を 2×2 mの400区画に分割し小地区とする。小地区は、大地区の北西隅を起点としX軸上に西から東へA～Tのアルファベットを、Y軸上に北から南へ01～20の数字を与え40区分し、両者を合わせて小地区名とする。遺構外遺物の取り上げの基準とした。

現場における調査区の設定は、中地区（ 8×8 m）が基本で、業者委託をして実施したが、一部は調査研究員が測量し設定した。標高は公団の「事用水子点もしくは公共水準点」を利用し、ベンチマークを設定した。遺構測量は、原則として簡易遣り方で行い、一部は平板測量を行った。また、全体図と遺構実測図の一部については、業者委託の航空写真測量を採用した。

2 整理方針と報告書の構成

調査結果については、報告書への掲載不掲載にかかわらず、遺物の接合・復元・実測と遺構の計測などできるだけ資料化に努めたが、諸種の制約からこれらすべてを報告書に掲載することはできなかった。資料化されながらも、記述や図示することのできなかつた遺構や遺物については、観察表や計測表のみを示して事実記載に代えた事例もある。

調査報告については、佐久管内の対象遺跡を位置的に東から西の順番、すなわち芝宮遺跡群、中原遺跡群の順で掲載した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

1 地形の概観

佐久盆地は長野県の南東部の東信地域に位置し、山梨県・埼玉県・群馬県に接する。北に浅間・東は荒船・南西には蓼科の3つの火山体に囲まれ、北西側は御牧原台地に接した標高600~700mを測る高原性盆地である。

北にそびえる浅間山(2,542m)は上信火山帯の一角、浅間・烏帽子火山群の中に位置づけられる三重式活火山で、今なお時折噴煙を見せている。盆地北半部は浅間山の噴出物である第一軽石流が、古い黒斑火山の塚原泥流の上に堆積し形成された火山性の台地である。その台地上には浅間を起源とする小河川が南西方向に流下し、侵食されやすい土壌であるため田切り地形が形成されている。田切りの底面には水田、台地上では畑作地が広がっている。

東は荒船山(1,423m)を筆頭とする開析の進んだ古い火山である荒船・碓氷火山群に接し、その南方には金峰山(2,595m)を主峰とする関東(佐久)山地が連なっている。これらの峰を源流とした千曲川の支流でもある内山川・志賀川・香坂川などが西流する。

南西部には八ヶ岳・蓼科・霧ヶ峰の火山群の形成した山地が裾野を広げ、その縁辺の平地部は盆地南半にあたり北上する千曲川の氾濫原が広がっている。

2 遺跡の立地

山に囲まれた佐久地方は、碓氷峠・入山峠・志賀越・内山峠・余地峠・十国峠・十字峠・大池峠・信州峠・富士見峠・大河原峠・夏沢峠・雨境峠を始めとして多くの峠をもち、他地域との交流に関して峠を無視することは出来ない条件に位置している。

上信越自動車道は荒船火山の破風山中腹を貫き佐久盆地に下り、浅間山の南麓を北上する。自動車ルート内に所在する遺跡の立地を地形区分で分類すると、山地と平地に大区別され、平地はさらに台地と沖積段丘に区分できる。

芝宮遺跡群・中原遺跡群の立地する佐久盆地北半部は、凝灰角礫岩を基盤としてその上部に浅間の第1軽石流をのせた火山性の台地である。他にその台地に立地する遺跡は、栗毛坂・長土呂・聖端・周防畑・前田遺跡などが知られ、東山道・牧との関連が指摘されている。

第2節 歴史的環境

佐久地域で確認された人類の軌跡は、立科の美笹高原で確認された立科F遺跡から始まる。始良丹沢火山灰層(AT)・八ヶ岳起源の降下軽石より下層から台形礫石器が確認されたことから後期旧石器とされている。また、黒曜石の水和層年代分析の結果からも、多少のばらつきはあるものの三万年前の年代が与えられている。

佐久盆地の東部、群馬県境寄りの関東山塊には旧石器時代の八風山遺跡群・香坂山遺跡が知られている。八風山麓一帯は、石器の材料となるガラス質安山岩の原産地であり、八風山系から流出する香坂川には現在でも転石としてこれを認めることができる。

それらの遺跡の性格はガラス質安山岩を用いた石器製作跡を中心とするもので、そこで製作された製品が近年では佐久平のみならず関東地方でも出土しており、各地との交流の一端の解明に近づいたといえる。八風山ガラス質安山岩は、縄文時代に入ってもなお石器の石材として普遍的に用いられ、昭和63年の上信越自動車道の建設に伴って発掘調査された下茂内遺跡では、後期旧石器時代終末から縄文時代初頭（約1万4千年前）にかけての尖頭器製作跡が確認されている。下茂内遺跡で確認された尖頭器製作跡は第1文化層・第2文化層の二つの時期に分けられている。

第1文化層は八風山ガラス質安山岩を用いた尖頭器の製作跡で21ヶ所の石器集中地点が確認され、出土した石器は約3万を超えそのほとんどがガラス質安山岩であった。

第1文化層の下層、下茂内軽石（大窪沢第2軽石）のさらに下から第2文化層が確認され、18ヶ所の石器集中地点からは約7万点にもおよぶ八風山ガラス質安山岩の石器が出土している。両文化層からは10万点にもおよぶガラス質安山岩の石器・石片が発見されたが、そのほとんどが尖頭器製作にかかわる破片であり、完成品はほとんど見られない。和田峠周辺の黒曜石の原産地遺跡群に匹敵する石器石材の原産地遺跡群として注目されている。

縄文時代は、平地部には生活の痕跡が少なく、遺跡の多くは蓼科・八ヶ岳山麓・佐久山塊南半、浅間山麓に分布する。遺跡の規模も比較的大規模なものを含んでいて、縄文時代の生活の拠点が佐久盆地周縁にあったことが知られる。そこは落葉広葉樹林が主体で、居住地と自然採集の対象となる食料に恵まれていた。これまでに発掘調査された縄文時代の代表的な遺跡には、草創期の寺田遺跡（佐久市）、前期の塚田遺跡（御代田町）・後沢遺跡（佐久市）、中期の川原田遺跡（御代田町）・中村遺跡（佐久市）・吹付遺跡（同）・寄山遺跡（同）、後期の滝沢遺跡（御代田町）などがあり、いずれも豊かな自然環境の中で集落が営まれ、自然採集を中心とした活発な生業活動が行われていたことが明らかにされている。

昨年度刊行された新幹線関連のルート上では縄文時代遺跡の希薄な部分を通し、縄文集落の調査には恵まれなかったが、浅科村内に所在し、千曲川流域の沖積段丘に立地する砂原遺跡と中平・田中島遺跡、布施川の段丘に立地する土合遺跡では遺物包含層であるが縄文時代前期・中期・後期の遺物が多量に出土した。関連遺構はごくわずかしか検出されなかったが、いずれも付近に該期の集落跡が存在することが実証された点は大きな成果であった。

自動車道ルート上の縄文時代の遺跡は先にあげた縄文時代初頭の下茂内遺跡をはじめとして、三田原遺跡・郷土遺跡（来年度刊行予定）が存在し、縄文時代中期の良好な集落資料を得ている。

弥生時代の遺跡は、礫床墓・形象埴輪群の出土した北西ノ久保遺跡や久保田遺跡・周防畑B遺跡・清水田遺跡が田切り地形の発達した台地・微高地上に立地し、拠点集落と考えられている。盆地南部には湯川・滑津川・片貝川などの河川によって形成された沖積地が発達し、その沖積地を北に見下ろす台地上にも後沢遺跡をはじめとして諏訪神社境内遺跡・市道遺跡など弥生時代から平安時代の佐久を代表する集落が知られている。

佐久平では弥生時代後期に文化的な最盛期をむかえ、集落数がピークに達すると考えられている。続く古墳時代前期～中期になると集落数は減少し、規模も縮小する。前期～中期の代表的な遺跡では、清水田遺跡（佐久市）・一本柳遺跡（佐久市）・池畑遺跡（佐久市）・下小平遺跡（佐久市）・腰巻遺跡（佐久市）・大ふけ遺跡（佐久市）などがあげられる。

古墳時代後期以降、佐久平の集落遺跡数は爆発的に増大する。該期の集落立地は高位段丘の田切り台地上に位置し、計画的な村落が大規模に営まれている。集落の存続期間は6世紀から認められ、7世紀には大規模に展開し、9世紀後半まで継続したと考えられる。そして10世紀には単発的になり、いわゆる「山積み集落」が形成されていく。古墳時代後期以降の集落の特徴として6世紀あるいは7世紀に展開した集落は



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

そのほとんどが途切れることなく連続と営まれていることである。

古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡としては「河原寺式」の瓦を出した周防畑遺跡を始めとして聖原遺跡(佐久市)・長土呂遺跡(佐久市)・銚師屋遺跡(佐久市・小諸市・御代田町)・宮ノ反遺跡(小諸市)・竹花遺跡(小諸市)などの遺跡からは馬具・八咫鏡・石製印「伯万私印」・金銅製鈴・緑釉陶器・皇朝十二銭などが出土している。これら発掘調査の成果から古東山道・令制東山道・塩野牧・定額寺と推定される妙楽寺・駅の比定地・官衙的性格の強い集落などの指摘がされている。

引用参考文献

働長野埋蔵文化財センター 1991 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内

第2章 遺跡の環境

その2-木戸平A遺跡ほか』

勸長野県埋蔵文化財センター 1992 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2-佐久市内

その1-下氏内遺跡』

佐久市教育委員会 1985 『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』

軽井沢町教育委員会 1986 『軽井沢町遺跡詳細分布調査報告書』

佐久市 1988 『佐久市志 自然編』

佐久市 1995 『佐久市志 歴史編(1) 原始・古代』

佐久市 1993 『佐久市志 歴史編(2) 中世』

御代田町誌刊行会 1992 『御代田町誌 図説編』

第3章 芝宮遺跡群

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

佐久盆地の北部、佐久市と小諸市の市境に位置する。浅間山の南斜面に広がる「田切り地形」の台地上の平坦面にある。遺跡の南側は浅間火山の裾野1,000m付近から発し「田切り」谷を形成しながら流下する濁川に接し、その対岸には長土呂遺跡群が広がる。北側には比高差約12mの「田切り」谷を隔てて中原遺跡群が存在する。

周囲の台地上には古墳時代後期から平安時代にわたる鉾師屋遺跡群・宮ノ反A遺跡群・周防畑遺跡群・長土呂遺跡群等の大規模な遺跡群が展開し、芝宮遺跡群もそれらの一角を形成している。これら遺跡群の存在は早くから知られるものであり、古代の牧・古東山道・令制東山道を考える上でも注目されてきた遺跡群である。

佐久盆地北部域は、上信越自動車道・長野新幹線の工事に伴う事前の発掘調査やその開通に伴って急激に開発が進み発掘件数・面積が増大している。近年、それらの発掘調査の成果が刊行されつつある。大規模な遺跡群の群落は調査単位、あるいは一遺跡群のみの検討では読み切れない部分がかかりあったが、今後資料の増大により多角的な様相の究明が期待されるが、そういった意味で本遺跡もその一端の資料を提供できた。

2 調査の概要

本遺跡の発掘調査にあたっては、平成4年4月6日に現地で道路公団（用地課・小諸工事区）・佐久市（新幹線高速道課・土木課・農林課）・あさま農協御代田支所・西屋敷区・地権者会畑灌組合等関係者による畑灌施設の取扱いと佐久市側道拡幅追加買収に関する協議を行い、4月11日から表土剥ぎを開始し、4月13日から作業員が従事して本格的に着手した。当初の発掘調査計画では、本線部分15,000㎡を対象に平成4・5年度の2カ年で調査を完了させる予定であったが、用地残件の取去時期が予定以上に遅れたため、一部については平成6年度に実施せざるを得なくなった。また、佐久市による側道の追加買収部分990㎡についても、本線部分と一体で調査することとなった。

年度別の調査面積は、平成4年度8,745㎡（本線8,000・側道745）、5年度5,745㎡（本線5,500・側道245）、6年度1,500㎡（本線）で、総面積15,990㎡である。

発掘調査は、調査区を北部から南部に向けて便宜的にⅠ～Ⅱ区とし、4年度はⅠ・Ⅲ区、5年度はⅡ区、6年度はⅡ区の残りを対象に実施した。

3年にわたる発掘調査で検出された遺構は、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡245軒・掘立柱建物跡90棟・溝5条・土坑40基・ピット約2100基である。

遺物は、土器類（土師器・須臾器・灰釉陶器）・石製品（管玉・勾玉・白玉・霰玉・小玉紡錘車・磨石・凹石・コモ編み石・砥石・石鏝）・金属製品（鉄鏝・刀子・鋤先・鎌・鉄・金環・馬具・帯金具・銭貨）・羽口・鉄滓・動物骨などが出土した。

調査日誌抄

第3章 芝宮遺跡群

平成4年度

- 4月11日 表土剥ぎ開始
- 4月13日 調査開始
- 7月15日 現地説明会
- 7月30日 I区の空撮・測を実施
- 12月8日 III区の空撮実施
- 12月24日 調査終了

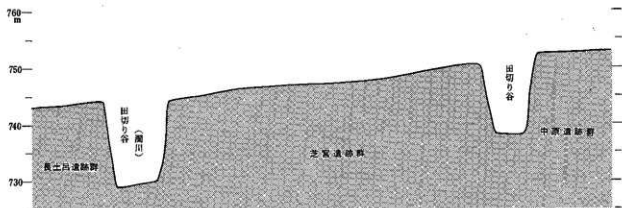
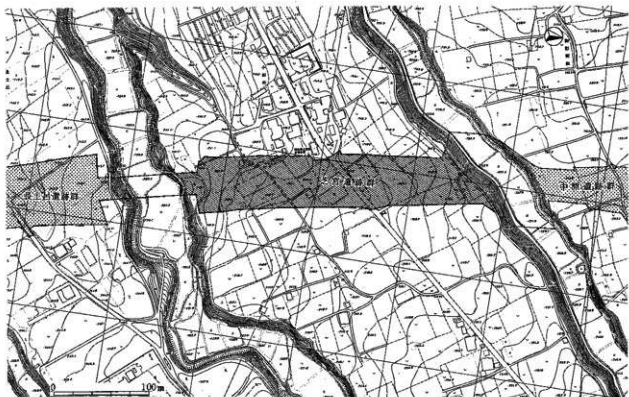
平成5年度

- 4月5日 調査開始

- 8月10日 II区の空撮実施
- 9月20日 II a区の空撮を実施
- 10月30日 II c区の空撮を実施
- 11月11日 調査終了

平成6年度

- 4月11日 調査開始
- 5月25日 II c区空撮実施
- 6月10日 調査終了



第2図 調査範囲、調査区断面

第2節 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第3・89図、PL1) 位置

I J-9

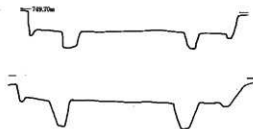
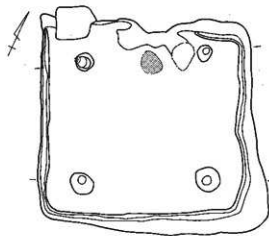
206号住居跡より新しく、1153号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されているが残存状態は悪い。燃焼部は壁面よりやや手前に有り、支脚石と思われる軽石が袖の東側で確認された。

施設：床面は全面明瞭に認められたが、硬化は部分的であった。周溝は北壁西半を除き確認され、支柱穴と考えられるPitが4基確認された。覆土はブロック状に土壌が堆積するため人為的なものと考えられる。

掘形は東側半分が深く、西側が浅いタイプであった。

遺物と時期：覆土から須恵環(132図1~5)・蓋(6・7)・甕(8)・鉢(9)が出土している。(8・9)は時期的に疑問があるが、他の遺物から遺構の時期は8c後半と考えられる。



0 2m
第3図 1号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡(第4・89図、PL1) 位置

I J-5

209・210号住居跡・47号建物跡と重複関係にあり、本跡はそれらより古い。図面上209・210号住居跡より新しく記されているが、調査ミスであり、本跡が一番古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残し両袖の先端に石を配し本体を粘土で築く先石粘土覆の構造をしているものと思われるが、遺存状態は悪く右側の袖は完全に崩壊している。燃焼部・煙道は遺構外に若干張り出している。

施設：周溝は西壁と北壁の西側が欠落し全周しない。4基の支柱穴の他、床面中央の南寄りに1基検出されている。

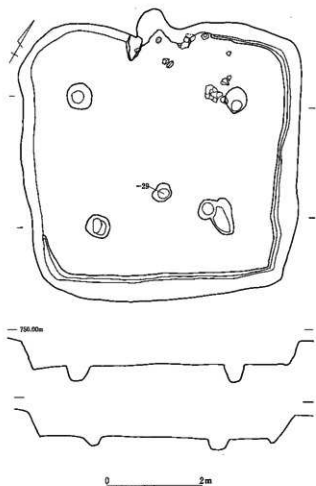
遺物と時期：覆土から環(132図1・2・3)・蓋(4・5・6)・甕(7・8・9)が出土しているが、宝珠のつまみのついた(5)は何らかのまぎれ込みと考えられる。また、鉄製品では穂積具(190図8)が出土している。これらの遺物から遺構の時期は7c前半としておきたい。

4号竪穴住居跡(第85図) 位置 II A-17

103号建物跡と重複し、それより古い。

カマド：北壁の西寄りに位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。また、構築に際し壁を掘り込み若干外に張り出している。

施設：床面は明瞭に硬化し貼床が施され、その直上には炭化物層が確認された。Pitは3基確認された



第4図 3号竪穴住居跡

された。主柱穴と考えられるPitが4基とカマドの右脇に1基、南壁に壁柱穴と思われる3基のPitが確認された。

遺物と時期：石製品では有孔円盤(198図47)が覆土から出土している。また、土器では覆土から坏(132図1・2・3)・蓋(5)が、北壁西半では甕の上半部が正位で置かれた状態で3個体(6・8・9)検

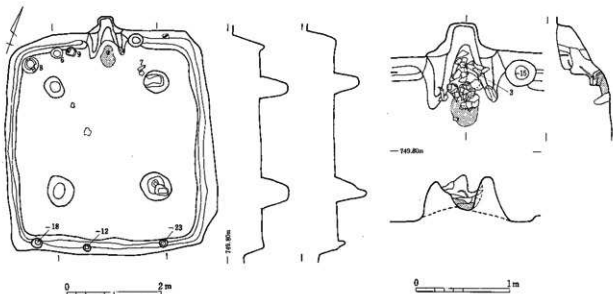
が規則性がない。カマドの左脇のPitは貯蔵穴、南壁際のPitは入り口、床面中央部のPitは柱穴と考えられる。

遺物と時期：自然系の遺物としては床面直上の炭化樹種があげられるが、同定の結果はモモ・クスギ・ナラ・オオバヤナギ・ススキであった。床面から坏(132図2)、覆土から坏(1)・蓋(3)・甕(5)が出土しているが、(3)の環状つまみの蓋は時的に若干ずれる可能性がある。これらの遺物から遺構の時期は7C前半と考えられる。

5号竪穴住居跡(第5・86図、PL1)位置 IF-6

40号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残し袖の先端に石を配し本体を粘土で築く構造をしている。面取りされた軽石製の支脚石が残り、天井部は崩落しているものの粘土を構築材とする袖の遺存状態はやや良好であった。右袖の脇には深さ15cmのPitが確認された。

施設：床面の硬化は明瞭で、貼床が認めら



第5図 5号竪穴住居跡

出されている。実測に耐えられる物ではなかったが、東海系と考えられる甕の破片が3個体分(8片)覆土から出土している。遺構の時期は(2)の半球状の坏などから7c後半と考えられる。

6号竪穴住居跡(第86図) 位置 II A-17

106号建物跡と重複し、本跡の方が古い。

カマド:北壁中央に位置し、遺存状態は不良で、破壊されたカマドの粘土が本跡の中央付近まで散乱していたが、本来は袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。

施設:床面はやや軟弱で若干凹凸が認められる。主柱穴と思われるPit 4基以外に、北東コーナーの貯蔵穴状のもの以外に3基確認されているがその規模・位置から本跡に伴うものかどうか疑問である。周溝は北東コーナーを除いて確認された。掘形は周囲が浅く中央部が深いタイプである。

遺物と時期:石製品では円盤状軽石(198図50)が覆土から出土している。土器は坏(133図1・2・3)がカマドと床面から、甕(4・5・6)が床面から出土している。他に床面上の南西コーナー・南東コーナー付近からも編み石が多数出土した。遺物から遺構の時期は7c中葉と考えられる。

7号竪穴住居跡(第6・95図、PL1) 位置 IO-24

189号住居跡より新しく、188号住居跡より古い。

カマド:北壁の中央に位置するが遺存状態は不良である。左袖には土器(134図10)が残っており、袖の先端に土器を補強材として埋納した粘土主体の構造である。

施設:床面は明瞭で中心部とカマド手前は堅牢であった。4基の主柱穴と思われるPitの他、南東コーナーに10cmほどの浅いPitが検出された。周溝は全周する。

遺物と時期:カマドから坏(133図2)・甕(10)、床面から甕(9)が出土している。坏(1・2)や次世代の武蔵甕の胎動を思わせる甕(4)などから、時期は7c後半と考えられる。

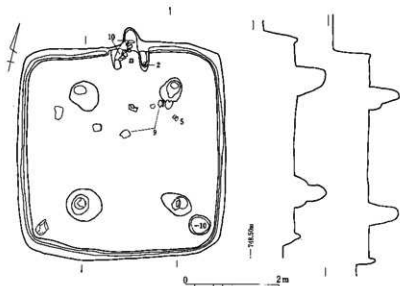
8号竪穴住居跡(第86図) 位置 II A-21

28号・203号住居跡より新しい。

カマド:北壁中央に有り残存状態は良くない。天井部は崩落しているが白色の粘土によって造られた袖が確認された。燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの可能性が考えられる。

施設:床面の硬化は明瞭で、掘形調査によって貼床を確認することができた。柱穴に規則性はなく南壁沿いに4基のPitが確認されている。それらの深さは15~22cmと浅く位置からも柱穴とは考えにくい。あえていうなら、中央の2基は入り口のはしご穴であろうか。周溝は全周する。

遺物と時期:床面からは坏(134図2)・蓋(6)・甕(8)が出土



第6図 7号竪穴住居跡

している。遺構の時期は坏(1・2・3)・蓋(4・5・6)から9c初頭と考えられる。壘(7)がやや時期が溯るものと思われ、いわゆる、「コ」の字状の萌芽が感じられない。

9号竪穴住居跡(第92図) 位置 IO-3

59・65号住居跡と重複関係にあり、本跡の方がそれより新しい。

カマド:北壁中央に位置し、焚き口の横と思われる位置に補強のための石材が検出されたことから、地山を掘り残し両袖の先端に石を配して本体を粘土で築く、先石粘土覆の構造をしていたものと考えられる。火床面は被熱によって堅牢に硬化していた。

施設:本跡の西側は調査区外におよび、一部は攪乱に壊されている。床面は軟弱で不明瞭であったためカマドの火床面から追っていった。柱穴と考えられるPitが3基確認されたが残る1基は攪乱のため不明である。壁柱穴と考えられるPitが4基と南壁中央の1基は入り口であろうか壁際に確認できた。

遺物と時期:(10)の蓋以外は覆土出土である。坏(134図1~7)・高台皿(8)・蓋(10・11)などから時期は9c中葉と考えられる。

11号竪穴住居跡(第88図) 位置 II F-2

109号建物跡と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド:住居跡内の床面上には多量の粘土が確認され、北壁に位置するカマドにはほとんど粘土が見られなかったが、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。崩落のため詳細は不明であるが煙道は遺構外に比較的長く伸びていたようである。

施設:床面は軟弱で、地山を床面としていたようである。南西コーナーの張り出しは本跡に伴うものではなく、調査ミスにより他の土坑を掘ってしまったものと考えられる。柱穴など他の施設は検出されていない。

遺物と時期:覆土から手捏ね(135図1)・壘(2)が出土している。遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

12号竪穴住居跡(第7・88図、PL1) 位置 II F-11

27号住居跡と重複関係にあり、27号住居跡より古い。

カマド:北壁中央に位置するが、右半分は27号住居跡によって壊されている。残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられ、火床が明瞭に硬化していた。

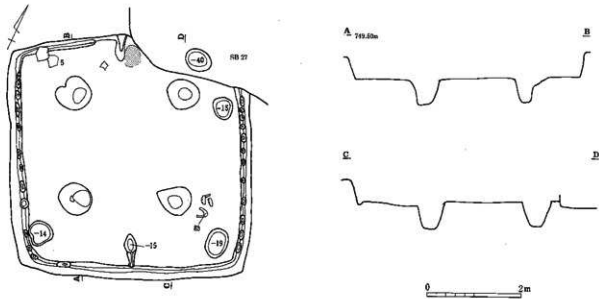
施設:床面は明瞭に硬化していた。主柱穴以外に4基のPitが見られるが、カマド脇のPitは貯蔵穴と考えられ、南壁中央のPitは入り口に伴うものと考えられる。他のものは補助穴であろうか。周溝は残存部で全周するが、周溝内には板材の痕跡と思われる小Pitが連続して穿たれていた。

遺物と時期:鉄製の鎌先(190図1)が床面から、白玉(198図62)が覆土から確認されている。土器では坏(135図1)・須恵壺(3)・甌(5)が床面から出土している。(1・2)の坏から時期は6c後半7c前半と考えられる。

13号竪穴住居跡(第91図、PL1) 位置 II F-16

811・928・2181号土坑と重複関係にあり、本跡の方がそれらの土坑より新しい。

カマド:北壁中央に位置し、残存状況は良くなく袖の基部が現状を留めるのみであるが、地山を掘り残し両袖の先端に石を配し本体を粘土で築いたものと考えられる。火床は確認できたがそれに伴う灰・焼土層



第7図 12号竪穴住居跡

はわずかであった。

施設：床面の硬化は明瞭で、凹凸のない平坦なものであった。周溝は西南壁際で確認できた。4基の柱穴の他、北東コーナーに貯蔵穴状のPitが検出された。掘形は浅い均一なものである。

遺物と時期：高台環(135図3)と胴張り甕(4)はカマドから出土し、他は覆土からの資料である。(1・2)の環・(6)の甕などの遺物から遺構の時期は7c後半と考えられる。(3)の高台環については何らかの理由で混入したものと考えられる。

14号竪穴住居跡(第85図) 位置 II A-13

26号住居跡より新しく、78号土坑より古いものと考えられる。

カマド：北壁に位置し、燃焼部・煙道は遺構外に張り出しているようであるが、上部に攪乱があり旧状をとどめていない。内部には多量の土器と支脚石・構築に使われた石材が残っていたが、原位置ではなく攪拌されたような状態であった。

施設：床面はやや軟弱であり、周溝は確認できなかった。9基のPitが確認されたが、床面の中央よりのPitは13~15cmと浅く、壁面近くのPitは35~40cmの深さがあり柱穴の可能性が考えられる。

遺物と時期：石製品ではカマド内から凹石(93)が出土している。土器は甕(135図5・6)はカマドから、環(3)は床上10cmから出土し、他は覆土からである。(1・2・3)の環や(4・5・6)の甕の様相から遺構の時期は8c後半と考えられる。

15号竪穴住居跡(第88図、PL2) 位置 II F-2

7号建物跡・491・512号土坑と重複し、本跡の方がそれより新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。支脚石が燃焼部に原位置にあり、そのうえには天井部と思われる粘土が崩落していた。焚き口の周辺からは多量の土器が潰れた状態で出土している。

施設：床面は堅緻で平坦であり、地山を床面としており掘形はなかった。主柱穴と考えられるPitが4基、北東コーナーには貯蔵穴のPitが確認されているが、他の2基のPitについては本跡に伴わない可能性が強

い。周溝や入り口に伴う施設は検出されなかった。

遺物と時期：石製品では円盤状石製品（198図51）が覆土から出土している。土器は床面から坏（136図3）・小型の甕（5）・甕（12）・小型の壺（9）が、カマドからは坏（2）・鉢（6）・甕（10・11）・甕（13）が出土している。（1～4）の坏と（11）の長胴甕から、遺構の時期は6c後半と考えられる。

16号竪穴住居跡（第98図） 位置 II P-1

197号と重複関係にあり、本跡の方が197号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残し両袖の先端に石を配し本体を粘土で築いたものと考えられるが、袖に使用されていたと考えられる石、支脚に使われたと考えられる石がカマド手前の床面から検出された。天井部は崩落しているが、カマド内に落ち込んだ天井部と考えられる粘土層が観察された。

施設：床面の硬化は明瞭で、床面までの深さは38cmと比較的深くほぼ平坦であった。柱穴と考えられるPitが4基確認され、周溝は南西コーナー付近で確認されているが他では検出されなかった。掘形は周囲が深く中央が浅いタイプのものであった。

遺物と時期：鉄製品では刀子（197図25）と環状鉄製品（92）が、石製品では凹石（199図88）が出土している。土器はカマドから坏（137図1・4）が、床面から甕（6）が、他は覆土出土である。これらの遺物から遺構の時期は7c前半と考えられる。

17号竪穴住居跡（第93図） 位置 II K-9

51・64号住居跡より新しく、42号住居跡より古いと考えられるが64号住居跡との重複はわずかであり、調査の時点での確認は不確実なものであった。

カマド：北壁の中央に位置し、両袖の先端に石を配し本体は粘土を多用して構築されていたものと考えられるが、上部の攪乱と煙道部分が42号住居跡に壊されていることから不明な部分が多い。崩落した粘土を取り除いたところ袖石を埋め込んだと考えられるPitが2基確認されているが、火床なども認められなかった。

施設：床面は上部からの攪乱により断片的にし確認できず、また、軟弱なものであった。掘形は不明瞭であったが中央が浅く周囲の深いタイプである。Pitが4基確認されているが主柱穴とするには位置と規模の点で疑問が残る。柱穴とするには上屋構造の違いを考えなくてはならない。入り口・周溝など他の施設は検出されなかった。

遺物と時期：床面から坏（136図1・2）が出土している。（2）の有段口縁坏は大型型で群馬県産と考えられる。これらの遺物から遺構の時期は7c前半と考えられる。

18号竪穴住居跡（第8・93図、PL2） 位置 IO-9

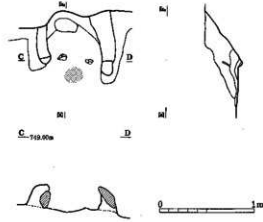
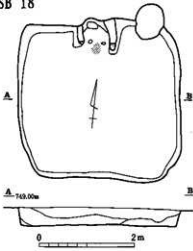
135号建物跡より新しく、20号建物跡より古い。

カマド：北壁中央に位置し、両袖の先端には石材が残り、燃焼部には支脚と思われる自然石が並列して配されていたことから、両袖の間隔があまり広くないが横置き二つ掛けの可能性が考えられる。

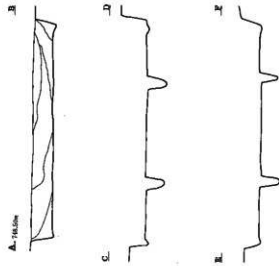
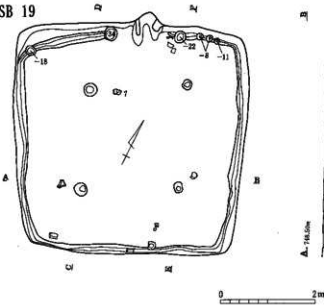
施設：住居跡は小型で、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。床面の硬化は弱く他に施設は認められなかった。

遺物と時期：カマドから甕（137図4）が出土し、他は覆土出土である。（1）の坏や（4）の武蔵甕から遺構の時期は8c後半と考えられる。

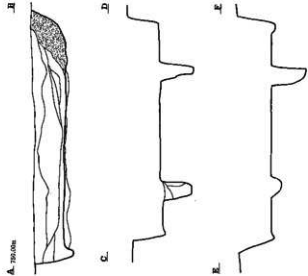
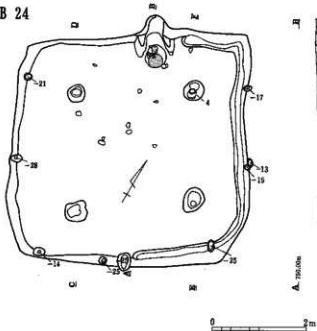
SB 18



SB 19



SB 24



第 8 図 18・19・24号竪穴住居跡

19号竪穴住居跡(第8・95図、PL2) 位置 IO-25

23号住居跡と重複関係にあり、それより新しい。

カマド:北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたようである。遺存状態は悪く崩落した天井部と思われる粘土層が燃焼部に見られ、袖部についても粘土は崩落し掘り残された地山の部分だけが確認できた。

施設:床面は堅緻で明瞭であり、掘形は周囲が深く中央が浅いタイプであった。主柱穴と思われるPitは4基確認されたが掘形をほとんど持たず径の細いものである。カマドの両脇の2基はカマドに伴うものと考えられ、北壁の周溝内には6基の壁柱穴がある。周溝は全周するが、北西コーナーでは壁と周溝の間に空白域が認められることから、櫛状の施設が想定されるが規模が小さく詳細は不明である。

遺物と時期:石製品では円盤状軽石(198図52)が覆土から出土している。土器はカマドから坏(137図1)・甕(8)が、床面から甕(7)・台付甕(6)が出土している。(1・2・3)の坏などから遺構の時期は6c後半と考えられる。

20号竪穴住居跡(第85図、PL2) 位置 IIA-18

105号住居跡と重複関係にあり、それより古い。

カマド:北壁中央に位置し、天井は崩落している。地山を掘り残し、両袖の先端に石を配し粘土で築いていたようだが、石は検出されず痕跡と考えられるPitが確認された。焚き口の手前には灰の掻き出しに伴うものと考えられる灰の充填された掘り込みが検出された。

施設:床面は浅い掘形の上に貼床が施された堅緻なものであった。主柱穴と考えられる4基のPitが確認された他、北西コーナーには深さ28cmの貯蔵穴状のPitが1基認められている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、周溝は西壁の一部検出されたが入り口などは確認されなかった。

遺物と時期:カマドからは坏(137図1)が、床上10cmからは坏(2)・甕(3)が出土している。これらの遺物から遺構の時期は6c後半と考えられる。

21号竪穴住居跡(第92図) 位置 IO-9

22・160号住居跡10号建物跡より古く、南壁側は160号住居跡によって壊されている。

カマド:検出されなかったが、東カマドでないことからおそらく北壁に設けられていたものと考えられる。

施設:周溝は残存部分では全周し、柱穴が2基確認されている。

遺物と時期:金属製品では覆土から銅製の巡方(194図102)、石製品では紡錘車(198図41)が出土している。土器は、床下出土の坏(137図1)以外は全て覆土からである。(2・3・5)の坏・鉢(鉄鉢型)などが出土している。遺構の時期は8c中葉と考えられる。

22号竪穴住居跡(第92図) 位置 IO-14

21・160号住居跡と重複関係にあり、21・160号住居跡より新しい。本跡西側はほとんど調査区外で、全貌は不明である。

カマド:東壁に見られないことから、おそらく北壁に設けられていたものと考えられるが不明である。

施設:検出範囲内で、全周する周溝と柱穴を2基確認した。他の施設については不明である。

遺物と時期:鉄製品の刀子(191図23・24)・板状不明品(79)が出土している。土器では、床面出土の坏(138図3・4)・甕(19)の他は覆土出土である。甕は口縁部が「コ」の字状に屈曲する武蔵甕が主体で、坏は底部系切りの内黒の坏と須恵坏である。(4・5・6)の坏には墨書が認められる。(14)は内外面ミ

ガキの施された内黒の鉢であるが、時期的に合わないことから調査区外の遺構を同時に掘ってしまったものか整合しない。遺構の時期は9c中葉としておきたい。

23号竪穴住居跡（第95図） 位置 IO-20

19号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残し両袖の先端に石を配し粘土で築く構造をしていた。焚き口・燃焼部の火床上層からは焼土・灰が多量に採取されている。

施設：床面は明瞭に硬化し、周溝は全周する。柱穴と考えられるPit2基、北壁沿いには3基のPitが確認された。北西コーナーのPitは深さ51cmを測り貯蔵穴というには深さがあり過ぎる。用途は不明とした。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

24号竪穴住居跡（第8・87図、PL2） 位置 IIF-3

44・49号住居跡と重複関係にあり、本跡の方がそれらより新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。面取りされた軽石製の支脚石は原位置を留め、火床上面には多量の灰層が確認できた。煙道は遺構外に掘り込んでおり比較的長いといえる。

施設：床面は明瞭に確認できたが軟弱なものであった。東・西壁には壁柱穴と考えられる2基のPitが対になるように穿たれている。南壁には中央の入り口に相当する位置にPitが1基認められる。周溝は東半分で明瞭に確認されたが、西半分では若干の凹みが観察されたのみである。掘形は浅く規則性のないものであった。

遺物と時期：柱穴内から出土した甕（138図4）以外は、全て覆土出土である。環（1・2）から時期は7c後半と考えられる。

25号竪穴住居跡（第87図） 位置 IIF-3

254号土坑より新しく、3号櫛列・255・265号土坑より古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残し両袖先端に石を配し粘土で築いたものと考えられるが、石は残されていなかった。袖の間隔が広いことから2つ掛けのカマドが想定される。

施設：本跡東側は調査区外におよんでおり全貌は不明である。床面は軟弱でやや起伏が見られた。掘形も不明瞭で、深さがなく規則的な形状ではなかった。Pitは7基確認されたが主柱穴に該当するものは不明である。

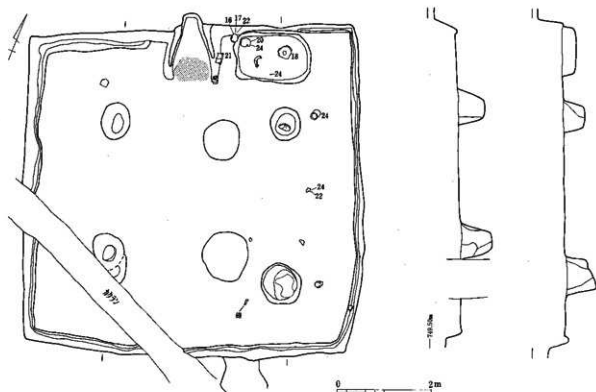
遺物と時期：鉄製品では兵庫庫（191図45）、石製品では勾玉（198図77）が出土している。土器では、（139図1）の環が床下から、（2）の蓋がカマド内から出土していることから、8c後半といえようか。

26号竪穴住居跡（第85図） 位置 IIA-13

14号住居跡・101・260号土坑と重複関係にあり、それらより古いものと考えられる。

施設：本跡北東側は調査区外であり、北壁の一部は攪乱を受けている。辛うじて床面と思われる平坦面を確認したことから住居跡としたが、他に住居跡と裏付ける施設は確認できなかった。あえて挙げればほぼ垂直に立ちあがる壁面ということができようか。

遺物と時期：鉄製品である蛇尾（194図96）が出土している。出土遺物は少なく、他に図化できたものは



第9図 27号竪穴住居跡

ない。

27号竪穴住居跡 (第9・88図、PL3) 位置 II F-6

12・40・41・48号住居跡より新しく、4号柵列より古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残す先石粘土覆の構造をしていたようである。天井部は崩壊するが火床は明確に残存度は良好である。支脚は認められなかった。

施設：床面はやや起伏があり全体に軟弱で、掘形は浅く不規則なものであった。周溝は全周し、柱穴は4基確認されているが柱根は確認できなかった。おそらく抜き取られたものと考えられる。他にはカマドの右脇に貯蔵穴と考えられる方形のPitが確認されている。

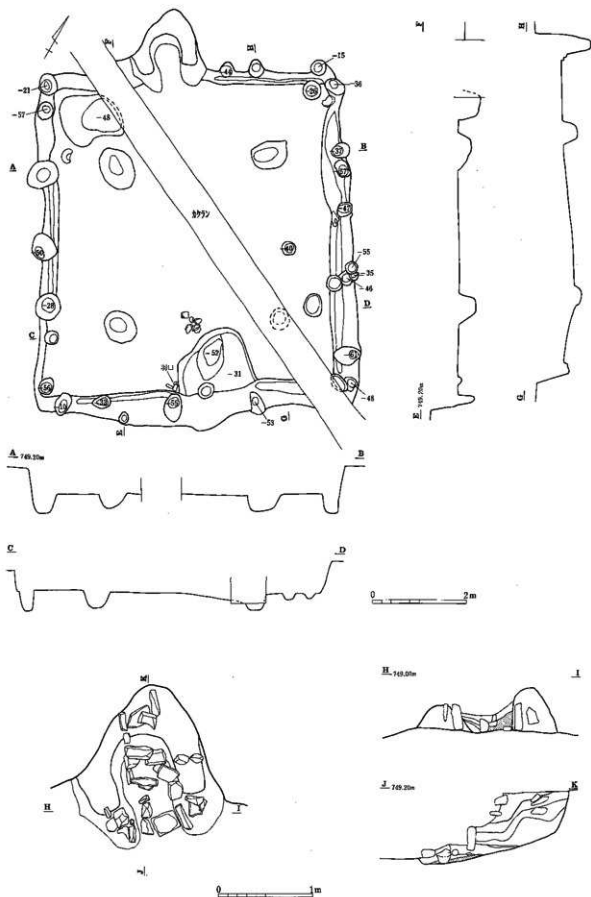
遺物と時期：鉄製品では床面から鎌 (190図2)・紡錘車 (10)・鉄鏝 (192図47) が、石製品では火打ち石 (198図80)・丸小玉 (80)・凹石 (88) が出土している。土器では、土師環 (139図1～4)・須恵環 (5・6・7・9)・須恵蓋 (11・12・13) 他が見られるが、甕の時期と時期差のあるものがかなりあることから、調査ミスか遺物取り上げ時に誤った可能性が考えられる。比較的出土位置の明らかな甕から、古墳時代後期と考えたい。

28号竪穴住居跡 (第86図) 位置 II F-1

211号住居跡・2183号土坑より新しく、8号住居跡より古い。

カマド：北壁中央のやや東寄りに確認され、燃焼部・煙道は遺構外に張り出している。袖先端部には石が埋設されその周囲を粘土で築いていたようであり、焚き口からは天井石に用いられたと考えられる石材が検出された。

施設：凹凸は見られるがしまりの良い明瞭なもので、掘形は全面を20cmほど掘り込んだ均一なものであ



第 10 図 30号堅穴住居跡

た。Pitは5基検出されたが、主柱穴と考えられるPitは床面中央の2基で、他は不明である。
遺物と時期：坏（1401～6）は（5）がカマドから出土し、他は覆土からである。甕は（7・9）がカマドから、（8）は覆土から出土している。7c前半と考えられる。

29号竪穴住居跡（第89図、PL2）位置 I J-15

56・57・58号住居跡より新しく、2103号土坑より古いと考えられるが、1号土坑との重複関係については周囲の竪穴住居跡により不明である。

カマド：北壁のほぼ中央に位置し、地山掘り残しの袖に粘土で構築され、煙道については遺構外に掘り込んでおり比較的最長いタイプである。また火床の下層には良好な灰層が検出されているが、動植物の遺存体は確認できなかった。

施設：床面は明瞭に硬化し堅牢であり、掘形は中央が浅く周囲が浅い形状であった。柱穴は4基あったものと思われるが、2103号土坑によって破壊され残るのは3基である。周溝は全周するが、貯蔵穴や入り口は見られなかった。

遺物と時期：金属製品の鉄鏃（192図58）・金環（106）が覆土から出土している。土器は、覆土から坏（140図1～4）が出土している。遺物から7c後半と考えられる。

30号竪穴住居跡（第10・90図、PL3）位置 II F-13

31・36・46・61・62号住居跡と重複関係にあり、それら全てに切られている。

カマド：カマドは北壁の中央のやや西よりに築かれている。多数の石材によって構築され、粘土によって補填されている。天井部は崩落しているが一部残存し、燃焼部は良好に硬化している。

施設：床面は堅牢で、掘形調査によって堅牢な貼床が認められた。壁柱穴と考えられるPitが29基確認された。カマドと対峙する壁中央の床面には深さ53cmを測る不整形の特異な形状の入り口施設がある。北西コーナーには擾乱により一部破壊されているが貯蔵穴が認められる。周溝は貯蔵穴の周囲を除き全周する。本跡の遺物は特異なものが多く、その代表的なものが床面出土の鞠の羽口・鉄滓である。（200図104・105）

遺物と時期：金属製品では（190～194図、15・26・28・72・73・82・99）・石製品では凹石（200図103）・土錘（34）が出土している。遺物は、坏（141図1～13）が出土している。遺物から9cと考えられる。

31号竪穴住居跡（第90図）位置 II F-13

61号住居跡より新しく、30号住居跡より古い。

カマド：残存する部分から袖は地山を掘り残り粘土で構築されていたものと考えられる。燃焼部は幅があり遺構外に張り出していることから横置き二つ掛けカマドと考えられる。煙道は遺構外に掘り込んでおり比較的最長い。

施設：床面は軟弱で、掘形には規則性はない。柱穴は4基確認されている。

遺物と時期：覆土・床面から、坏（142図1・2）・甕（3・5）が出土している。これらの遺構から8c前半と考えたい。

32号竪穴住居跡（第11・94図、PL3）位置 II K-18

60号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が60号住居跡より新しい。比較的小規模な住居跡で方形を呈する。

カマド：北壁中央に位置し、燃焼部は著しい被熱により硬化し、壁面をやや掘り込んでいる。全面石を多用した作られ石組みカマドで粘土はほとんど見られない。石材は軽石・安山岩・砂岩を用いている。

施設：床面は重複する60号住居跡のため軟弱で、その部分の掘形には深さがある。周溝・柱穴等の施設は認められない。掘形はカマド部分以外では施されていない。覆土は分層されたが基本的には混入するブロックの量の違いで人為的なものと考えられる。

遺物と時期：環（142図1～14）・甕（15・16）・四耳壺（17）が出土している。床面から環（1・4・59・10・11・13）・甕（15・16）・四耳壺が覆土から出土し、その甕などから8末～9c初頭と考えられる。

33号竪穴住居跡（第89図） 位置 I J-20

57号住居跡・2179号建物跡より新しく、841号建物跡より古い。

カマド：北壁中央に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていた。煙道は遺構外に張り出し、燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けと考えられる。

施設：床面は明瞭で掘形は認められなかった。柱穴状のPitが2基、入り口と考えられる箇所に深さ40cm程のPitが確認されている。周溝は部分的に北西コーナーでは検出されなかった。

遺物と時期：覆土上層から石製品の白玉（198図64）が出土し、土器は、カマドから環（143図1～3）と床上から甕（4）が出土しているが、他時期の遺物の混入がある。遺構の時期は7cとしたい。

34号竪穴住居跡（第11・93図、PL4） 位置 II K-20

39号住居跡・603号土坑住居跡と重複関係にあり、39号住居跡603号土坑より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられるが、天井部は崩落している。煙道は遺構外に掘り込んでおり比較的長い。

施設：床面は軟弱で貼床は認められなかった。掘形はおおむね周囲が深く中央部の盛り上がった形状であった。周溝は全周し、南壁の中央部では溝の幅が広がっていることから出入り口が想定できる。柱穴と思われるPitは各コーナー寄りに4基認められる。

遺物と時期：覆土出土の環（143図1～2）から7c後半と考えられる。

35号竪穴住居跡（第11・93図、PL35） 位置 II K-15

51・64号住居跡より新しい。東壁は調査区外におよび全貌はつかめないが、ほぼ方形を呈するものと考えられる。

カマド：北壁中央に位置し、カマド前面の床面上には石が散乱し、廃棄時の破壊が想定される。両袖を石で組み本体は粘土で築く、石組粘土覆の構造である。

施設：Pitが5基確認されているが主柱穴と考えられるものは見られなかった。西壁寄りの南側には深さ60cmの楕円形の掘り込みが認められたが、貯蔵穴を想定するには無理がある。

遺物と時期：覆土から金属製品刀子（191図29）・鎖（193図86・87）が出土している。環（144図1～7）から8c前と考えられる。

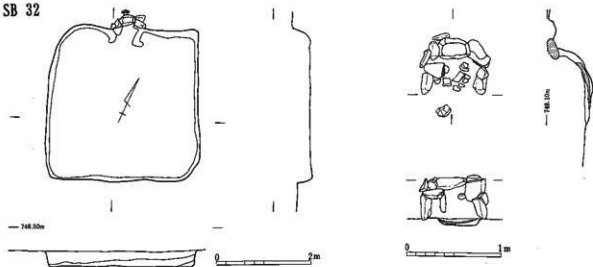
36号竪穴住居跡（第90図、PL36） 位置 II F-18

30・37・46号住居跡と重複関係にあり、30号住居跡より古く、37・46号住居跡より新しい。

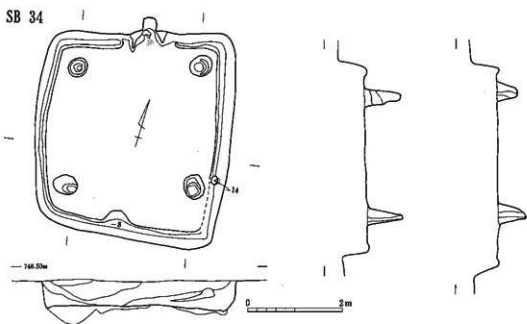
カマド：北壁中央に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものである。燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けと考えられる。

施設：床面は明瞭で、硬化している。遺構の上部は攪乱を受けている。掘形は軟弱である。Pitがそれぞれ四隅に、入り口と思われるPitが南壁中央で検出される。周溝は全周する。

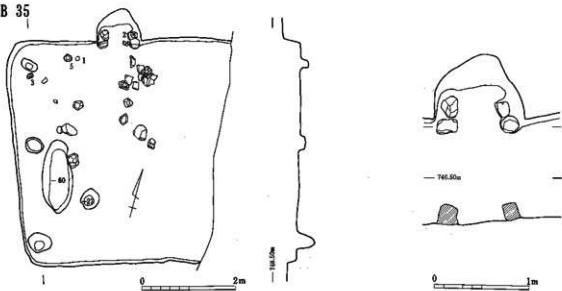
SB 32



SB 34



SB 35



第 11 图 32・34・35号竪穴住居跡

遺物と時期：覆土から石製品の白玉（198図65）が、坏（144図1・2）は覆土から検出し、遺物から遺構の時期は7c後半としたい。

37号竪穴住居跡（第90図、P L 4） 位置 II F-19

126号建物跡より新しく、36号住居跡5号欄列より古い。

カマド：北壁中央に位置し、焚き口の両袖を石で組み本体は粘土で築く石組粘土覆の構造をしている。

施設：床面は弱く軟弱なものであった。貼床は観察できたものの床面の顕著な硬化は認められなかった。周溝は認められず、西半の床面から不整の4基のPitが検出されているが柱穴とは考えられない。

遺物と時期：覆土から不明石製品（196図16）が出土している。（144図1・3・4）の坏と甕が覆土から出土し、床面から鉢（2）が出土している。遺物から遺構の時期は7c後半と考えられる。

38号竪穴住居跡（第94図、P L 4） 位置 II K-13

4号建物跡と重複関係にあり、本跡の方が新しいと考えられる。

カマド：地山を掘り残り両袖の先端に石を配し本体を粘土で築いたものである。燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けと考えられる。

施設：本跡の深さは約20cmと浅く、床面は軟弱で、掘形は認められなかった。南壁中央付近の床面には作業台ともいえる台石が床直で残されていた。

遺物と時期：覆土出土の坏（144図3・4・7）、床面出土の坏（1・2・7）・甕（7）から遺構の時期は9c後半と考えられる。

39号竪穴住居跡（第93図） 位置 II K-20

34号住居跡と重複し、西側のほとんどを壊されていることから、本跡の方が古いものと考えられる。

カマド：詳細は不明であるが、北壁寄りの床面上に若干の灰層が確認されたことから、本跡のカマドは北壁に設けられていたことが予想される。

施設：床面には凹凸があり軟弱である。北壁際に周溝が、南東コーナーと思われる床面上に小Pitが1基確認されている。

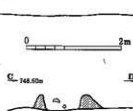
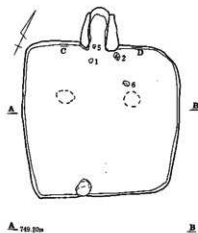
遺物と時期：金属製品の棒状不明品（69）が覆土から出土している。坏（145図1）が出土していることから遺構の時期は6c～7c後半と考えられる。

40号竪穴住居跡（第88図、P L 4） 位置 II F-6

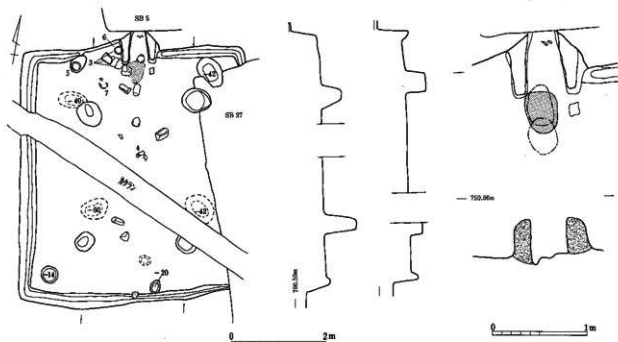
5・27号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド：北壁に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残り粘土で構築されている。構築材と考えられる安山岩がカマド前面に散在し、煙道下面は被熱により硬化していた。灰の掻き出しレベルを違えて検出されており、おそらく建て替えによるものと考えられる。

施設：床面には凹凸があり軟弱であった。床面上には4基のPitが確認され、北東コーナーには貯蔵穴状の掘り込みが見られる。周溝は全周し、南壁中央際のPitには入り口が想定され



第12号 38号竪穴住居跡



第13図 40号竪穴住居跡

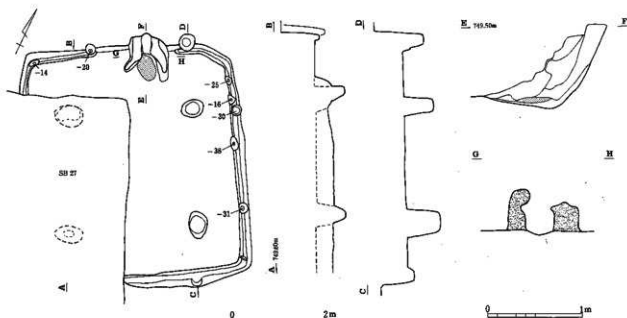
る。またカマド西横のPitには甕が埋納されていた。掘形の調査の結果、4基の柱穴の内側にさらに小規模な主柱穴と思われる掘り込みが確認された。また入り口に伴うと考えられたPitも建て替え前のものは小規模であった。

遺物と時期：覆土から石製品紡錘車（198図44）・白玉（66・67）・台石（200図101）が出土している。環（145図1）・甕（3・4・5）から遺構の時期は遺物は7c後半と考えられる。

41号竪穴住居跡（第14・88図、P.L.4） 位置 II F-7

27号住居跡・247号土坑より古く、48・49号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央のやや東寄りに築かれ、袖は残るが天井部は欠落していた。本体は石（安山岩）を芯材



第14図 41号竪穴住居跡

として使用し、それを粘土で覆っているようである。

施設：床面は中央部とカマド周辺で27号住居跡に壊されているが、明瞭に硬化した平坦面が認められている。残存部分で周溝が全周し、壁柱穴と思われる小Pitが9基検出された。そのうちカマドの両脇の2基は規模が比較的大きいことから、カマド設置に伴う構造に関わるPitであろうか。柱穴は床面上では2基確認されたが、27号住居跡の掘形の調査で、本跡の主柱穴と考えられる掘り込みが2基確認された。

遺物と時期：石製品の砥石（195図1）が床面から、覆土から不明軽石（200図100）が出土している。カマド周辺の床面から環（145図1・2）が、カマドからは壘（3・6）が出土していることから遺構の時期は7c前半と考えられる。

42号竪穴住居跡（第93図、PL4）位置 II K-9

17号住居跡・24号建物跡と重複関係にあり、本跡の方が新しいものと考えられる。

カマド：北壁中央に設けられているが、耕作による攪乱・廃棄時の破壊をかなり受け残存状況はきわめて悪いが、袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。袖については痕跡をかるうじて残すのみである。

施設：4基の柱穴以外には南壁際に入り口に関わると思われる掘り込みと5基のPitが確認された。床面は軟弱といえる。掘形は中央部が深く壁際が浅い。

遺物と時期：石製品は凹石がカマドから、白玉が覆土から出土している。図化できた土器の量は少ないが環（145図1・2）などから7c中葉と考えたい。

43号竪穴住居跡（第95図、PL5）位置

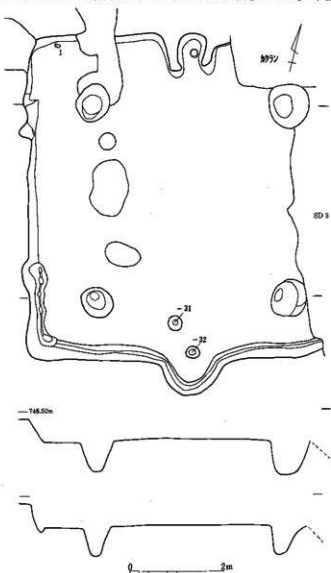
I O-15

SD3号（大溝）と18号建物跡と重複関係にあり、本跡の方が古いものと考えられる。

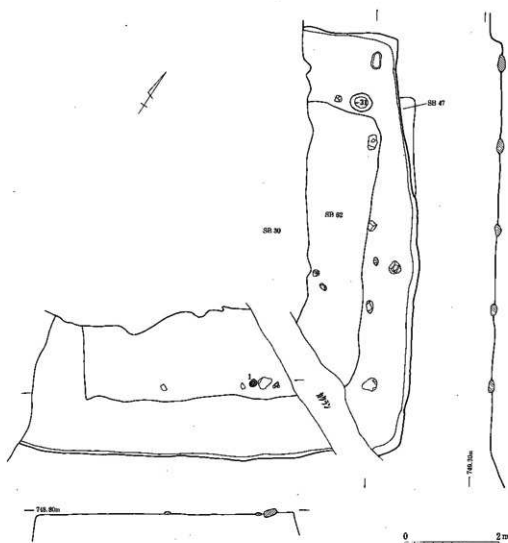
カマド：北壁中央にやや人型のカマドを有し、袖は地山を掘り残し、粘土で構築されていたものと考えられる。

施設：主柱穴と考えられる4基のPitが確認された。周溝は残存部の南壁で確認され、西壁際の周溝は幾分深く掘られていることから、板材の痕跡と捉えることもできる。南壁の中央部には入り口施設が外に張り出し、張り出した箇所床面には小Pitが2基掘り込まれている。

遺物と時期：石製品では白玉（198図70）が覆土から出土し、土器に関しては時期的なばらつきが認められるが床面の環（146図1）、カマド内の胴張り壘（8）などから7c前半と考えられる。



第15図 43号竪穴住居跡



第 16 図 46号竪穴住居跡

44号竪穴住居跡（第87図、P L 5）位置 II F-8

24号住居跡と重複し、24号住居跡にはほとんど切られることから、本跡の方が古いものといえる。

カマド：北壁中央に位置したものと考えられるが、24号住居跡に破壊され残っていない。

施設：支柱穴が4基確認され、そのうち3基のPitの形が不整形なのは抜き取り痕と考えて良いであろう。周溝は残存部で全周し、南壁中央部が若干膨らみを見せるのは入り口に関わるものであろうか、小Pit 2基も検出された。

遺物と時期：図化できた遺物は覆土出土の坏（146図1・2）であるが、その2点の遺物から遺構の時期は7c中葉と考えられる。

45号竪穴住居跡（第94図、P L 5）位置 II K-12

SD03（大溝）・12号建物跡と重複関係にあり、西半分以上がSD3に削平され、本跡は12号建物跡より古い。

カマド：SD03との重複により欠落しており不明である。

施設：貯蔵穴と思われるPitが北東コーナーで検出されている。周溝は残存部で全周し、南壁側では壁柱穴あるいは入り口を思わせるPit基が、東壁側の周構内には小さな掘り込みが連なって確認された。

遺物と時期：北壁の中央寄りの床面からは坏（146図1～4）が出土している。遺構の時期は、これらが

6c後半の様相を残すものと思われるが、(4)の坏が見られることから7c初頭としておきたい。

46号竪穴住居跡(第16・90図、PL5) 位置 II F-13

30号・36号住居跡より古く、47・62号住居跡より新しいと考えられる。

カマド: 30号住居跡と重複し、欠落しているため不明である。

施設: 本跡の深さはおおむね15cmと浅く、西壁の検出には至らなかった。北東コーナーにPitが1基確認された他、掘り込みはない。特筆すべきものとして東壁にそって5個の石がほぼ同じレベル・間隔で配されていた。これを礎石とするには住居跡の半分近くを欠いているため疑問が残るが、同様な配石が残存していた175号住居跡が類似遺構としてあげられる。

遺物と時期: 砥石(195図11)が床面で出土している。土器は図化できたのは須恵坏(146図1)の1点のみであるため時期的な決定は難しいが、遺構の重複関係などから9c前半としておきたい。

47号竪穴住居跡(第90図) 位置

46号住居跡にほとんどを切られており全貌は不明である。調査の時点で、極わずかではあったがやや硬化した水平に広がる床面とほぼ垂直に立ちあがる壁面が確認できたため住居跡としたが、住居跡というには無理があるかもしれない。

遺物と時期: なし。

48号竪穴住居跡(第88図) 位置 II F-7

27・41・49号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が27・41号住居跡より古く、49号住居跡より新しい。

カマド: 北壁中央に位置し、遺存状況はかなり不良で右袖のみ確認できた。袖先端の小Pitは袖石を埋め込んだ痕跡と考えられ、旧状は地山を掘り残し両袖の先端に石を配し本体を粘土で築いたものと考えられる。

施設: 北壁と東壁には壁柱穴と考えられるPitが3基確認され、また41号住居跡に一部壊されているが本跡の支柱穴の一部と思われるPitが2基確認されている。

遺物と時期: 出土遺物は少なく、図化できたものは甕(147図1・2)の2点であり、時期的な確定はできないため古墳時代後期前半(7c前半)としておく。

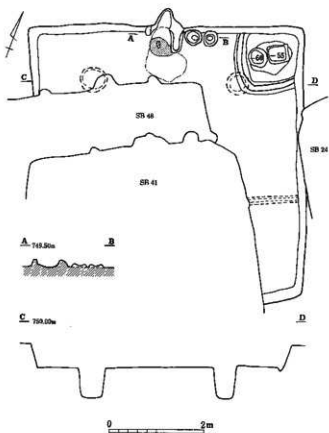
49号竪穴住居跡(第17・18図、PL5・6) 位置 II F-7

24・41・48号住居跡と重複関係にあり、本跡のほうがそれらより古い。

カマド: 北壁中央に設けられ、残存状況は不良で右袖の基部が確認され、それより地山を掘り残し本体は粘土で構築されていたものと考えられる。

施設: 右袖の脇に2つのドーナツ状の盛りあがり床直で確認され、それらの直径は約40cm・床面からの高さは10cmを測る。材質はカマドに使われている粘土と同質のもので、内側の凹みには掘り込んだ痕跡は認められない。北東コーナーには方形の貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認され、その掘り込みの上縁の西・南側には「L」字状の周堤状盛りあがり高さが2~5cmの高さで廻っていた。さらにその内側には平面形が円形と方形のPitが2基確認できた。他の施設に関しては掘形調査中にPit2基と間仕切りと思われる溝が確認された。

遺物と時期: 石製品の凹石(196図18)が覆土から出土している。図化できた土器はないが、重複関係から7c初頭以前があてはめられよう。



第 17 図 49号竪穴住居跡

50号竪穴住居跡(第93図) 位置 II K-14
51号住居跡・75号建物跡と重複し、本跡の方が新しい。

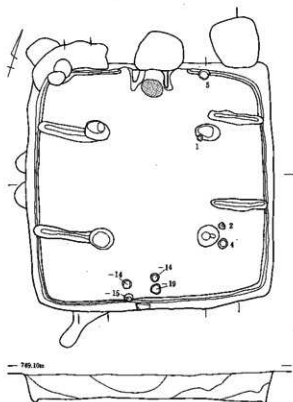
カマド：北壁中央のやや東寄りに位置し、右袖は欠落し、左袖の一部が残存していたが、その断面から地山を掘り残り両袖の先端に石を配し、本体を粘土で築いたものと考えられる。

施設：床面の硬化は軟弱であり、色調の差によって検出できた。主柱穴と考えられるPitが4基確認され、周溝は東壁側で確認できなかった。

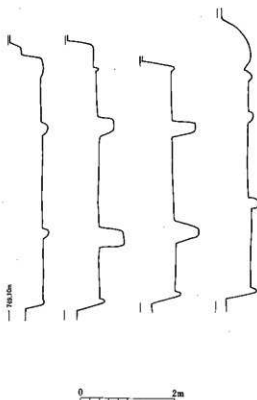
遺物と時期：覆土から鉄製品の鏝(190図4)が出土している。土器はカマドから甕(147図3・5)が、覆土から坏(1)・甕(2・4)が見られ、それらの遺物から7c中葉といえようか。

51号竪穴住居跡(第93図、P L 6) 位置 II K-14

17・35・50号住居跡より古く、52号住居跡よ



第 18 図 53号竪穴住居跡



り新しい。

カマド：北壁中央の東寄りに位置するが、東壁の中央にもカマドの痕跡が認められることから付け替えが行われたものと考えられる。現カマドに関しては、炊き口付近の袖先端部と天井部に面取りした石を芯材とし粘土を用いて構築している。煙道は短く、立ち上がりは緩やかである。燃焼部には支脚石が残り火床も明瞭であった。

施設：床面は軟弱で若干凹凸を有している。周溝は全周し、規則性に欠けるが間仕切りと考えられる溝が掘形の調査で確認された。西壁には壁柱穴と考えられるPitが16~32cmの深さをもって4基設けられているが、東壁では認められなかった。掘形は中央が浅く周囲が深いものであった。

遺物と時期：覆土から石製品の丸小玉(198図84)が出土している。覆土出土の環(147図1)・甕(2)・甌(3)から6c後半といえよう。

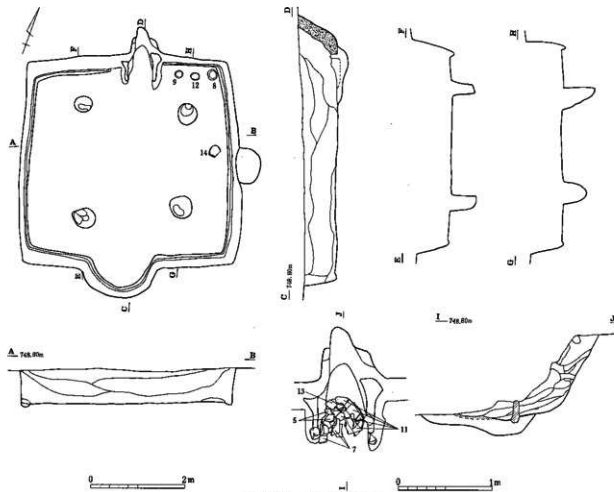
52号竪穴住居跡(第93図) 位置 II K-14

51号住居跡に切られている。

カマド：北壁に位置し、粘土によって構築されている。遺存状態は不良であり、上部は攪乱によって破壊されていた。

施設：床面の硬化は弱く凹凸を有する。周溝は明瞭に確認できた。西側には主柱穴と考えられるPitが2基確認された。

遺物と時期：カマド手前の床面上出土の直口壺ともいふべき口縁部の形状をした中形の甕(147図1)か



第19図 54号竪穴住居跡

ら、遺構の時期は6c前半と考えられる。

53号竪穴住居跡(第18図、PL6) 位置 I J-20

101号建物跡と重複し、本跡の方が古い。

カマド：北壁中央に位置し、建物跡との重複で上部と煙道は欠落しているが、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。

施設：主柱穴と思われる4基のPit、南壁中央には入り口に伴うと考えられる小Pitが4基検出され、全周する周溝に直交する形で深さ10cm前後の4条の間仕切り溝が検出された。

遺物と時期：床面から環(147図1・2)・甕(4・5)、カマドから小型甕(3)が出土していることから、6c後半～7c初頭と考えられる。

54号竪穴住居跡(第19・91図、PL6) 位置 II K-1

8・119・120号建物跡と重複し、それらより古い。

カマド：北壁の中央に位置し、地山を掘り残し袖の先端に石を配し本体を粘土で築いた構造である。天井部は崩落しているが内部から(148図5・7・11・13)の土器が出土し、燃焼部には支脚石が残り、火床上の灰・炭化物層も良好な状態で遺存していた。

施設：カマドの東側には3個の甕(8・9・12)が並んだ状態で出土している。南壁は80cmほど遺構外に張り出しを有している。入り口の施設に伴うものと思われるが、底面は床面のレベルと同じであり床面は連続し、周溝も張り出し部を含めて全周する。主柱穴と考えられるPitは4基確認された。

遺物と時期：環(148図1～5)・甕(7～14)などから7c中葉と考えられる。

55号竪穴住居跡(第89図) 位置 I J-19

西側をSD3に切れ、101号建物跡と重複関係にあるが本跡のほうが古い。

カマド：北壁に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。

施設：カマドの東側には円形で深さ28cmの貯蔵穴が検出された。主柱穴は両側に欠くので全貌は不明であるが、南東コーナー寄りに1基確認でき、北東コーナーに本来あったと考えられる柱穴は建物跡のPitが掘り込まれ不明である。

遺物と時期：甕(149図2～6)・鉢(1)が出土している。遺構の時期は、(1)の鉢は時的に6c代の特徴を良好に残すものであるが、甕の特徴から7c前半と考えた方が妥当と考えられる。

56号竪穴住居跡(第89図) 位置 I J-15

29号住居跡と重複し、29号住居跡より古い。

カマド：北壁中央に粘土によって築かれているが、遺存度は低く天井・右袖を欠いた状態である。

施設：住居跡は小型で横長な方形を呈し、周溝は残存箇所まで全周する。主柱穴と考えられるPitが床面中央の東寄り1基確認できた。掘形は認められず、他の施設も確認されていない。

遺物と時期：環(149図1・2・3)・甕(5)が認められたが、それらから遺構の時期は7c前半～中葉と考えられる。(2)の有段口縁環は群馬県からの搬入品である。

57号竪穴住居跡(第89図) 位置 I J-15

29・33号住居跡・101号建物跡・2103号土坑より古く、58号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央に設けられ残存度は悪い。右側の袖の一部は29号住居跡によって壊されているが、残存する部分の袖は地山を掘り残し粘土で構築されていた。

施設：支柱穴は重複が著しかったが4基確認されている。おおむね42～60cmの深さを有している。周溝や他の施設は確認できなかった。

遺物と時期：環（149図1・2）の2点から、遺構の時期は7c前半と考えられる。

58号竪穴住居跡（第89図）位置 I J-15

29・57号住居跡と重複し、本跡の方が古い。北壁と西壁の一部が残るだけで規模は不明である。

カマド：北壁に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されたと考えられるが、残存状況は不良である。

施設：床面は明瞭に硬化し、周溝と深さ52cmのPitが1基検出された。他の施設は重複により不明である。

遺物と時期：環（150図1・2）と胴張り甕（3）が出土したが、（2）の大きく浅く外反する環が見られることから6c中葉と考えられる。

59号竪穴住居跡（第92図、P L 7）位置 I J-23

9号住居跡と重複し、それより古い。

カマド：北壁に位置し、粘土によって構築されていたが、遺存状態は悪くかなり崩落している。

施設：入り口の9号住居跡に切られているため。柱穴等の施設は9号住居跡の掘形調査で確認した。その結果、支柱穴と思われる4基のPitが確認されたが、他の施設については検出されなかった。

遺物と時期：遺物の出土は少ないが、環（150図1・2・3）の3点が図化でき、このうちの（2・3）から遺構の時期は8c前半としたい。（1）のロクロ土師環は9号住居跡に伴うものと考えたい。

60号竪穴住居跡（第93・94図）位置 II K-18

32号住居跡と重複し、本跡の方が古い。

カマド：32号住居跡によって大部分破壊され上部の構造については不明であるが、北壁のほぼ中央に火床と思われる焼土と灰が確認されている。

施設：壁面は直線的ではなく凹凸があり、床面の硬化はあまりなく軟弱といえる。柱穴は4基確認され柱痕が確認された。周溝・入り口などは認められなかった。

遺物と時期：甕（150図1）が1点図化できたのみであるが、口縁部が「く」の字に屈曲しやや薄手の造りであることから、7c末～8c初頭と考えられる。

61号竪穴住居跡（第90図）位置 II F-13

30・31号住居跡・176号土坑と重複し、それらより本跡の方が古い。

カマド：粘土で構築されたカマドが北壁で確認されている。

施設：周溝は西壁の一部で検出された。他の施設は見られず、貼床も確認されなかった。

遺物と時期：遺物はカマド周辺で少量出土しただけで、覆土等にはほとんど見られなかった。カマドとその周辺の床面から甕（150図1・2）が出土したが、それらの遺物から7c代と考えられる。

62号竪穴住居跡（第90図）位置 II F-19

30・46号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が古いものと考えられる。

カマド：北壁にあったものと思われるが、30号住居跡との重複により不明である。



第20図 63号竪穴住居跡

施設：Pitは7基確認されたが主柱穴に該当するものは不明である。南西コーナーのPitの深さは47cm、北東コーナーのPitは深さ31cmを有している。周溝や貼床は検出されなかった。
遺物と時期：覆土出土であるが底部の回転糸切りの須恵坏（150図1・2）と甕（4）から8c後半が考えられる。（3）の手握ねは床下出土である。

63号竪穴住居跡（第20・95図） 位置 I O-19

重複関係はなく単独である。

カマド：北壁中央に位置している。残存状況は悪く、袖の基部のみ残っていた。石組みのカマド構築材と考えられる安山岩・軽石の小礫が覆土中・床面に多く散在していた。カマド内部燃焼部の幅・袖の間隔が広く、支脚石が2つ並列した状態で検出されたことから横置き二つ掛けの可能性が考えられる。

施設：方形で小規模な住居跡である。壁面は緩やかな傾斜をもって立ち上がり、柱穴等の掘り込みはみられない。床面は全体に硬化しており、掘形は見られなかった。

遺物と時期：覆土から底部回転ヘラケズリの須恵坏（150図1）、カマドから小型甕（2・3）が出土していることから8c中葉と考えられる。

64号竪穴住居跡（第93図） 位置 II K-10

35号住居跡より古く、17号住居跡より新しい。ほとんどが調査区外で全貌は不明であり、カマドは認められない。

施設：西壁には壁柱穴が認められ、床面からの深さは34～38cmを測る。床面は硬化し平坦であり、掘形は全面を均一に12cmほど掘り下げている。周溝は北壁側の一部に認められたが、他の施設は認められなかった。

遺物と時期：全て覆土であるが坏（151図1・2・3）、駒張り甕（5）から6c後半が考えられようか。

65号竪穴住居跡（第92図） 位置 I O-3

9・59号住居跡と重複するが、重複と遺構外に広がっていることから、深さ66cmのPitが1基確認されたのみで、他は不明である。遺物の出土も無い。

67号竪穴住居跡（第93図） 位置 II K-5

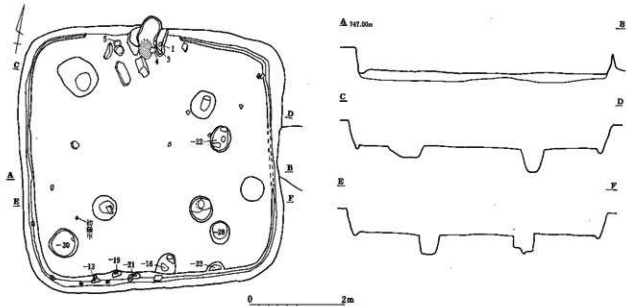
ほとんどが調査区外のため詳細は不明であるが、ほぼ垂直に立ちあがる壁と周溝の一部が確認できたことから竪穴住居跡ととらえた。他は不明である。遺物の出土も見られなかった。

68号竪穴住居跡（第87図） 位置 II F-14

ほとんどが調査区外のため詳細は不明。床面に締まりはなく、壁はほぼ垂直に立ちあがる。他は不明である。遺物の出土も見られなかった。住居跡とするには無理があろうか。

70号竪穴住居跡（第21・107・109図） 位置 III B-22

804号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

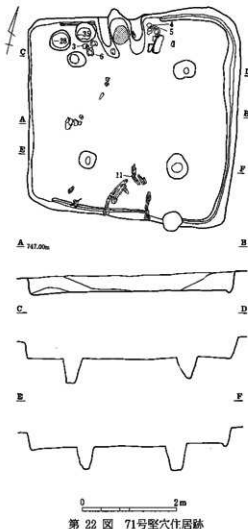


第 21 図 70号堅穴住居跡

カマド：北壁中央に位置し、遺存状態は比較的良好といえる。カマド前面の床面上には構築材として使用されていたと考えられる安山岩が散在していた。袖は地山を掘り残し、その上を粘土で覆っている。

施設：10基のPitが床面上に確認されたが、主柱穴と考えられるPitは4基、南壁中央際には入り口施設と考えられるPitが1基で、他のものは不明である。

遺物と時期：床面から滑石製紡錘車（198図45・46）が出土している。土器は北東コーナーから多く出土しているが、環（151図1・2・3・4）から遺構の時期は6c後半と考えられる。甕（5）は東海地方（南伊勢系）の小型甕であり、北野型の甕と考えられる。



第 22 図 71号堅穴住居跡

71号堅穴住居跡（第22・109図、P L 7）位置
Ⅲ B-23

75号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

カマド：北壁中央に位置し、石を芯材として粘土によって築かれている。遺存状態は比較的良好であるが、支脚石は抜き取られている。

施設：南壁中央付近には屋根材のような炭化材が検出されたが、出土量は少なく焼失家屋の可能性は低いものと考えられる。主柱穴と考えられるPitが4基、北西コーナーには2基の貯蔵穴状のPitが確認された。周溝は本来全周するものと思われるが、西壁で確認で

きなかったのは調査ミスの可能性もある。

遺物と時期：環（151図1～4）・甕（6～11）・高環（5）などから、遺構の時期は6c後半と考えられる。

72号竪穴住居跡（第109図） 位置 III G-3

重複関係は無く単独であるが、南東コーナーの一部は調査区外におよんでいる。

カマド：検出できなかったが、南東コーナー付近に粘土ブロックが見られることからカマドの存在が考えられるが、詳細は不明である。

施設：床面は軟弱で、掘形は見られなかった。12基のPitを有するが規則性がなく一般的な住居跡の概念では捉えられない。

遺物と時期：環（152図1～5）・碗（6）・皿（7）・甕（8・9）が出土しているが、これらの遺物から遺構の時期は10c前半と考えられる。

73号竪穴住居跡（第109図） 位置 III G-1

76号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が新しい。

カマド：東壁中央に位置し、壁面を掘り込み粘土によって構築されている。

施設：床面は平坦であるが締まりに欠け、掘形との区別が付けづらいため、カマドの火床を基準にして床面のレベルを決定した。他に施設は深さ55cmのPit 1基のみである。

遺物と時期：土器は全てカマド周辺からで、環（152図1・2）・甕（3・4）が出土し、（2）の大形の有段口縁環が見られることから6c後半～7c前半と考えられる。

74号竪穴住居跡（第109図） 位置 III G-2

41号建物跡・817・1067・1076号土坑より古く、75号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央にあったものと考えられるが、Pitが確認されたのみでカマドとかどうか疑問が残る。

施設：床面までの掘り込みは約10cmと浅い。柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物と時期：7c初頭と考えられる環（152図1）が1点出土している。

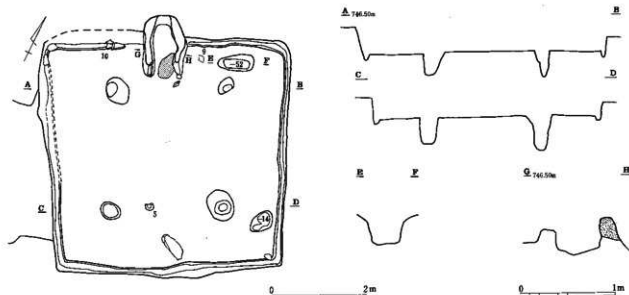
75号竪穴住居跡（第23・109図） 位置 III G-02

71・74号住居跡・1064・1065号土坑と重複し、71・74号住居跡の方が新しいものと考えられる。1064・1065号土坑との関係は、75号住居跡廃絶時に粘土を採取した痕跡と考えられるため新旧関係だけでは説明できない。あえて言えば、住居廃絶時に伴うものといえよう。

カマド：北壁中央に位置し、天井部は崩落しているが袖の遺存状態は比較的良好である。袖は基部を掘り残し粘土で作られるタイプで、袖の先端には石が埋め込まれている。

施設：北西コーナーは本跡廃棄後、粘土探掘坑の1065・1064号土坑が掘り込まれ、上部は欠落する。床面の硬化は弱いが締まりがあったため平坦な床面が確認できた。主柱穴は4基、北東コーナーにはやや小規模な貯蔵穴が1基確認されている。周溝は西壁一部で欠落するがほぼ全周する。

遺物と時期：環（152図1～6）・鉢（7）・甕（153図8～12）が出土しているが、6c代の特徴を残す環や群馬県から搬入されたと考えられる環（1）が認められることから、遺構の時期は6c後半～7c初頭と考えたい。



第23図 75号竪穴住居跡

76号竪穴住居跡(第109図) 位置 III G-1

73号住居跡・1064号土坑と重複し、本跡の方がそれらより古い。

カマド：北壁中央に位置するが、上部は覆乱を受け不明であり袖の基部のみ確認できた。残存する袖から地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。

施設：床面の中央付近には深さ24cmのPitが確認されたが、本跡廃棄後の粘土探掘坑と考えられる。床面は軟弱であったため、崩落したカマドの粘土の広がりから判断した。

遺物と時期：鉄製品の釘(192図68)以外に図化できた遺物はないが、重複関係から73号住居跡より古いといえるため、6c後半代といえようか。

77号竪穴住居跡(第108・109図) 位置 III F-5

重複はなく単独である。

カマド：天井部が崩落しているが残存状態は良く、煙道は被熱のため硬化し、燃焼部からは多量の焼土・灰が採取された。袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。

施設：カマドの東脇には深さ74cmの貯蔵穴が確認されている。4基の支柱穴の他、壁際には壁柱穴が、北西コーナーには深さ19cmのPitが確認されている。南壁にはやや歪んでいるが出入り口と考えられる張り出しがある。北西コーナーにも拡張の跡が認められるが、本跡廃棄後の粘土探掘坑と考えられる。また床面下粘土を採取したと考えられる掘り込みが認められている。

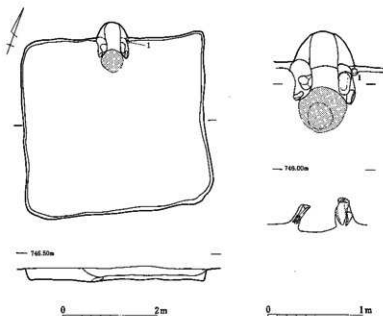
遺物と時期：石製品ではこも編み石(197図29)が床面から出土している。土器では10個体(153図1~10)を図化することができた。群馬県から搬入されたと考えられる有段口縁環(3)が見られることから、遺構の時期は6c後半~7c初頭と考えられる。

78号竪穴住居跡(第109図) 位置 III G-6

83・84号住居跡より新しく、41号建物跡・1066号土坑より古いものと考えられる。

カマド：東壁のほぼ中央に位置し、壁を掘り込んで構築されている。構築材の石が若干残っていたことから両袖を石で組み本体は粘土で築く構造をしていたものと考えられる。

施設：住居跡はカマドのある主軸に対して横軸の方が長く、床面上にはPit等の施設は確認できなかった。



第24図 79号竪穴住居跡

施設：床面に締まりがあるが硬化は認められず、他の施設・掘形等も認められない。

遺物と時期：覆土から砥石（195図2）・敲石（26）が出土し、土器はカマドから環（154図1）、覆土から甕（2）が認められている。2点ではあるがこれらの土器から10c前半と考えられる。

80号竪穴住居跡（第109・111図） 位置 III G-11

82号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が新しい。粘土採掘坑と考えられる900号土坑とも重複関係にあるが、これは住居跡廃絶後のものである。

カマド：北壁中央を掘り込んで設けられている。カマド内には構築に使われたと思われる石材が認められることから、両袖を石で組み本体を粘土で築く構造をしていたようである。燃焼部には焼土・灰が明瞭な状態で残っていた。

施設：床面は平坦でやや軟弱であるが、柱穴などの施設は認められなかった。

遺物と時期：覆土から環（154図1～7）・灰釉皿（8）・盤脚部（9）・灰釉壺（10）が出土していることから遺構の時期は10c前半と考えられる。

81号竪穴住居跡（第111・112図） 位置 III F-20

153号住居跡より古く、54号建物跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残り両袖の先端に石を配し本体を粘土で築いたもので、火床は良好な状態で残っていた。

施設：主柱穴と思われるPitは4基確認され、南壁の中央付近の床面には深さ16cmの入り口に伴うと思われるPitが1基掘り込まれている。北東コーナーには深さ44cmの貯蔵穴と考えられるPitが1基検出された。その他、周溝などの施設は認められなかった。

遺物と時期：銅製品では簪（94図114）が出土しているが、製品は近世の所産と考えられることから、混入品と考えられ本跡に伴うものではない。覆土等から環（154図1～4）・甕（5）・鉢（6）が出土しているがそれらの遺物から、遺構の時期は6c後半後葉～7c前半と考えられる。また、有段口縁環（2・3）は群馬県産の搬入品である。

た。

遺物と時期：環（153図1～6）・灰釉皿（7）・突帯付四耳壺（8）などから、遺構の時期は9c末葉といえるか。

79号竪穴住居跡（第24・109図） 位置 III G-11

本跡廃絶後に掘り込まれた粘土採掘坑と思われる891・892号土坑と重複する。カマド：北壁中央を掘り込んで構築され、石を主体に粘土を用いているようであるが崩落が著しく不明である。燃焼部には焼土と灰が少量検出されている。

82号竪穴住居跡 (第25・109・111図)

位置 III G-7

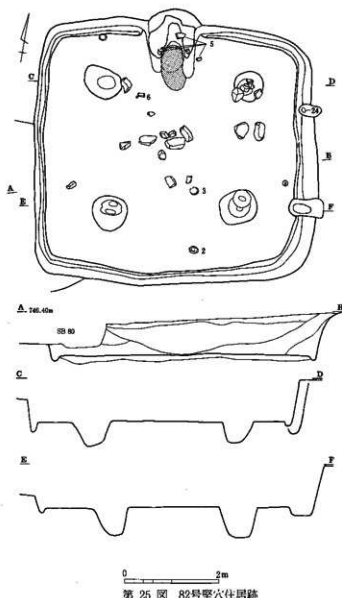
83・84号住居跡より新しく、80号住居跡より古いと考えられる。

カマド：北壁に位置し、地山を掘り残し袖の先端などに石を芯材として用い、本体は粘土で築いたものと考えられるが、旧状を留めておらず、床面上には構築材と考えられる石材が散在していた。

施設：床面に硬化は認められなかったが覆土より締まりがあったため確定できた。周溝は全周する。壁は全体的に垂直であるが、東壁は崩落のため緩やかな傾斜を有している。また東壁では深さが床面から24cmの壁柱穴が2基確認されている。掘形は全体を約10cmほど掘り起こした平坦なものであった。

遺物と時期：金属製品では覆土から刀子(191図31)・金環(194図109)が出土している。土器は甕(154図5)がカマドから、小型甕(154図2・3)・胴張り甕(6)が床面から出土している。これらの遺物から遺構の時期は7c中葉と考えられる。覆土から出土した坏(1)に関しては他からの混入品と考えられる。

83号竪穴住居跡 (第109・111図) 位置



第25図 82号竪穴住居跡

III G-6

82・84号住居跡・1069号土坑より新しく、78号住居跡より古い。

カマド：北壁中央に位置するが、崩落が著しく残存状況は良くない。袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと想定される。袖の基部とわずかな火床部が残っていた。

施設：本跡南壁中央の張り出しは住居廃絶後粘土を採取した痕跡と考えられるが、周溝が残ることから出入りのあった可能性も考えられる。1069号土坑も同様に住居廃絶後の粘土採取の痕跡である。カマドの東脇には深さ52cmの貯蔵穴が1基、床面上には主柱穴と考えられるPitが3基確認され、南西寄りのPitの重複は抜き取り痕と考えられる。南東寄りのPitは粘土採取により消滅したものであろう。

遺物と時期：覆土から不明銅製品(194図112)、石製品の石臼(199図97)が出土している。土器ではロクロ内黒坏・高台坏(155図1・2・3)が出土していることから10c初頭の年代が考えられる。(4~6)については時期的に附合しないことから、84号住居跡を掘り過ぎた可能性が考えられる。

84号竪穴住居跡 (第109・111図) 位置 III G-7

78・82・83号住居跡よりも古く、1021号土坑より新しい。

カマド：北壁に位置し、残存状態は芯材と考えられる安山岩が床面上に散在していたことから、地山を掘り残し両袖の先端に石を配し、本体を粘土で築いたものと考えられる。

施設：本跡は周囲の重複と住居跡廃絶後の粘土採取によってかなりの攪乱を受けており、北壁と南東コーナーの一部がかろうじて痕跡を留めていた。1021号土坑との重複は本跡の壁面をえぐるように掘り込んでいることから、本跡廃絶後の粘土採取のために穿たれたものと考えられる。カマドの東脇には貯蔵穴と考えられる2～3cmの周堤を持つ深さ約50cmの方形のPitが検出された。床面の北東コーナー寄りには深さ58cm・南東コーナー寄りには深さ60cmのPitが確認されたが、それぞれ主柱穴と考えられる。その他の不整形なPitに関しては粘土採掘に関わるものと思われる。

遺物と時期：石製品の白玉（198図72～74）がカマドの右脇の床面から、凹石（200図102）が床面から出土している。土器は内外面黒色処理された須恵器の坏身模倣坏（2・3）・有段L縁坏（4）が出土していることから、遺構の時期は6c後半と考えられる。（6）のロクロ整形された甕はいわゆる北信以北に主体を置く甕で10c初頭以降と思われ、本跡には所属しない。おそらく83号住居跡の調査ミスにより掘り残しを取り上げてしまったものと考えている。

85号竪穴住居跡（第110図） 位置 III G-13

2091号土坑と重複するが、本跡の方が新しい。

カマド：不明。

施設：ほぼ方形になると思われるが、調査区外におよんでいるため全貌は不明である。北壁側が突出しているが、部分的に他の遺構（種類不明）と重複している。床面には明瞭に貼床が施され硬化している。掘形は凹凸が少なく15cmほど均一に掘り下げた形状をしていた。

遺物と時期：やや内湾気味に立ち上がる回転糸切り底の須恵坏（156図1）と須恵甕の口縁部（2）の2点を図化した。全体的に遺物は少なく図化出来なかったが口縁部が「コ」の字形の武蔵甕が2・3個体分の破片が出土している。遺構の時期は少量の遺物であるので9c代としておきたい。

86号竪穴住居跡（第113図） 位置 III G-23

90・96号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が新しい。

カマド：北壁に位置し、石組みによるものと思えるが石は抜き取られており若干の石材を検出したのみである。火床なども認められなかった。

施設：床面に柱穴等の施設は認められない。

遺物と時期：遺物は少なく、須恵坏（156図1）が1点図化できた。（1）の坏は回転糸切り底で、体部の立上りに手持ちのヘラケズリが施されていることから、遺構の時期は8c代と考えられる。

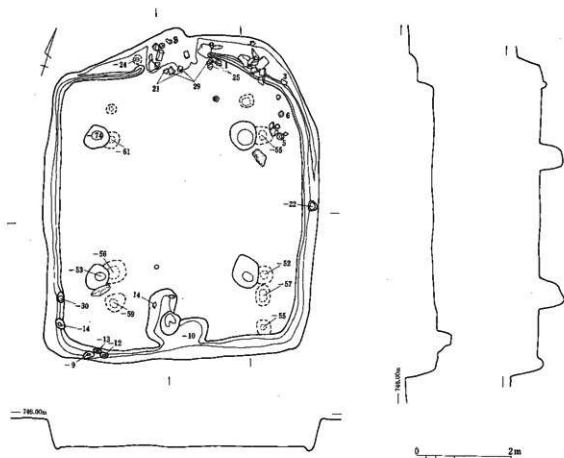
87号竪穴住居跡（第110・113図） 位置 III G-18

92・96・152・157・158号住居跡と重複するが、それらの中で一番新しい。

カマド：東壁のほぼ中央に位置し、袖の先端に石を配し本体を粘土で築いたものと考えられ、少量の粘土を伴う袖と火床の一部が確認されたが、全体に残りは悪い。

柱穴などカマド以外の施設は検出されていない。

遺物と時期：土器では内黒でミガキあるいは暗文の施された坏（156図1～6・8・9）が主体をしめ、煮沸具は北信以北に多く見られるロクロ甕が出土している。これらの土器の特徴から10c中葉と考えられ



第26図 89号竪穴住居跡

る。

88号竪穴住居跡（第113図、PL7）位置 III G-17

粘土採掘坑の838号土坑に切られている。838号土坑は浅い粘土採掘坑で、重複しているが本跡の全てを壊すことは無く、カマド・周溝などの施設は痕跡程度であるが確認できた。

カマド：北壁に位置し、芯材に石を使う石組みの構造をしたと思われ、構築材の石材が多量に残されていた。火床などの詳細は重複で攪拌され不明である。

施設：周溝は残存する部分で全周し、床面には2基のPitが検出され、Pit1は中央の西壁寄りで深さ28cm・Pit2は東壁寄りで深さ24cmを測る。他の施設は認められなかった。

遺物と時期：ロクロ整形の鉢（156図1）1点のみ図化出来たが、図化出来なかった破片の中には北信系のロクロ甕が見られることから10c初頭の所産と考えられる。

89号竪穴住居跡（第26・111・113図、PL7）位置 III G-22

91・100号住居跡と重複し、本跡の方がそれらより新しい。

カマド：北壁に位置し、カマドは石を芯材として用い粘土で覆っていたものと思われるが、崩落により原形をとどめず石材は床面上に散在していた。

施設：本跡は主軸方向に長い住居跡で、南壁中央には入り口と考えられるPitが認められ、全周する周溝内には6基の小Pitが確認されたが、規則性がないことから壁柱穴とするのは難しい。主柱穴は4基確認されたが、それ以外に掘形調査により数基確認されている。カマドを有する北壁は周溝よりさらに遺構

外に廻り込んで構築され、周溝と壁面の間に空間を持っている。カマド側の壁面に櫛状の段が認められることがあるが同レベルな例は本跡が始めてではないだろうか。

遺物と時期：覆土からではあるが石製の巡方が出土している。土器は坏類が24個体・甕類が5個体が図化出来た。坏では内黒坏（156図）が主体を占め、高台のつくタイプも多く、また墨書（12～15）の施されているものが見られる。甕は（25・29）が北信系のロクロ甕で、（27・28）が武蔵甕系統の台付甕である。（26）は外面を刷毛目調整した体部球形の小型甕で、底部を欠くが平底になるものと思われる。このタイプの甕は今のところ類例は少ないが、おそらく濃尾地方の美濃方面を主体として生産されたものではないかと推測される。須恵器が数点混ざることや東濃産の灰釉皿（24）、上記の土器などから9c後半前葉と考えられる。

90号竪穴住居跡（第113図） 位置 III G-22

91・157号住居跡より新しく、88・86号住居跡より古い。

カマド：北壁中央に位置し、88号住居跡に煙道部分を切られている。天井部を欠き、袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものであるが、袖には他の住居跡に比べ多量の粘土を用いている。

施設：床面は平坦であったが明瞭な硬化は認められず、色調の違いで確認した。主柱穴と考えられるPitが4基検出され、深さは概ね67～53cmを測っている。南東コーナーに1基確認されたPitは深さ39cmを測るが用途などは不明である。周溝は南壁のみで確認されている。

遺物と時期：須恵坏（157図1）と萌芽期の武蔵甕（2）が見られるが、坏は8c初頭の色彩が強く、甕は8c中葉以降というのが濃い。坏が摩耗傾向であることから、遺構の時期は8c後半の前葉としておきたい。

91号竪穴住居跡（第113図、PL7） 位置 III G-22

88・89・90号住居跡・31号建物跡と重複関係にあり、それらの重複の中で本跡が一番古い。

カマド：炊き口には天井石を残し、袖部先端には袖石が埋め込まれたまま残り、粘土で構築されていた。カマド内部の状態は調査中の冬期の凍結によって不明である。

施設：北壁・西壁は直線的であるが、南壁は入り口施設が存在したのであろうか、やや膨らみを有する。主柱穴と考えられるPitは3基確認され、深さは40～49cmである。

遺物と時期：自然系の遺物としてカマドの灰の同定結果から、タニシ・フナの可能性の高い骨片や他にコイ科・カエル・哺乳類などの炭化動物骨と穀類塊の炭化種実が確認されている。土器では（157図3・4）は覆土から、それ以外はカマドから得られたものである。（1）の坏は内面にミガキ・（2）の坏は内黒で内外面に丁寧なミガキが施されている。（3）については緻密な胎土で焼成も優良である。（5・6）は古墳後期に典型的な長胴甕で、両者とも内面に刷毛目を残している。（4）の小型甕は外面ヘラケズリの丸底で、佐久地方で主体的な存在ではないが散見される資料であり、おそらく群馬県（西毛地方）を主体とするものであろう。なお本例は内底面付近に煮焦げと思われる痕跡が認められている。これらの土器から遺構の時期は7c後半と考えられる。

92号竪穴住居跡（第113図） 位置 III G-18

87・130号住居跡と重複し、87号住居跡より古く、130号住居跡より新しい。

施設：カマド等の施設は認められなかったが、床面状の平坦面が確認できたため住居跡とした。

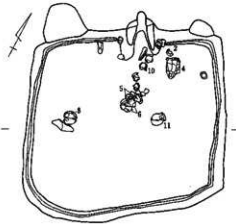
遺物と時期：遺物の出土は極少量で、図化できたものはない。

93号竪穴住居跡(第110・113図) 位置 III G-19

161・162号住居跡と重複し、両住居跡を切っていることから本跡の方が新しい。

施設：本跡のほとんどは調査区外におよんでいるため全貌は不明であり、カマドも検出されていない。床面は硬化し検出は明瞭であった。主柱穴と考えられるPitが2基床面上で確認できた。2基とも深さは60cmである。周溝内に5基の壁柱穴が認められる。

遺物と時期：遺物は極わずかで、1点のみ図化できた。坏(157図1)は口縁部を欠くが、7c代の遺物と考えられる。



第27図 94号竪穴住居跡

94号竪穴住居跡(第27・110・113図、P L 7) 位置 III G-24

904号土坑跡と重複し、本跡の方が新しい。

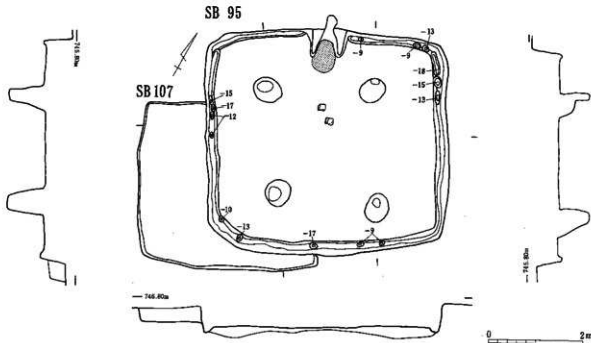
カマド：北壁中央のやや東寄りに位置し、粘土で構築された袖の基部が遺存していた。燃焼部には支脚に用いられた

と思われる自然石が残っていた。

施設：周溝は全周するが、柱穴等の掘り込みは認められなかった。掘形は南壁寄り深く、北壁寄り浅い形状であった。

遺物と時期：本跡の床面上からは多数の遺物が出土している。坏(158図1・2・3)・甕類(1~7・9~11)・甕(8)が出土しているが、ほとんどが床面から得られたものでカマドの崩落に伴うものと予想される。

有段口縁坏(1)、厚手の長胴甕(4・5・6・9)などから6c後半~7c初頭の時期が与えられようか。



第28図 95・107号竪穴住居跡

95号竪穴住居跡(第113図) 位置 III L-7

107号住居跡・944号土坑と重複し、両者を切っていることから本跡の方が新しいといえる。

カマド：北壁中央に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で覆っているのが観察され、燃焼部の火床には焼土が確認され明瞭な硬化をしていた。

施設：床面の硬化は明瞭で、主柱穴と考えられる4基のPitと周溝内には間隔が不規則ではあるが小Pitが検出された。

遺物と時期：覆土から土製紡錘車(197図38)が出土している。坏(159図1・2・3・4)のうち(4)の坏に関して内面はミガキが施されているが、底部と体部の境に施される沈線が極めて弱いのは退化傾向を示すものであろうか。小型甕(6)の内面下半はミガキが施されている。遺構の時期は6c末に置かれるようか。

96号竪穴住居跡(第113図) 位置 III G-18

86・87・90号住居跡より古く、152・157・158号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央にカマドを有しているが、157号住居跡に攪乱を受けているため残りはかなり悪く、粘土で構築された袖基部の痕跡が確認できた。燃焼部等の詳細は不明である。

施設：床面はほぼ平坦であったが、硬化面は確認できなかった。他の柱穴等の施設は確認できなかった。遺物と時期：坏(159図1~4)が出土し、(2・4)の内面は内黒で放射状のミガキ・暗文が施されている。(5・6)は時期的に附合しない。遺構の時期は9c後半であろうか。

97号竪穴住居跡(第113図) 位置 III G-23

98号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

カマド：北壁の西寄りに位置し、燃焼部・煙道は遺構外に張り出した壁を掘り込んだタイプであり、燃焼部内面の壁面には石が埋め込まれていた。燃焼部には支脚石が残り、煙道部には被熱した粘土が堆積している。

施設：床面は軟弱で、色調の違いで判断された。周溝・柱穴等の施設は認められなかった。

遺物と時期：坏(159図1・2・3)は3点出土しているが、(1)についてはロクロ整形・内黒・回転糸切りが観察されるが体部下半にヘラケズリが施されたもので類例をあまり知らない。(4・5)の甕については本跡に伴うかどうか疑問視される個体である。重複する98号住居跡の遺物とも考えられないことから古い時期の遺構を見逃してしまったのであろうか。坏から遺構の時期は9c中葉と考えられる。

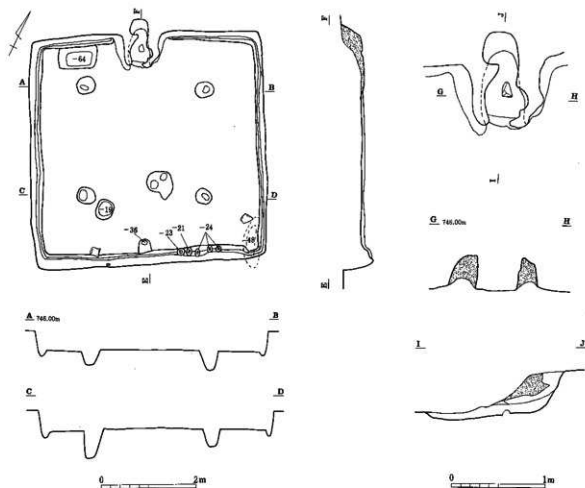
98号竪穴住居跡(第113図) 位置 III L-3

99号住居跡・910号土坑より新しく、97号住居跡より古い。

カマド：北壁の本来カマドがあったと思われる箇所は攪乱によって不明である。

施設：周溝は全周せず部分的である。主柱穴と思われるPitは4基確認され深さは48~52cmを測る。本跡の壁面は比較的傾斜を持って立ち上がり、本遺跡では希である。掘形は中央が浅く周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製の刀子(191図33)が覆土から出土している。土器では坏(159図1・2・3)が3点出土しているが(3)の坏は古墳後期の所産であり、本跡とは附合しない。甕(6・7)は薄手ご武蔵産の胎動を思わせるものである。遺構の時期は8c後半の前葉と考えられる。



第29図 99号竪穴住居跡

99号竪穴住居跡(第29・113図、PL7) 位置 III L-2

98号住居跡と重複し、本跡の方が古い。

カマド：北壁中央に位置し、粘土を用いて作られている。遺存状態は内部の断面観察で天井部の崩落が確認できた他、袖は比較的良好に残りわずかに地山を掘り残り粘土で築かれ、燃焼部上には焼土と灰が良好な形で確認できた。

施設：床面は明瞭に硬化し、南壁中央には入り口・そのやや東寄りの周溝内からは小Pitが検出された。カマドの西脇には深さ64cmの方形の貯蔵穴が残っている。掘形は中央が浅く周囲が深いタイプであり、南東コーナーには住居廃絶後に粘土を採取したと思われる掘り込みが確認されている。

遺物と時期：凶化できたのは、坏(160図1)と甕(2)の2点で、遺構の時期は破片のため7c代としておきたい。

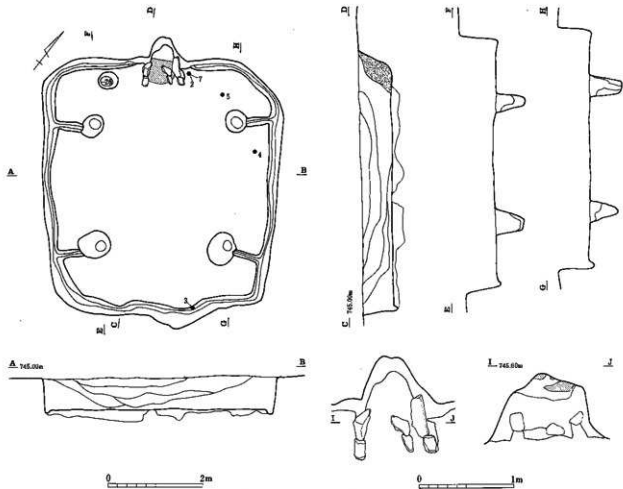
100号竪穴住居跡(第113・115図) 位置 III L-2

89号住居跡と重複し、本跡の方が古い。

カマド：本来北壁に築かれていたものと思われるが、重複により消失している。

施設：主柱穴と考えられるPitが2基確認された。それぞれ約70cmの深さを有する。南壁には入り口に伴うと考えられる深さ26cmのPitを持ち、西壁には深さ50cmほどの壁柱穴が確認されている。

遺物と時期：軽石製凹石(199図91)が覆土から出土している。土器では凶化できた資料は全て須恵器で坏(160図1・2・3)・蓋(4・5)・甕(6・7)が見られるが、(2)の底部調整は摩耗により不明で



第30図 102号竪穴住居跡

あるが(1)は回転ヘラケズリで、(3)とは時間幅があるように思える。遺構の時期は8c中葉と考えられる。

101号竪穴住居跡(第111図) 位置 III G-21

905号土坑と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド：東壁中央のやや北寄りに位置し、袖石を袖先端に埋設し粘土で構築されている。北壁のほぼ中央には煙道の痕跡と思われる掘り込みが確認されたが、被熱の痕跡や焼土などが確認されなかったことから土坑を誤認して調査してしまった可能性も考えられる。

施設：床面はカマド周辺で明瞭に硬化し、周溝が北壁の一部を除き全周する。他に施設などは確認されなかった。

遺物と時期：滑石製紡錘車(198図42)が覆土から出土している。壺(160図144)が4点出土している。(3・4)は厚手の長胴甕で、古墳時代後期の特徴を良く残している。

102号竪穴住居跡(第30・113・114図、PL 8) 位置 III L-8

871・922号土坑より古く、103号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、壁を遺構外に掘り込み、石を芯材にして粘土を用いて作られている。カマド内部の燃焼部には灰が残り、周囲からはカマドの構築に使われた粘土が多量に検出された。

施設：カマドの西脇には円形の貯蔵穴が確認された。南壁の一部が張り出していることから入り口が想

定できる。周溝は全周し、間仕切りと考えられる溝が周溝から主柱穴に向かってのびている。主柱穴の深さはおおむね60cmを測る。また覆土はレンズ状の堆積を見せるがそれぞれに地山などをブロック状に混入することから、他の住居跡と同じく人為的な埋め戻しと考えられる。掘形には5～22cmの凹凸があるが規則性は見られない。

遺物と時期：高台坯も含めて坯(160図1～6)は6点出土し、底部の調整は回転ヘラケズリ(4・6)・手持ちヘラケズリ後ナデ(3)・回転ヘラ切り後ナデ(2・5)・回転糸切り(1)とバリエーションに富む。甕(9・10)は武蔵甕の初期段階で(9)の口縁部は「く」の字に屈曲している。遺構の時期は8c前半後葉と考えられる。

103号竪穴住居跡(第110・113・114図) 位置 III L-8

102号住居跡・868号土坑と重複し、本跡の方が古いと判断された。

カマド：北壁中央のやや東寄りに位置し、粘土を用いて構築されている。

施設：床面の硬化は弱く、若干凹凸が観察された。また掘形は5～10cmの規則性の無い凹凸のある形状であった。主柱穴と考えられるPitが2基検出でき、北側は76cm・南側は96cmの深さを測った。他の施設は確認されなかった。

遺物と時期：土器は、甕(161図1)がカマド西側の壁際に底部を欠いた状態で置かれていた。甕1点であるので遺構の時期の確定は難しいが、7c後半といえるであろうか。

104号竪穴住居跡(第113図) 位置 III L-3

884・911・1017号土坑と重複し、それらに切られることから本跡の方が古いといえる。

カマド：北壁中央に位置し、残存する部分から袖は地山を掘り残り粘土で構築されている。燃焼部には明瞭に火床が残り、煙道に用いられたと考えられる甕が小片で出土しているが遺物としての図化は出来なかった。

施設：床面は明瞭に硬化し、掘形は浅く均一でほぼ平坦なものであった。住居跡の平面形は西壁の張り出した台形を呈する。カマド西側のPitは形状が円形で深さが42cmと深いことから、貯蔵穴というより位置的な問題が残るが柱穴と考えたい。周溝は全周する。

遺物と時期：図化できた遺物は甕(161図1)の底部1点のみである。外面に粘土が付着することからカマドの構築材として使われていたものであろうか。遺構の時期は古墳時代後期としたい。

105号竪穴住居跡(第110・114図) 位置 III L-9

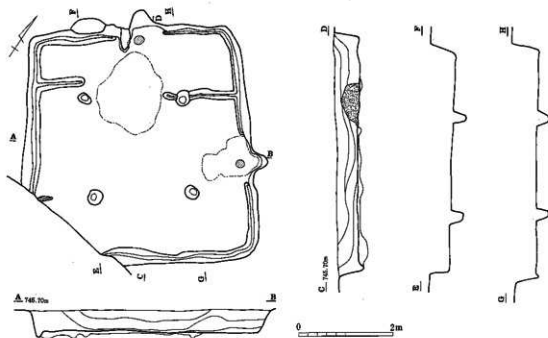
106号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

施設：大半が調査区外におよぶため全貌は不明である。カマドは調査区外と思われ、検出されていない。床面には凹凸が認められるが締まりのあるもので、掘形は10～15cmと浅くほぼ均一な深さを有していた。Pitは3基確認され、北側のPitは深さ60cm・南側のPitは72cmを測っている。南西コーナーには貯蔵穴を思わせる長軸124×短軸65cm、深さ60cmのPitが検出されたが用途などは不明である。他の施設については不明である。

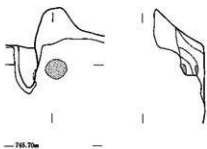
遺物と時期：遺物は極わずかで図化出来たものはなく、遺構の時期は不明である。

106号竪穴住居跡(第110図) 位置 III L-4

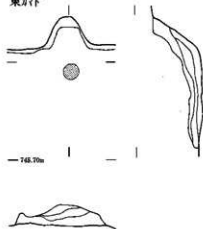
105号住居跡・79号建物跡と重複するが、本跡の方が古い。



北カマド



東カマド



第31図 109号竪穴住居跡

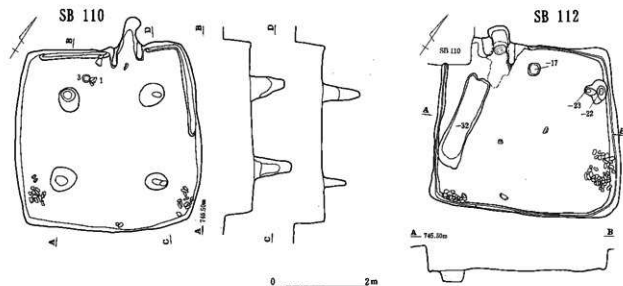
施設：大半が調査区外におよぶため全貌は不明である。カマドは調査区外と思われ、検出されていない。残存部で周溝は全周している。Pitiは3基確認されているが、その深さは北から58cm・28cm・16cmとばらつきがある。掘形は中央が浅く周囲を深く掘り込んだもので、その上に顕著な貼床が確認された。
 遺物と時期：自然系遺物としてカマドの灰から炭化した不明獣骨の骨片、炭化種実ではイネ科・マメ科近似種が採取されている。土器は坏(161図1)と小型甕(2)の2点が図化された。両者とも破片であり時期の決定には難があるが6c後半の範疇で考えられるであろうか。

107号竪穴住居跡(第113・115図) 位置 III L-7

95号住居跡・961号土坑と重複関係にあり、95号住居跡より古く、961号土坑より新しい。

施設：本跡の大部分は95号住居跡によって壊されているため不明な点が多い。比較的浅い方形の住居跡で、床面の硬化は弱いものであった。

遺物と時期：遺物に関しては、図化できる遺物は出土していない。



第32図 110・112号壁穴住居跡

108号壁穴住居跡(第115図、P L 8) 位置 III L-12

109号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

カマド：北壁中央に位置し、天井部は欠落しているが袖は明確に確認できた。カマド内部に火床部と思われる箇所が2カ所認められたことから、二つ掛けのカマドの可能性が考えられる。

施設：南壁中央には入り口と考えられるPitが1基確認されている。掘形は中央が浅く周囲が深いタイプで、その上に明瞭な貼床が確認された。東壁中央のPitは土坑の可能性も考えられ本跡に関わるものであるかどうか不明である。住居中央の床面上から軽石が出土し、カマドの構築材とも考えられるが詳細な用途は不明である。

遺物と時期：坏(161図1・2・3)が3点の他、鉢(4)・把手付き甕(5・6)、あるいは甕(鍋)が2点図化できた。(5・6)は破片で時期的に古い様相を残しているものと思われる。(2)の須恵器の坏は灰白色で特異な色調であるが、底部が回転糸切りと新しい段階の特徴を示している。遺構の時期は遺物に時間幅が感じられるが7c前半としておきたい。

109号壁穴住居跡(第31・115図、P L 8) 位置 III L-7

108号より古く、894・954号土坑より新しい。

カマド：カマドは東壁と北壁に設けられていた。東側のカマドにはわずかに火床は見られるが袖は認められず、燃焼部上部には粘土の崩落が確認され、被熱した煙道が壁面に残っていた。北側のカマドは右袖を欠落するが袖の一部を残している。この2つのカマドの残存状況から東側のカマドが先に使われ、その後北側のカマドが住居跡廃絶まで使われたものと考えられるが、東側のカマド周辺に粘土が崩落していたことがカマドの同時存在を示すとは考えられず、また類例も知らない。

施設：床面は明瞭に硬化し、全体に浅い掘形の上に作られている。床面上には深さ20～26cmのPit4基が認められた他、間仕切りの溝が3条検出された。

遺物と時期：金属製品の板状不用品(193図77)が出土している。土器の出土は少なく、図化できたのは坏(162図1)・小型甕(2・3)の3点である。遺構の時期は7c初頭に置かれようか。時期的にずれるが越州窯系青磁が2点(189図1・2)出土している。

110号竪穴住居跡(第32・115・114図、P L 8) 位置 III L-13

112号住居跡・893号土坑と重複関係にあり、本跡の方が新しい。

カマド：北壁中央のやや東寄りに位置する。崩落は著しく袖の基部は残っており、残存する部分から袖は地山を掘り残し粘土で構築されていたものと考えられる。煙道は本遺跡では長い方で遺構外に張り出し、燃焼部に灰は認められたものの火床などの被熱箇所は残っていない。

施設：掘形は浅く、そのためか床面のしまりは明瞭であった。主柱穴と考えられるPitは4基認められ、周溝は全周せず北壁と東壁の一部で検出された。他に入り口などの施設は認められなかった。

遺物と時期：遺物は、南東コーナーと南西コーナーにこも編み石と思われる小礫が30数個出土している。土器は坏(162図1・2)・高坏(3)・鉢(4・5・6)・壺(7・8・9)が出土するが、(4・6)については便宜上鉢としたが「コップ」を思わせ、手握ねともいえる形状であるが調整はしっかりしたものであった。(3)の高坏は脚部を欠くが脚部との破損箇所は摩耗しており、脚部欠落後も使用されていた可能性が考えられる。(1)の坏は有段口縁坏と考えられるが口縁部中位の稜線が弱く退化傾向のものと思われる。これらの遺物から遺構の時期は7c前半～中葉と捉えたい。

111号竪穴住居跡(第114図) 位置 III L-14

112号住居跡・2095号土坑と重複関係にあり、112号住居跡より古く、2095号土坑より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、粘土によって構築されたようだが残存状況は悪く、火床は認められず、構築に使われた多量の粘土が床面上に散在していた。

施設：床は不明瞭で硬化面は見られなかった。掘形には凹凸があるが全体に浅い掘り込である。北西コーナー付近には深さ14cmの貯蔵穴状のPitが確認され、主柱穴と考えられるPitは4基それぞれコーナー寄りに確認されたが、他の3基のPitに関しては用途などは不明である。周溝・入り口等は検出されなかった。

遺物と時期：土器では北東コーナー床面から甕(162図2)が出土しているが、内面の口縁部には煤が付着し、外面下半には粘土が多量に付着することからカマドで使用されていたものが崩落と伴にもたらされたものと考えられる。遺構の時期は7c中葉と考えられる。

112号竪穴住居跡(第32・114図、P L 8) 位置 III L-13

110号住居跡に切られ、111号住居跡を切っている。

カマド：北壁の西寄りに位置し、粘土で構築されている。

施設：床面は凹凸があるが中央からカマド付近にかけて硬化が観察され、周溝は全周する。西壁寄りの、深さ32cm・長軸1.9mの方形の土坑には覆土に炭と灰の混入が見られた。

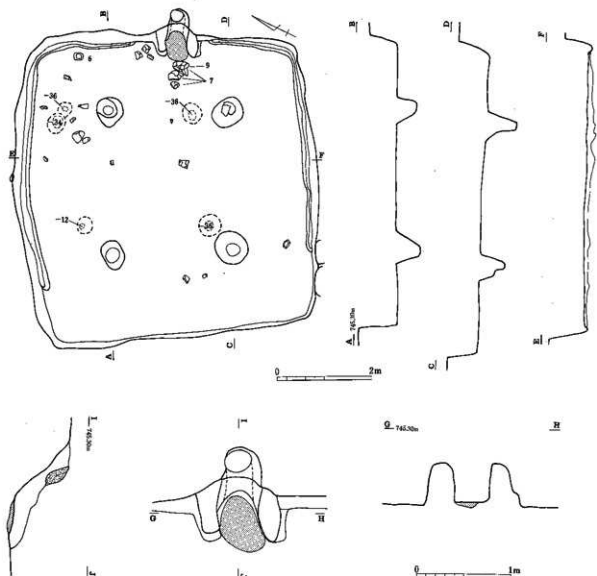
遺物と時期：遺物は、南東コーナー付近と南西コーナーではこも編み石が計38個出土している。土器は鉢(162図1)は古墳時代後期で、坏(2)は10c代であり時期的に附合しない。遺構の時期は重複関係から7c中葉と考えられる。

113号竪穴住居跡(第33・114図、P L 8) 位置 III L-19

33・34号建物跡・2018号土坑と重複し、両者に切られている。

カマド：東壁の中央に位置し、一部に石を芯材として粘土を用いて築かれたものと考えられるが石材はカマドの脇や床面に散逸していた。天井部は崩落し痕跡を留めていなかったが、煙道部周辺では崩れてはいたが断面で観察できた。

施設：床面はカマド周辺で硬化が認められたが他の部分は軟弱であった。掘形については凹凸が有り全



第33図 113号壑穴住居跡

体を均一に掘り窪めたタイプで、おおむね10cmほどの深さであった。主柱穴はPit 1～4で深さは44～62cmを測る。周溝は南壁では確認できなかった。また掘形調査の結果検出されたPitは位置や規模から建て替え前のものと考えられる。

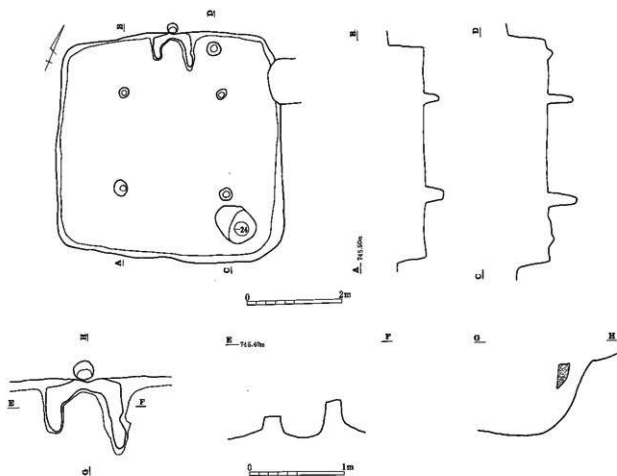
遺物と時期：床面からは石製の打製石斧（196図19）が出土している。土器は、炊き口の手前に甕（162図7・8・9）がほぼ完形で出土し、北西コーナー付近からは底部を欠く甕（6）が正位で床に5cmほど埋められた状態で出土している。甕（6～10）と環（1・2・3）から7c初頭と考えられる。なお（5）のロクロ整形の小型甕は本跡に伴うものではない。

114号壑穴住居跡（第115図） 位置 III L-17

115号住居跡と重複し、本跡の方が新しいと考えられる。

カマド：東壁の南寄りに位置し、燃焼部・煙道は遺構外に張り出して構築されている。本体内部に面取りされた石材が残るが粘土・火床は検出されなかった。床面上からは面取りされた石材が出土している。

施設：床面は軟弱で若干の凹凸がある。掘形は比較的浅く中央がやや高いタイプであった。周溝・柱穴等の施設は検出されなかった。



第34図 116号竪穴住居跡

遺物と時期：耳皿（2・3）・環（1）・碗（4）・羽釜（6）が見られることから、遺構の時期は10c中葉と考えられる。（5）の長胴甕については本跡には伴わない。

115号竪穴住居跡（第115図） 位置 III L-12

114・150・151号住居跡・934号土坑と重複し、それらの中で一番古い時期と考えられる。

カマド：北壁中央に位置するが、934号土坑に壊され粘土で作られた右袖のみが残っている。

施設：北西コーナーは他の箇所比べて丸みを帯びる異例な形状をなす。主柱穴は深さ48～58cmの4基が確認され、北東コーナーには深さ78cmの貯蔵穴がある。床面は若干凹凸が見られるがカマド前面を中心に硬化していた。掘形は周囲の深いタイプである。

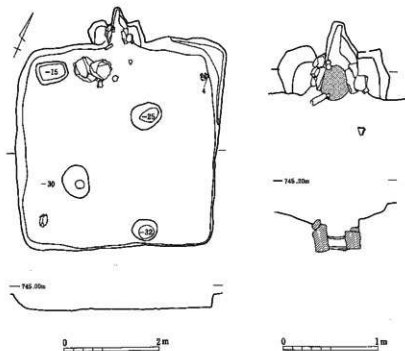
遺物と時期：出土遺物は少なく、内外面ミガキの施された環（164図1）と甕（2）の2点が図化できた。遺物量が少なく明言できないが、遺構の時期は6c後半であろうか。

116号竪穴住居跡（第34・115図、P L 9） 位置 III L-18

117号住居跡・875・1083・2008号土坑と重複し、2008号土坑より古く、117号住居跡・1083・875号土坑より新しいと考えられる。

カマド：カマドは北壁中央に位置する。粘土作りで石材は残っておらず、覆土内からも検出されていない。袖は地山掘り残しのタイプで、煙道上部も地山を掘り残して築かれている。

施設：貼床は認められず、掘形も無い。主柱穴は4基で、カマド右脇には深さ10cmのPitが、南東コー



第35図 118号竪穴住居跡

明であり、石材は認められない。

施設：隅丸方形を呈し、やや主軸方向に長い小型の住居跡である。掘形は認められず、地山を床面としていたようである。カマドの右脇には深さ24cmの貯蔵穴が見られ、床面中央の西壁寄りには深さ44cmの掘り込みが検出された。

遺物と時期：坏（164図1）・壺（2）の2点の遺物から古墳時代後期前葉と言えようか。

118号竪穴住居跡（第35・114図、P L 9） 位置 III L-19

重複はなく、単独である。

カマド：北壁のほぼ中央を遺構外に掘り込んで構築され、燃焼部の両側には面取りされた石が配されていた。天井部は崩落していたが構築材と考えられる石材が床面上で検出された。

施設：カマドの西側には深さ15cmの貯蔵穴が掘り込まれている。南壁中央の東寄りの床面上には入り口に関係するものであろうか深さ32cmのPitが認められた。他にPitは2基検出されたが支柱穴とするには位置的に疑問が残る。北東コーナーには「L」字状の掘り込みが認められるが、おそらく上屋構造と関係するものと考えられる。

遺物と時期：坏（164図1・2・3）・小型壺（4）が認められ、これらの遺物から遺構の時期は9c後半と考えられる。

119号竪穴住居跡（第36・114図、P L 9） 位置 III L-24

32号建物跡と重複関係にあると思われるが新旧は不明である。2019号土坑に切られている。

カマド：北壁のほぼ中央に位置し、燃焼部・煙道は遺構外に張り出して築かれている。石材を用いていたようだが本体内部や床面上に散乱し旧状を留めていない。

施設：覆土は分層されたが、それぞれブロック状の地山などの混入物が見られることから他の住居跡と同様に人為的な埋没を観察できた。カマド右脇には不定形な深さ36cmのPit、左側には不定形な深さ15cm

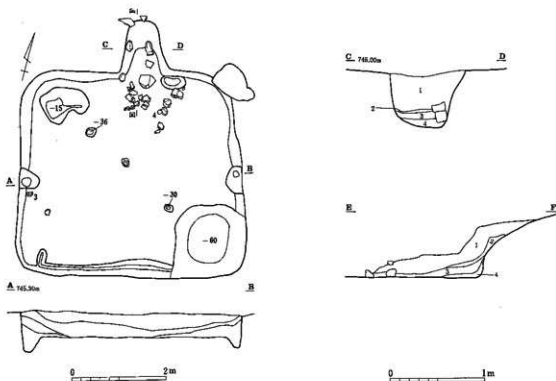
ナールには深さ24cmの掘り込みが検出された。周溝は検出されなかった。

遺物と時期：金属製の板状不明品（193図81）が出土している。図化できた遺物は坏（164図1）1点であり、古墳時代後期と考えられる。

117号竪穴住居跡（第115図、P L 9） 位置 III L-17

116号住居跡・875号土坑と重複し、116号住居跡より古く、875号土坑より新しい。

カマド：北壁の東寄りに位置する。袖の部分は地山を掘り残し粘土を用いて構築されている。火床は不



第36図 119号壁穴住居跡

のPitが掘り込まれている。東壁と西壁のほぼ中央にはそれぞれ深さ22cm・32cmの壁柱穴が認められた。周溝は南壁沿いで確認されている。南東隅には深さ60cmの隅丸方形の掘り込みが確認されたが、特別な遺物や状況は認められないことから用途などは不明である。

遺物と時期： 坏 (164図1~4)・高台の碗と皿 (5・6)・「コ」の字状の口縁部の甕 (7) などから9c後半の前葉と考えられる。

120号壁穴住居跡 (第118図) 位置 III Q-4

121号住居跡と重複し、本跡の方が古いものである。

カマド： カマドは削平あるいは調査区外に構築されたものと思われるが検出されなかった。

施設： 西側は削平され、南東側は調査区外のため不明である。北壁がわずかに残り、床面上に深さ28cmのPitが確認された。床面は若干硬化が認められたが凹凸がある。柱穴などの施設は認められなかった。

遺物と時期： 遺物は少なく図化できたのは須恵坏(164図1)のみである。遺構の時期は坏1点であるので9c代としておきたい。

121号壁穴住居跡 (第118図、P.L.9) 位置 III Q-4

120号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。916号土坑に切られている。

カマド： 北壁の中央に位置し、若干壁を遺構外に掘り込んで構築されていた。カマド周辺に構築材の礫が多数認められたが崩落により原位置は留めていない。それらの礫はほとんど面取りの行われていない自然礫であった。袖は崩れているが左袖の基部には少量の粘土が残存していた。

施設： 床面は不明瞭であったが若干の硬化を確認できたが、掘形調査中に本跡の床面下にさらにもう一枚の床面と思われる硬化面が確認できた。その硬化面の範囲から考えて建て替え前のもので、建て替えによって北東側に拡張したようである。その床面下の掘形は周囲が深く中央部が浅いタイプであった。床面

上には深さ20～28cmの4基のPitが確認された。西壁中央部際には深さ10cmの横幅のあるPitが認められたが入り口に関わるものであろうか。

遺物と時期：須恵环（164図1）・「コ」の字状の口縁部寛（2）の2点が図化できた。遺構の時期は9c後半と考えられる。

122号竪穴住居跡（第114図） 位置 III L-25

単独で検出されたが、大部分が調査区外のため全貌は不明である。

施設：床面にしまりはなく、北西コーナーと西壁に壁柱穴状のPitが2基検出された。北西コーナーのPitの深さは40cm、西壁のPitは深さ62cmを測る。他の施設は検出されなかった。

遺物と時期：金属製の鉸具（194図98）が出土している。土器は内黒の土師器（1641・2）・東濃系の灰釉陶器（3～5）が出土していることから、遺構の時期は10c初頭と考えられる。

123号竪穴住居跡（第118図） 位置 III L-23

他の遺構との重複関係は認められない。

カマド：柱穴の位置から考えて北壁のほぼ中央に位置する。残存状態はあまり良くなく、石を芯材として粘土で構築されていたようだが石は抜き取られ、炊き口部に崩落した石材が認められた。

施設：本跡の西側は削平により全貌は不明であるが、検出されたPitの位置から約1/2が消失したものと考えられる。床面上には主柱穴と考えられる4基のPitとカマドに対峙する側に深さ16cmの入り口に伴うと考えられるPitが1基確認されている

遺物と時期：环（164図1・2）が2点認められ、これらの遺物から遺構の時期は7c代としておきたい。

124号竪穴住居跡（第114図） 位置 III L-20

156号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

施設：東側が調査区外におよぶため全貌は不明である。北壁と西壁際に周溝が検出された他、深さ50cmのPitが1基確認されたが、カマドなど他の施設は認められなかった。

遺物と時期：覆土から敲石（197図27）が出土している。土器は环（164図1）のみであるが、環のミガキがやや粗雑な印象を受けることから、遺構の時期は10c代としておく。

125号竪穴住居跡（第119図） 位置 III P-4

多くの遺構と重複関係にあり、125・129号住居跡・888・890号土坑より新しく、889・1100・2176・2177号土坑より古いと判断された。

カマド：確認できなかったが、北壁寄りに粘土粒子を多く含んだ堆積が見られたことから、北壁に存在したことが推察されるがここでは不明とする。

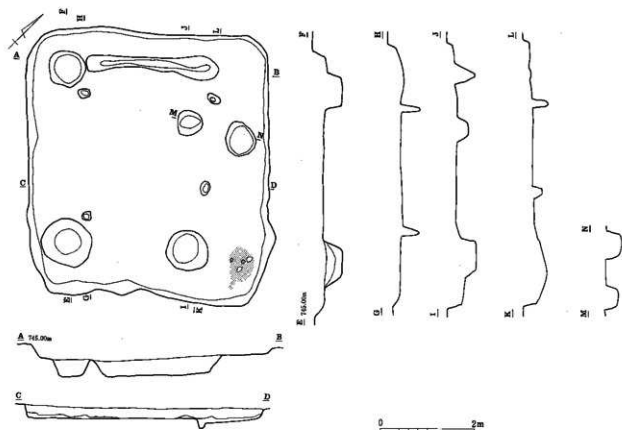
施設：床面は軟弱で硬化も認められなかった。掘形もなく地山をもって床面とした。

遺物と時期：内外面煤状の黒色処理された环（164図1）が出土することから、9c前半であろうか。

126号竪穴住居跡（第119図） 位置 III P-5

125号住居跡と重複し、本跡の方が古い。

カマド：東壁のほぼ中央に位置し、燃焼部・煙道は遺構外に大きく張り出して作られるが、石材や粘土は認められなかった。不明瞭ではあるが火床が確認されている。



第37図 127号竪穴住居跡

施設：北壁際には周溝が巡り、床面はカマドの周囲で若干硬化を見せるだけで他は軟弱である。

遺物と時期：遺物で図化できるものは出土していない。

127号竪穴住居跡(第37・119図、P L 10) 位置 III K-24

128号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

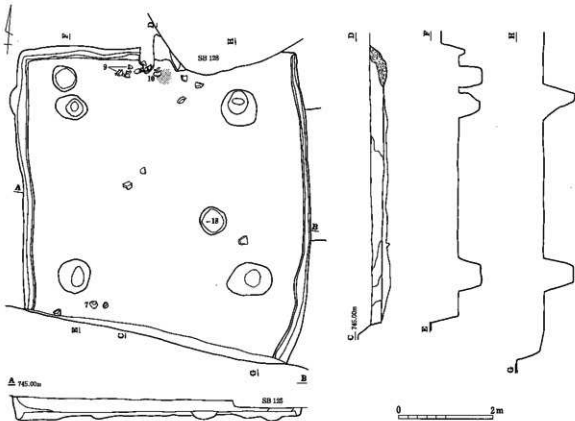
カマド：いわゆる「カマド」というものは確認できなかった。南東隅に少量の焼土が堆積する5cmほどの浅い掘り込みが確認されたが、煙道・袖などカマドを構成する基本的な部位が何も検出できないこと、南東隅という本遺跡では異例な位置にあることからカマドとするには疑問が残る。あえて本跡に関わる燃焼施設としておきたい。

施設：覆土は黄褐色土をブロック状に混入する人為的なものであったが、床面近くでは黄褐色土主体で黒色土をブロック状に混ぜるものであった。床面は非常に軟弱で、床面の認定は各Pitなどが検出できたレベルをもって床面とした。床面上には9基のPitが確認されたが北西隅のPitの覆土はしまりがなく砂質で灰を混入していた。北壁沿いには深さがおよそ38cmの細長い掘り込みが検出された。掘形は東西方向に畑の畝のような起伏が波打っており、特異な形状といえる。床面については前述したが、検出にはかなり無理があったことを考えるとあるいは床面はなく、波打った掘形の状態が本来使用されていた形状であったのであろうか。

遺物と時期：遺物は底径のやや大きな須恵環(164図1)が認められたことから、9c前半代と考えられる。

128号竪穴住居跡(第119図、P L 9) 位置 III P-4

129号住居跡より新しく、127号住居跡より古いものと判断される。



第38図 129号竪穴住居跡

カマド：東壁に見られないことから北壁に存在していたものが127号住居跡との重複で消滅したものと考えられる。

施設：床面は軟弱で、支柱穴と考えられるPitが4基と補助穴と考えられるPitがその外側に3基確認された。周溝・入り口などの施設は検出されていない。

遺物と時期：須恵環(165図1～4)が4点出土している。遺構の時期は9c中葉と考えられる。

129号竪穴住居跡(第38・119図) 位置 III P-4

125・128号住居跡・885号土坑に切られている。

カマド：カマドは一部を128号住居跡に壊されているが、北壁のほぼ中央を若干掘り込んで設けられている。袖は粘土を用いて構築されているが崩落が著しい。火床は認められた。

施設：覆土はブロック状の地山などを含む人為的なものであった。床面は中央部とカマド前面で硬化面を確認できたが他の箇所は軟弱であり、掘形は浅い均一な形状であった。4基の支柱穴の他に北東隅に深さ48cmの貯蔵穴状のPitと床面中央の南東寄りに深さ18cmのPitが確認されている。

遺物と時期：環(165図1～6)・鉢(7)・小型甕(8)・甕(9・10)・把手付き甕(11)が図化できた。(7)の鉢は内外面ミガキが施され、(8)の甕は内面・胴部上半にミガキが施されている。(9)の甕の形状は口縁部が大きく屈曲するもので、希に見られるが在地のものとは思われない。環では有段口縁環が主体を占めるが、(6)の環など前代的なものも見られる。以上の遺物から遺構の時期は6c末～7c初頭と考えられる。

130号竪穴住居跡(第113図、P L10) 位置 III G-18

92号住居跡・1030号土坑と重複し、両者より本跡の方が古いと考えられる。

カマド：北壁に位置している。残存率は良好ではなく、天井部などは全て欠落している。地山削り出しの袖の基部がかるうじて検出され、その上部に若干の粘土が付着していた。火床部は不明瞭であったが被熱による変色が観察された。石材などは見られず、支脚石の抜き取り痕が観察された。

施設：床面は軟弱で覆土よりしまりがある程度であった。他に施設は確認されていない。

遺物と時期：土器は坏（165図1）・甕（3）・刷毛調整の甕（4）・（2）は把手付きの甕であろうか、4点図化できた。遺構の時期は7c後半と考えられる。

131号竪穴住居跡（第119図） 位置 III P-3

155号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

カマド：北壁に位置し、構築材には礫を多用し、袖の基部は地山の掘り残しが認められたが粘土は崩落し認められなかった。煙道の立ち上がりは緩やかで壁面を遺構外に掘り込んで作られている。東壁の中央のやや北寄りにも少量の焼土と粘土が見られ煙道状の掘り込みが検出された。北壁に設けられたカマド以前のものであると考えられる。

施設：西側と南壁の一部は調査区外のため不明である。床面は軟弱で不明瞭であった。北東隅には深さ26cm、南東隅には深さ20cmのPitが検出された。

遺物と時期：覆土からであるが砥石（195図7）が出土している。土器は坏（165図1・2）・甕（3～8）が図化できた。武蔵甕（3～7）の口縁部が多く出土している。武蔵甕の口縁部が「コ」の字の屈曲が明瞭であることから、遺構の時期は9c中葉のやや古い段階といえようか。

132号竪穴住居跡（第119図） 位置 III K-23

39号建物跡・917号土坑と重複し、本跡の方が古いと考えられる。

カマド：調査区外にあると思われ不明である。

施設：大部分が調査区外のため全貌は不明である。床面には貼床は認められなかったが硬くしまっていた。南東隅に深さ74cmのPitが検出されたが支柱穴かどうかは不明である。深さ10cmほどの周溝がめぐっている。

遺物と時期：内面に「十」文字状の暗文の施された坏（166図1）1点のみである。遺構の時期は10c初頭がと考えられようか。

133号竪穴住居跡（第116図、P L10） 位置 III K-20

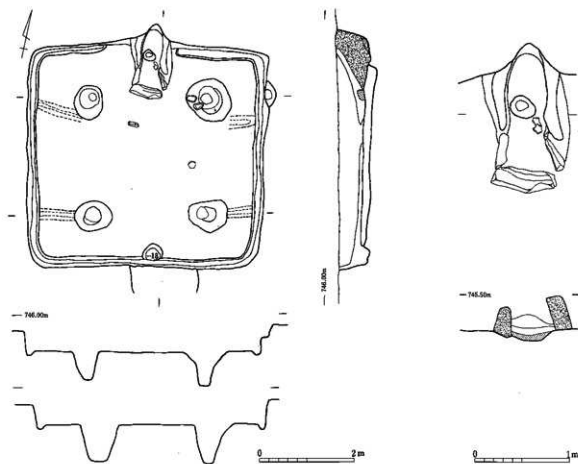
切り合いはなく、単独である。

カマド：北壁中央の東寄りに位置する。粘土と礫で構築されているようだが、芯材に使用されたと考えられる礫は右袖脇に散乱していた。

施設：床面は軟弱で、掘形に規則性はなく全体を10cmほど掘り込んでいた。周溝は北壁東側と東壁南側を除き認められた。床面上には4基のPitが検出されたが、西壁寄りの2基と南東寄りのPitは深さ20cm、北東隅のPitは深さ34cmを測る。

遺物と時期：滑石製の白玉がカマドの左脇の床面から出土している。土器は坏（166図1・2）・甕（3・5・6）・鉢（4）が認められ、（4）はカマド出土で内外面ミガキが施され、（6）の長胴甕は底部と胴部下端の境に明瞭な段を有している。これらの遺物から遺構の時期は6c後半の前葉と考えられる。

134号竪穴住居跡（第112図、P L10） 位置 III F-24



第39図 135号竪穴住居跡

切り合いはなく、単独である。

カマド：北壁中央に位置する。燃焼部・煙道は遺構外に張り出しているが、火床は皿状に掘り込まれていたが焼土はほとんど検出されなかった。

施設：掘形は認められないことから地山を床面と考えられる。周溝は全周するが、他の施設はない。

遺物と時期：覆土から鉄製の鍔（190図17）が出土している。図化出来た土器は全て碗で（166図1・2）は土師器・（3・4・5）は東濃産灰釉陶器である。遺物から遺構の時期は10c前半と考えられる。

136号竪穴住居跡（第39・112図、PL11） 位置 III F-19

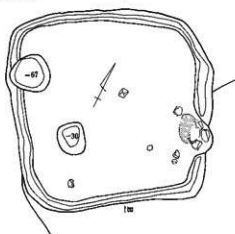
903号土坑と重複し、本跡の方が新しいものと考えられる。

カマド：北壁中央に位置し、崩落しているが天井石・支脚石・袖石がほぼ原位置をとどめて確認され、燃焼部中央には支脚の痕跡である小Pitが認められた。

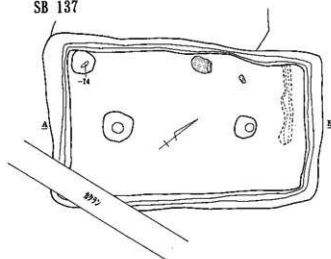
施設：903号土坑は当初入り口に伴うものかと考えられたが、断面観察の結果、本跡に伴うものではないと判断された。床面は貼床をもたず、硬化していた。掘形は中央付近が深いタイプであるが、旧住居跡が残存していた可能性も否定できない。掘形調査によって、柱穴から壁に向かって直交するように走る間仕切り状の溝が4条確認された。主柱穴と考えられるPitが4基検出されて深さは60から82cmを測る。南壁中央には深さ18cmの入り口施設に伴うと考えられるPitが確認された。周溝はほぼ全周する。

遺物と時期：環（166図1・2）が2点見られるが、（2）はTK23段階の環蓋を思わせる横敞円で、口縁部が長く直立しやや内傾している。群馬県で良く見られるものである。遺構の時期は6c中葉といえよう

SB 136



SB 137



第40図 136・137号竪穴住居跡

か。

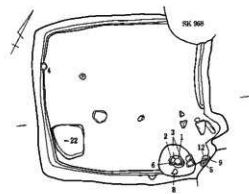
136号竪穴住居跡 (第40・116図) 位置 III K-4

137号住居跡を切っている。

カマド：東壁中央の隅寄りに設けられた東向きのカマドである。主に面取りされた軽石で構築されその周囲を粘土で覆っていたようであるが、遺存度は悪く粘土はそのほとんどが床面や覆土に流失していた。構築材に使用されたと思われる石材も原位置をとどめず崩落し、その一部は床面中央にも見られた。火床と思われる硬化面は認められなかったが、焼土粒子を混入する灰層が燃焼部で観察された。

施設：周溝は全周するが、幅は約20～30cmと均一ではない。床面は軟弱で硬化は認められなかった。床面上には2基の掘り込みが認められている。

遺物と時期：覆土から滑石製の紡錘車 (198図43) が出土している。土器は坏 (166図1・2・3)・碗 (5・6)・東濃産灰釉陶器の皿 (4) が出土し、また覆土から越州窯系青磁の碗 (189図3) の破片が出土している。遺構の時期は10c初頭といえようか。



第41図 138号竪穴住居跡

137号竪穴住居跡 (第40・116図、P L11) 位置 III K-5

136号住居跡と重複し、本跡の方が古い。136号住居跡より深さを有するため、カマドや床面などの施設は残存しており確認することができた。

カマド：北 (北西) 壁のほぼ中央に位置し、残存状態は

きわめて悪く構築に用いられたと思われる粘土ブロックと火床の一部が確認されたが、袖などの構造は不明である。

施設：住居跡の規模は小型でありカマドに対して横長な形状で、主軸は北西に傾いている。北西コーナーには貯蔵穴と考えられる浅い掘り込みが認められた。掘形の調査では東壁寄りに間仕切り状の溝が認められたが、間仕切りとするには無理があろうか。

遺物と時期：覆土から鉄製刀子（191図35）、床面から安山岩製の砥石（196図15）が出土している。土器は坏（167図1・2）・甌（3）・甕（4）が見られ、遺物から判断して6c後半と考えられる。

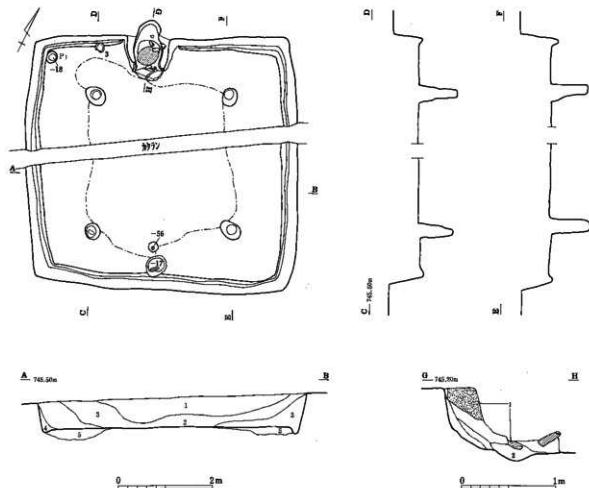
138号竪穴住居跡（第41・117図、P L11） 位置 III K-7

81・82号建物跡と重複関係にあり、81号建物跡より古く、82号建物跡より新しい。

カマド：東壁の南寄りに検出されたが、崩落が著しく構築材と考えられる石材が燃焼部上に見られた。また床面の中央付近にはやはりカマドの構築材に使用されたと思われる石材が確認された。

施設：床面は不明瞭で、周溝はほぼ全周する。壁面の立上りは若干緩やかであったが、壁際に粒子の細かいやや砂質の黒色土の堆積が見られたことから壁面の崩落が考えられる。その上部の覆土の堆積は地山のブロックを混入し一括して埋め戻されたことがうかがえる。2基の不定形なPitが検出され、南東コーナー寄りのPitからは十数個の坏が出土している。掘形は凹凸があり1～6cmで全般に浅いものである。

遺物と時期：覆土から凝灰岩製の砥石（195図12）が出土している。土器は坏（167図1～8）・碗（9・10・12）・東濃産灰釉碗（11）が図化できたが、南東コーナーのPitからは（1・2・3・6・8）が、カ



第42図 140号竪穴住居跡

マド右脇の床面からは(5・9・12)が出土している。遺構の時期は9c末葉～10c初頭と考えられる。

139号竪穴住居跡(第117図) 位置 III K-7

本跡の西側の大半は調査区外におよぶため詳細は不明であり、調査区内での重複は認められない。

カマド: 東壁寄りのやや南側に火床部の痕跡をとどめる焼土が確認され、その周囲の覆土には極少量の粘土粒子も見られたが、全貌が不明であるためカマドとするには不安な要素が多い。

施設: 遺構の深さは32～38cmと浅いが22～28cmの均一な掘形を施されており貼床も認められ、床面の中央部には良好な硬化面が確認できた。床面の北東コーナー寄りには深さ17cmのPitが検出されている。

遺物と時期: 遺物の出土はなく時期は不明。

140号竪穴住居跡(第42・117図、P L 11) 位置 III K-8

南壁で145号住居跡と接しているが、平面観察から新旧関係は確認できなかった。出土遺物から本跡の方が古いと考えられる。

カマド: 北壁中央に位置し、残存状態は良好であった。袖は地山を掘り残した上に粘土で構築され、その先端の焚き口付近には石が埋め込まれ、天井石に用いられたと考えられる石材が崩れた状態で出土している。1層は崩落した天井部の一部と考えられる。火床は良好な状態、その上部には純粋な灰層(2層)が残っていた。

施設: 住居跡の覆土の1・2・3層は地山や粘土などのブロックを多量に含む暗褐色土で一気に埋め戻したことがうかがえる。4層はしまりの弱い黒色土で、周溝上部ではほとんど確認できた。南壁中央付近には縦に配列された入り口に伴うと思われるPitが2基確認された。北西コーナーの床面で検出したPitは貯蔵穴にしては深さがあり、規模も小さく用途は不明である。掘形は周囲の深いタイプで支柱穴より内側はほとんど掘り込まれておらず、その部分では明瞭な硬化が観察された。硬化面が北西コーナー寄りに伸びているのはカマドの左側の利用頻度が多かったからであろうか。

遺物と時期: 鉄製の刀子(191図36)が出土し、また、カマド内の灰層(2層)337ccを洗浄篩別した結果、タニシと考えられる貝類と雑穀塊・菌類が検出された。土器は少なく図化できたものは4点である。カマドの左脇から出土した甕(167図3)は床面に置かれた状態であった。(4)の甕はカマドから出土した破片の接合資料であるが、接合の結果、胴部表面には全体に粘土が付着していた。おそらくカマドに埋め込まれて使用されたものと思われる。遺構の時期は7c前半と考えられようか。

141号竪穴住居跡(第116図) 位置 III K-9

重複はなく、単独である。

カマド: カマドは地山を掘り残した上に粘土を貼り付けて袖を構築し、袖石は抜き取られた痕跡が袖の先端に確認できた。また、支脚石を抜いた痕跡も燃焼部中央の火床に検出された。天井部が崩落しているが残存状況は良好であった。

施設: 検出段階で本跡の北壁に二つの張出しが認められたため土坑との重複を考慮して調査にあたったが、平面・断面の観察においても違いが認められず、他の遺構との重複関係はないとらえて調査にあたった。近年関東地方では壁が棚状に形成される竪穴住居跡の例が増えつつあるが、佐久地方では特異であり、あるいは調査ミスの可能性もある。支柱穴と考えられる深さ30～38cmのPitが4基、南壁の中央寄りには入り口に伴うと思われる深さ15cmのPitが1基確認されている。掘形は10cmほど均一に掘り下げた浅いものであった。

遺物と時期：土器は図化できたのは2点で、有段口縁環（168図1）は覆土から・小型甕（2）がカマド右脇の床面から出土している。遺構の時期は7c初頭と考えられる。

142号竪穴住居跡（第117図） 位置 III K-12

143・146号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。

施設：遺構のほとんどは調査区外におよんでいるため詳細はわからないが、南東のコーナーには盤状に破碎した礫が散乱し、それと共に焼土が密に分布しておりカマドの可能性が考えられるが、礫が被熱していないことや位置が南東コーナーであること、さらには全貌がわからないことからカマドであるという確信はない。その焼土を取り除いたところ深さ42cmのPitが検出されたが、内部に焼土は見られなかった。

遺物と時期：遺構の時期は10cと考えられる。

143号竪穴住居跡（第117図） 位置 III K-12

142号住居跡と重複するが、本跡の方が古く入れ子状態でほとんどが調査区外におよんでいるため不明な点が多い。

施設：142号住居跡の掘形調査中に硬化面が認められたことから、別の遺構として調査にあたったがあるいは建て替え前の遺構かもしれない。本跡は浅く部分的に上部の142号住居跡に攪乱されていた。

遺物と時期：遺物は東壁の中央部付近の床面下から灯明に使われたと思われる環（168図3）が出土している。（4）は北信方面のロクロ整形の甕である。遺構の時期は10cと考えられる。

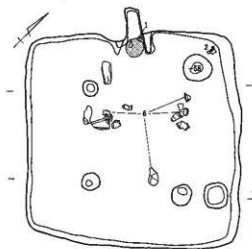
144号竪穴住居跡（第43・116図、P L11） 位置 III K-14

重複関係はなく、単独である。

カマド：北壁の中央に設けたタイプである。地山を掘り残した袖と火床が袖の間に確認できた。他は崩落し不明である。

施設：支柱穴に相当するものは3基で、深さは50～64cmを測っている。南東コーナーに深さ18cmのPitが1基と北東コーナーに深さ58cmの貯蔵穴が1基確認された。

遺物と時期：遺物は（168図1）の環がカマド内、甕の（2・6）が床面から出土している。遺構の時期は6c中葉と考えられる。

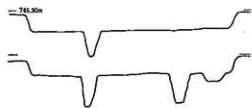


145号竪穴住居跡（第44・117図） 位置

III K-13

140号住居跡と北壁で接し平面確認では新旧が不明であったが、遺物から考えて本跡の方が新しい。

カマド：東壁に持つタイプで、壁を60cmほど外側に掘り込んで構築されているが、覆



第43図 144号竪穴住居跡

土には少量の焼土粒子を混ぜるだけで構築材に使用されたと思われる石材等は抜き取られ床面の中央部に散乱していた。

施設：床面の硬化は認められず、遺物の出土状況や掘形が無かったことから、地山を床面とした。

遺物と時期：遺物は群馬県からたらされたと思われる羽釜(169図9)が床面から出土している。他に床面からは(3・5・6)が出土し、(6)は類例を知らないが群馬県からたらされたものであろうか。遺構の時期は10c後半と考えられる。

146号竪穴住居跡(第46・117図、P L12) 位置 III K-18

142・147号住居跡と重複しているが、両者より本跡の方が古い。147号住居跡に上部をかなり破壊されているが、本跡の方が深いためほぼ全貌を知ることができた。

カマド：天井は崩落しているが残りは良い方で、袖は地山を掘り残し、石を芯材として使用しその上に粘土を貼り付けて構築され、支脚が燃焼部中央に立った状態で検出された。

施設：掘形は壁面近くで認められたが浅いもので、中央付近では認められず。掘形の無い部分の床面はかなり硬化していた。また掘形調査によって壁からP3・P4に向かって間仕切りと考えられる2条の溝が確認された。

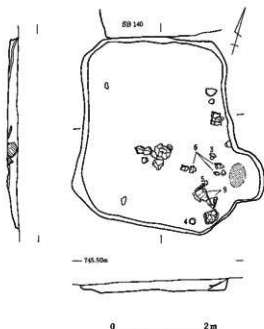
遺物と時期：自然系の遺物としてはカマドの灰の同定の結果、種は不明であるが大型哺乳類の椎骨片・タニシと考えられる貝類等が検出されている。土器は坏(170図1・2・3)が出土していることから、遺構の時期は7c後半後葉と考えられる。

147号竪穴住居跡(第45・117図) 位置 III K-18

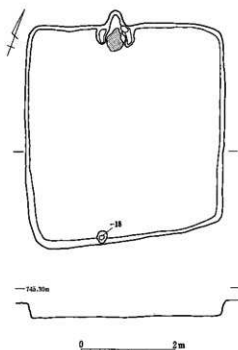
146号住居跡・38号建物跡と重複し、146号住居跡より新しく38号建物跡より古い。遺構の規模は比較的小型といえる。

カマド：天井部を欠くが比較的良好に残り、地山(本跡の場合は146号住居跡の覆土)を掘り残した上に粘土を用いて構築されている。カマドの芯材と思われる石は右袖に残っていたが、左袖は抜き取られていて確認できなかった。燃焼部には良くしまった火床が検出され、その下層には純粋な灰層が認められた。

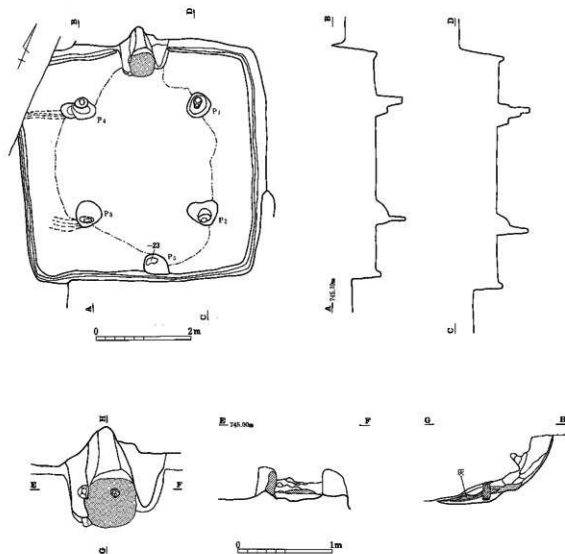
遺物と時期：床面からは刀子(191図32)、砥石(195図6)が出土している。土器はロクコ整形の甕(170図7・8・9)がカマドあるいはその周辺から出土したが、在地のものではなく北陸方面の影響と考えられる。遺構の時期は10c前半の後葉と考えられる。



第44図 145号竪穴住居跡



第45図 147号竪穴住居跡



第46図 146号堅穴住居跡

148号堅穴住居跡(第119図) 位置 ⅢK-19

994・995号土坑・9号櫓列と重複し、本跡の方がそれより古い。

カマド：ほとんど995号土坑に壊されているが、面取りされた石材などが床面上に見られたことなどから石を用いて構築されたと考えられる。

施設：深さ12cmと浅い住居跡で掘形はほとんど見られない。不整なPitが検出されたが位置的に用途などは不明であり、本跡が浅いということから別の遺構と重複していた可能性も考えられる。

遺物と時期：遺物はわずかで、図化できたのは(169図1)のみである。遺構の時期は9cと考えられる。

149号堅穴住居跡(第116図、P L11) 位置 ⅢK-5

1080号土坑と重複し、南壁の一部を壊されていることから本跡の方が古いと考えられる。北壁は攪乱によって壊されている。

カマド：北壁中央に設けられていたものと思われ、石材と粘土がわずかに確認できたが、攪乱され不明である。

施設：本跡は深さ約74cmを測る中規模な住居跡で床面は主に中央部に堅緻であった。掘形は周囲の深いタイプで、床下調査では柱穴から壁に向かって伸びる2条と逆L字状の間仕切り溝が確認された。主柱穴

は55～40cm、北東コーナー・南東コーナーのPitはそれぞれ15cmを測る。

遺物と時期：図化できた遺物は（169図1）のみである。

150号竪穴住居跡（第115図） 位置 III L-11

115・151号住居跡、85号建物跡と重複関係にあり、115・151号より新しく85号より古い。遺構の規模は3.1×4.0mで深さは20cmと小型である。

カマド：東壁の南寄りに位置し石材を多用して作られたものようであるが、面取りされた石がカマド内から1点出土しただけで、他は抜き取られ遺構外に廃棄されたものと思われる。他の詳細は攪乱を受けており不明である。

施設：床面は軟弱で、若干の凹凸がある。掘形は不規則で強いて言えば周囲がやや深い傾向にある。

遺物と時期：遺物は内黒の暗文環（170図3）がカマドの脇の床面から出土し、掘形からは小型ロクロ甕（7）が出土している。遺構の時期は10c前半の前葉と考えられる。

151号竪穴住居跡（第48・115図） 位置 III L-11

115・150号住居跡と重複し、115号より新しく150号より古い。北東部は150号に壊されているが本跡の方が深さがあるためほぼ全貌を知ることができた。

カマド：東壁の南寄りに位置し、石を主體的に用いて構築されていた。内部には火床や灰層・粘土粒子などは見られず、被熱の痕跡も観察されなかった。

施設：床面に硬化は認められず、掘形は周囲がやや深いタイプであるが全体に浅い。他の施設は床面にPitが検出されている。

遺物と時期：土器以外では曲幽（くりがんな：191図18）が住居跡中央部の床上10cm、釘（192図67）が北壁際から出土している。また、自然系の遺物として床面上では少量ではあるがクヌギの炭化材が見られた。土器は覆土内から土器が3点（171図1・2・3）出土している。遺構の時期は10c代と考えられる。

152号竪穴住居跡（第113図） 位置 III G-23

87・96号住居跡より古く、それらにほとんど壊され全貌は不明である。

施設：住居跡かどうか疑わしいが、水平な広がりを見せる硬化面が確認されたため住居跡として取り上げた。掘形もほとんど認められない。

遺物と時期：図化できた出土遺物はない。

153号竪穴住居跡（第111図） 位置 III G-16

81号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。4.88×4.08m、深さ62cmとやや小振りな住居跡といえる。

カマド：明瞭なカマドは検出されなかったが、東壁の南寄りに少量の粘土が検出された。火床・煙道を伴わないためこれをもってカマドというにはあまりにも確信に欠ける。ここではカマドの可能性を指摘するのみである。

施設：周溝が一部認められた他、柱穴・掘形は認められなかった。

遺物と時期：遺物は覆土から5点出土している。墨書土器（171図3）は「佐」と不明記号が坏体部に記されている。遺



第47図 153号竪穴住居跡

構の時期は10c前半であろうか。

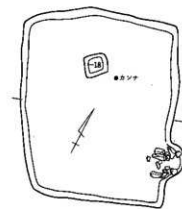
154号竪穴住居跡(第49・116図) 位置 III L-11

84・151号建物跡、992号土坑と重複するが、それらより本跡の方が古い。覆土は掘形を除いて暗褐色土の単層であることから、一気に埋められたものと考えられる。

カマド：北壁のほぼ中央部に壁を外側に掘り込んで構築されている。内部には石材が多数崩落していることから石組みと考えられるが、火床・支脚などは確認できなかった。

施設：床面は明瞭に硬化し、その掘形は浅いが周囲がやや深いものである。

遺物と時期：掘形からは刀子(191図34)が出土している。また、覆土からは炭化したモモの種実が1点見られた。土器は、カマド内から放射状の暗文環(171図1)などほとんどがカマドの出土であった。遺構の時期は10c前半と考えられる。



0 2m

第48図 151号竪穴住居跡

155号竪穴住居跡(第119図) 位置 III P-3

131号住居跡と重複し、本跡の方が古い。また、西側は調査区外におよび全貌は不明である。

施設：東壁の際には周溝、北東コーナーには深さ22cmの貯蔵穴状のPitが検出されている。

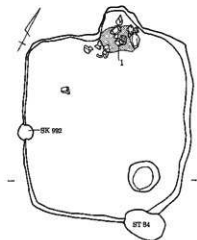
遺物と時期：土器は床面から須恵器の坏(171図1・2・3・4)が出土している。遺構の時期は9c後半の前葉と考えられる。

156号竪穴住居跡(第114図) 位置 III L-15

124号住居跡と重複し、切られていることから本跡の方が古いと判断されるが、東側のほとんどが調査区外のため全貌は不明である。

施設：カマドなどの施設は検出されなかったが、床面と考えられる硬化面が弱いながらも確認できたため住居跡とした。掘形の調査で床面下に凹凸が著しいことから他遺構の存在が考えられたが、やはり不明である。

遺物と時期：土器は覆土から内黒の高台坏(171図1・2)が見られ、遺構の時期は10c中葉と考えられる。



0 2m

第49図 154号竪穴住居跡

158号竪穴住居跡(第47・113図) 位置 III G-18

87・88・96・157号住居跡と重複関係にあり、これら全てに切られていることから最も古い住居跡である。カマド：地山を掘り残し袖を作りその上に粘土を用いて作られていた。土層は1・2層は粘土で、1層が崩落した天井部の一部、2層は煙道の補強のために貼り付けられたものと考えられる。4・5層は良好な灰層であった。

施設：北壁と考えられる立上りとカマドが確認され、床面はカマド前面に硬化面を残していた。

遺物と時期：上記のカマドの灰層は良好であったため、4層を「サンプルA」・5層を「サンプルB」・5層の平面採取を「カマド」として同定したところ5層相当「カマド」の資料からタニシ・海産種の可能性のある腹足類が検出された。遺物はカマド内から内黒の環(171図1)が出土している。遺構の時期は7c後半と考えられる。

160号竪穴住居跡(第92図) 位置 I O-13

21・22号住居跡と重複し、断面の観察から本跡は22号より古く、21号より新しい。

施設：ほとんどが他遺構の破壊、または調査区外で不明な部分が多いが、断面での明瞭な壁の立上りと周溝を回らず深さ67cmの床面が確認できたため住居跡とした。

遺物と時期：遺物は少量で図化できたものはない。

161号竪穴住居跡(第110図) 位置 III G-24

93号住居跡と重複関係にあり、本跡が切られることから本跡の方が古い。遺構検出時には93・161・162号住居跡は一遺構として取り扱ってしまい、掘り進めるうち3軒の重複であることがわかった。

施設：深さは約50cmを測り、周溝が認められるが、他は不明である。

遺物と時期：遺物の出土はなかった。

162号竪穴住居跡(第110図) 位置 III G-19

93号住居跡と重複し、本跡の方が古い。161号住居跡での記載のとおり遺構の確認ミスであったが、掘り進めるうち93号住居跡と本跡の間に壁の立上りを確認したことや、掘形調査の結果によって別の遺構とした。あるいは93号住居跡の建替えなどが考えられなくもないが、全貌がわからないためその点は不明である。

施設：一辺約5.0m、深さは48cmの規模で床面と思われる平坦面は軟弱であった。その他の施設は検出されなかった。

遺物と時期：遺物の出土はなかった。

170号竪穴住居跡(第50・97図、P L 12) 位置 II K-23

55・130号建物跡と重複し、本跡の上で確認できたことから本跡の方が古い。

カマド：地山を掘り残した上に粘土で作られるタイプで、天井部の崩落が確認できたが、袖・天井の石材は検出されていない。燃焼部も明瞭に認められ、その上部の灰層からはタニシと考えられる貝の小片が検出されている。また、右袖外側の基部には床から39cmの棚状の高まりが認められた。単なる崩落とも考えられるが他に類例を知らない。ここでは棚を想定しておきたい。

施設：床面は凹凸の少ない平坦面で全体に硬くしまっていた。掘形は認められなかったが、そのことに床の硬さが起因しているのかもしれない。

遺物と時期：土器は小型の手握ねの壺(172図3)がカマド手前の床面、胴張りの甕(6)がカマド左脇

とカマドから出土している。他に刀子片・砥石(195図3)が南壁の周溝から出土している。遺構の時期は6c末~7c初頭と考えられる。

171号竪穴住居跡(第50・97図、PL12) 位置 II P-4

重複関係はなく、横長で小型の住居跡である。

カマド:北壁の西寄りにあり、石を袖の芯材に使い粘土によって構築されていたようであるが、石材は抜き取られていた。南壁寄りの床面に石が見られたが、おそらくカマドから抜き取られたものと考えられる。袖や天井に使われていた粘土は完全につぶされ、元の形を想定することもできなかった。確認できたのは石の抜き取られた痕跡と火床、軽石製の支脚石である。火床の下の灰層からは、種類は不明だが魚骨(真骨類)と貝殻の可能性のある腕骨が検出された。

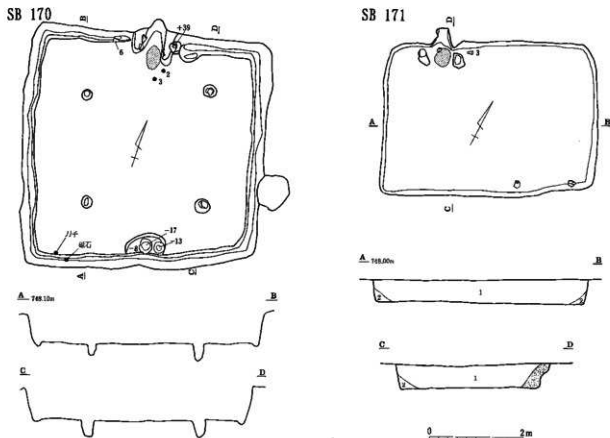
施設:掘形は見られず、地山上に床が設けられていた。そのためか床面は全体に硬化している。土層の堆積は、壁際の床面上にはしまりの弱い黒色土の2層が見られるが、大半はロームブロックを多く混入する黒褐色土の1層で、人為的なものと考えられる。

遺物と時期:土器は、カマドの脇から胎土・焼成が優れ内面に螺旋と放射状の暗文を持った織内系暗文坏(172図3)が認められた。遺構の時期は7c中葉~後半と考えられる。

172号竪穴住居跡(第97図、PL12) 位置 II P-14

SD3と重複し、壊されていることから本跡の方が古いと考えられる。

施設:北壁中央にあり、袖は地山を掘り残した上に粘土を用いて構築されている。天井部は崩落し、使用されていた粘土は床面中央までおよんでいた。



第50図 170・171号竪穴住居跡

施設：床面は全体に硬化し、周溝は残存部では全周する。南壁の中央部では周溝が部分的に広がっており、入り口に関するものと考えられる。主柱穴は4基確認され、深さは82～86cmを測った。掘形はあまり深さを持たないが中央部に比べて周囲の深いタイプであった。

遺物と時期：床面からはヨシとワラ・クリの炭化材が検出された。遺物は土器の破片が多く出土したが、接合できた個体は少なく（172図1）の甕だけであった。カマドの灰層から、種は不明であるが貝殻と骨の小片が出ている。遺構の時期は7c代と考えられる。

173号竪穴住居跡（第99図、P L 12） 位置 II P-14

174号住居跡・78号建物跡を切っていることから本跡の方が新しい。主軸3.1mに対し横軸が5.78mと横長の住居跡である。

カマド：北壁の中央やや南寄りに位置し、天井部は崩落し袖石・支脚石などは抜き取られているが、粘土で作られた袖は残り、残存状況は良好といえる。

施設：床面は全体に硬化し、周溝は全周する。主柱穴は52～60cmを測るものが4基確認された。南壁の中央部がやや膨らむのは入り口に関するものであろう。

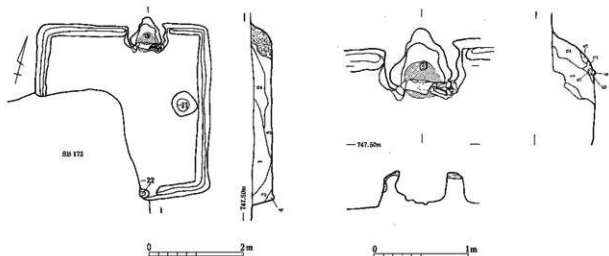
遺物と時期：石製品は白玉（198図76）・勾玉（78）が出土している。土器は胴張りの甕・内黒土師器の坏（古墳時代後期）の小片が出土しているが、図化し得る大きさが無かった。遺構の時期は7c後半と考えられる。

174号竪穴住居跡（第51・99図、P L 12） 位置 II P-12

173と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド：北壁のやや南寄りにあり、袖は地山を掘り残しその上に粘土を用いて構築されている。両袖の先端には石が残り、天井に使われていたと考えられる石材が、崩れてはいるが焚き口に残っていた。支脚については燃焼部中央の原位置に残されていた。カマド内は粘土と共に黒色土のブロックが混入する。4・5層は灰層で、6層は火床を構成する硬化した焼土層である。

施設：覆土は1～3層は地山の黄褐色土などをブロック上に混入した人為的なもの、4層はきめの細かい黒色土で、壁面直下の周溝上に認められた。P 1は柱穴とするには21cmと浅く詳細は不明である。床面は全体に硬化し、掘形は認められない。



第51図 174号竪穴住居跡

遺物と時期：出土遺物は、覆土から甕（172図1）が出土している。遺構の時期は7c後半と考えられる。

175号竪穴住居跡（第52・101図、P.L12）

位置 II P-21

176・214・218・242号住居跡・1427号土坑と重複関係にあり、これらの中で一番新しい。

カマド：地山（176号住居跡覆土）を掘り残した上に多量の粘土によって構築されているが、両袖の間隔が広く、いわゆる東日本型といわれる、横に二つ掛けのできるタイプのものである。構築材の石材は抜き取られカマド内・住居跡床面に散在し、両袖の先端の石は抜き取られずに残されていた。施設：床面には若干凹凸があり、カマド前面で明瞭な硬化面を認めることができたが、壁際近くでは硬化は弱い傾向があった。またその壁際の床面上には石が配されているが、礎石というにはあまりに小さく、壁の構造に関するものと考えられるが詳細は不明である。南壁の中央には入り口施設と考えられる張り出しが確認されている。

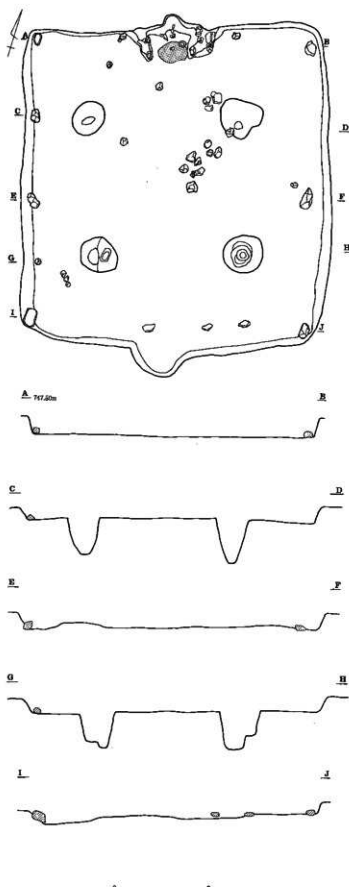
遺物と時期：カマド内の灰層からは種は不明であるが、魚骨・貝殻・獣骨と同定された焼骨が確認されている。出土遺物はカマド内から内黒環（172図1）・小型の武蔵甕（9）が認められ、他は覆土出土である。遺構の時期は8c中葉と考えられる。

176号竪穴住居跡（第53・101図、P.L14）

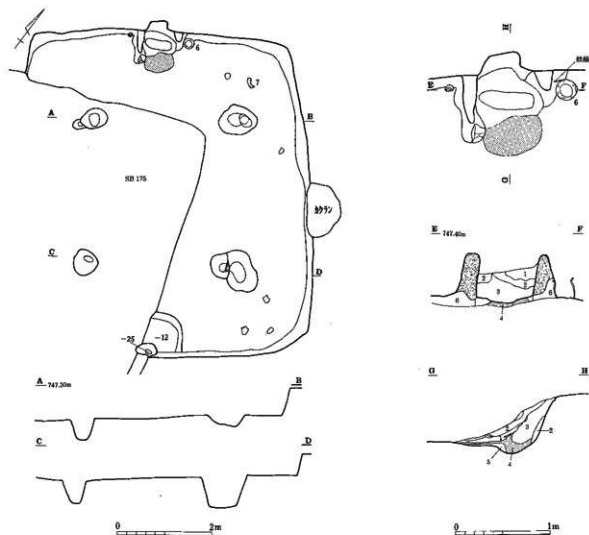
位置 II P-21

175号住居跡と重複し、南西部が切られていることから本跡の方が古い。

カマド：北壁中央に設けられ、袖は基部に暗褐色土（6層）を用い、その上を粘土で構築している。1～3層は粘土・炭化物などのブロックによって形成された層で、天井などの崩落した層と考えられる。4層は



第52図 175号竪穴住居跡



第53図 176号竪穴住居跡

焼土主体層、5層は灰層であった。

施設：床面はカマド手前と中央部で硬化を見せるが、周辺ではやや軟弱であった。掘形は中央部が高く、壁際が深いタイプである。南壁中央の床面には入り口と考えられる掘り込みとPitが認められるが、一部を175号住居跡に切られている。

遺物と時期：土器は、カマド右袖の脇には土師器の甕（173図6）が正位の状態で置かれていた。また、その土師器の甕の横から鉄鏝（192図48・49）が出土している。遺構の時期は7c末葉と考えられる。

177号竪穴住居跡（第98図、P.L14）位置 II P-6

198・227号住居跡と重複し、両者より新しい。

カマド：北壁中央に位置しているが、上部は崩落し原型をとどめず、袖の某部である地山の掘り残しが認められた。火床上には部分的に薄い灰の堆積が認められた。

施設：覆土は単層で、掘形は認められず、床面は明瞭に硬化していた。

遺物と時期：遺物は東壁局溝内から回転糸切り底の須恵環（173図1～4）が出土している。遺構の時期は9c前半と考えられる。

178号竪穴住居跡（第99図、P.L14）位置 II P-11

230号住居跡を切って構築されるため、本跡の方が新しい。

カマド：東壁と北壁は大きな攪乱で壊され、本来北壁にあったと思われるカマドは、煙道の一部が残るのみで、その周辺に芯材に使われた石材が散在している。

施設：覆土はブロックを多量に混入する人為的なもので、床面はやや凹凸があるが硬化していた。南壁の中央には入り口と考えられるPitが検出され、北壁の東側と西壁の中央には3基の壁柱穴が認められた。遺物と時期：土器は(173図2)がPit内、(1)の坏がカマドの左脇から出土している。(2)の甕の内面には帯状に煤が付着している。遺構の時期は7c後半と考えられる。

179号竪穴住居跡(第54・98図) 位置 II P-6

227号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。

カマド：北壁中央に位置し、多数の土器が出土しているが、左袖は完全に崩落し残存状況は良好とはいえない。

施設：床面にはやや凹凸があり、硬化面の範囲は狭くカマドの焚き口周辺のみであった。北壁にはカマドを挟んで2基のPitが検出されているが、壁柱穴であろうか。

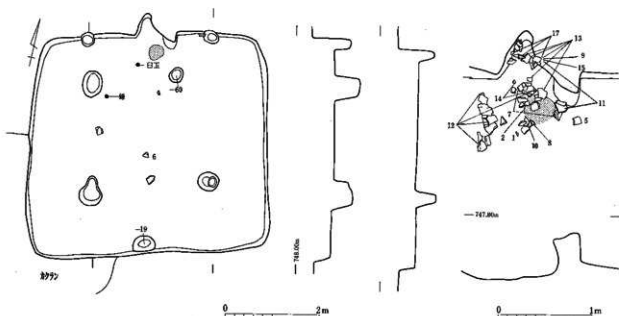
遺物と時期：床面直上で鎌(190図3)と白玉(198図69)が出土している。土器は、カマドの煙道部で土師器の甕(174図13・15・17)出土しているが、全て破片で原位置を留めていたかどうか疑問が残るため、煙道に使われたかどうかの言及は避きたい。またカマドからは7個の坏が出土し、(173図1)の外面には「矢」であろうか逆位で記されている。遺構の時期は9c後半の前葉と考えられる。

180号竪穴住居跡(第97図、P L14) 位置 II K-22

SD3と重複し、切られていることから本跡の方がSD3より古いと考えられる。

カマド：袖は地山の黄褐色土をつき固めた上に、粘土を貼り付けて構築されている。袖石は抜き取られたものが、焚き口周辺に廃棄されていた。

施設：床面は硬化し、周溝は全周する。掘形は浅く凹凸の少ない形状である。検出できた柱穴は1基で深さ50cmを測る。



第54図 179号竪穴住居跡

遺物と時期：土器は内黒の坏（174図1・2・3）が3点出土しているが、（1）と（2）については外面に煤状の黒色処理が施された関東的色彩の濃いものである。遺構の時期は7c中葉と考えられる。

181号竪穴住居跡（第55・96図、P L14） 位置 II P-5

本跡の東半分は調査区外におよび全貌は不明である。

カマド：北壁のほぼ中央にあると考えられ、煙出しに使っていた甕が若干潰れてはいるが煙道の下部に連結された状態で残っていた。地山掘り残しタイプの両袖は崩され天井は残っていないが、燃焼部では火床・灰層・支脚の抜き取られた痕跡が2基横に並列して認められ、良好な残存状態だといえる。

施設：床面で貼床が認められ、明瞭に硬化していた。北壁には3基の壁柱穴が認められたが、P8が他に比べて44cmと深く掘り過ぎの疑いもある。

遺物と時期：土器は（175図2・3・4）の甕が煙道部から出土し他、（1）の須恵器高台坏が床面から出土している。（3）の甕の口縁部には煤の付着が認められたが、煮炊きによるものではなく煙出しの際残ったものであろう。また、貼床を剥いだところ、灰白色の灰が充填されたP5が検出され、その覆土を洗浄篩別したところ炭化したイネ・キビ・ムギと多量のアワが検出し、カマドと床面に見られた灰についても洗浄篩別を行い、上記以外にオニグルミ・オオムギが同定されている。遺構の時期は8c中葉～後半と考えられる。

182号竪穴住居跡（第56・93図、P L15） 位置 II K-19

131号建物跡・1166号土坑と重複関係にあり、本跡は131号掘立柱建物跡より新しく、116号土坑より古い。

カマド：東壁の中央にあり、粘土を用いて構築されている。床面上にはカマドの袖の芯材・天井石と思われる石材が認められたが、抜き取られた痕跡は調査では確認できなかった。天井部は潰れてはいたが一部残っていた。

施設：覆土の堆積状況は、ブロックを多く混入するもので人為的なものである。床面には凹凸が認められ硬化は顕著ではなかった。また、掘形についても規則性はなかく北東部がいくぶん深い。

遺物と時期：遺物は少なく図化し得たのは高坏の坏部（175図1）のみであった。遺構の時期は7c代と考えられる。

184号竪穴住居跡（第57・99図） 位置 I T-14

185・186号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が新しい。

カマド：カマド部分は攪乱を受けていること、遺構廃絶時に入念な破壊を受けていることから残存状況は悪く、火床のみが確認され、粘土や石材は検出されなかった。

施設：床は軟弱でとすると掘り過ぎる傾向にあった。

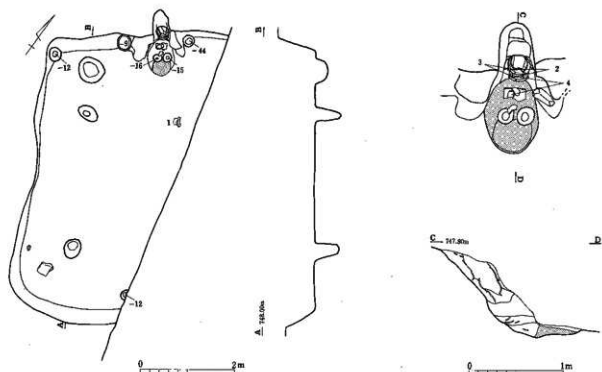
遺物と時期：敲石（196図22）が覆土から出土し、土器は土師器であるが須恵器製作技法の丸底長胴甕（175図5）が覆土から出土している。遺構の時期は8c前半と考えられる。

185号竪穴住居跡（第58・99図、P L15） 位置 I T-15

184号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド：北壁中央のやや東寄りに位置し、袖・天井は粘土によって作られ、芯材の石などは抜き取られていたが、天井の一部はブリッジ状に残っていた。

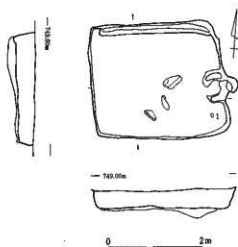
施設：床面は南西部がいくぶん軟弱であった他、やや凹凸が見られたが硬化していた。掘形に規則性は



第55図 181号竪穴住居跡

なく4~20cmの深さで凹凸が激しい。

遺物と時期：覆土からは石製の砥石（195図9・13）・こも編み石（195図33）・円盤状軽石（198図57）の3点出土している。また、カマドの火床部上には灰層が見られその灰の洗浄選別の結果、哺乳類（歯）・魚類（真骨類）などの焼骨が検出されている。土器は床面上での遺物の出土は多かったが、図化できたのは古墳時代後期に特徴的な坏が4点（175図1・2・3・4）である。遺構の時期は7c前半と考えられる。



第56図 182号竪穴住居跡

186号竪穴住居跡（第99図、P.L15）位置 I T-14

184・192号住居跡と重複関係にあり、184号住居跡より古く、192号住居跡より新しい。遺構の西半分は調査区外のため全貌は不明であるが、主軸方向で7.04mを測る大形の住居跡と思われる。

カマド：北壁にあったと考えられるが調査区外で不明である。

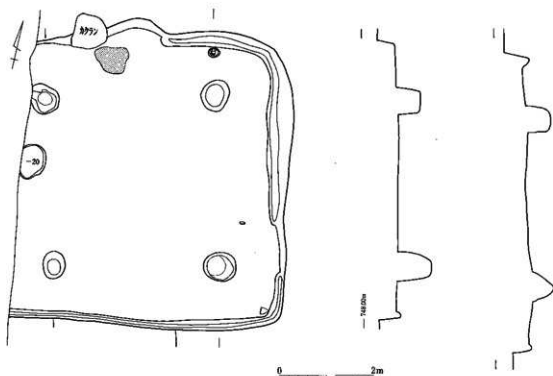
施設：南壁の西寄りには入り口施設と考えられる37cm掘り込みが検出されている。北・東・南の壁には7基の壁柱穴が認められた。

遺物と時期：土器は須恵器（175図1）の1点のみ図化できた。遺構の時期は7c中葉と考えられる。

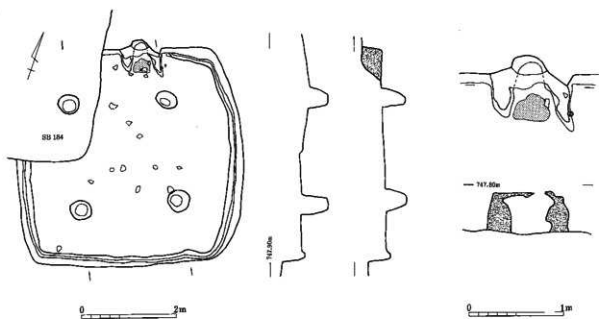
187号竪穴住居跡（第98図）位置 I T-9

本跡と切りあう遺構はなく単独である。

施設：遺構の規模は2.38×2.38mと小型で、カマドを伴っていないことから竪穴住居跡とするには疑問



第 57 図 184号竪穴住居跡



第 58 図 185号竪穴住居跡

の残るところである。竪穴住居跡状遺構とすべきであったか。床面中央に深さ38cmのPitが検出されたが、調査の所見では用途は不明であるが本跡に伴うものである。掘形については若干認められたが、明瞭さに欠けるものであった。

遺物と時期：遺物の出土は少なく、図化し得たものはない。

188号竪穴住居跡（第98図） 位置 IO-24

7・189・194号住居跡と重複関係にあり、本跡が新しいものと考えられる。

施設：187号住居跡と同様に規模は小さくカマドを持たず、竪穴住居跡とするには疑問ある遺構である。床面は軟弱で、掘形は認められず他の施設も無い。
遺物と時期：遺物は、床面直上で環が2点(175図1・2)出土しており、遺構の時期は7c前半と考えたい。

189号竪穴住居跡(第95・98図、P L15) 位置 I O-24

7・188・194号住居跡、1169号土坑と重複し、本跡は7・188号住居跡より古く、194号住居跡より新しい。東側は7号住居跡によって欠落しているが北壁に設けられたカマドと南壁中央の入り口施設は確認できた。カマド：右袖を欠くが、粘土で構築された左袖の先端には石が残り、火床・支脚石が検出されている。
施設：床面は平坦であったがやや軟弱で、掘形は残存個所で15～20cmの深さを有していた。支柱穴のPitの深さは44～56cmである。
遺物と時期：遺物は図化できる土器はなく、古墳時代後期の甕の破片が出土している。覆土から砥石(195図8)が出土している。遺構の時期は7c後半であろうか。

190号竪穴住居跡(第98・99図、P L15) 位置 I T-10

198・229号住居跡・1382号土坑と重複関係にあり、両跡を切ることから本跡の方が新しい。
カマド：北壁中央に位置し、地山(198号住居跡の覆土)を掘り残り粘土を用いて構築されていたようである。袖の先端には石が芯材として用いられていたようであるが、抜き取られたようで床面上に石材が散乱していた。全体的に残りは良好といえないが、明瞭に確認できた火床は横に長く、横並列掛けのいわゆる「東日本型」のようである。
施設：床面は明瞭に硬化し、貼床も認められた。カマドの両脇の北壁の床面にはPitが2基確認され、調査中は建替え前の柱かかと考えたが、竪穴住居跡の上層構造に関する可能性も考えられる。
遺物と時期：土器は、内黒環(175図1)がカマド脇の床面から、須恵器環(2・3・6)は床面から出土し、そのうち須恵器高台環の(6)の外底面には「X」のへら記号が記されている。遺構の時期は8c前半と考えられる。

191号竪穴住居跡(第98図) 位置 I T-5

193・195・197号住居跡と重複し、193・195号住居跡については本跡より古い、197号住居跡との重複はわずかであり新旧は不明である。
施設：床面は軟弱で硬化は見られなかったが浅い掘形が確認され、覆土と掘形の土層の違いから床面と思われる平坦面を追いかけることができた。カマド・周溝・柱穴などの施設は検出されなかった。
遺物と時期：遺物の出土はわずかで図化できたものはない。

192号竪穴住居跡(第99図) 位置 I T-19

186号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が古い。西側は調査区外におよんでいるため全貌は不明である。
施設：住居跡とするには不明な点が多いが、検出面から約30cmの深さで硬化面が確認されたことから竪穴住居跡とした。
遺物と時期：遺物の出土はない。

193号竪穴住居跡(第59・60・98図、P L15) 位置 I T-5

191・194・195・198号住居跡と重複関係にあり、191号住居跡より古く、194・195・198号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、地山（194・195号住居跡の覆土）を掘り残し粘土を用いて構築されている。天井部・左袖は崩落していたが、右袖は芯材である石材が残り残存状況は良好である。土層の断面観察では粘土と暗褐色のブロック（1層）の下には灰層（2層）が見られ、燃焼部上面には焼土（3・4層）が堆積していた。そしてさらに下層にはもう一枚の灰層や焼土層が見られることから、建替え前のカマドの可能性が指摘できるが、床面が全体に二枚見られないことから不明と考えたい。

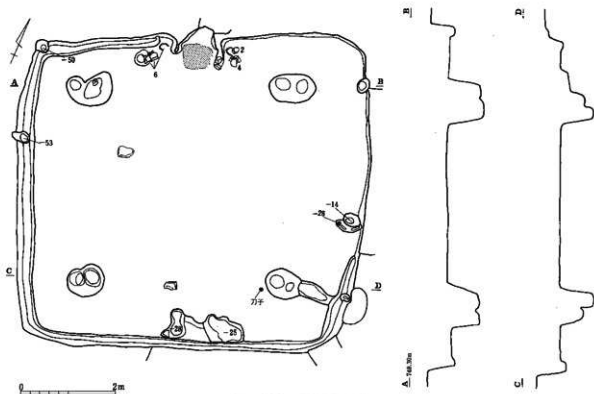
施設：支柱穴・周溝・間仕切りの溝が確認されたが、周溝は東壁寄りの床面の硬化が弱く検出されなかった。南壁中央には入り口施設と考えられるPitが検出されたが掘り過ぎであろうか不整な形状であった。また、壁柱穴の並びも不規則である。

遺物と時期：床面から刀子（191図37）・不明銅製品（194図113）、石製品では覆土から凹石（200図99）が出土している。土器は小型の丸底甕（176図4）と底部を欠いた長胴甕（6）がカマドの両脇から正位で出土している。（1・2・3）の坏はこの時期を代表するものであり、7c後半の後葉と考えられる。

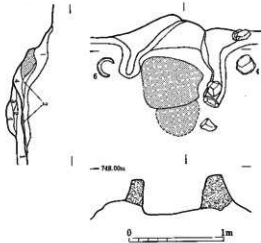
194号壁穴住居跡（第61・98図、P L15・16） 位置 I T-4

188・189・193・195号と重複関係にあり、188・193・195号住居跡は本跡より新しく、189号住居跡は古いと考えられるが、189号住居跡との重複はわずかにカマドの煙道部のみで、さらに重複する部分の上部を188号住居跡が壊し、189号住居跡に時期決定の遺物が無いことから若干の不安が残る。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山の掘り残しをせず、粘土を用いて構築されていた。袖の先端には芯材の石を抜き取った痕跡が認められるが、本跡内には抜き取られた石材は見つかっていない。床面・覆土内には多量のカマド構築材の粘土が見られたことから、粘土主体のカマドを意図的に破壊していること



第59図 193号壁穴住居跡

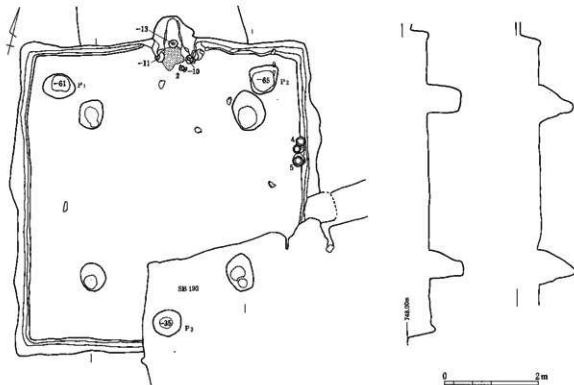


第60図 193号竪穴住居跡

壁際に見られのだけが本例は異例といえる。(2)の土師器の坏は関東特に群馬県で顕著に見られるタイプで、カマド近くの床面出土して。内外面ハケの施された土師器長胴甕(3)は佐久地方では珍しいが中信の影響であろうか。遺構の時期は6c末~7c初頭と考えられる。

195号竪穴住居跡(第98図) 位置 IT-5

191・193・194号住居跡と重複関係にあり、本跡は191・193号住居跡より古く、194号住居跡より新しい。カマド：東壁のやや南寄りに位置しているが、残存状況は悪く、火床と煙道は確認できたが袖や天井などの部分は完全に壊れていた。袖については掘形などから、地山掘り残しではなく先端に石を埋め粘土によって構築されたものと考えられる。



第61図 194号竪穴住居跡

うかがえる。また、火床上にも支脚石を抜き取った跡のPitが検出された。

施設：床面はほぼ全体が硬化しており、北西コーナー・北東コーナー寄りにP1・P2が検出されたが、貯蔵穴あるいは補助穴であろうか。また、南壁中央の壁際には入り口施設と考えられるP3が、193号住居跡の掘形調査によって検出されている。

遺物と時期：石製品は敲石(196図2)が覆土から出土している。土器は東壁際の床面に長胴甕(176図4)・胴張り甕(5)と実測できなかったが(4)と同じタイプの長胴甕の3点が胴部下半を欠いた正位の状態で見つかった。こうした置かれ方はほとんどの場合カマド側の

施設：193号住居跡との重複により大部分を失うが、残存する床面は軟弱で掘形は深さが5～15cmの不規則なものであった。柱穴は深さが床面から52～58cmで、193号住居跡の掘形調査によって確認された。
遺物と時期：遺物は(176図1・2)がカマド手前の床面から、鉄製の針(191図21)がカマドの火床上面で出土している。遺物の時期から7c中葉としたい。

196号竪穴住居跡(第98図、P L16) 位置 II P-1

197・198・228号住居跡と重複し、本跡は197・198号住居跡より新しく、228号住居跡より古い。

カマド：袖部の地山を掘り残し、上部を粘土で構築されるタイプで天井は崩れていたが、軽石製の支脚石も原位置に見られ残存状況は良い方といえる。また、長さ約40cm・直径25～40cmのパイプ状の粘土塊が焚き口から検出され、カマド煙道上部の崩落したものと想定したが類例もなく現段階では憶測に過ぎず不明としておく。

施設：床面には柱穴周溝もなく平坦で、北東コーナーには貯蔵穴と思われる深さ22cmのPitが検出された。

遺物と時期：遺物は土器の小片は出土しているが、図化できるものはなかったが、古墳時代後期の甕の破片が多いことや重複関係から古墳時代後期(7c代)としておく。

197号竪穴住居跡(第98図) 位置 II P-1

16・191・196号住居跡と重複関係にあり、本跡がそれらより古いと判断したが、191号住居跡との重複については極わずかな部分であったため確信に欠ける。

カマド：東壁の南東コーナー寄りにカマドと思われる粘土塊が検出され、床面に袖の基部と思われる粘土が微量付着していた。また、煙道を思わせる窪みが壁面に見られた。

施設：床面にはやや凹凸があり軟弱なもので、検出面からの深さは38cmを測ったが検出時に東壁周辺を下げ過ぎてしまったため深さは15cm程である。柱穴と思われるPitが2基、東壁コーナーには貯蔵穴状のPitが検出されている。掘形は10～22cmの深さで一様に下げていた。

遺物と時期：遺物：図化できたものはない。

198号竪穴住居跡(第98図、P L16) 位置 II P-6

177・190・193・196・229号住居跡と重複関係にあり、それら全てに切られていることから本跡が一番古い。

カマド：北壁中央に設けられているが193号住居跡に大部分壊され、崩れた右袖の先端と火床の一部が確認されたが、タイプとして袖石を先端に埋め込み粘土で構築されたものと思われる。

施設：やや凹凸のある床面からは支柱穴と思われるPit4基が確認され、掘形調査でその内側からさらに4基のPitが確認されたことから立替えが想定される。なお床の中央付近で確認された2基のPitについては本跡に伴うかどうか不明である。

遺物と時期：土師器の坏(177図1～4)・甕(6)・小型甕(5)が出土し、カマド手前の床面から刀子(191図38)、覆土から石錘(197図36)が出土している。遺物から遺構の時期は7c後半の後葉と考えられる。

200号竪穴住居跡(第89図) 位置 I J-4

1151・1190土坑と重複し、本跡の方が古く、北側は田切り谷によって切り取られており全貌は不明である。

カマド：北寄りの床面にはカマド構築材に使われたと思われる粘土と灰が確認されたことから、北壁に設けられていたものと推測される。

施設：床は深さ18～30cmを測り、軟弱でやや凹凸がある。掘形は約12cmの均一なものであった。

遺物と時期：図化できた遺物はない。

201号竪穴住居跡（第86図） 位置 II A-16

202号住居跡・106号建物跡と重複関係にあり、202号住居跡より新しく、106号建物跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端に石を使用し粘土によって構築されている。

施設：床面はほぼ平坦であるが硬化は弱い、掘形は中央部が深く周辺部が浅いもので、他の住居と比較して異例である。柱穴と思われるPitは2基確認されたが、両側に本来あると考えられる2基のうち、1基は建物跡と重複しているものと思われ、もう1基は攪乱により不明である。

遺物と時期：カマドの灰から貝類A・不明（貝殻・骨片）が同定されている。また、図化し得た遺物は古墳時代後期の土師器の坏（177図1～5）である。遺構の時期は7c後半の後葉と考えられる。

202号竪穴住居跡（第86図） 位置 II A-16

201・204号住居跡と重複し、両跡より古い。北西部は田切りの谷により欠落している。

カマド：北壁に設けられていたものと思われるが、不明である。

施設：床面は軟弱で、硬化面は認められない。東壁には壁柱穴と考えられる2基のPitが確認されたが、他の壁では確認されていない。掘形は10cm程度の不規則なものであった。

遺物と時期：石製品が出土している。出土遺物は少なく土師器の坏（177図1）のみである。7c後半であろうか。

203号竪穴住居跡（第86図、P L17） 位置 II A-21

8・204・205・210号住居跡と重複し、8号住居跡より古く204・205・210号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、右袖と燃焼部の一部は攪乱を受け、石組みした上に粘土を用いて構築されている。燃焼部では火床が明瞭に検出されている。

施設：床面は軟弱で、やや凹凸が見られた。掘形は深さ18cmを測ったが底部は平坦であり、掘形というよりは建替え前、あるいは別の遺構が想定される。

遺物と時期：カマドから須恵器高台坏（177図1）・小型甕（3）、北西隅の床面から甕（5・6）が出土することから遺構の時期は8c前半の後葉と考えられる。

204号竪穴住居跡（第62・86図） 位置 II A-21

202・203号住居跡と重複関係にあり、202号住居跡より新しく、203号住居跡より古い。北西コーナーは田切りに削られ欠落している。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。柱穴は2基確認されたが他は203号住居跡と重複するため不明である。

施設：床面にはやや凹凸があり、中央付近で良好な硬化が認められた。掘形の形状は周囲が5cm程の深さはあるが、中央部では掘り込みは見られない。周溝は北壁以外で検出できた。

遺物と時期：カマドの灰から貝類A・不明（貝殻・骨片）が同定されている。床面から（178図2・4・6）が、カマド内から（3・5・8）が出土している。小型甕（7）はカマドの右袖の脇に埋め込まれた

状態で出土し、外面には煤の付着が見られた。遺構の時期は7c後半の後葉といえる。

205号竪穴住居跡(第86図) 位置 I E-25

203・209・210号住居跡と重複関係にあり、210号住居跡より新しく、203・209号住居跡より古いものとしたが、いずれとも重複はわずかで攪乱で破壊されていることから調査ミスの可能性がある。本跡北西コーナーは田切り谷によって削られている。

カマド:北壁の中央の床面上に火床と思われる焼土が検出されているが、その他の構築物などは不明であるためカマドとは断言しにくい。

施設:床面は深さは38cmで軟弱であった。掘形は浅く、さらに下層から建替え前、あるいは別の遺構の掘形状の掘り込みが検出されたが遺物はなく詳細は不明である。柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物と時期:遺物は少なく須恵器の坏(178図1)・蓋(2)が覆土から出土している。遺物から9c前半の後葉と考えられる。

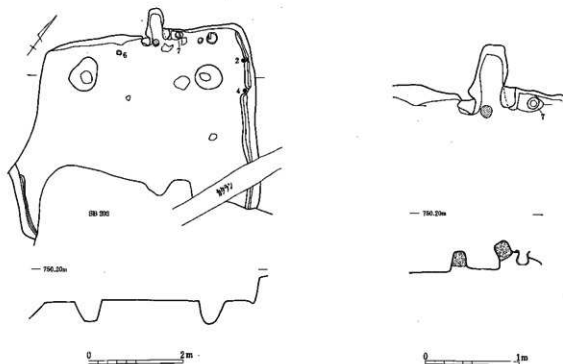
206号竪穴住居跡(第63・86図) 位置 I J-9

1号住居跡・1191号土坑と重複関係にあり、本跡の方が古い。

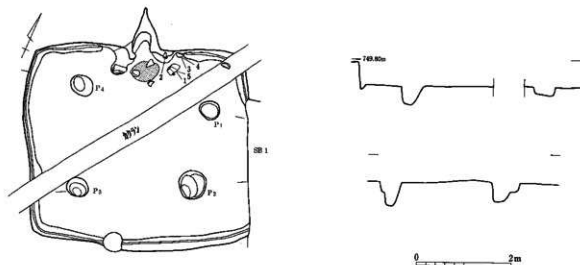
カマド:北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残り粘土で構築されている。焚き口付近に芯材に用いた石が確認されたが、抜き取られ放棄されたようで原位置をとどめていない。燃焼部から急激に立ち上がった煙道部は、崩落のためか上部で緩やかに伸びている。

施設:床面は全面明瞭に硬化し、掘形は中央部が高く周囲が深いタイプで、その断面観察で貼床が認められている。柱穴と思われるPitは4基確認されたが、P1については深さが16cmと浅く他のPitと比較しても浅く位置から考えても、本来の柱穴は攪乱に壊されている可能性がある。

遺物と時期:遺物のほとんどはカマド周辺から出土している。ハケ調整された甕(178図3・4)はカマドの右袖脇から出土しているが、佐久地方在地のものではない。三重県の北野遺跡出土の甕に類似するが、



第62図 204号竪穴住居跡



第 68 図 206号竪穴住居跡

口縁部の形態が揃み上げられていないという点で相違するため、東海地方としておく。(5) の中型甕の底部は内面から打ち欠いた穿孔が認められた。遺構の時期は 7c 後半であろうか。

207号竪穴住居跡(第86図) 位置 I J-9

208号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が新しい。遺構の北側は田切り谷に削り取られている。

カマド：カマドの構築に使われたと思われる石材が床面上に検出されたが、不明である。

施設：床面は軟弱で硬化は認められず、深さはあまりなく 20cm を測った。掘形は中央部が若干高いタイプである。柱穴などの他の施設は検出されていない。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

208号竪穴住居跡(第89図) 位置 I J-9

207号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が古い。

カマド：北壁の設けられていたものと他遺構との重複で不明である。

施設：床面は軟弱で深さ 15cm ほどの浅く小型の住居跡である。柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

209号竪穴住居跡(第86・89図) 位置 I J-5

3・205・210号住居跡と重複関係にあり、205・210号住居跡より新しく、3号住居跡より古い。北壁の一部は田切り谷によって削られている。

カマド：北壁中央に位置し、袖は地山掘り残しで主に粘土を用いて構築されている。天井は崩落し、一部に粘土ブロックは見られたが痕跡はとどめない。燃焼部には灰が多く堆積していたが、火床は見られなかった。

施設：床面には凹凸があり、掘形においても階段状になることから他遺構を同時に掘ってしまった可能性が考えられる。

遺物と時期：覆土から 3 点(178図)の出土が見られるが、重複する3号住居跡との時期が逆転している。

(3号住居跡の記述参照)。時期は 8c 前半と考えられる。

210号竪穴住居跡(第86図、P L17) 位置 I J-5

3・209・205・211号住居跡と重複関係にあり、3・211号住居跡より新しく、205・209号住居跡より古い。
 カマド:北壁中央にあり、袖は地山を掘り残し主に粘土を用いて構築されている。
 施設:床面は平坦で全面明瞭に硬化している。
 遺物と時期:覆土から須恵器の坏(178図1)が1点出土している。時期は9c後半と考えられる。

211号竪穴住居跡(第86図) 位置 II F-1

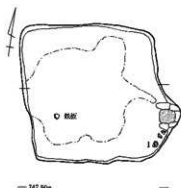
28・210号住居跡と重複関係にあり、本跡の方が28・210号住居跡より古いものと考えられる。
 カマド:北壁中央に位置し、焚き口・天井の両袖を石で組み本体は粘土で築く構造をしている。
 施設:床面全体は本跡南半分は攪乱のため不明で、軟弱であったが検出できた。本跡南半分は攪乱のため不明である。
 遺物と時期:遺物は少なく図化できたものはないが、重複関係から遺構の時期は9cと考えられる。

212号竪穴住居跡(第64・102図) 位置 I T-24

238号住居跡・138号建物跡・1470・1476・2128号土坑と重複関係にあり、138号建物跡・2128号土坑より古く、他の遺構より本跡の方が新しい。
 カマド:東壁の南寄りに位置し、燃焼部・煙道は遺構外に張り出している。残存状況は悪く粘土で築かれた袖の基部が確認されたにすぎない。粘土主体で袖の先端に石を使用したものと考えられる。
 施設:深さ10~15cmを測る床面は中央部で明瞭な硬化面を形成している。掘形は見られず、その他、柱穴などは検出されなかった。
 遺物と時期:南東コーナーの床面から内黒の土師器(178図1)が出土しているが、内面のミガキは丁車であることから、9c初頭と考えられる。

213号竪穴住居跡(第102図、P L17) 位置 I T-20

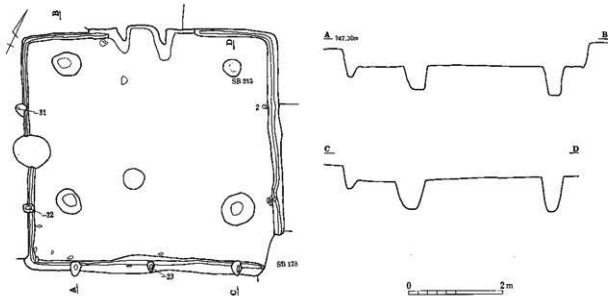
238・214号住居跡と重複関係にあり、238号住居跡は本跡より古く、214号住居跡は本跡より新しい。
 カマド:北壁中央に位置し、粘土で築いた石組粘土覆の構造をしていた。燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの可能性が考えられるが、支脚石は検出されなかった。
 施設:床面は明瞭に硬化し、掘形は中央が高く周囲が深いタイプであるが深さはあまりない。壁柱穴は南壁に4基・北壁のカマドの両側に2基検出された。南壁の中央には遺構外に張り出した入り口施設が確認されている。
 遺物と時期:石製品は凹石(199図92)がカマドから、白玉(198図75)が覆土から出土している。甕(179図7)の上半部が床面から、他は覆土出土である。これらの遺物から古墳時代後期(7c中葉)に置かれる。



第64図 212号竪穴住居跡

214号竪穴住居跡(第65・102図、P L17) 位置 I T-25

213・215・238・242号住居跡より新しく、175号住居跡・139号建物跡より古い。調査上のミスで図を取らずに掘り上げてしまったため、図では213号住居跡と重複している北東コーナー部分が欠落している。



第 65 図 214号竈穴住居跡

カマド：北壁中央に位置し、焚き口の両袖を石で積み本体は粘土で築く、石組粘土覆の構造をしている。燃烧部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの可能性が考えられるが、支脚石は検出されなかった。

施設：床面は明瞭で中央部とカマドの手前で硬化が見られた。掘形は深さ10～14cmを測る規則性のないものであった。

遺物と時期：坏（179図1）の底部はナデ調整が施され、（2）の高台坏は底部が高台より膨らみを見せることから、時期は8c前半と考えられる。

215号竈穴住居跡（第102図） 位置 I T-24

214・242号住居跡・139号建物跡と重複関係にあり、本跡はそれらより古いものと考えられる。

カマド：北壁中央にあり、袖は地山を掘り残し主に粘土を用いて構築されている。焚き口の両袖部分に甕の破片が埋め込まれていたことから、土器を芯材に利用した可能性があるが上部が崩落しているため明言はできない。燃烧部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの可能性が考えられる。

施設：床面は中央部とカマド前面で硬化しほぼ平坦である。南壁中央の床面上に掘り込みが見られたがPitは確認できなかった。柱穴と思われるPitは2基検出され、周溝は西半分には巡っているが東側で検出できなかった。重複により見落とした可能性が考えられる。

遺物と時期：内外面の丁寧なミガキの施された内黒の坏（179図1）と須恵器の坏（2）・蓋（3）から6c後半～7c初頭と考えられる。

216号竈穴住居跡（第66・102図、P L17） 位置 II U-6

217・218・219号住居跡、1186・1485・1454号土坑と重複関係にあり、本跡は217・218・219号住居跡・1485・1454号土坑より新しく、1186号土坑より古い。

カマド：北壁中央に位置し、燃烧部・煙道は遺構外に張り出している。1186号土坑と重複するため破損が著しいが火床部はかるうじて検出できた。その状況から粘土で築いた石組粘土覆の構造ではないかと思われるが、詳細は不明である。

施設：床面は中央部とカマド周辺で明瞭に硬化し、全体的に平坦であった。掘形は14～20cmのやや均一

なもので、断面には貼床が認められた。4基の支柱穴の他に、北西コーナーには貯蔵穴、南壁中央の床面には入り口と考えられるはしご穴が検出された。

遺物と時期：内黒の環（179図1・2）と高台環（3）の他、（4）の蓋は群馬産と考えられる。遺物から時期は9c中葉と考えられる。

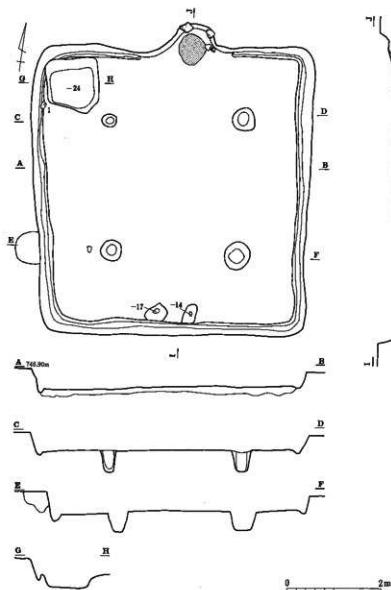
217号竪穴住居跡（第102図、P L 17）位置 I Y-5

218・223・224号住居跡より新しく、216号住居跡・140号建物跡より古い。

カマド：北壁に位置するが、残存状況は悪く、火床は認められたが本体を構成する粘土は全て崩されていた。わずかに地山を掘り残した袖の基部が検出された。

施設：床面は部分的に軟弱であったが、ほぼ明瞭であり若干の高低差があった。掘形は中央部はほとんど掘らず周辺部を掘り下げるタイプである。

遺物と時期：遺物は少なく図化できたのは環（179図1・2）の2点である。遺物から時期は8c前半と考えられる。



第66図 216号竪穴住居跡

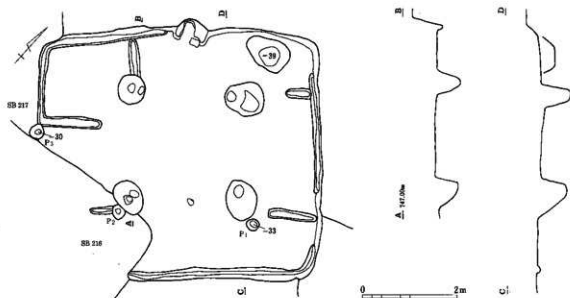
218号竪穴住居跡（第67・101図、P L 18）位置 II U-1

175・216・217・219号住居跡・1425・1427号土坑と重複関係にあり、本跡より古いのは1427号土坑のみで、他は本跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、焚き口の両袖を石で組み本体は粘土で築く、石組粘土覆の構造をしている。残存状況は上部を175号住居跡に削平されているため良好ではない。

施設：床面は中央部とカマド周辺で明瞭に硬化していた。掘形は深さ5～15cmを測る不規則なもので、おおむね中央付近が深いものである。床面精査中に5条の間仕切り溝が検出されたが、深いものでは床面から20cm前後を測った。また、間仕切り溝に近接してP1～P3が検出されたが、間仕切りに関するものであろうか。

遺物と時期：遺物は少なく、図化できたものは環（179図1・



第 67 図 218号竪穴住居跡

2) の 2 点である。遺物から時期は 7 c 前半と考えられる。

219号竪穴住居跡(第101図) 位置 II U-1

216・218号住居跡と重複関係にあり、218号住居跡より新しく、216号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、軸は地山を掘り残し粘土で構築されている。燃焼部の中央に支脚の抜き取り痕が認められたが、石などは残っていないかった。

施設：床面は中央部とカマドの手前が明瞭に硬化しており、掘形は凹凸のある不規則なものであり、南壁寄りの床面の下から深さ22cmのPitが検出されたが、入り口施設とするには壁から離れており、用途・機能等は不明である。

遺物と時期：床面から砥石(195図10)こも編み石(32)が出土している。中央部の床面上からは長胴甕(179図2)が出土している。佐久地方在地のものではなく東海地方の濃尾甕に近似するが、器肉が厚い点で相異する。東海地方の類例を待ちたい。遺構の時期は須恵器の坏(1)から時期は9c初頭と考えられる。

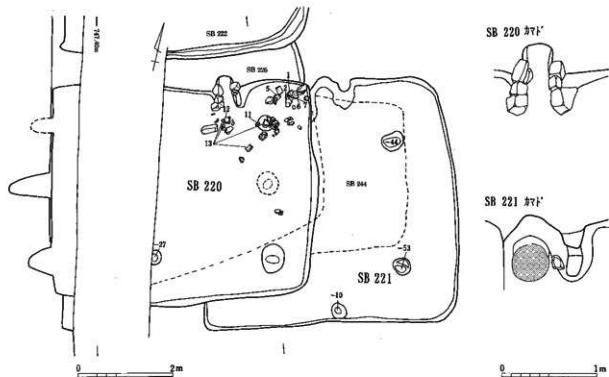
220号竪穴住居跡(第68・102図、PL18) 位置 I Y-10

221・226・244号住居跡と重複関係にあり、本跡はそれらの住居跡より新しい。西側の一部が調査区外であるため全貌は不明である。

カマド：北壁のほぼ中央に位置し、粘土で築いた石組粘土覆の構造をしていた。

施設：床面はカマド周辺で若干の硬化と色調の変化が見受けられたが、全体に軟弱で不明瞭である。掘形の調査は重複する住居跡と覆土が類似したため行っていない。周溝は認められず、柱穴は3基確認されている。

遺物と時期：本跡周辺は重複が著しく、調査当初は226号住居跡が見えておらず若干掘り抜いてしまったため出土遺物は遺物の出土層位で分離した。覆土からは石製品の管玉(198図61)が、金属器では金環(194図107)が出土している。土器では「主」と記された墨書土器(180図2・4~6)が5点出土し、カマド周辺から出土した武蔵甕(12・13)は口縁部は「コ」の字状にの屈曲している。遺構の時期は9c後半の前葉と考えられる。



第 68 図 220・221号壁穴住居跡

221号壁穴住居跡 (第68・102図、P L18) 位置 I Y-10

220・244号住居跡と重複関係にあり、本跡は244号住居跡より新しく、220号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、左袖は220号住居跡との重複で消失している。右袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。カマド内に構築に使われたと思われる石が出土しているが、火床は明瞭に確認できた。

施設：床面にはやや凹凸があり、しまりはなく軟弱であった。掘形はほとんどなく、床面下からは244号住居跡が確認されている。柱穴は東側で2基検出されたが、西側は220号住居跡の掘形により消失している。入り口と考えられる深さ10cmのPitが南壁の中央に確認されている。

遺物と時期：覆土から石製品の凹石 (198図59) が出土している。遺物の出土は少なく、図化できたのは床下出土の坏 (180図1) のみである。遺物から時期は9c前半と考えられるが、出土個数と位置の問題があり時期決定には不確定な要素が多いといわざるを得ない。

222号壁穴住居跡 (第102図) 位置 I Y-4

223・226・243号住居跡と重複関係にあり、本跡の方がそれらの住居跡より新しい。西側半分が調査区外におよぶため全貌は不明である。

カマド：カマドから崩落したと思われる粘土が北壁の中央寄りに確認されたが、本体は調査区外に位置するものと思われる。

施設：床面は硬化し、明瞭な貼床が認められた。掘形は凹凸が著しく規則性のないタイプであった。周溝と主柱穴と考えられるPit 2基が検出された。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

223号壁穴住居跡 (第102図) 位置 I Y-5

224・226号住居跡より新しく、217・222号住居跡・140号建物跡より古い。

カマド：北壁中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。火床は明瞭に残り硬化している。
 施設：床面は硬化し明瞭な貼床を確認できた。東壁は217号住居跡との重複で北東コーナーのみ確認され、西壁は壁面のほとんどが222号住居跡により消失していたが、本跡の貼床がかろうじて残存していたことから床面の範囲を確定できた。貯蔵穴と考えられる深さ17cmのPitが北東コーナーから、入り口施設のはしご穴と考えられる深さ10cmのPit 2基が南壁中央のやや南寄り床面から検出された。
 遺物と時期：鉄製品ではカマド内から出土した鎌（190図6）が出土している。出土遺物は少なく、図化できたものは覆土から出土した坏（180図1）のみで、遺物から時期は7cと考えられる。

224号竪穴住居跡（第102図） 位置 I Y-5

217・223号住居跡・139・140号建物跡と重複関係にあり、それら全てに切られることから本跡が一番古い。
 カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端に石を抜き取った小Pitがあることから、焚き口の両袖を石で組み本体は粘土で築く、石組粘土覆の構造をしていたものと思われる。
 施設：床の一部と北壁が残存していたが、他の施設については不明である。掘形は18～22cmの深さの規則性のないものであった。
 遺物と時期：（180図1）の坏はカマド右脇の床面から、（2）の坏はカマド、長胴甕（3）はカマド手前の床面から出土している。遺物から時期は7cと考えられる。

225号竪穴住居跡（第96・97図） 位置 II K-24

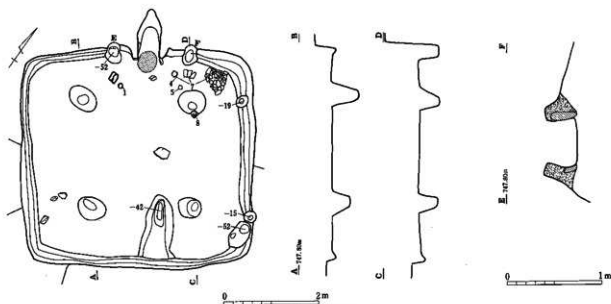
52号建物跡と重複関係にあり、52号建物跡より新しい。
 カマド：北壁の半分は幅40～50cmの攪乱により床面まで欠落するが、床面中央のやや北寄りに粘土の塊が見られることから、北壁中央に設けられていたことが推察される。
 施設：床面は良くしまり硬化したもので、掘形は中央が高く周囲が深いタイプであった。柱穴などの他の施設は検出されていない。
 遺物と時期：東壁近くの床面から内外面を丁寧に磨いた坏（180図1）とやや胴張りの甕（2）が出土しているが、これらの遺物から時期は7c前半と考えられる。

226号竪穴住居跡（第68・102図） 位置 I Y-10

220・221・222・223号住居跡と重複関係にあり、それらの中で本跡が一番古いものと考えられる。
 カマド：北壁に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されているものと思われるが、本跡は重複が激しく、西側のほぼ半分が調査区のため詳細は不明である。
 施設：床面は硬化しているが全面ではなく部分的である。掘形は中央が高く周囲が深いタイプで、その調査で主柱穴と思われるPit 2基が確認された。おそらく床面での見落としたものと思われるが、それ以外に施設は検出されていない。
 遺物と時期：カマドから坏（180図1・3）、床面から坏（2）、小型甕（4）と胴張り甕（5）は覆土から出土していることから、遺構の時期は7c中葉と考えられる。

227号竪穴住居跡（第69・98図、P.L18） 位置 II P-6

177・179・228号住居跡と重複関係にあり、本跡は228号住居跡より新しく、177・179号住居跡より古い。
 カマド：北壁中央に位置し、焚き口の両袖に石を埋め、本体は粘土で築いていた石組粘土覆の構造が考えられ、煙道は大きく遺構外に張り出している。



第 69 図 227号竪穴住居跡

施設：床面は平坦で硬化し、明瞭な貼床が認められ、主柱穴・全周する周溝・壁柱穴・入り口施設が確認されている。壁柱穴は東壁とカマドの両脇に認められるが、カマドの両側に見られる壁柱穴については上屋構造と関係するものであろうが、遺構外に大きく張り出した煙道という形態と大きく関るものと考えられる。入り口施設については南壁際から床面中央に向かって行くほど深く斜めに掘り込まれたPitがあるが、木材を斜めに埋め込んでいたものだろうか。

遺物と時期：不明石製品（196図17）とカマドの灰からタニシと考えられる貝殻が同定されている。カマド周辺の床面から、坏（181図1）・長胴甕（5）・胴張り甕（7）・甌（8）が出土している。遺構の時期は6c後半～7c前半と考えられる。

228号竪穴住居跡（第98図、P L 18） 位置 II P-1

本跡は196号住居跡より新しく、179・227号住居跡、1261・1263・1266・1267・1270号土坑より古いと考えられるが、196号住居跡との重複は極わずかなものであったため確信に欠ける。

カマド：北壁中央のやや西に位置し、袖石の抜き取り痕が確認されたことから、焚き口の両袖先端を石で組み本体は粘土で築く先石粘土覆の構造をしているものと思われる。

施設：床面はやや凹凸があったが、全体に一定の硬さのある明確なものである。柱穴と考えられるPitは4基確認されたがそれぞれ大きく、最も大きなもので径1.20m、深さ60cmを測っている。掘形は中央部をほとんど掘らず周溝周辺のみ掘り下げていた。周溝は北東コーナーを除いて確認できた。

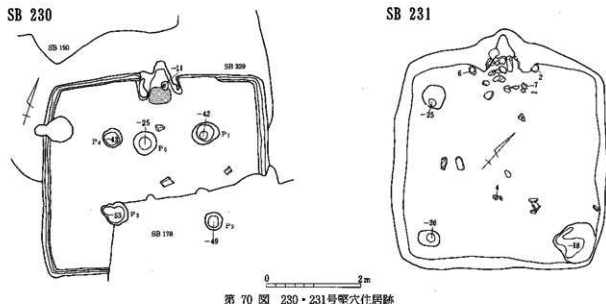
遺物と時期：カマド内から下彫れの甕（182図1）、覆土から長胴甕（2）が出土していることから、古墳時代後期としておきたい。

229号竪穴住居跡（第99図） 位置 I T-15

190・230号住居跡と重複関係にあり、230号住居跡より新しく、190号住居跡より古い。

カマド：北壁にあったと予想されるが、190号住居跡との重複のため不明。

施設：本跡の北西部のおよそ1/3は重複と攪乱により欠落しているが、4基の柱穴と考えられる深さ60～72cmのPitと平坦で明瞭な深さ25cmの床面が確認できた。掘形は浅く規則性のないものであった。他の



第70図 230・231号竪穴住居跡

施設は検出されていない。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

230号竪穴住居跡（第70・99図、P L 18） 位置 I T-15

178・229号住居跡と重複関係にあり、178・229号住居跡より古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残した袖の先端に石を配し、本体を粘土で築く先石粘土覆の構造をしている。崩落は著しく天井部に使われていたと思われる石材と粘土が床面中央にまでおびんでいた。燃焼部には火床と支脚の抜き取り痕が確認できたが支脚石は本跡からは見つからない。

施設：床面は全体に不明瞭で硬化面はなくカマドの火床のレベルや床面上の粘土から判断した。支柱穴と思われるPitは4基確認されたが、カマド手前のP5については本跡に伴うか不明であり、重複する229号住居跡の入り口とする方が妥当であろうか。

遺物と時期：砥石（196図14）、自然遺物としてカマドの灰から炭化種実のシロザ近似種が同定されている。覆土から坏（182図1・2・3）が出土しており、遺物から遺構の時期は7c中葉と位置づけられるであろうか。

231号竪穴住居跡（第70・105図、P L 19） 位置 III A-11

1235号土坑と重複関係にあり、1235号土坑より新しい。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り込み粘土で築いた石組粘土覆の構造をしている。

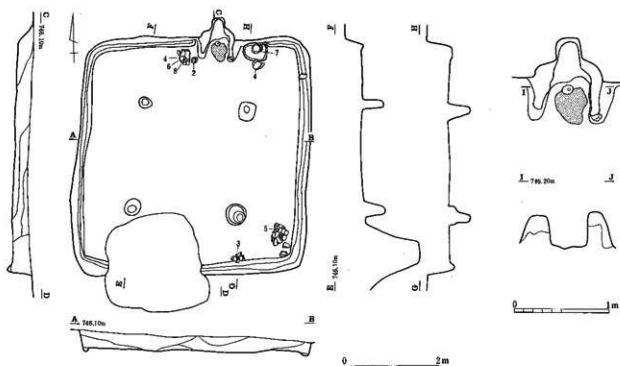
施設：床面は軟弱であったが、覆土との色調の違いから比較的容易に確認できた。3基の柱穴が確認されたが北東コーナーでは確認できなかった。掘形は中央部が一段深く掘られていた。

遺物と時期：カマドの掘形から炭化樹種のクヌギが出土している。土器はカマドおよびその周辺からは須恵器蓋（182図2）・小型台付甕（6）・甕（7）が出土している。遺構の時期は8c後半と考えられる。

232号竪穴住居跡（第104図、P L 19） 位置 II U-21

重複関係はなく単独である。

カマド：北壁中央に位置し、遺構外にやや掘り込んで作られており、石を多用し粘土で築いた石組粘土覆



第71図 234号竪穴住居跡

の構造である。火床は明瞭に硬化していたが支脚の抜き取り痕は認められなかった。本体内部から3個の武蔵甕の破片が出土している。佐久地方では希な煙道の煙出しに甕を連結して用いていたものと予想される。

施設：床面までの深さは約50cmで、硬化面は中央部とカマドの周辺で顕著であったが他は軟弱である。柱穴は深さ4基確認され深さが23~61cmと不揃いなものであり、入り口と思われるPitが南壁の際に確認されている。掘形はほとんどない。

遺物と時期：他に、覆土から鉄製の針(191図20)、石製品では砥石(195図5)・敲石(25)・丸小玉(81)・白玉(82)・石臼(95)が出土している。

坏が4点(182図1~4)と甕7点(5~11)が得られたが、そのうち(2・5~11)はカマド出土である。以上の土器から9c前半と考えられる。

233号竪穴住居跡(第104図) 位置 II U-21

重複関係はなく単独であるが、遺構の西半分は遺構外におよんでいるため詳細は不明である。

カマド：北壁の中央で右袖が確認され、その脇の床面からは底部を欠いた胴張り甕(183図2)が正位で安置されていた。

施設：床面は平坦でカマド周辺で硬化が認められ、掘形は中央が浅く周囲が深いタイプであった。柱穴などの他の施設は検出されていない。

遺物と時期：坏(183図1)と甕(2)が出土している。遺物から遺構の時期は7c前半と考えられる。

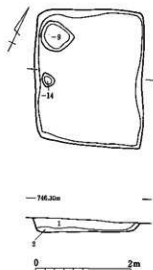
234号竪穴住居跡(第71・112図、PL19) 位置 III F-15

239号住居跡・54号建物跡・1188号土坑と重複関係にあり、239号住居跡・54号建物跡より新しく、1188号土坑より古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残した焚き口両袖の先端に石を配し本体を粘土で築く、先石粘土覆の構造をしている。燃焼部の煙道よりには支脚の抜き取り痕が検出されたが、支脚石などは確認されなかった。

施設：床面は明瞭であったが239号住居跡と重複する部分では軟弱で、周溝は全周する。カマド手前の床面上には炭化物の薄い広がりが見られたが、面的な広がりを留めてはいない。4基の柱穴の他、カマド右脇には貯蔵穴が確認されている。

遺物と時期：環(183図1)の他、甕(2・4・6・7・8)がカマド周辺から、(3・5)が南壁寄りの床面から出土している。これらの遺物から遺構の時期は6C後半と考えられる。



第72図 235号竪穴住居跡

235号竪穴住居跡(第72・111図) 位置 III F-15

250号住居跡・54号土坑と重複関係にあり、それより新しい。

カマド：確認されていない。南東コーナーの西壁に被熱による硬化による硬化が認められるが、カマドの痕跡かどうかは不明である。

施設：灰白色の灰を多量に混入する2層の上に地山ブロック・軽石粒を主体とする1層が堆積し、床面上には2層中に見えた灰の粒子・炭化物・焼土粒子が部分的に認められたが、焼失家屋の可能性は低いものと思われる。2基のPitの他の施設は検出されていない。

遺物と時期：出土遺物は少なく図化できたものはない。古墳時代後期以降と考えられるが、時期は不明である。

236号竪穴住居跡(第105図) 位置 II U-16

237号住居跡より新しく、248号住居跡・1221・1233号土坑より古い。

カマド：検出されていない。

施設：248号住居跡との重複と上部からの攪乱により全貌は不明である。明瞭な硬化面とPit 2基が確認された。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

237号竪穴住居跡(第105図) 位置 II U-21

236号住居跡・1221・1233号土坑と重複関係にあり、本跡はそれらより古い。

カマド：検出されていない。

施設：ほとんどを他遺構との重複・調査範囲外といった理由で不明であり、竪穴住居跡であるかどうか疑わしい面がある。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

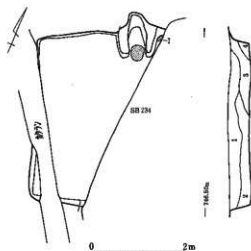
238号竪穴住居跡(第102図) 位置 I T-20

212・213・214号住居跡と重複関係にあり、本跡はそれらの中で一番古い。

カマド：北壁の中央に位置し、(住居跡の主軸がN-55°-Wとやや西に傾くがここでは北壁としておく)袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。

施設：213号住居跡との重複により遺構のほとんどを失うが、明瞭な床面を確認することができた。

遺物と時期：カマド側の壁面近くで坏（184図4・5）・甕（6）が、他の坏（1・2・3）は覆土出土である。これらの遺物から遺構の時期は7c前半と考えられる。



第73図 239号堅穴住居跡

239号堅穴住居跡（第73・112図、P L20）位置 III F-14

234号住居跡と重複関係にあり、234号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されている。

施設：東側のほとんどは切り合いにより不明だが、平坦な床面が確認された。その他、柱穴などの他の施設は検出されていない。

土層の1～3層は他の住居跡同様、人為的な埋没によってもたらされた粘土などのブロック塊を多く含み、4層はカマド袖の基部できめの細かい黄色土であった。

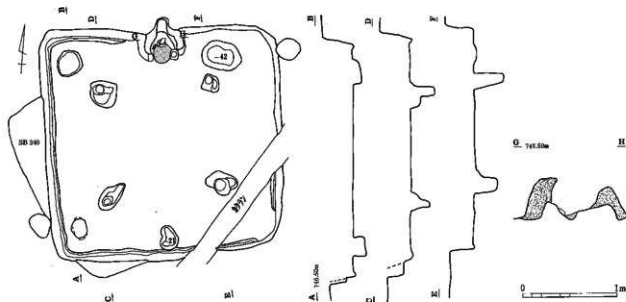
遺物と時期：カマドから内黒の有段坏（184図1）が1点出土している。遺物から遺構の時期は7c前半に置かれようか。

240号堅穴住居跡（第108図、P L20）位置 III F-4

241号住居跡・67号建物跡と重複関係にあり、本跡の方がそれらより新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築されているが、他の住居跡に比べて地山掘り残し部分が少ない粘土主体のものといえる。

施設：241号住居跡との重複部分では人為的な埋め戻しによって床面が形成されたようであるが、地山部分では掘形は見られなかった。建替えのために短期間に埋め戻されたものであろうか。



第74図 241号堅穴住居跡

遺物と時期：北東コーナーの床面から甔(184図1)と覆土から坏(1・2)が出土している。遺物から遺構の時期は7c中葉と考えられる。

241号竪穴住居跡(第74・108図、PL20) 位置 III F-4

240号住居跡と重複関係にあり、241号住居跡より新しい。

カマド：北壁中央に位置する。地山を掘り残し先石粘土覆の構造をしていると思われるが、左袖の石は残存するが、右袖は抜き取られていた。支脚については抜き取られた痕跡が確認できた。

施設：床面の硬化は認められたが部分的に軟弱であった。4基の柱穴の他、北東コーナーには貯蔵穴と南壁中央には入り口と思われるPitが確認されたが、北西コーナー・南西コーナーのPitについては不明である。掘形は中央部が浅く周囲が深いタイプである。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

242号竪穴住居跡(第102図) 位置 I Y-5

175・214・215号住居跡139号建物跡と重複関係にあり、それらより本跡の方が古い。

カマド：検出されていない。

施設：床面の硬化と2基のPitは確認されたが、他の施設は検出されていない。他の遺構との重複により不明である。

遺物と時期：床面から坏(184図1)が1点出土している。時期は7c後半と考えられる。

243号竪穴住居跡(第102図、PL20) 位置 I Y-4

222号住居跡と重複関係にあり、222号住居跡より古い。

カマド：ほとんどが調査区外のため全貌は不明であるが、北壁に位置する。煙道は遺構外に長く伸び、地山掘り残しの天井の一部が確認されたが、袖石は抜き取られていた。粘土主体に構築されていたものと考えられる。

施設：北東コーナーに周溝が認められたが、柱穴など他の施設は検出されていない。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

244号竪穴住居跡(第68・102図、PL20) 位置 I Y-10

221号の掘形調査によって確認された。220・221号住居跡と重複関係にあり、本跡の方がそれらより古い。

カマド：東壁際に焼土が若干認められたが他に痕跡は認められなかった。

施設：221号住居跡の掘形で一部攪乱されているが、平坦な硬化面が認められたことから竪穴住居跡ととらえた。柱穴などの他の施設は検出されていない。

遺物と時期：出土遺物は少なく、図化できたものはない。

246号竪穴住居跡(第107図、PL20) 位置 III B-21

247号住居跡・29号建物跡・1533号土坑と重複関係にあり、247号住居跡より新しく、1533号土坑より古い。29号建物跡との新旧関係は不明である。

カマド：北壁中央に位置し、崩落しているが石を多用し粘土で築いた石組粘土覆の構造と考えられる。燃焼部は若干壁を遺構外に掘り込んでいた。また、支脚については抜き取られた痕跡が確認された。

施設：床面は軟弱で色調の違いで判断され、周溝は本跡西半分で確認されている。柱穴等は確認されな

かった。

遺物と時期：覆土から環（185図1・2）が出土している。遺物から9c初頭であろうか。

247号竪穴住居跡（第107図） 位置 III A-25

246号住居跡・7号溝状遺構と重複関係にあり、本跡の方がそれより古い。

カマド：北壁中央に位置し、地山を掘り残し両袖の先端に石を配し本体を粘土で築く、先石粘土覆の構造をしていると考えられる。火床と思われる焼土層が検出されたが、軟質で不明瞭であった。燃焼部の中央には支脚を抜き取った痕跡があり、焚き口では支脚に使われたと思われる石材が出土している。

施設：床面の硬化は中央部とカマド周辺で顕著で、周辺はやや軟弱であった。掘形は中央が浅く周辺が深いタイプで、床面の硬化部分と一致していた。主柱穴と思われるPitが4基と不明Pitが1基、入り口施設に伴うはしご穴が確認されている。

遺物と時期：覆土から環（185図1～4）が出土している。遺物から遺構の時期は7c初頭と考えられる。

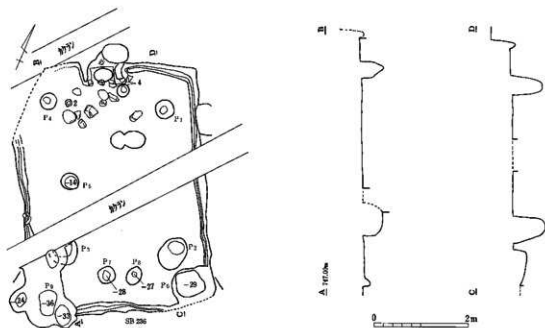
248号竪穴住居跡（第75・105図、P L 20） 位置 I Y-20

236号住居跡・92号建物跡と重複関係にあり、236号住居跡より新しく、92号建物跡より古い。北西コーナーは調査区外からの攪乱により不明である。

カマド：北壁中央に位置し、床面に崩落した多数の石が出土したことから、石を多用し粘土で築いた石組粘土覆の構造をしていたものと考えられる。また、袖の間隔がやや広いことから、横置き二つ掛けの可能性が考えられる

施設：床面は全面硬化し明瞭であった。掘形は東壁・西壁寄りが深く他の部分は浅いものであった。Pitは9基確認され、P1～P4は主柱穴、P7とP8は入り口に伴うはしご穴、P6は貯蔵穴であろうか。P9は本跡を切っているようであったが断面などの観察から、住居跡廃絶時に粘土を採取したものと判断された。

遺物と時期：環（185図1・2・3）が3点と甕（4）が出土しているが、（2）は床面から、（4）はカマド内からである。遺物から遺構の時期は8cと考えられる。



第75図 248号竪穴住居跡

249号竪穴住居跡（第101図） 位置 II U-11

90号建物跡と重複関係にあり、90号建物跡より古い。

カマド：北壁のほぼ中央で攪乱と攪乱の間のわずかに残った部分から火床と考えられる硬化面が確認され、粘土主体の構造であったと考えられる。

施設：床面は全面硬化し、掘形は20cmほどの均一なもので貼床が認められた。支柱穴と思われるPitが4基検出され、間仕切りの溝がPitから周溝に直交する形で3条認められたが、北西部に関しては攪乱により不明である。

遺物と時期：覆土から石製品の砥石（195図4）が出土している。覆土から坏（185図1・2・3）点・須恵蓋（4）・甕（7）が、床面から甕（6）、カマド付近の床面から甕（5）が出土している。遺物から遺構の時期は7c前半と考えられる。











250号竪穴住居跡（第111図、PL21） 位置 III F-15

235号住居跡・2178号土坑と重複関係にあり、235号住居跡より古く、2178号土坑より新しい。

カマド：東壁の中央のやや南よりに位置し、袖は地山を掘り残り粘土で構築されている。7c代で東カマドは稀な例である。支脚の痕跡は見られなかった。

施設：床面は全面明瞭であるが中央部とカマド周辺の硬化が著しく、中央部が浅く周辺が深い掘形と対応していた。支柱穴と思われる4基のPitの他に、カマドの右脇には貯蔵穴が1基、不明Pitが2基確認されている。周溝は全周する。

遺物と時期：7c代の甕（185図1）が出土している。この遺物から遺構の時期は7c代としておきたい。

タイプ	模式図	I 側柱	I' 溝持	II 総柱
A		9、56、57、61、66、68、74、81、88、92、93、110、124、127、133、143、147	131、148	
A'				
B		22、72、126		
C		30、41、51、59、60、69、89、103、104、109、111、112、117、121、128、130、132、146、149	50、53	
D		97、114		
D'		49、119		
E		37、43、75	36、54	13、16、17、47、48、123、144、145
F		73		
G		55、63、136	52	
H		33、85		

(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(第125・94図、P L23)

II K-7グリッドに位置し、13・125号掘立柱建物跡と重複する。Jタイプに分類される。

規模は長軸5.3~4.1m、短軸3.2~3.4mを測り、平面プランは矩形を呈する。1間×2間の側柱式である。柱間は長軸1.2~2.9m、短軸1.4~1.8mを測り、主軸方向はN-16° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形で一部溝持ちを伴う。





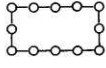
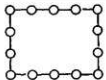
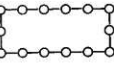
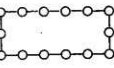
3号掘立柱建物跡(第122・91図、P L23)

II F-22グリッドに位置し、733号土坑を壊して構築されている。Lタイプに分類される。

規模は長軸3.8~3.9m、短軸3.6~3.8mを測り、平面プランは方形を呈する。3間×3間の側柱式で、柱間は長軸1.1~1.4m、短軸0.8~1.4mを測り、主軸方向は、N-33° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

4号掘立柱建物跡(第

I		108			124・94図、P L23)
J			1		II K-13グリッドに位置し、重複関係から38号住居跡・16号掘立柱建物跡より古い。Kタイプに分類される。 規模は長軸3.9～4.0m、短軸2.2～3.2mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×3間の側柱式で、柱間は、長軸1.1～1.5m、短軸1.6mを測り、主軸方向は、N-26° -Wを示す。
K		4、8、15、29、58	11,91,122	7、31	Pit掘形の平面プランは、円形である。
L		3、90、116、137	14		6号掘立柱建物跡 (第121・90図、P L23)
M		6	125	12	II K-4グリッドに位置し、重複では859・2113号土坑より新しいと考えられる。Mタイプに分類される。 規模は長軸7.4～7.5m、短軸3.8～4.0mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×5間の側柱式で、柱間は、長軸1.1～2.1m、短軸1.8～2.1mを測り、主
N		115、120	24		
O			18		
P		38、101			

軸方向は、N-22° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。本跡周囲には庇の存在を予想させるPitが検出できたが、Pitの密集度が甚だしく庇を確定することは困難であった。

12号掘立柱建物跡 (第124・94図)

II K-12グリッドに位置し、45号住居跡、4・16・17号掘立柱建物跡より古い。Mタイプに分類される。

規模は長軸7.2～7.3m、短軸5.0～5.2mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×4間の側柱式で、柱間は、長軸5.1～2.3m、短軸2.4～2.6mを測り、主軸方向は、N-35° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

13号掘立柱建物跡（第125・94図、P L 24）

II K-7グリッドに位置し、1・15・125号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。Eタイプに分類される。

規模は長軸3.8～3.9m、短軸3.7～3.9mを測り、平面プランは方形を呈する。2間×2間の総柱式で、柱間は長軸1.9～2.0m、短軸0.9～1.8mを測る。主軸方向は、N-20° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、楕円・方形である。

14号掘立柱建物跡（第122・91図）

II F-17グリッドに位置する。3号掘立柱建物跡と重複し、本跡の方が古いものと考えられる。Lタイプに分類される。

規模は長軸5.2～5.5m、短軸5.3～5.4mを測り、平面プランは方形を呈する。基本的には3間×3間の側柱式と考えられるが、東・南・西壁には溝持ちが施されている。柱間は、長軸1.0～2.0m、短軸1.2～2.8mを測る。主軸方向は、N-32° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

15号掘立柱建物跡（第125・94図、P L 24）

II K-6グリッドに位置する。13号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。Kタイプに分類される。

規模は長軸4.3～4.4m、短軸3.4～3.6mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×3間の側柱式で、柱間は長軸1.6～1.8m、短軸～mを測る。主軸方向は、N-25° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

16号掘立柱建物跡（第124・94図、P L 24）

II K-12グリッドに位置する。重複関係から12号掘立柱建物跡より古く、4号掘立柱建物跡より新しいものと判断された。Eタイプに分類される。

規模は長軸4.0～4.1m、短軸3.0mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×2間の側柱式で、柱間は長軸2.0～2.1m、短軸1.4～1.6mを測る。主軸方向は、N-38° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

17号掘立柱建物跡（第124・94図、P L 24）

II K-12グリッドに位置する。重複関係から12号掘立柱建物跡より新しい。

18号掘立柱建物跡（第128・92・95図、P L 24）

I O-20グリッドに位置する。重複関係は43号住居跡・137号掘立柱建物跡の方が古いものと判断された。Oタイプに分類される。

規模は長軸6.2～6.3m、短軸3.5～3.6mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×5間の側柱式で、柱間は、長軸0.9～1.7m、短軸1.8～3.5mを測る。主軸方向は、N-30° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形であり溝持ちを伴う。

22号掘立柱建物跡（第120・92図、P L24）

Ⅰ J-24グリッドに位置する。3号溝と重複し、本跡の方が古い。Bタイプに分類される。

規模は長軸3.4m、短軸1.7mを測り、平面プランは方形を呈するものと考えられるが東側は溝に切られ不明である。1間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.6～3.4m、短軸1.6～1.7mを測る。主軸方向は、 $N-12^{\circ}-W$ を示す。

Pit掘形の平面プランは円形である。

31号掘立柱建物跡（第121・111図）

Ⅲ G-21グリッドに位置する。1043号土坑と重複関係にあり、本跡の方が新しい。Kタイプに分類される。

規模は長軸5.8～6.0m、短軸4.2～4.3mを測り、平面プランは矩形を呈する。3間×2間の総柱式で、柱間は、長軸1.8～2.2m、短軸2.1～2.2mを測る。主軸方向は、 $N-40^{\circ}-W$ を示す。

Pit掘形の平面プランは円形である。

33号掘立柱建物跡（第120・114図、P L25）

Ⅲ L-24グリッドに位置する。重複共ST34号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。Hタイプに分類される。

規模は長軸4.7～4.8m、短軸3.8～4.0mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×3間の側柱式で、柱間は、長軸1.2～2.1m、短軸1.8～2.2mを測る。主軸方向は、 $N-48^{\circ}-W$ を示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

37号掘立柱建物跡（第121・112・117図、P L25）

Ⅲ K-3グリッドに位置する。重複はなく単独である。Eタイプに分類される。

規模は長軸3.2～3.4m、短軸2.8mを測り、平面プランは矩形であるが方形に近い形状である。2間×2間の側柱式で、柱間は、長軸1.6～1.8m、短軸1.4mを測る。主軸方向は、 $N-30^{\circ}-W$ を示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

38号掘立柱建物跡（第123・119図、P L25）

Ⅲ K-24グリッドに位置する。重複関係は147号住居跡より新しいものと思われるが、調査上のミスで図化することができなかった。Pタイプに分類される。

規模は長軸6.7m、短軸5.6mを測り、平面プランは矩形を呈する。(2間)×5間の側柱式で、柱間は、長軸1.3～1.4m、短軸1.8～3.6mを測る。主軸方向は、 $N-38^{\circ}-W$ を示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

本跡は南壁側のPit列に対して図上で復元したもので、やや疑問が残る遺構である。

43号掘立柱建物跡（第121・111・112図）

Ⅲ K-5グリッドに位置する。重複はなく単独である。Eタイプに分類される。

規模は長軸3.2～3.0m、短軸3.0mを測り、平面プランは基本的に方形を呈する。2間×2間の側柱式で、柱間は長軸1.4～1.6m、短軸1.4～1.6mを測る。主軸方向は、 $N-40^{\circ}-W$ を示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

49号掘立柱建物跡 (122・96・97図、P L25)

II P-10グリッドに位置する。重複はなく単独である。D茶[^]イブに分類される。

規模は長軸4.2m、短軸3.2mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×2間の側柱式で、柱間は長軸2.0～2.2m、短軸1.4～1.6mを測る。主軸方向は、N-35° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

本跡は西方向に庇を有するものと考えられる。

56号掘立柱建物跡 (第124・104図、P L26)

II U-17グリッドに位置する。143号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。Aタイプに分類される。

規模は長軸3.6m、短軸2.3～2.4mを測り、平面プランは矩形を呈する。1間×1間の側柱式で、柱間は長軸3.6m、短軸2.3～2.4mを測る。主軸方向は、N-20° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

57号掘立柱建物跡 (第124・104図)

II U-18グリッドに位置する。56・88号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。Aタイプに分類される。

規模は長軸3.1m、短軸2.2～2.4mを測り、平面プランは矩形を呈する。1間×1間の側柱式で、柱間は長軸3.1m、短軸2.2～2.4mを測る。主軸方向は、N-13° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

58号掘立柱建物跡 (第124・104図)

II U-12グリッドに位置する。88・89・143号掘立柱建物跡・SK1282号土坑と重複し、88号掘立柱建物跡より新しいと考えられるが他の遺構との新旧関係は不明である。Kタイプに分類される。

規模は長軸5.0～5.2m、短軸3.6～3.9mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×3間の側柱式で、柱間は長軸1.6～1.8m、短軸1.7～2.2mを測る。主軸方向は、N-34° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

59号掘立柱建物跡 (第120・104図、P L26)

II U-23グリッドに位置する。Cタイプに分類される。

規模は長軸5.3m、短軸3.4mを測り、平面プランはを呈する。1間×2間の側柱式で、柱間は長軸2.6～2.7m、短軸3.4mを測る。主軸方向は、N-18° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

72号掘立柱建物跡 (第120・101図)

II P-23グリッドに位置する。重複はなく単独である。Bタイプに分類される。

規模は長軸2.4m、短軸2.0mを測り、平面プランはほぼ方形を呈する。1間×1間(2間)の側柱式で、柱間は長軸1.2～2.3m、短軸2.0mを測る。主軸方向は、N-35° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

73号掘立柱建物跡（第120・96・101図）

II P-23グリッドに位置する。74号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡の方が新しいものと考えられる。Fタイプに分類される。

規模は長軸6.4m、短軸2.4mを測り、平面プランは矩形を呈する。1間×3間（2間）の側柱式で、柱間は長軸6.1～6.4m、短軸2.4mを測る。主軸方向は、N-23° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

74号掘立柱建物跡（第120・96図）

II P-23グリッドに位置する。73号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本跡の方が古いものと考えられる。Aタイプに分類される。

規模は長軸2.8m、短軸2.2～2.4mを測り、平面プランはほぼ方形を呈する。1間×1間の側柱式で、柱間は長軸2.8m、短軸2.2～2.4mを測る。主軸方向は、N-0° を示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

88号掘立柱建物跡（第124・104図）

II U-18グリッドに位置する。58号掘立柱建物跡と重複し、本跡の方が古いものと考えられる。Aタイプに分類される。

規模は長軸2.7～2.8m、短軸2.3mを測り、平面プランはほぼ方形を呈する。1間×1間の側柱式で、柱間は長軸2.7～2.8m、短軸2.3mを測る。主軸方向は、N-8° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

89号掘立柱建物跡（第124・104図、P L26）

II U-17グリッドに位置する。58号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。Cタイプに分類される。

規模は長軸3.0～3.1m、短軸2.9mを測り、平面プランは方形を呈する。1間×2間の側柱式で、柱間は長軸3.0～3.1m、短軸1.2～1.7mを測る。主軸方向は、N-13° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

101号掘立柱建物跡（第123・88・89図）

I J-20グリッドに位置する。SB55・53・57号掘立柱建物跡、798・2051・2102号土坑と重複関係にあり、53・55号住居跡より新しく他の遺構より古いものと思われるが、北壁側では検出が難しく不明瞭であった。Pタイプに分類される。

規模は長軸9.2～10.2m、短軸5.8～5.9mを測り、平面プランは矩形を呈する。5間×3間の側柱式で、柱間は長軸1.6～2.2m、短軸1.7～2.1mを測る。主軸方向は、N-23° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

108号掘立柱建物跡（第120・85図）

II A-22グリッドに位置する。重複はなく単独であった。Iタイプに分類される。

規模は長軸5.1～5.2m、短軸3.2～3.4mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間（1間）×3間の側柱式で、柱間は長軸1.4～2.0m、短軸1.6～3.2mを測る。主軸方向は、N-22° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、楕円・方形である。

114号掘立柱建物跡（第120・87図）

II F-9 グリッドに位置する。113・11 5号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。Dタイプに分類される。

規模は長軸3.2m、短軸3.2mを測り、平面プランはほぼ方形を呈する。2間（1間）×2間の側柱式で、柱間は長軸1.3～1.9m、短軸1.4～3.0mを測る。主軸方向は、N-32° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

119号掘立柱建物跡（第125・91図）

II K-2 グリッドに位置する。重複に伴う新旧関係は120・121号掘立柱建物跡、54号住居跡より新しい。Dタイプに分類される。

規模は長軸8.2m、短軸4.3mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×4間の側柱式で、柱間は長軸1.6～2.5m、短軸1.9～2.7mを測る。主軸方向は、N-26° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

周辺は遺構密度が高く、本跡自体の規模には不確定な要素が多く、あるいは2棟の重複も考えられる。

120号掘立柱建物跡（第125・91図）

II K-1 グリッドに位置する。新旧関係は54号住居跡・119号掘立柱建物跡より古い。122・123・152号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。Nタイプに分類される。

規模は長軸5.6m、短軸3.7mを測り、平面プランは長方形を呈する。3間（2間）×4間の側柱式で、柱間は長軸1.2～1.6m、短軸1.1～1.4mを測る。主軸方向は、N-17° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

121号掘立柱建物跡（第125・91図）

II K-2 グリッドに位置する。119・122・152号掘立柱建物跡・2112号土坑と重複するが新旧関係は不明である。Cタイプに分類される。

規模は長軸3.7m、短軸2.6mを測り、平面プランは長方形を呈する。1間×2間の側柱式で、柱間は長軸1.7～2.0m、短軸2.6mを測る。主軸方向は、N-35° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

122号掘立柱建物跡（第125・91・94図）

II K-2 グリッドに位置する。120・121・123・125号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。Kタイプに分類される。

規模は長軸4.7m、短軸3.9mを測り、平面プランは矩形を呈する。2間×3間の側柱式で、柱間は長軸1.6～1.8m、短軸1.6～2.3mを測る。主軸方向は、N-20° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形であり溝持ちを伴う。

123号掘立柱建物跡（第125・91・94図）

II K-2 グリッドに位置する。重複新ST120・122・125・152と重複するが新旧関係は不明である。Eタイプに分類される。

規模は長軸3.9m、短軸3.9mを測り、平面プランは方形を呈する。2間×2間の側柱式で、柱間は長軸1.7～2.2m、短軸1.7～2.2mを測る。主軸方向は、N-20° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

124号掘立柱建物跡（第125・91・94図）

II K-2 グリッドに位置する。Aタイプに分類される。

規模は長軸1.6m、短軸1.4mを測り、平面プランは方形を呈する。1間×1間の側柱式で、主軸方向は、N-26° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

125号掘立柱建物跡（第125・94図）

II K-7 グリッドに位置する。13号掘立柱建物跡より古いものと考えられる。1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。Mタイプに分類される。

規模は長軸6.3m、短軸4.0mを測り、平面プランは長方形を呈する。2間×4間の側柱式で、柱間は、長軸1.5～1.7m、短軸1.9～2.1mを測る。主軸方向は、N-8° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

136号掘立柱建物跡（第121・95図）

I O-19グリッドに位置する。137号掘立柱建物跡より古いものと考えられるが、1・13・122号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。Gタイプに分類される。

規模は長軸3.4m、短軸3.0mを測り、平面プランは矩形を呈する。1間×3間の側柱式で、柱間は長軸0.8～1.4m、短軸3.0mを測る。主軸方向は、N-35° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

137号掘立柱建物跡（第121・95図）

I O-19グリッドに位置する。新旧関係は7号住居跡より古く、18・136号掘立柱建物跡より新しいものと考えられる。Lタイプに分類される。

規模は長軸7.3m、短軸(4.2)mを測り、平面プランは矩形を呈する。3間(2間)×3間の側柱式で、柱間は、長軸1.2～2.9m、短軸1.0～1.6mを測る。主軸方向は、N-30° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

143号掘立柱建物跡（第124・104図）

II U-17グリッドに位置する。56・58・88・89号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。Aタイプに分類される。

規模は長軸3.2m、短軸2.4mを測り、平面プランは矩形を呈する。3間×2間の側柱式で、柱間は長軸3.2m、短軸2.4mを測る。主軸方向は、N-20° -Wを示す。

Pit掘形の平面プランは、円形・楕円形である。

3) 溝

2号溝（第126・85図）

II A-12グリッドに位置する。

規模は現存する長さで4.2m、幅0.2～0.5m、検出面からの深さは12cmを測り、北から南西に向かって傾斜している。

土層は砂質の黒褐色土である。

3号溝・「田切り谷」（第2・130・131図、P L 28・29・30）

規模は2.6～9.3m、長さ202.7mを測り、調査区北端の「田切り谷」から突然始まり調査区中央部西端まで弓状の弧を描いて南流し、北端から南端までの底面の比高差は約3.2mを測る。断面は不整な「V」字形状で、底部の一部は「U」字状で流水によってもたらされたと思われる砂礫の堆積が認められる箇所がある。

時期的に明瞭な重複関係では43・45・55・172・180号住居跡を破壊し、それらはすべて7c代でその内の43・45・55号住居跡は7c初頭・前半に位置づけられる遺構である。

覆土は概ね最下層・下層の底部には砂礫・砂層が認められる。中層では数度の堆積、あるいは埋土の改修と考えられる掘り返しの痕跡が観察されている。また、地区によっては（特にF区以南）帯状に連なる硬化面が数枚認められている。上層は全ての地区で黒褐色土・褐色土が認められたことから、溝としての機能を失ったのち一気に埋め戻された可能性が考えられる。

全体を通しての鍵層は認められないが、最下層・下層の砂礫層からは古墳時代後期の土器が主体を締め、中層・上層から出土する遺物は時期的に古墳時代後期から平安時代とかなりの幅が認められることから長年の埋土の流入・改修を繰り返したことが土層断面観察だけでなく遺物からも窺うことが出来る。また、大中型の甕（186図13・187図31）の中には数mから70m離れた地点の破片が接合したことから、意図的に甕を壊し溝内に撒いたと思われる遺物が散見されている。

時期的には7c前半の住居跡を壊していることから、7c後半以降の所産と考えられる。

出土した土器はテンバコにして200個を有に超え、その内から67個の出土を図化した（第186～189図）が図化可能な土器の出土量からすると百分の一程の量に過ぎない。また、土器以外の獣骨・樹種など火山灰土壌にしては比較的良好な遺物（巻末付表参照）の出土を見ている。

調査当初の遺構検出の段階では試掘を行っていないため直線で構成される人為的な構造との予想がなされたが、結果的には平面は等高線にほぼ直交する湾曲形状で、底部には流水によってもたらされたと考えられる砂礫層が検出されるなど、自然流路を二次的に人が利用したものとの憶測が出来る。

本溝の北端は「田切り谷」によって削り取られている。現在の「田切り谷」は比高差が約12mで、その形成時期については有史以前というのが一般的な認識であった。しかし、本溝が当初は流路であったという観点からすると水の供給源と考えられる谷との比高差が問題であった。今回の調査で明らかになったことであるが「田切り谷」は本溝同様、古墳時代後期～平安時代（6c後半～9c前半：中原遺跡群を含めて）の住居跡を削り取っている。

以上のことから本溝は、7c後半に一時的に形成されたが、7c後半～8c初頭には水の供給は途絶え何らかの理由で現在の「田切り谷」側に流れを変えてたものと創造される。また、中層に見られる硬化面や改修による幾度かの掘り返しの痕跡は水流のない溝として何らかの機能を果たしたいたことが窺える。その機能とは「境界・区画・馬留め・道路・祭祀…」であろうか。やはり想像の域は出ない。

また、「田切り谷」は6c後半～9c前半の住居跡を削っていることから、現在より幅は狭く9c前半までは流路近くまで住居跡が存在していた。谷の幅が広がり始めたのは9c後半以降と考えられ、憶測ではあるが9c後半の「仁和の洪水」(888年)を契機として「田切り谷」の基礎が形成されたと考えることも出来る。

7号溝 (第126・107図)

ⅢB-16・21グリッドに位置する。

規模は、全体の幅が8.2m、溝の幅は0.7～1.1mを測る。

土層は主に暗褐色土で締まりがなく、分層は混入する粒子の大きさによる。

本跡の覆土からは平安期の所産と考えられる土器片が出土していることから、該期の周溝を伴う墓跡と位置付けられるが埋葬施設である主体部は検出できなかった。

(4) 土坑

47号土坑 (第126・87図)

ⅡF-8グリッドに位置する。重複はなく単独である。

長軸1.8m、短軸1.4m、検出面からの深さは0.4mを測り、平面プランは不整な楕円形を呈する。

覆土は小礫を混入する黒褐色土の単層である。

246号土坑 (第126・87・88図)

ⅡF-8グリッドに位置する。

重複44号住居跡より古いものと考えられる。

長軸1.4m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

覆土は砂質な黒褐色土の単層である。

280号土坑 (第126・90図、P.L.27)

ⅡF-24グリッドに位置する。

重複は5号柵列より新しい

長軸2.5m、短軸2.3m、深さ1.6mを測り、平面プランを呈する。

覆土は上・中層はしまりの弱い暗褐色土で、下層は黒褐色土である。下層からは獣骨が検出されている。

285号土坑 (第126・95図)

ⅡK-16グリッドに位置する。

重複は号溝より新しい。

長軸3.5m、短軸3.0m、深さ1.6mを測り、平面プランを呈する。

覆土は上層がしまりのある黒褐色土で、中・下層がしまりの欠ける暗褐色土である。中層からは炭化物粒子が少量検出された。

456号土坑 (第126・91・92図)

ⅠJ-25グリッドに位置する。

重複関係では117・118号掘立柱建物跡、SK2093号土坑より新しい。

長軸2.0m、短軸1.8m、深さ1.7mを測り、
平面プランを呈する。

覆土上層はしまりの欠ける暗褐色土で、中層は白色の粘質土を混入する黒褐色土、下層は地山の黄褐色土をブロック上に混入する暗黄褐色土である。

603号土坑（第127・93図）

Ⅱ K-19グリッドに位置する。

重複関係では34号住居跡より古い。

長軸2.3m、深さ0.6mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層はしまりのない黒褐色土で、中層は砂質の暗黄褐色土、下層は地山の粒子を多量に混ぜる黄褐色土である。

804号土坑（第127・107図）

Ⅲ B-23グリッドに位置する。

重複関係は70号住居跡より古い。

長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.9mを測り、
平面プランを呈する。

覆土は全体にしまりのない黒褐色土である。

838号土坑（第128・113図、P L）

Ⅲ G-17グリッドに位置する。

長軸3.2m、短軸1.8m、深さ0.5mを測り、平面プランを呈する。

884号土坑（第127・110図、P L 27）

Ⅲ L-4グリッドに位置する。

重複関係は104号住居跡より新しい。

長軸2.4m、短軸2.2m、深さ0.9mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層はしまりのない暗褐色土、中層は地山粒子を少量混入し、下層は地山の黄色土主体で黒色土を混入する。

922号土坑（第127・114図）

Ⅲ L-9グリッドに位置する。

重複関係は102号住居跡より新しい。

長軸1.7m、短軸1.5m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層は黄褐色土、下層は暗褐色土である。

929号土坑（第127・91図）

Ⅱ F-21グリッドに位置する。

重複関係は923・2083号土坑

長軸2.0m、短軸1.9m、深さ0.06mを測り、平面プランを呈する。

覆土はしまりのある砂質黒褐色土である。

934号土坑（第127・115図）

Ⅲ L-12グリッドに位置する。

重複関係は115号住居跡より新しい。

長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.6mを測り、平面プランを呈する。

覆土はしまりのない砂質暗褐色土である。

937号土坑（第127・117図）

Ⅲ K-13グリッドに位置する。

長軸2.1m、短軸2.0m、深さ0.6mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層は地山の黄色土粒子を含む暗褐色土、中層は軽石粒を多量に混入する暗黄褐色土、下層は混入物の少ない暗黄褐色土である。

961号土坑（第127・115図）

Ⅲ L-7グリッドに位置する。

重複関係は107号住居跡より古い。

長軸1.4m、短軸1.3m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

977号土坑（第127・115図）

Ⅲ L-7グリッドに位置する。

長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.3mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層は小礫を含む暗褐色土、下層は砂質黄褐色土である。

1027号土坑（第127・112図）

Ⅲ F-24グリッドに位置する。

長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.3mを測り、平面プランを呈する。

1028号土坑（第127・112図）

Ⅲ F-24グリッドに位置する。

重複関係は148・42号掘立柱建物跡より古い。

長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.8mを測り、平面プランを呈する。

1043号土坑（第127・111図）

Ⅲ G-21グリッドに位置する。

重複関係は31号掘立柱建物跡より古い。

長軸1.4m、短軸1.3m、深さ0.8mを測り、平面プランを呈する。

覆土はしまりのない暗褐色土である。

1055号土坑（第127・117図）

第3章 芝宮遺跡群

Ⅲ K-14グリッドに位置する。

長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

覆土は黒色土をブロック状に散在させる暗褐色土である。

1080号土坑（第127・116・189図、P L 28）

Ⅲ K-10グリッドに位置する。

重複関係は196号性格不明遺構より古く、149号より新しい。

長軸2.8m、短軸1.7m、深さ0.9mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層はしまりのある黄褐色土、中層は黄色土粒子を少量混入する黒褐色土、下層は暗黄褐色土、壁際には地山粒子を混入する黄褐色土が認められる。底面付近からは灰釉陶器が4点出土している。

本跡は形状から土坑墓と思われたため、自然化学分析によるリン酸・カルシウム分析を試みている。（第5章第4節参照）

1162号土坑（第127・97図）

Ⅱ P-7グリッドに位置する。

重複関係は3号溝より新しい。

長軸1.8m、短軸1.6m、深さ0.8mを測り、平面プランを呈する。

上部には褐色土を呈する3号溝の覆土が残り、本跡の覆土は全体的に黄褐色土粒子を多く混入するものである。

1166号土坑（第127・93図）

Ⅱ K-20グリッドに位置する。

重複関係は182号住居跡より新しい。

長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.2を測り、平面プランを呈する。

覆土はしまりのない褐色土である。

1188号土坑（第127・112図）

Ⅲ F-15グリッドに位置する。

重複関係は234号住居跡より新しい。

長軸2.0m、短軸1.9m、深さ1.7mを測り、平面プランを呈する。

覆土は上・中層ではしまりのない黒色土で、下層は地山の黄色土粒子を少量混入する黒褐色土である。

1235号土坑（第128・105図、P L 27）

Ⅲ A-12グリッドに位置する。

重複関係は231号住居跡より古い。

長軸2.8m、短軸2.6m、深さ1.4mを測り、平面プランを呈する。

覆土は上・中層はきめの細かい黒褐色土、下層は砂質な暗褐色土で、最下層は壁の崩落に伴うと考えられる地山の黄色土粒子を混入する。底面で獣骨（種不明）が検出された。

1285号土坑（第129・108図）

Ⅲ A-20グリッドに位置する。

重複関係は146号掘立柱建物跡より古い。

長軸3.0m、短軸2.7m、深さ1.1mを測り、平面プランを呈する。

1327号土坑（第128・99図）

Ⅱ P-12グリッドに位置する。

長軸1.9m、短軸1.1m、深さ0.7mを測り、平面プランを呈する。

覆土は粒子の細かい黒褐色土の単層。

1476号土坑（第128・102図）

Ⅰ T-25グリッドに位置する。

重複関係は212号住居跡より古い。

長軸1.7m、短軸0.7m、深さ0.5を測り、平面プランを呈する。

覆土は粒子の細かい黒褐色土の単層。

1500号土坑（第128・96図）

Ⅱ U-9グリッドに位置する。

重複関係は1519号土坑より新しい。

長軸3.6m、短軸2.8m、深さ0.8mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層は黒褐色土主体に地山の黄色土をブロック上に混入し、下層は黄色土ブロックの割合が更にかかる。人為的な埋没と考えられる。

1502号土坑（第129・96図）

Ⅱ U-13グリッドに位置する。

長軸3.1m、短軸1.7m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

1503号土坑（第128・103図）

Ⅱ U-25グリッドに位置する。

長軸2.8m、短軸1.4m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層は黒褐色土で、下位の層ほど粘性が強く赤褐色土ブロックを多く混入する。

1506号土坑（第128・103図、P L27）

Ⅱ U-15グリッドに位置する。

長軸2.1m、短軸0.9m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。

覆土上・中層はしまりの弱い暗褐色土で、下層は軟質な黄褐色土である。上層から灰釉陶器2点が出土している。出土した土器から10世紀前半と考えられる。本坑は土坑墓と考えられている。

1520号土坑（第128・101図、P L28）

Ⅱ U-7グリッドに位置する。

長軸2.0m、短軸1.0m、深さ0.5mを測り、平面プランを呈する。底部には2基の小Pitが検出されているこ

第3章 芝宮遺跡群

とから陥し穴と考えられる。

覆土上層はやや粘性のある黒褐色土、中層は黒褐色土で地山の黄色土をブロック状に混入し、下層は地山の黄色土ブロックを多量に混入する暗褐色土である。

1521号土坑（第129・101図）

II U-7グリッドに位置する。

長軸 2.8m、短軸2.0m、深さ0.6mを測り、平面プランを呈する。

1533号土坑（第128・107図）

III B-21グリッドに位置する。

重複関係は246号住居跡より新しい。

長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.4mを測り、平面プランを呈する。粘土探掘坑と考えられる。

1555号土坑（第128・101図、P L28）

II U-2グリッドに位置する。

長軸3.5m、短軸3.2m、深さ1.5mを測り、平面プランを呈する。

覆土上層はきめの細かい黒褐色土、中層はきめの細かい暗褐色土、下層は粒子の粗い褐色土である。

1576号土坑（第128・101図、P L28）

II U-11グリッドに位置する。

長軸1.9m、短軸0.8m、深さ0.9mを測り、平面プランを呈する。陥し穴と考えられ、底面には小Pitが3基検出された。

覆土上層はきめの細かい黒褐色土で、中・下層はややザラつく褐色土である。

1582号土坑（第129・104図）

II U-21グリッドに位置する。

重複関係は48号掘立柱建物跡より古い。

長軸5.1m、短軸1.7m、深さ1.0mを測り、平面プランを呈する。

覆土は地山の黄・白・赤色土ブロックを多量に混入する。

1583号土坑（第129・90・94図）

II K-3グリッドに位置する。

長軸5.7m、短軸4.4m、深さ1.3mを測り、平面プランを呈する。粘土探掘坑と考えられる。

覆土上層は黒色土で黄色土を混入し、中層は黒褐色土を基本とするが黄・白・赤色土をブロック状に多量混入する。下層は下位ほど混入物の割合が多くなり、雨によってもたらされたような砂粒も見受けられる。採掘行為が幾度か行われたようであるが、その規模や回数にはつかめなかった。

2044号土坑（第127・87図）

II F-9グリッドに位置する。

長軸1.6m、深さ0.6mを測り、平面プランを呈する。

覆土は全体にしまり・粘性のある黒褐色土である。

2096号土坑（第127・116図）

Ⅲ K-15グリッドに位置する。

長軸1.9m、短軸1.6m、深さ0.3mを測り、平面プランを呈する。

覆土はしまりのない砂質暗褐色土である。

2103号土坑（第128・89図）

I J-15グリッドに位置する。

重複関係は2101号土坑、101号掘立柱建物跡より古く、29・57号住居跡より新しい。

長軸3.2m、短軸2.6m、深さ1.6mを測り、平面プランを呈する。井戸状あるいは塵芥処理土坑と考えられる遺構である。

覆土上層は暗褐色土、中層は黄色土ブロックを大量に含む黒褐色土、下層は黒色土である。

2124号土坑（第129・94図）

Ⅱ K-8グリッドに位置する。

長軸3.0m、短軸1.4m、深さ0.8mを測り、平面プランを呈する。粘土探掘坑と考えられる。

覆土上層はきめの細かい黒褐色土で、中・下層は地山の黄・白・赤色ブロックと多量に混入し、下層は粘質度高い。

(5) 性格不明遺構

3号性格不明遺構（第129・97図）

Ⅱ P-8グリッドに位置する。

長軸2.7m、短軸1.2m、深さ0.6mを測り、平面プランを呈する。竪穴状の遺構である。

(6) 鉄・金属製品

1 鉄製品（第190～194、P L64～68）

本遺跡出土の鉄製品は鉄滓も含めて総数322点をかぞえる。それらの出土した遺構はすべて古代のものだが、銅製品の遺物に近世の所産とされる遺物があった。鉄製品にも新しい時期のものが混ざっている可能性は否めないがすべて一括して取り扱った。鉄製品が多く出土した住居跡はSB27、SB29、SB30、SB35であった。以下器種別に概略を述べていく。

農具：当遺跡出土の鉄製品のうち農具は鋤先が1点、鎌が7点、穂摘み具2点があった。鋤先はいわゆるU字型の鋤先でほぼ完形である。鎌はいずれも柄に装着する側の端を折り返した古墳時代から平安時代にかけて一般的な形態のものばかりである。鉄製穂摘み具は釘のための小孔が2つある小型のものであった。小諸市竹花遺跡、中原遺跡などでも出土例がある。

紡織具：紡錘車2点のほか紡輪、紡軸の出土もある。石製紡錘車と金属製の紡錘車が同時に出土した住居跡はなく、時期的な変遷があるのだろうか。苧引き具は1点出土しただけであった。

工具：曲鉋がSB151より1点完形で出土した。鉋の先端が曲がったものと考えたが本来刃が上向きに反り上がっている、細かな工作用の木工具である。棒状不明品として掲載しているが、錐もしくは鑿とみられる遺物が4点出土した。揉み錐ではなく打ち込んで使う打ち込み錐か、舞錐であろう。SD3より鑿も先

端だけが1点出土した。不明品として扱ったが板状の鉄片できざげの可能性のある遺物や、整式のおそらく撃らしい遺物の出土もあった。

刀子：投棄されたい遺物が多いため、やはり完形品は少なかった。関の有無や刃部と茎部の長さの比率などみるといくつかに分類できそうだ。小型のものが多く、また断面をみると鑄造りの刀子はなく、平造りのものばかりであった。

馬具：鎧の金具、鎧紐の兵庫鎖の一部、辻金具、轡の一部とおもわれる棒状鉄製品などがそれぞれ散発的に出土した。

鉄鏃：SD3を中心に多数の出土を見、大半が細身の鏃身をもつ長頸族であった。切出しナイフ状の刃先をもつもの、丸鏃の断面をもち、丸みを帯びた刃部をもつ本来は圭頭鏃だったと思われるものの二種類が、特に多かった。また、有茎・無茎の三角鏃や頸部をねじった鏃、雁俣鏃なども数は少ないが出土し、形態は多岐にわたっている。

その他の道具：鉄、毛抜き形鉄製品、針、釘、帯金具、刀装具などが出土している。

不明品：板状、棒状の不明な鉄製品も多数出土した。薄い鉄板を折り曲げたものや、刃物ではあるがその用途などを想定しかねる遺物もあった。

2 銅製品 (第194図、P L68)

本遺跡出土の銅製品は帯金具と金環を中心に26点出土した。古代の遺物が大部分だが江戸期の所産とされる箸や銭貨の出土もあった。

帯金具：帯金具では鉸具の杵、刺金が一点ずつ出土したほか、巡方、丸軋、鉈尾などが出土しているが大きさも出土位置もまちまちであった。投棄ないしは埋土中への粉れ込みと考える。

金環：大きさの異なるもの5点を図示した。表面の鍍金の残り具合はまちまちであった。

銭貨：図示した「神功開寶」のほかに「和同開弥」が破片で出土した。また、「文久永寶」も出土した。海獣罽葛鏡：SD3から出土したものの。溝の埋土中からの出土でやはり投棄か粉れ込みであろう。

その他：柄頭、箸のほか何かの装飾の金具があった。

(7) 石製品 (第195～203図、P L61～63)

石製品では、砥石・打斧・敲石・こも編み石・石錘・円盤状軽石・凹石・玉類・石製模造品・石臼などが出土している。砥石は26点図化できた。破片や疑わしいものは図化していないため、それらをなどを含めると倍以上の数量となる。小孔の穿たれたものや表面の粗いもの、細かいもの、滑らかなものが見られる。石材は砂岩・凝灰岩・粘板岩・軽石などが使用されている。

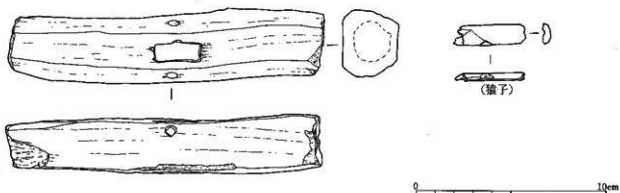
打斧は数点出土したが、図化できたのは2点である。調査中掘形覆土内に打斧と考えられる製品が認められたが、石製品として取り上げていない。これら掘形中に認められた打斧は、住居跡構築の掘削具として使用されたものと考えられる。

敲石は10点図化できた。球形のものと棒状の二者が見られ、重量は200～1000gと多様である。

こも編み石は9点図化できた。図化したもの以外に多量に出土しているが、本文中の堅穴住居跡の項に数量のみ記載した。出土状態はほとんどが床面直上で出土している。重量150～250gを測るものが主体を占め、それより大きな製品も見られた。大きな製品は用途が異なるものと考えられる。

石錘は3点図化できたが、こも編み石と区別しづらく、あるいはこも編み石の範疇に入れるべきかもしれない。横幅があり側面に打ち欠いた痕跡の認められたものを石錘とした。

紡錘車は21点図化できた。滑石製が主体で、他に軽石製・土製・鉄製が認められる。滑石製品の全ては断面台形である。6世紀後半～8世紀代が多いが、9・10世紀でも認められている。



第76図 骨角製品

円盤状軽石製品が18点図化できた。用途は不明で軽石を用いた円形のを分類してある。竪穴住居跡で出土したものは、ほとんどが古墳時代後期の所産である。図化した18点の他にも多数出土している。

凹石33点図化できた。石材はほとんどが軽石製であるが、中には安山岩製のものも見られる。33点のうち竪穴住居跡からは15点、3号溝からは17点出土している。

玉類は白玉・勾玉・管玉・丸玉・丸小玉・なつめ玉が見られる。白玉は33点・勾玉は4点・管玉1点・丸(小)玉8点・なつめ玉2点が出土している。白玉の33点のうち15点は竪穴住居跡から、3号溝から15点の出土している。

石製模造品は上記の白玉を含めて滑石製の剣・勾玉が認められている。剣の模造品は2点、7世紀後半と考えられる24・40号住居跡から出土している。

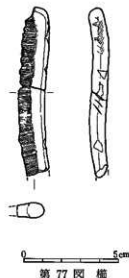
他に7世紀後半と考えられる40号住居跡から台石1点、9世紀代の住居跡から石臼4点が出土している。鞆の羽口が30号住居跡から2点出土している。

(8) その他

骨角製品(76図 P L60)が3号溝A区上層から出土している。鹿の角製で髓の部分は中空で、中央部は長方形に削り抜かれ、側面には $\phi 3\text{mm}$ ほどの小孔が二つ穿たれている。用途は不明であるが、実用ではなく祭祀的な用途に用いられた墨壺の可能性が考えられる。内部からは猿子(さつこ)と考えられる骨角製品が検出されている。

木製品では櫛(77図)が87号住居跡から出土している。形状は横櫛の範疇に入るもので、全体が炭化している。

銭貨は和同開珎(78図)が3号溝の上層、神功開寶(78図)が3号溝覆土から出土している。



第77図 櫛



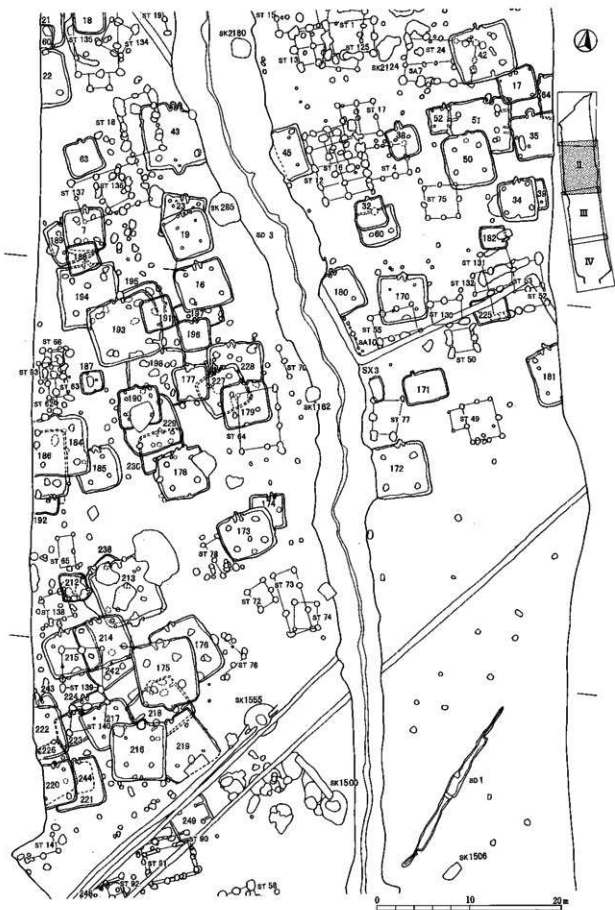
第78図 銭貨拓影図



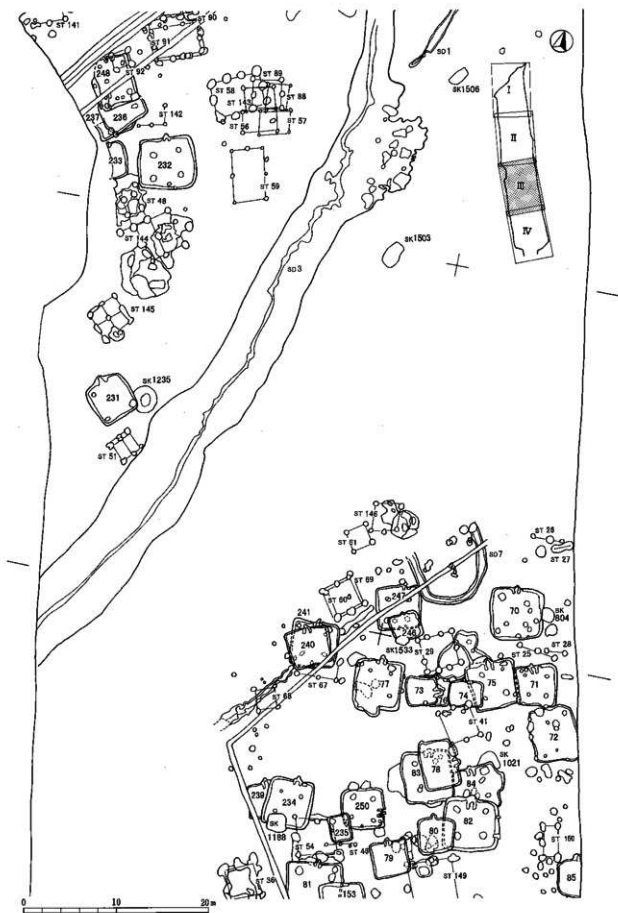
第 79 图 芝宮遺跡群全体图



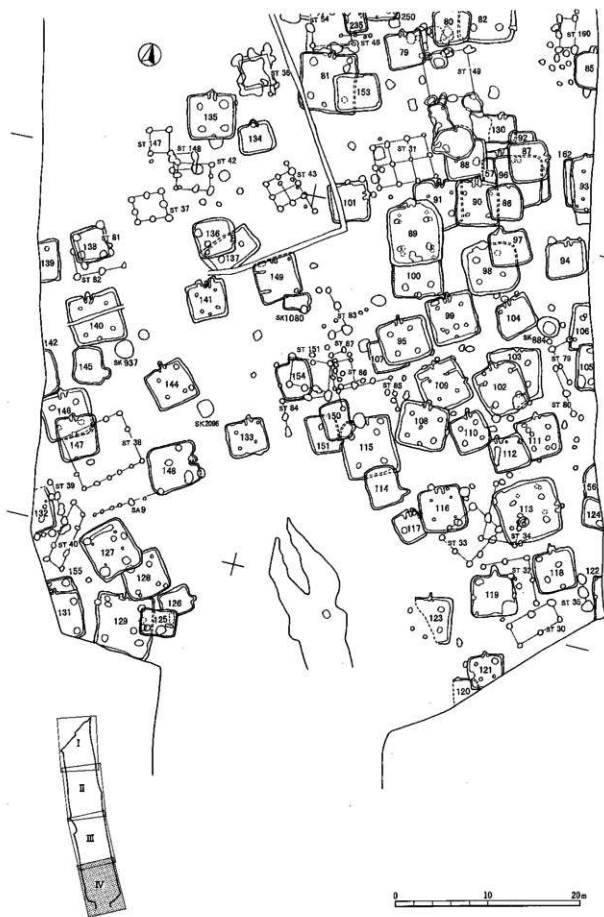
第80図 遺構配置 I



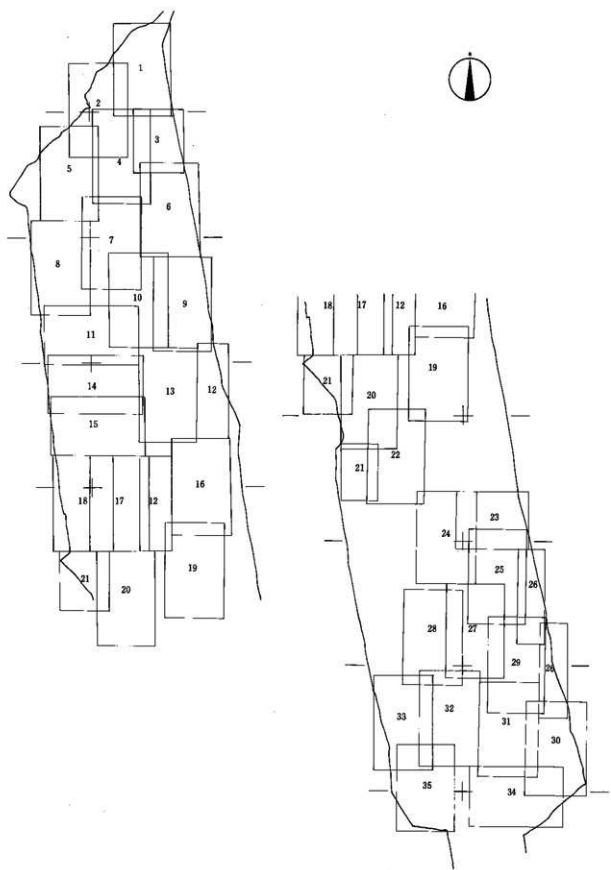
第 81 図 遺構配置 II



第 82 図 遺構配置 III



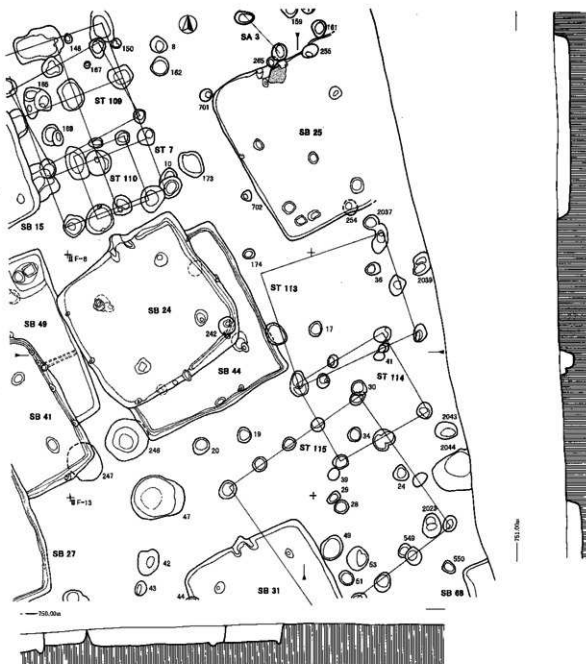
第 83 図 遺構配置 IV



第 84 図 遺構図割付

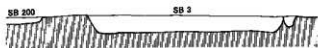


第86圖 遺構圖 2 (1:120)



遺構区2断面

— 151.00a

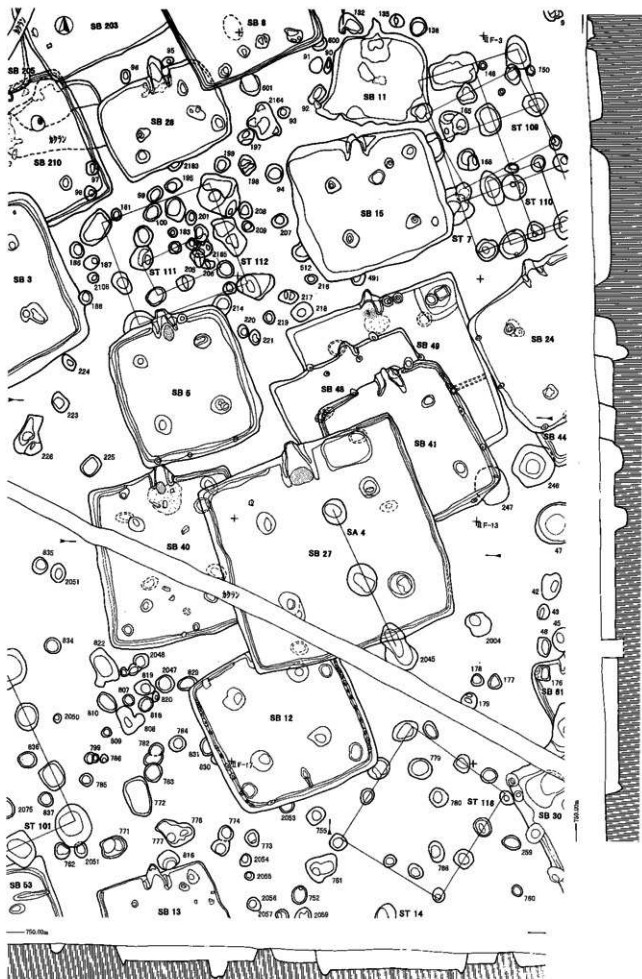


遺構区4断面

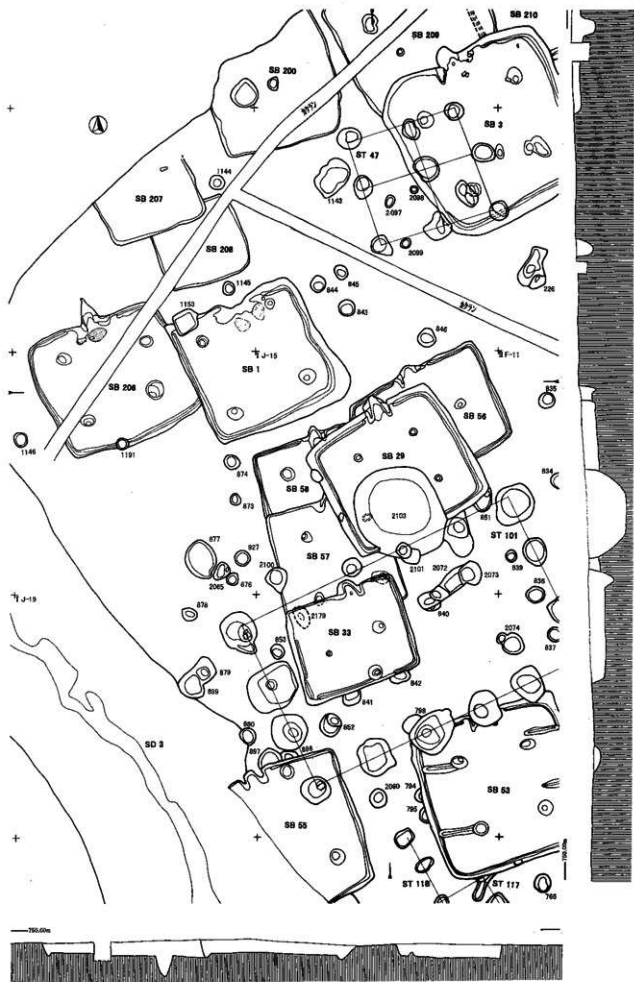
— 150.00a



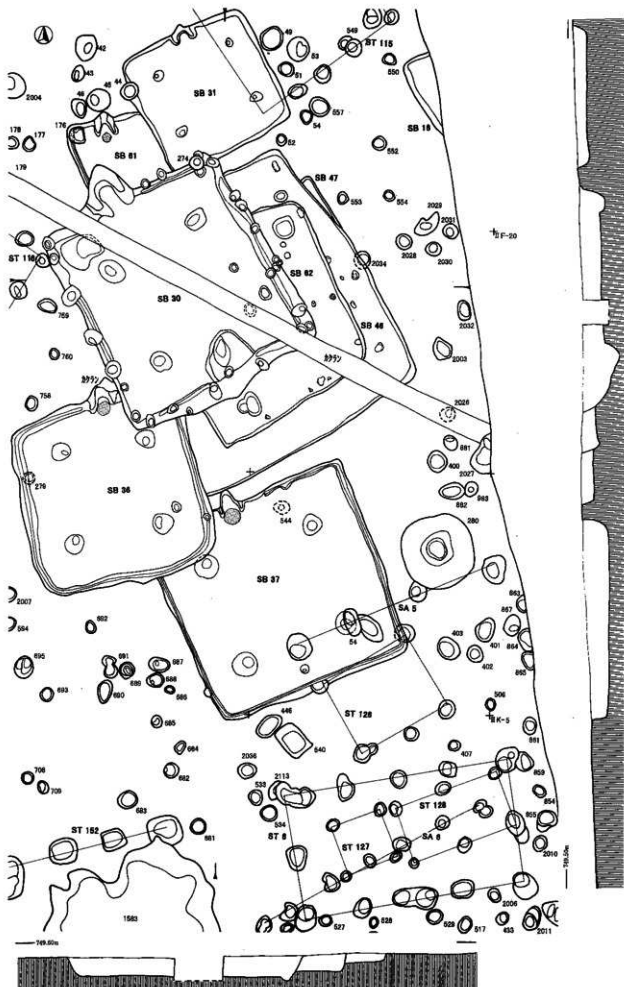
第 87 図 遺構区 3 (1:120)



第 88 号遺構図 4 (1 : 120)



第 89 図 遺構図 5 (1 : 120)



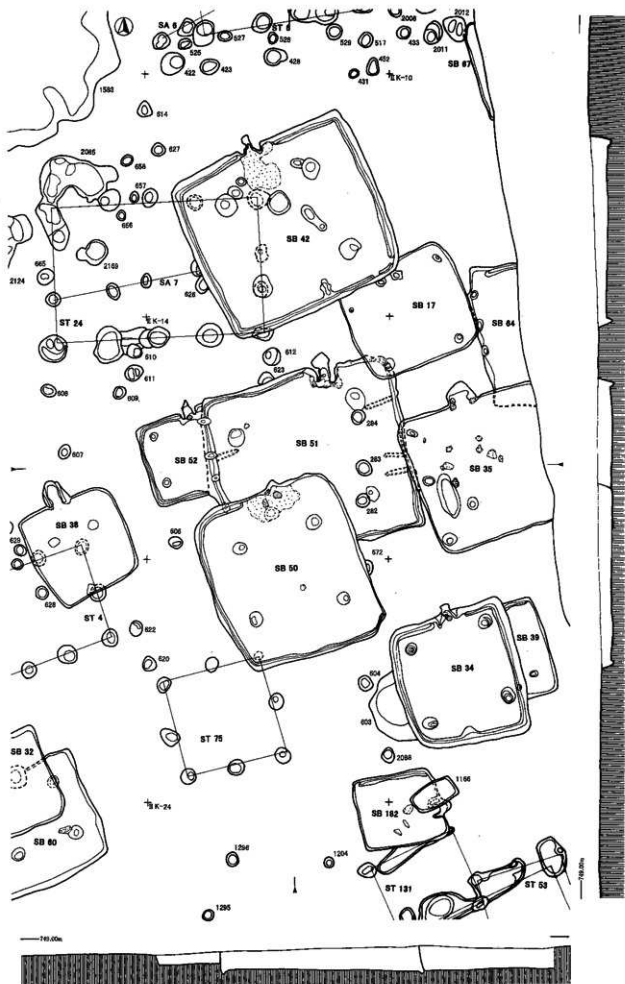
第90図 遺構図 6 (1:120)



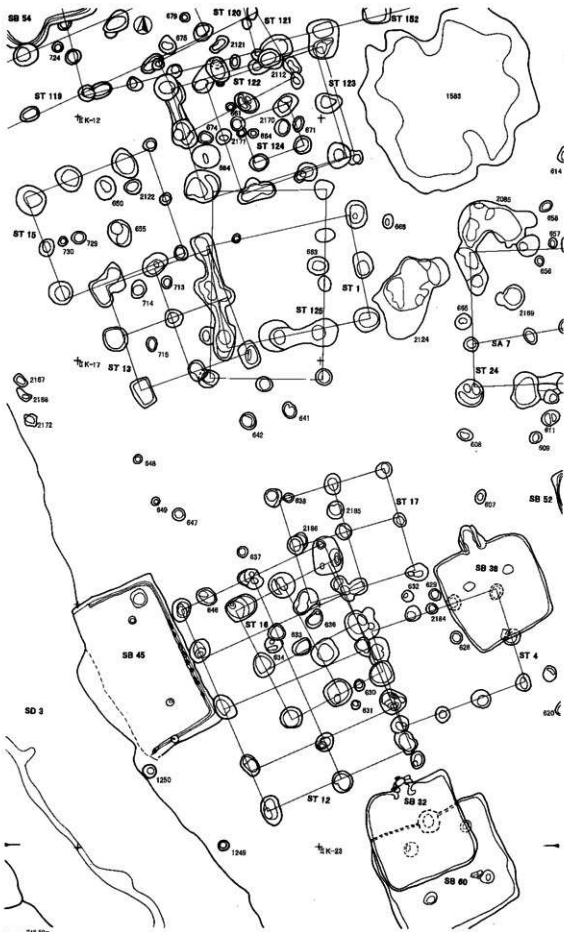
第91圖 遺構圖 7 (1:120)

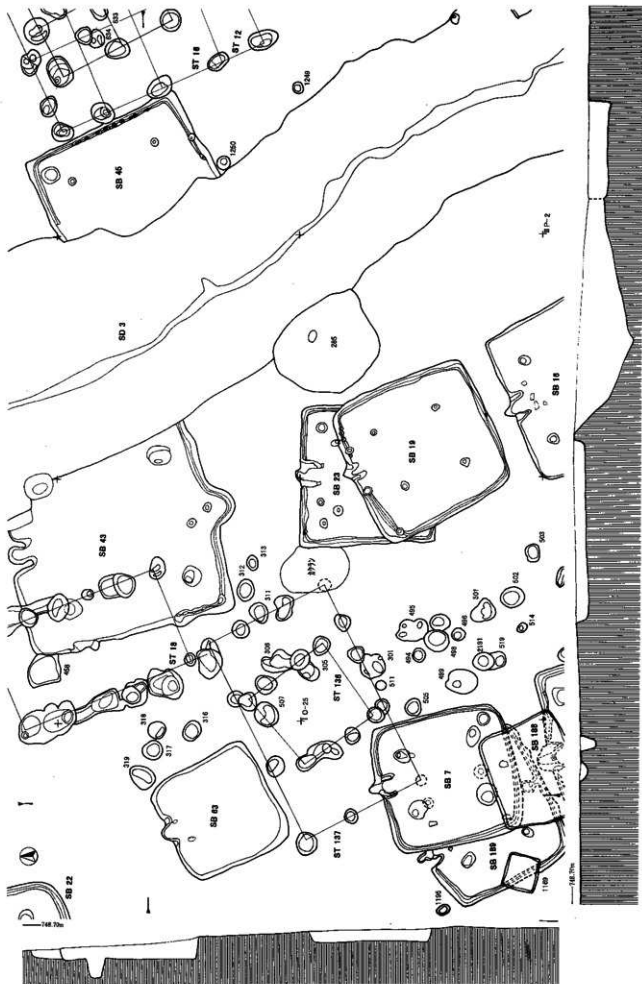


第 92 図 遺構図 8 (1 : 120)

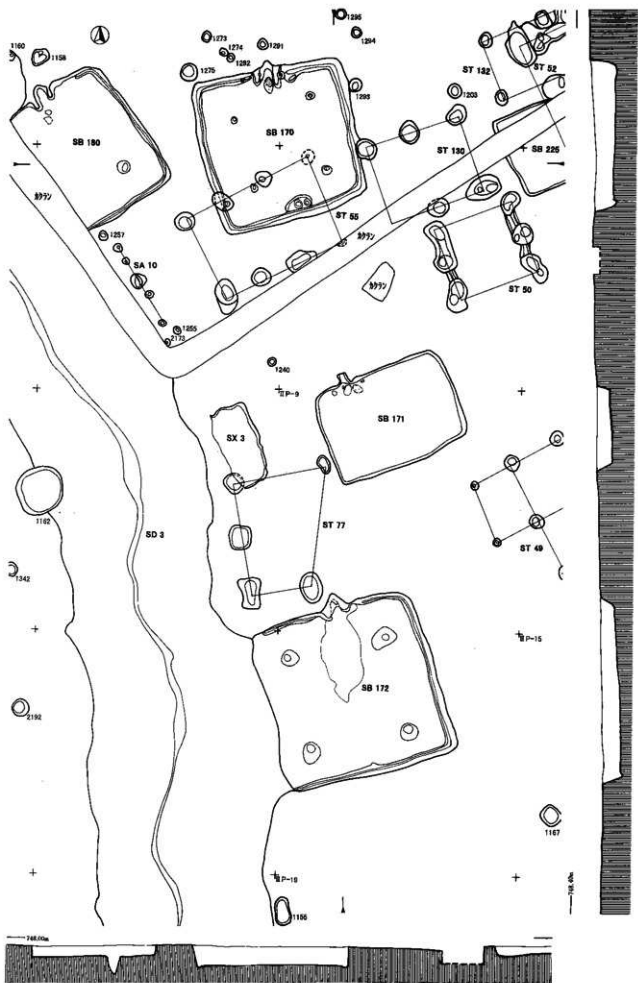


第93图 遺構图9 (1:120)

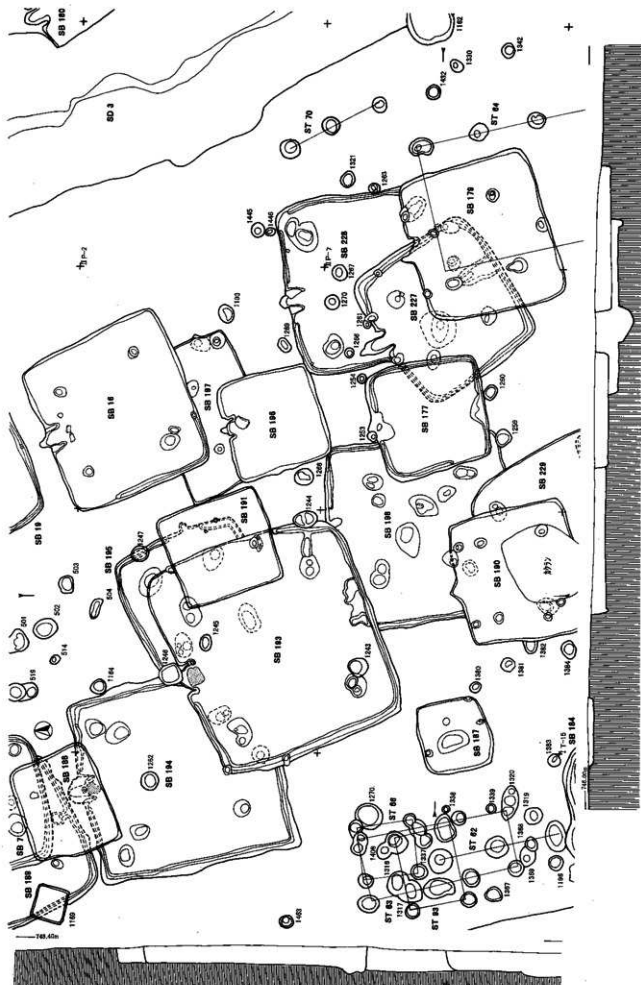




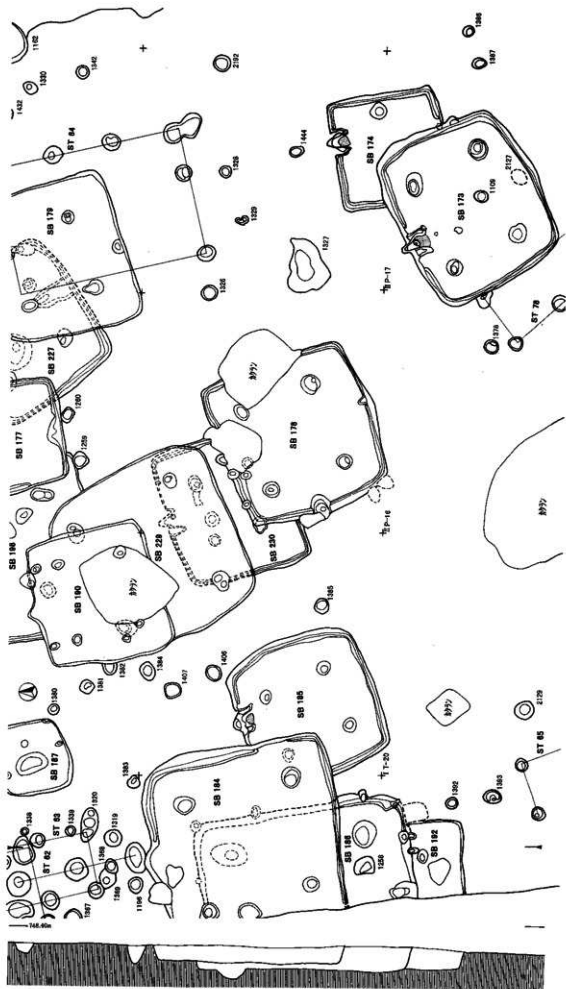
第 95 图 遗址图 11 (1:120)



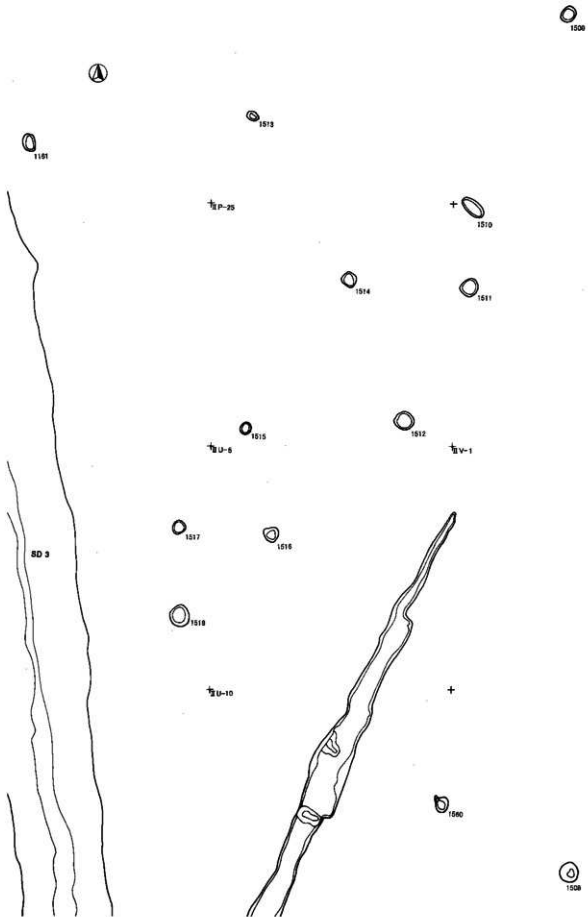
第 97 圖 遺構圖 13 (1 : 120)



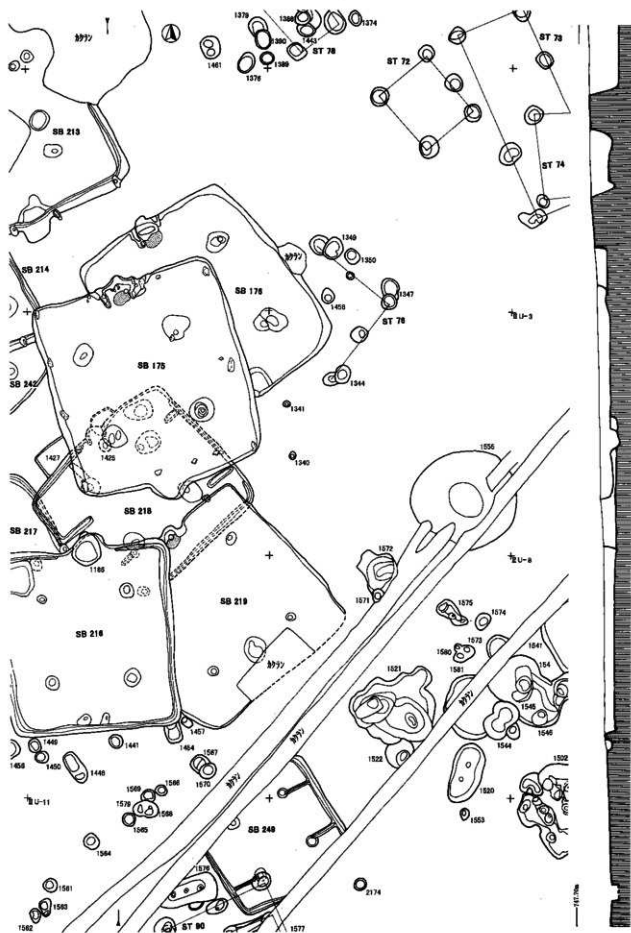
第 96 図 遺構図 14 (1:120)



第99图 遗構图 15 (1:120)



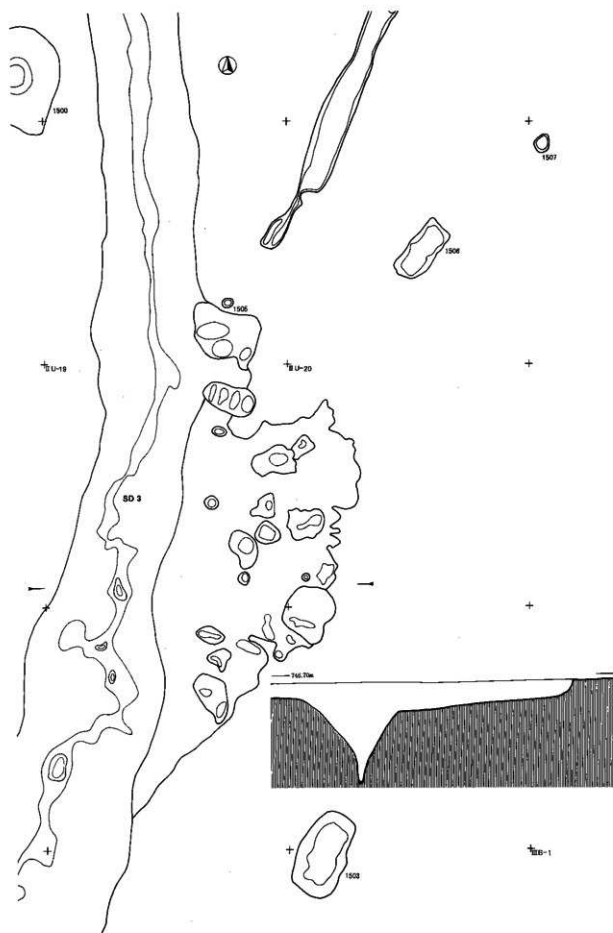
第100図 遺構図 16 (1:120)



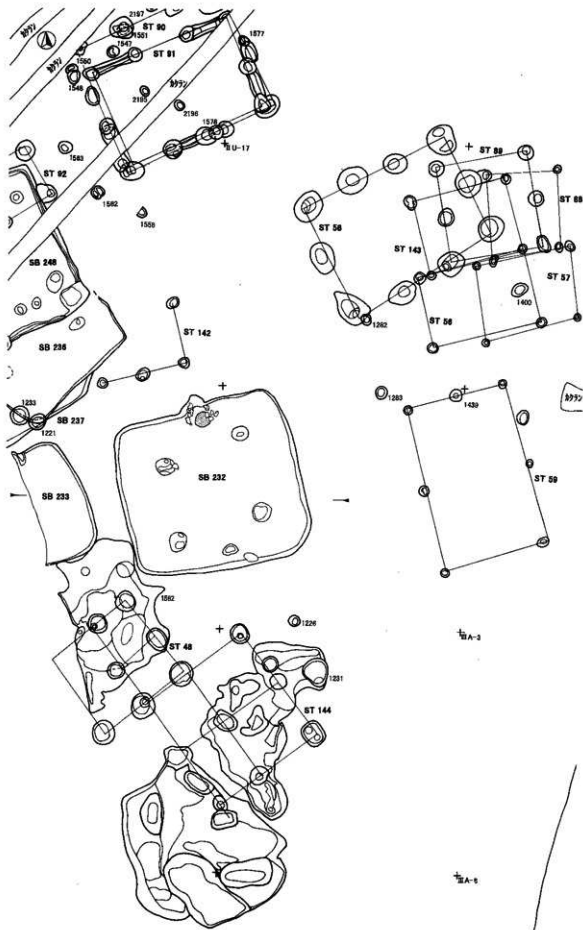
第101図 遺構図 17 (1:120)



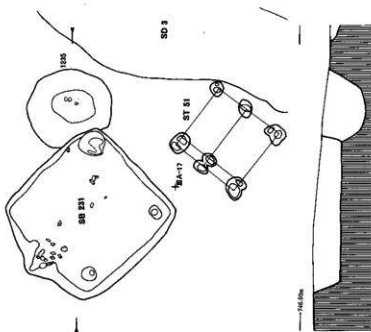
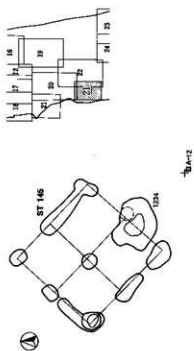
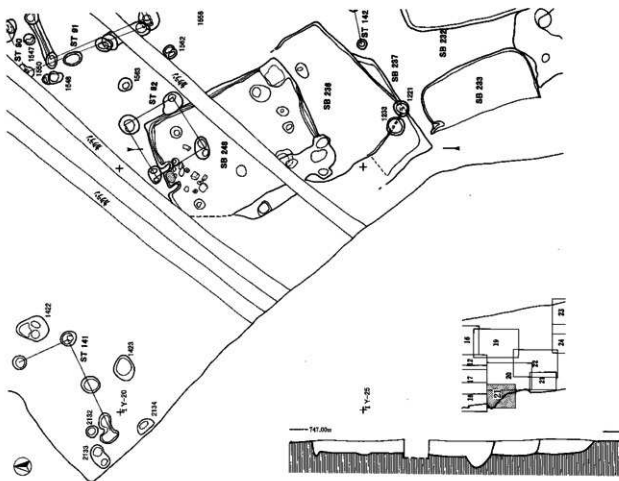
第102図 遺構図 18 (1:120)



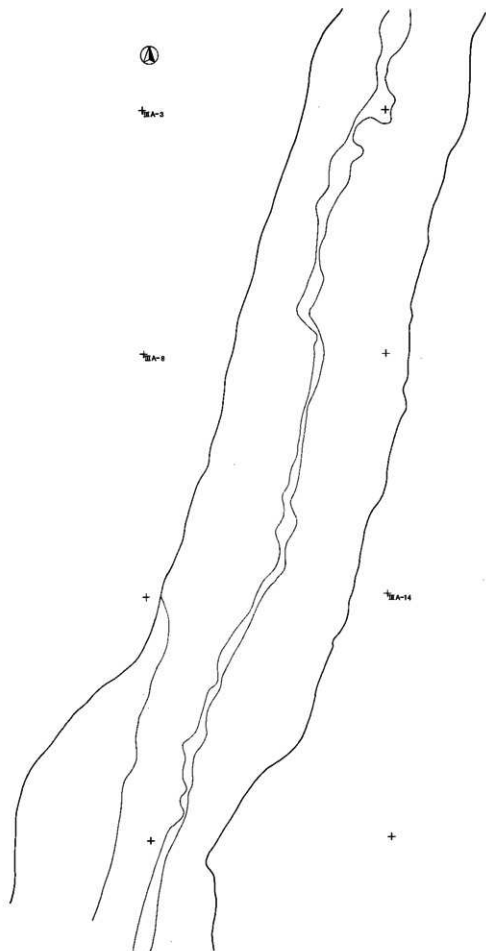
第103图 遺構图 19 (1:120)



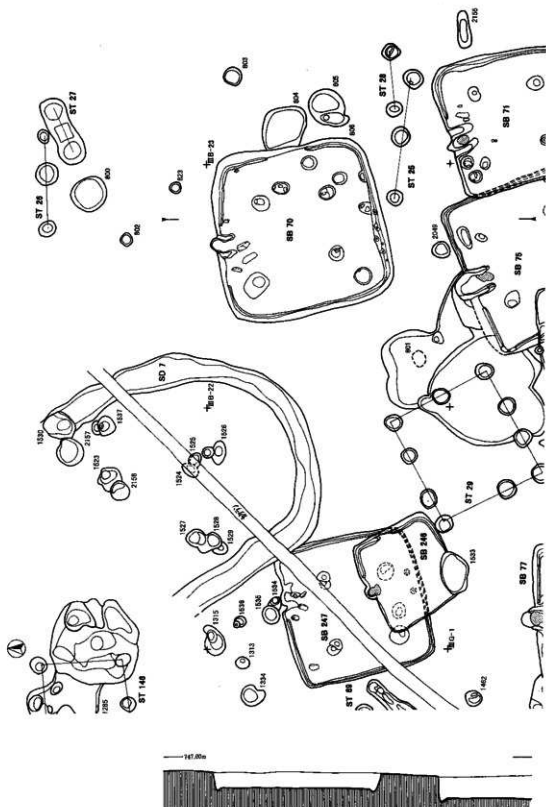
第104图 结构图 20 (1 : 120)



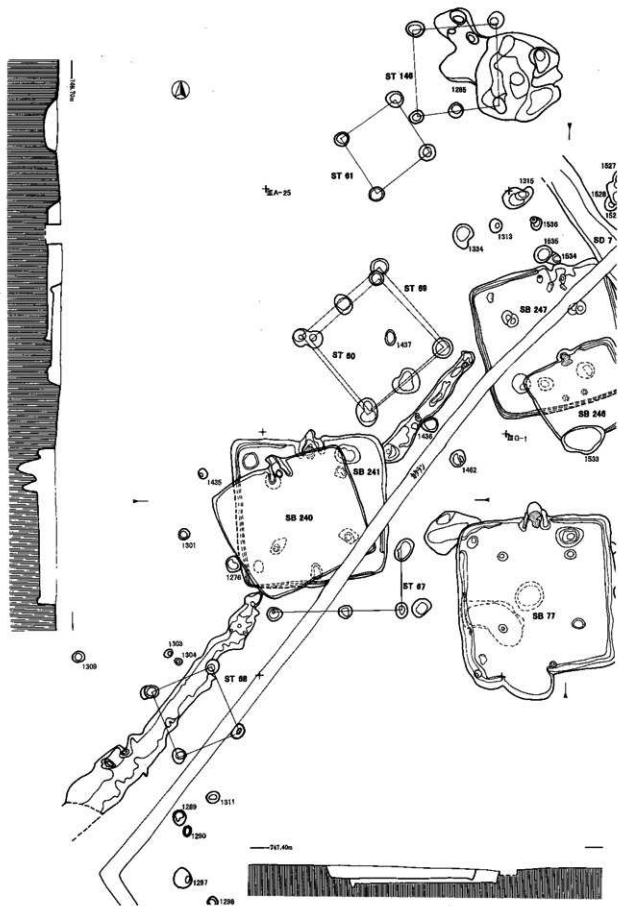
第105号遗址平面图 21 (1:120)



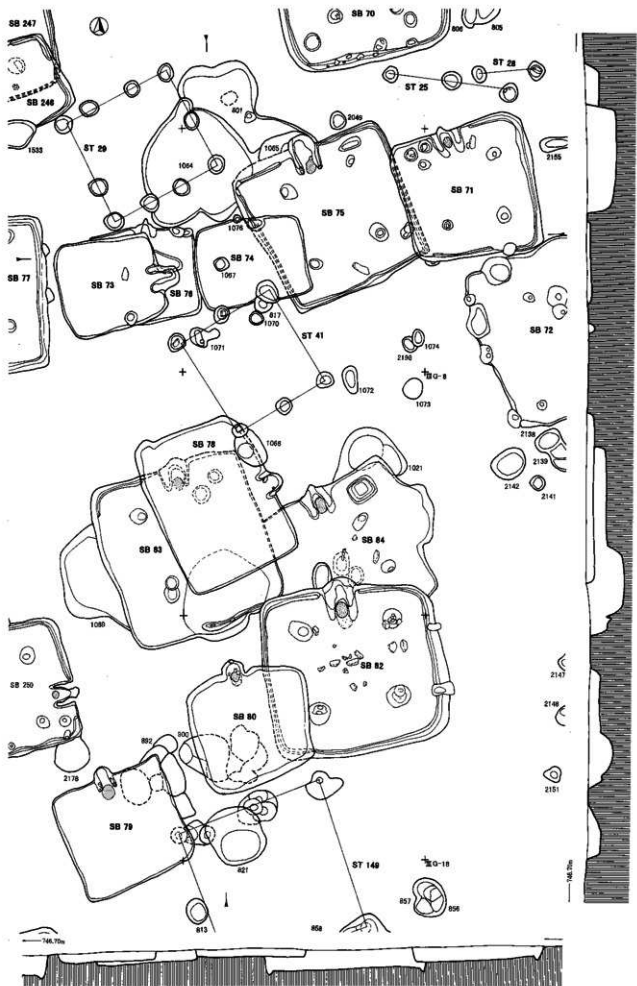
第106圖 遺構圖 22 (1:120)



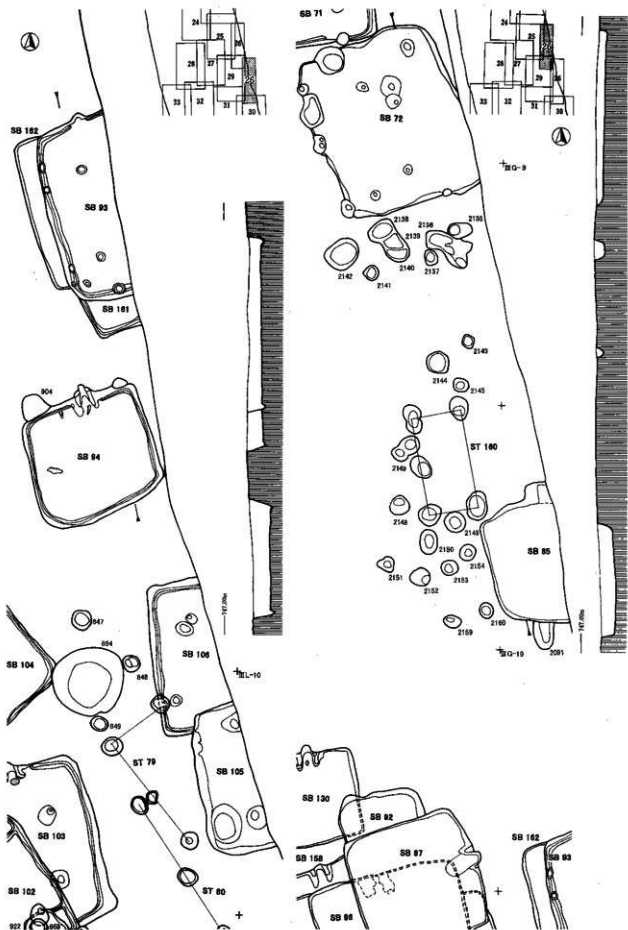
第107图 遺構図 23 (1 : 120)



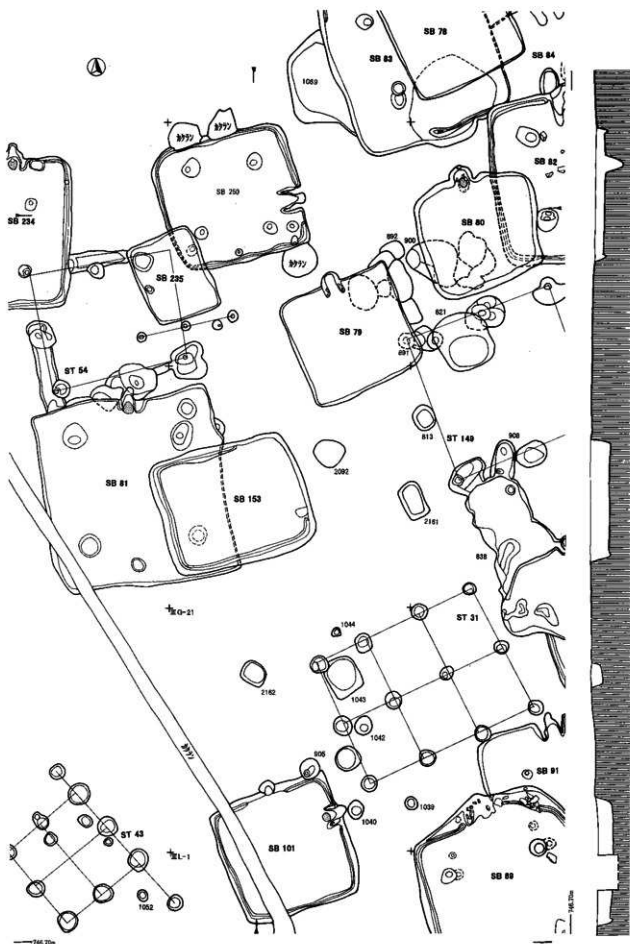
第108図 遺構図 24 (1:120)



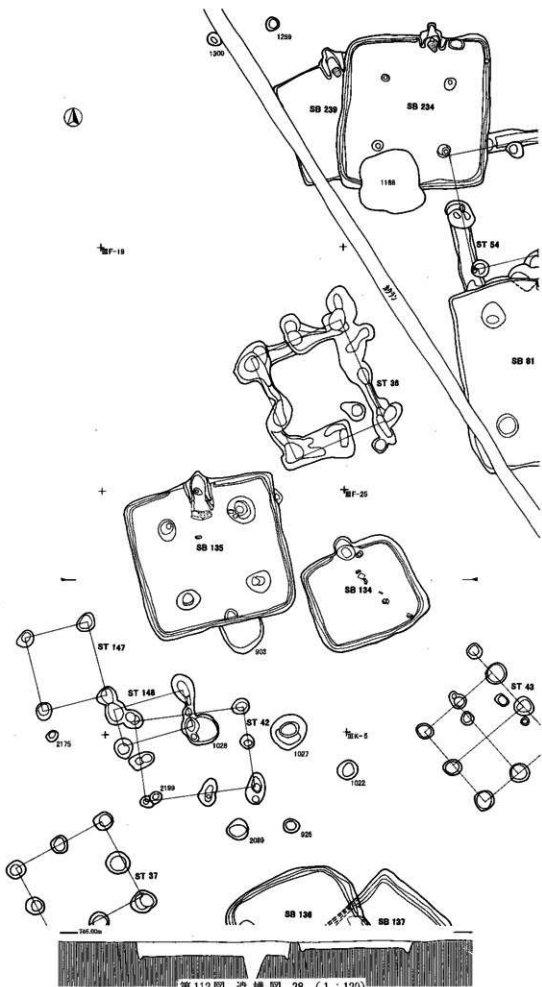
第109図 遺構図 25 (1:120)



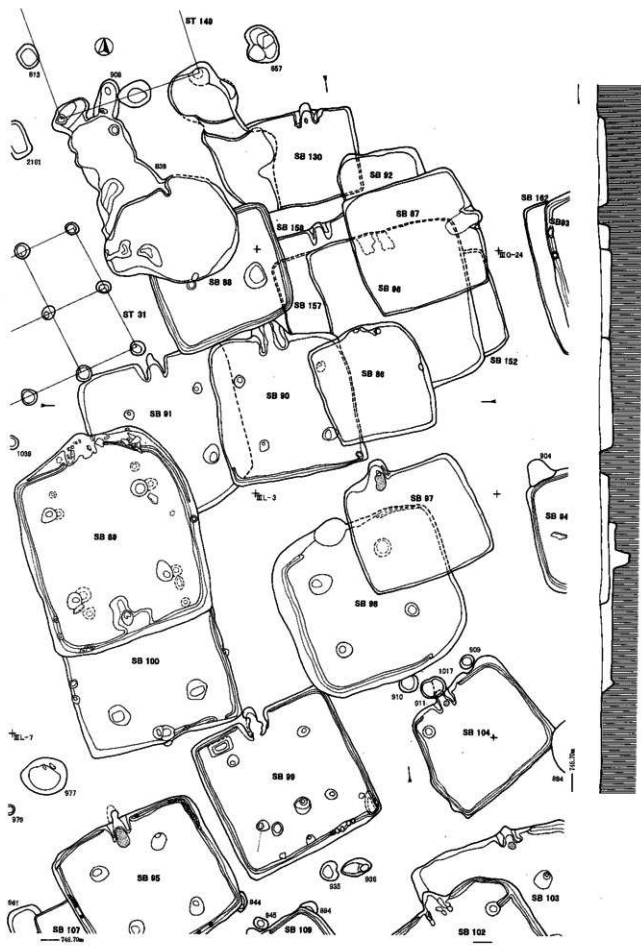
第110図 遺構図 26 (1:120)



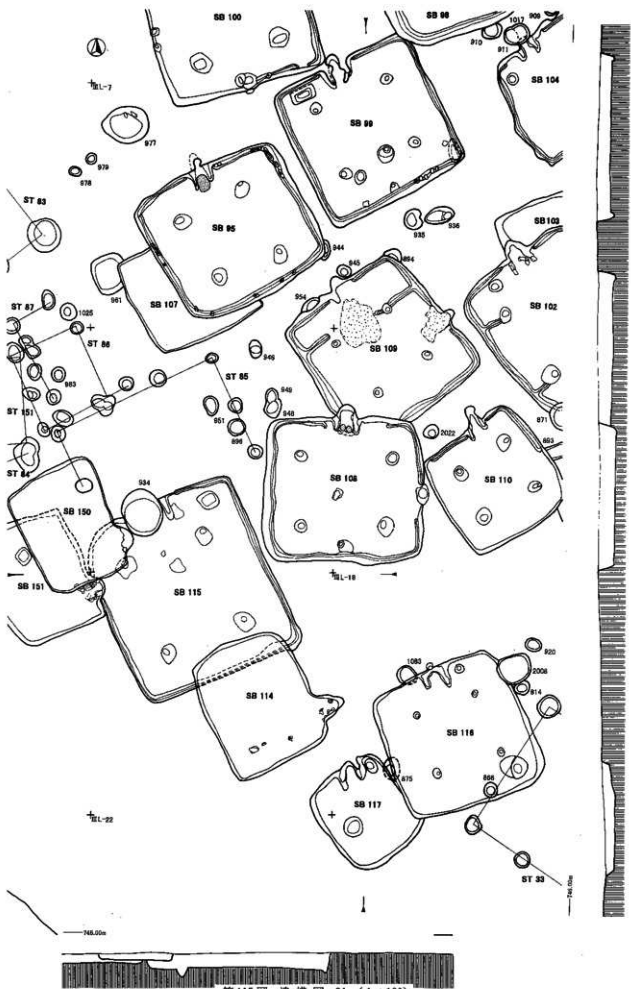
第111圖 結構圖 27 (1:120)



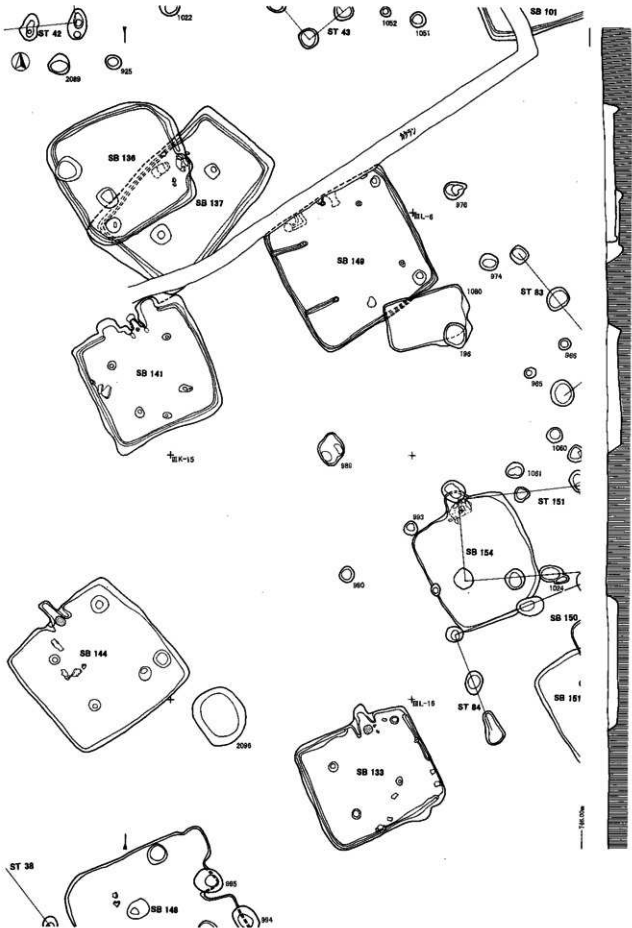
第112圖 遺構圖 28 (1:120)



第113号 遺構図 29 (1:120)



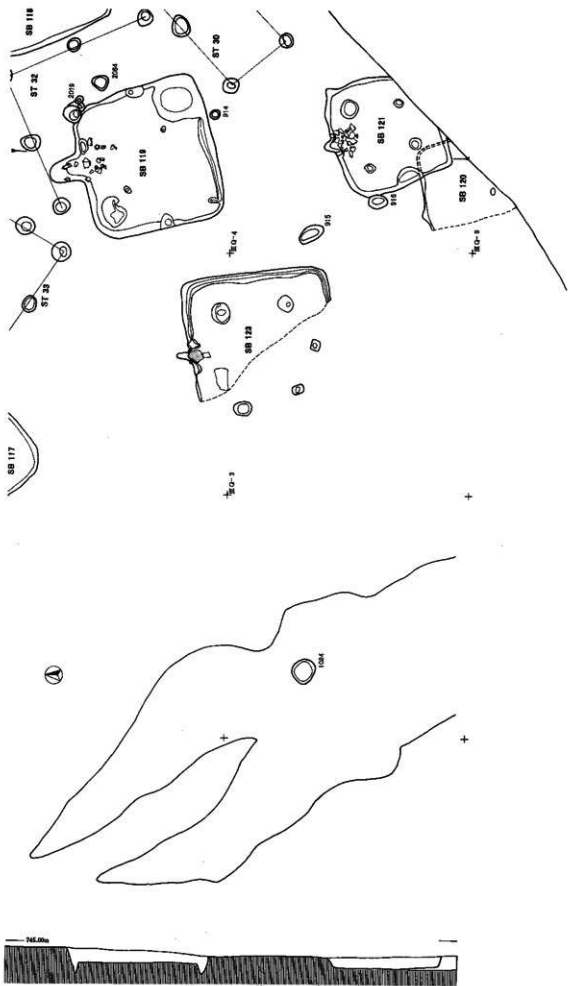
第115図 遺構図 31 (1:120)



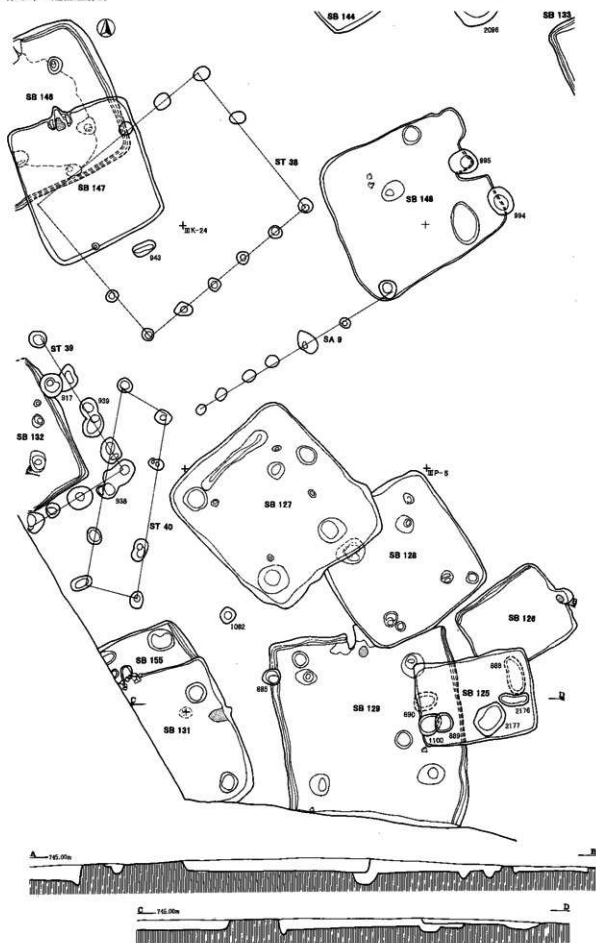
第116図 遺構図 32 (1:120)



第117図 遺構図 33 (1:120)

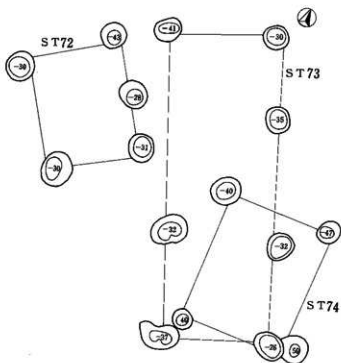
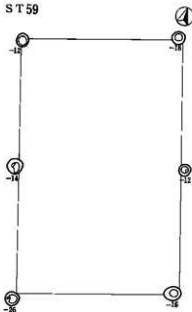


第118图 透视图 34 (1:120)

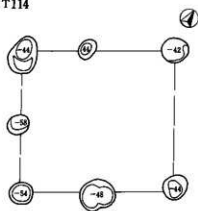


第119図 遺構図 35 (1:120)

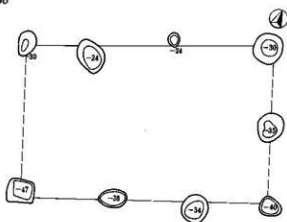
ST 59



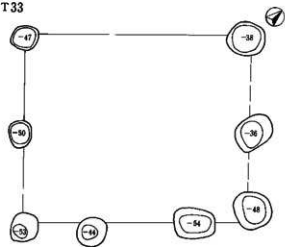
ST114



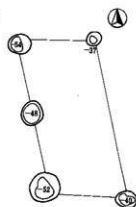
ST108



ST 33



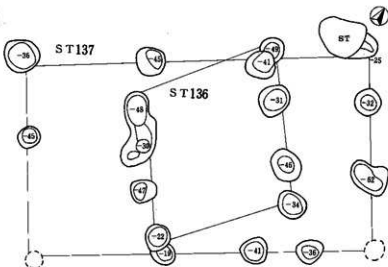
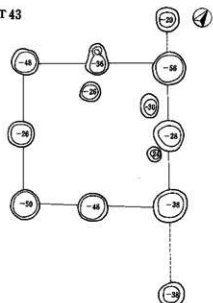
ST 22



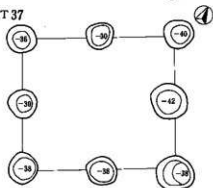
0 2m

第120号 22・33・59・72・73・74・108・114号掘立柱建物跡

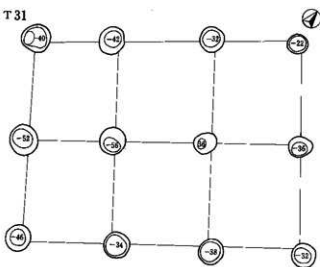
ST 43



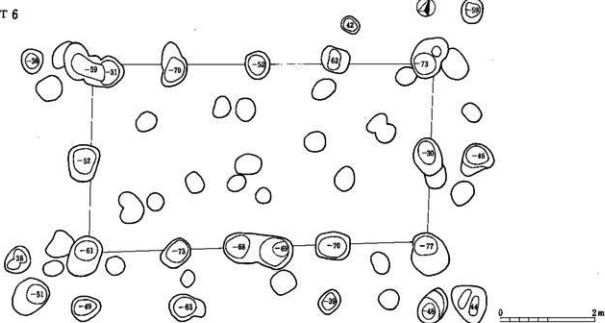
ST 37



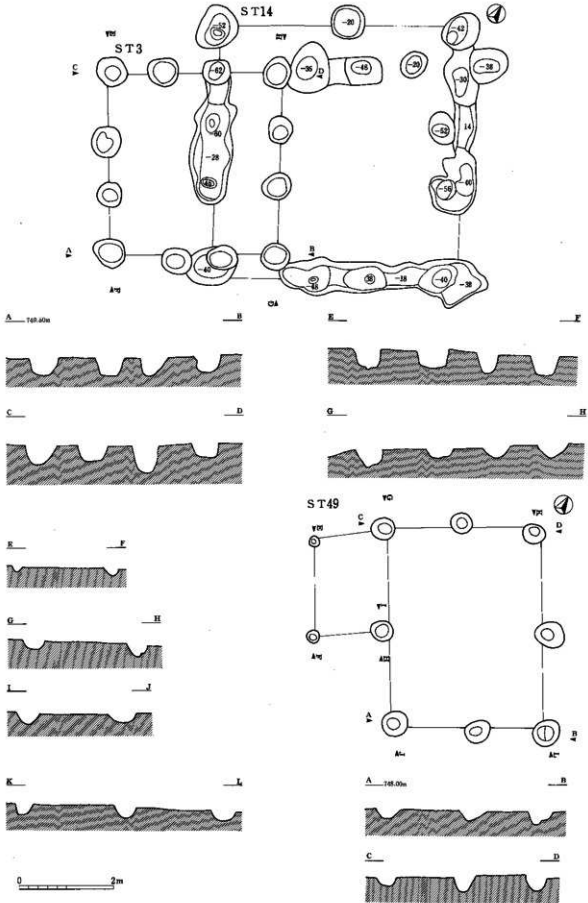
ST 31



ST 6

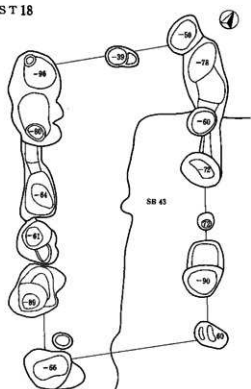


第121图 6・31・37・43・136・137号掘立柱建物跡

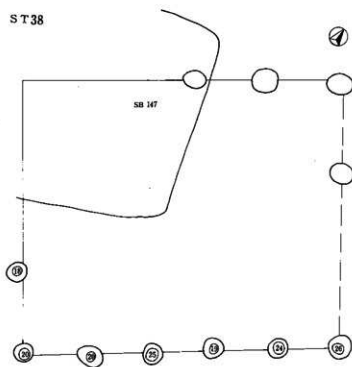


第122图 3・14・49号据立柱建物跡

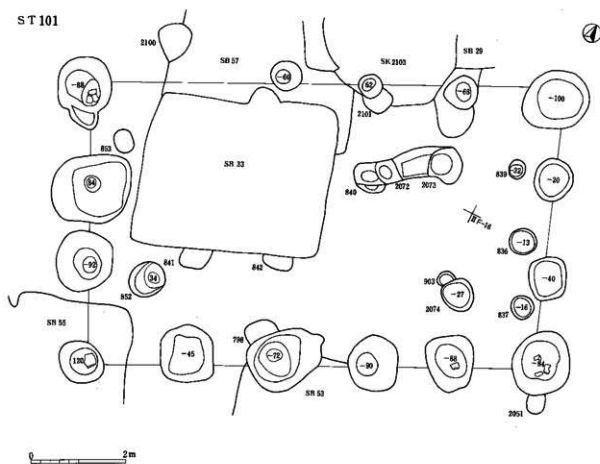
ST 18



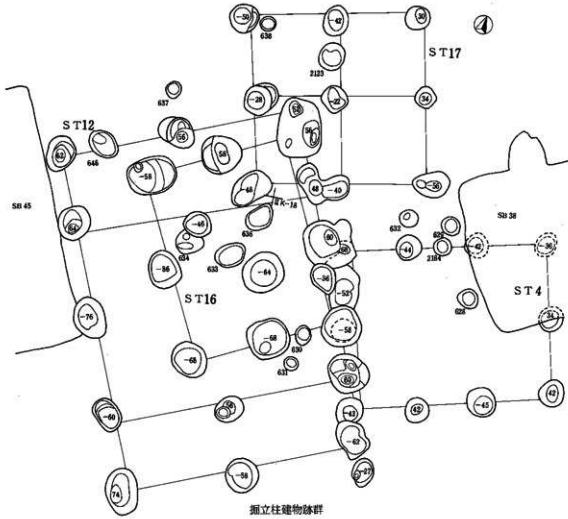
ST 38



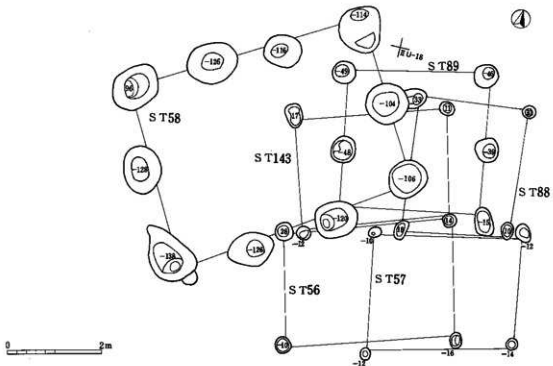
ST 101



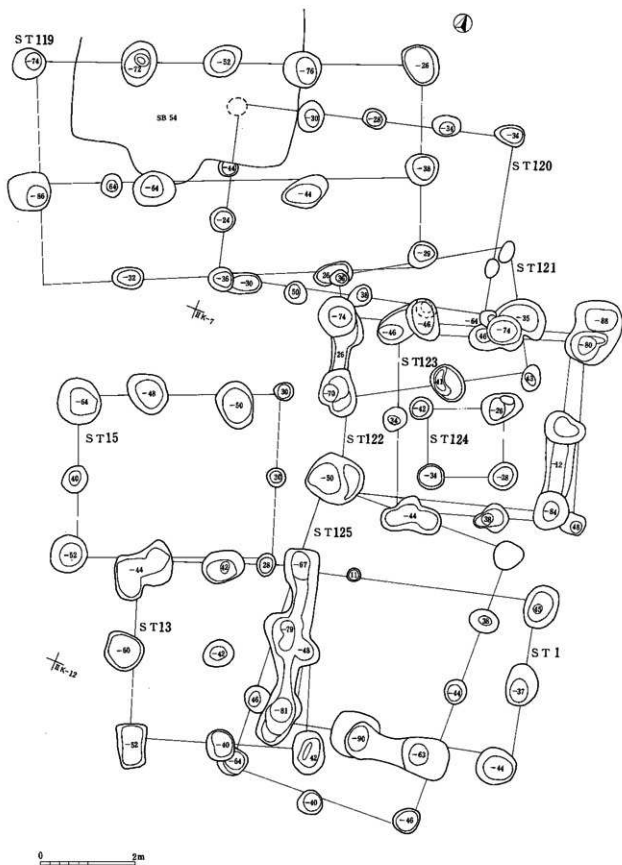
第 123 图 18・38・101号掘立柱建物跡



独立柱建物跡群

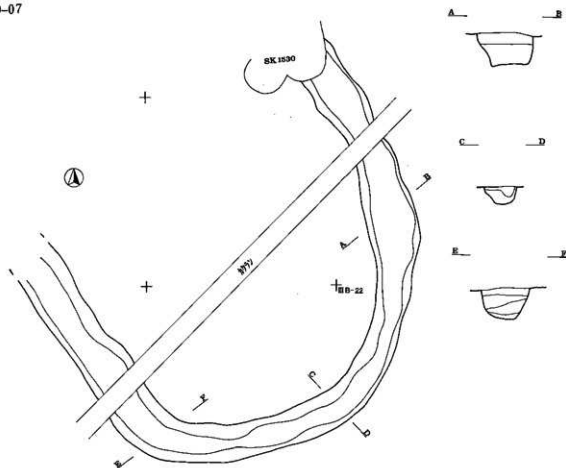


第124図 独立柱建物跡

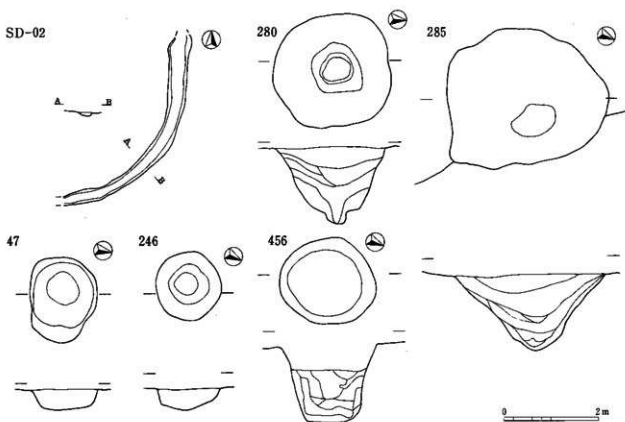


第 125 图 獨立柱建物跡

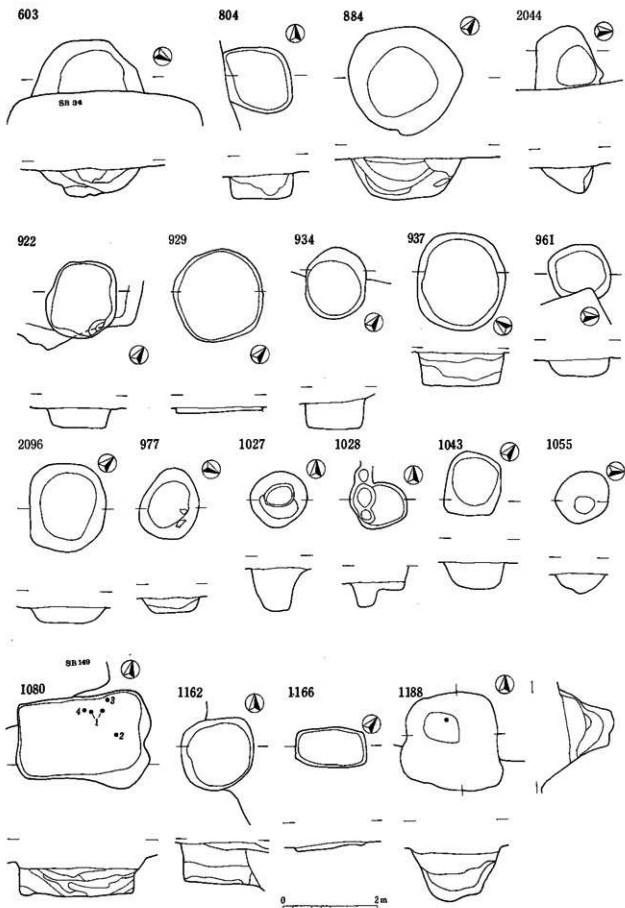
SD-07



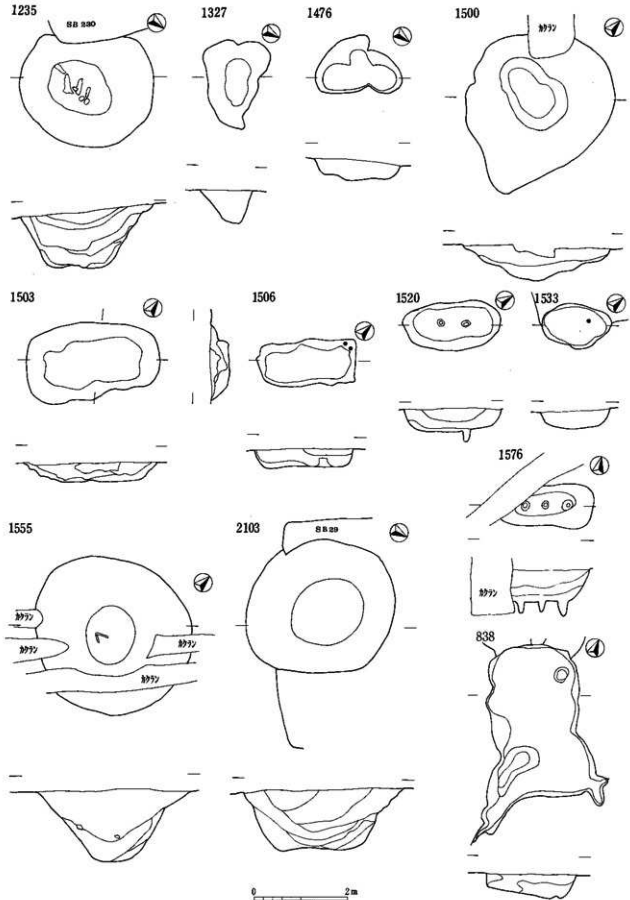
SD-02



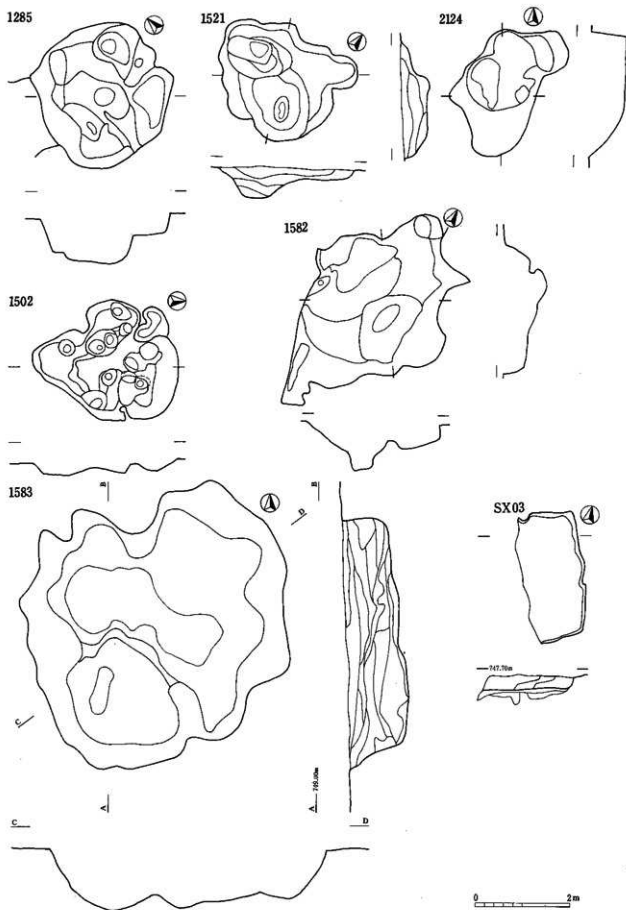
第126图 2・7号溝跡、土坑



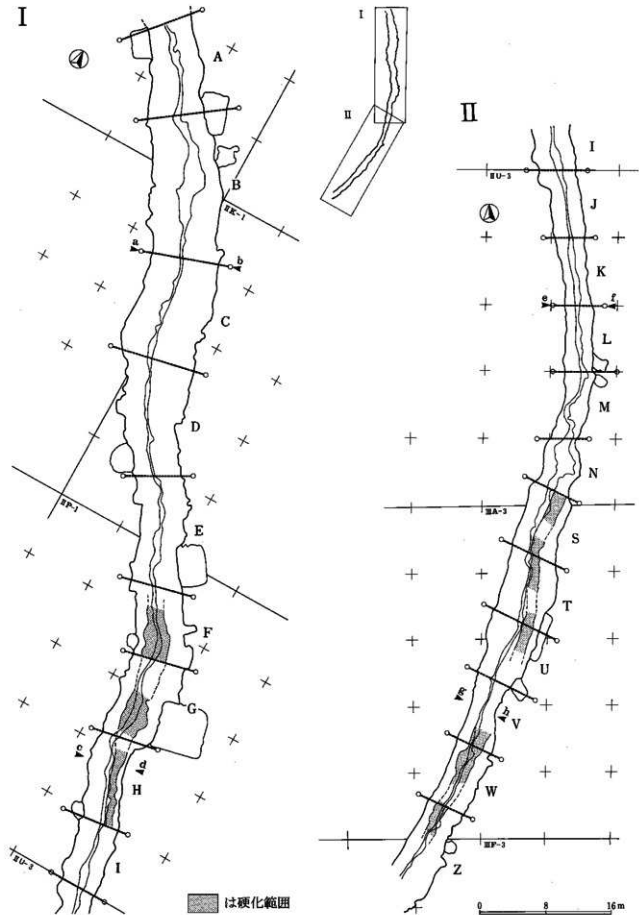
第127图 土坑



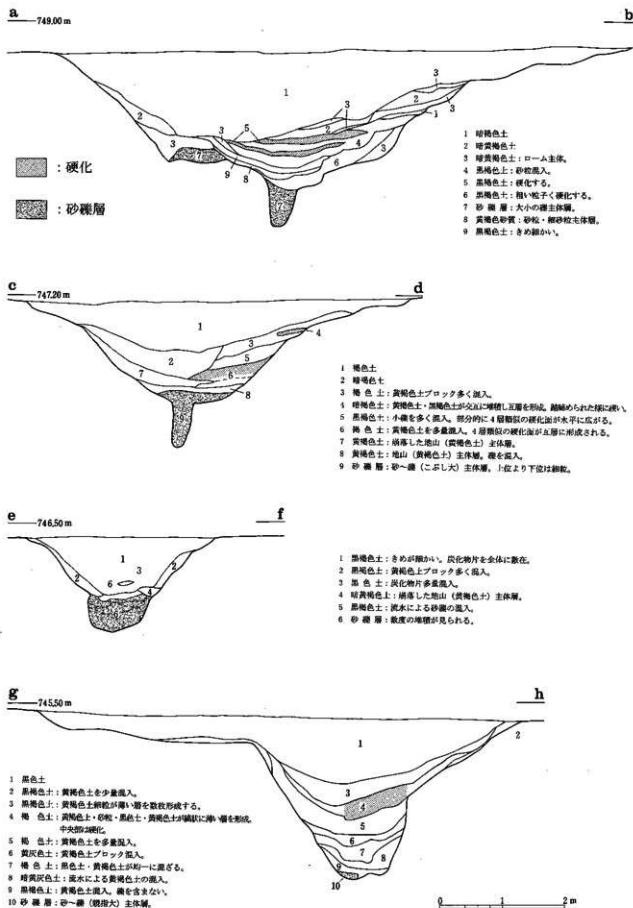
第128図 土坑



第129圖 土坑

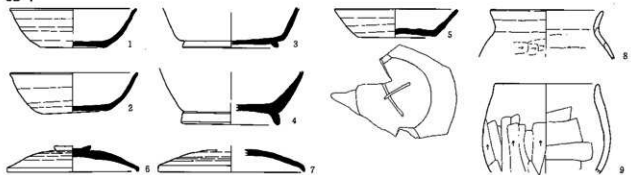


第130図 3号溝

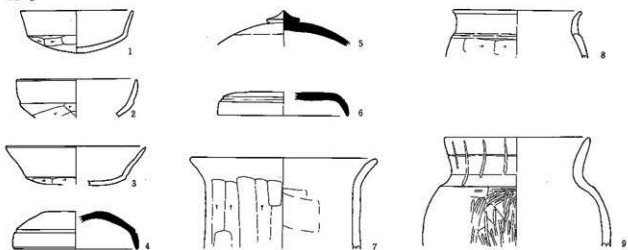


第131図 3号溝土層

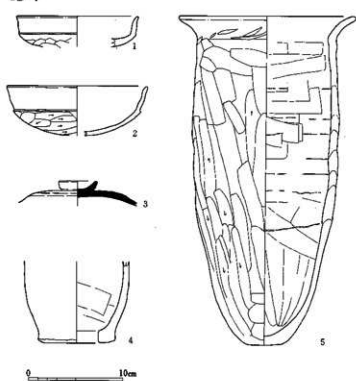
SB 1



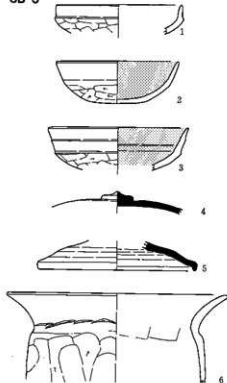
SB 3



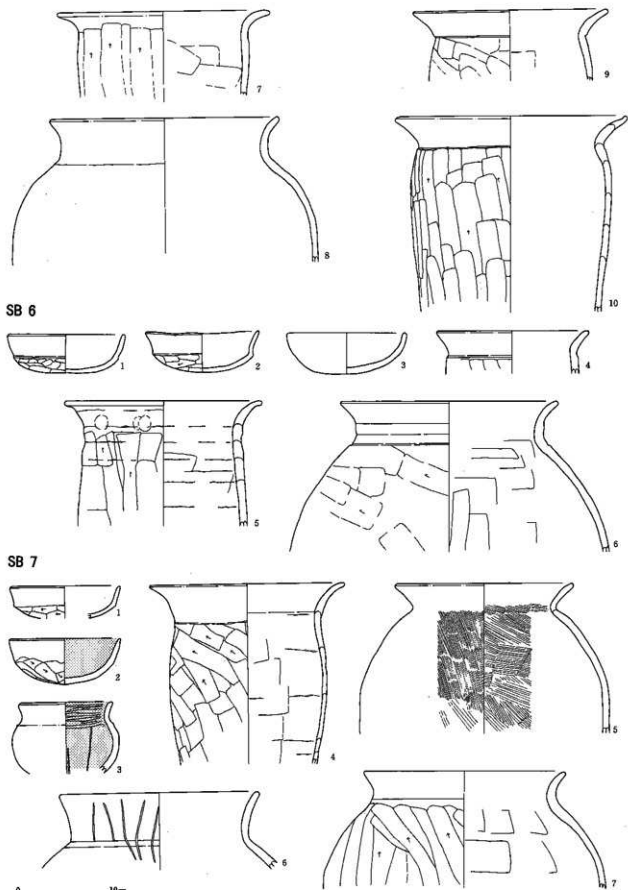
SB 4



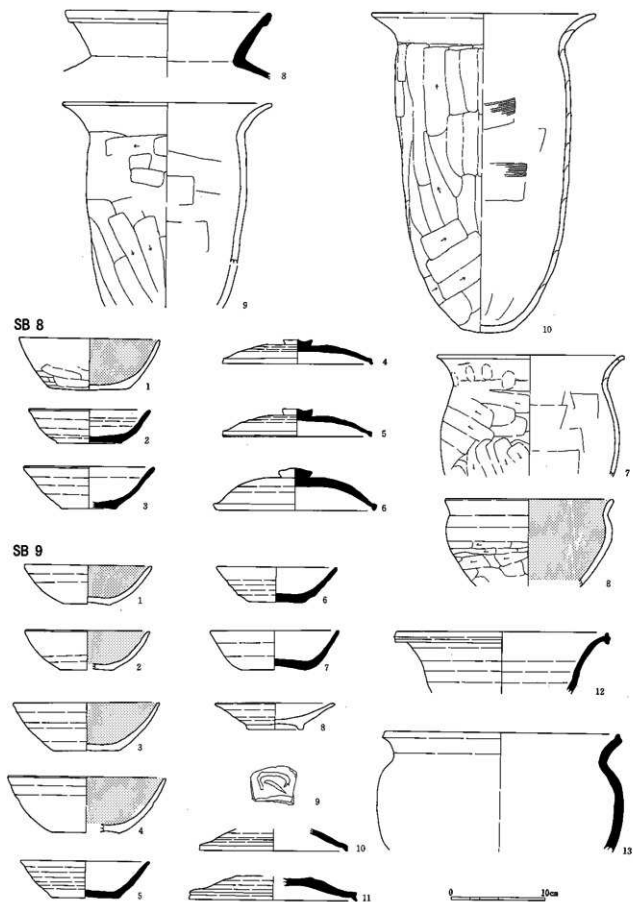
SB 5



第132图 1・3・4・5号竖穴住居跡出土遺物



第133图 5·6·7号竖穴住居跡出土遺物

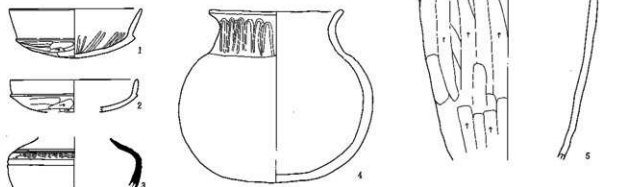


第134图 7・8・9号竪穴住居跡出土遺物

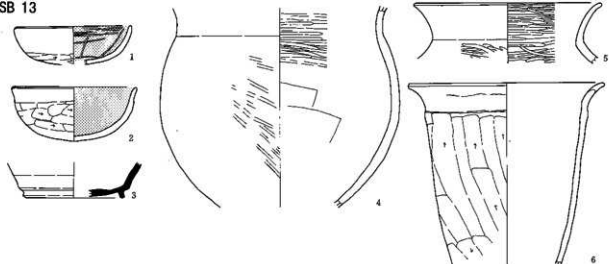
SB 11



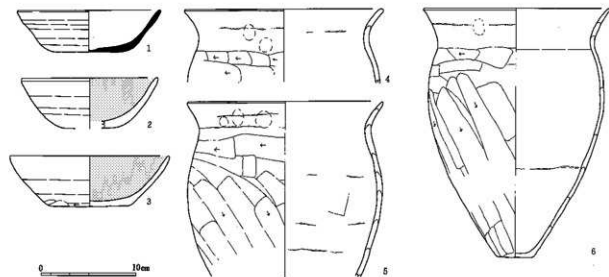
SB 12



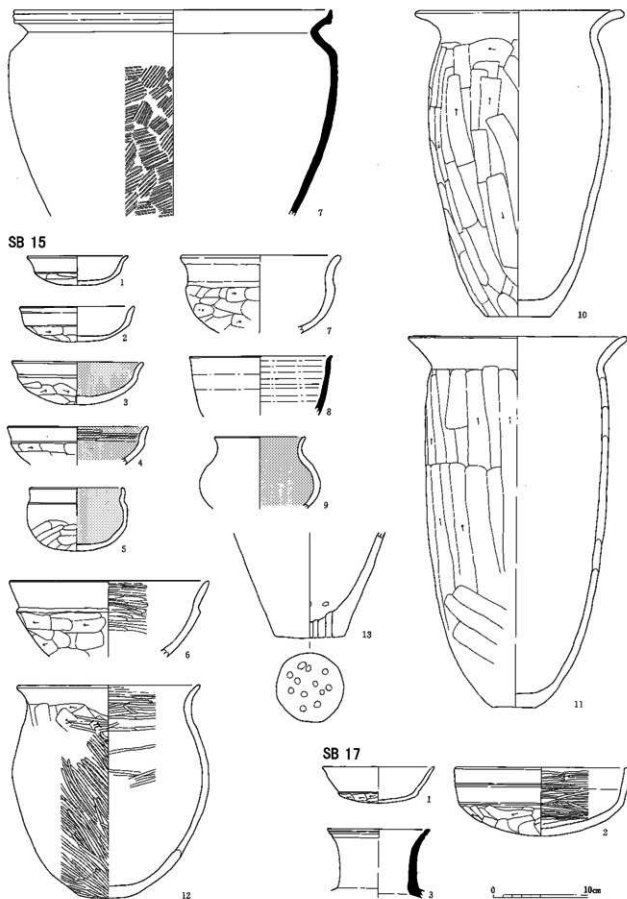
SB 13



SB 14

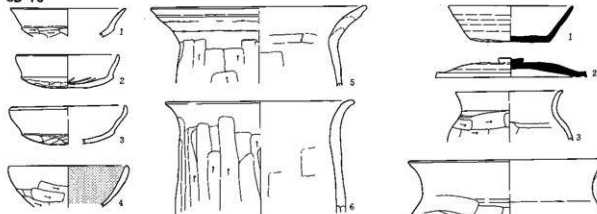


第135图 11~14号型穴住居跡出土物

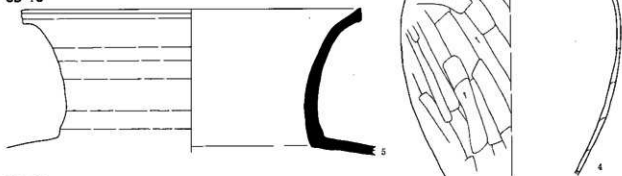


第136图 14・15・17号竪穴住居跡出土遺物

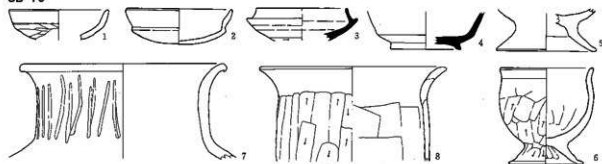
SB 16



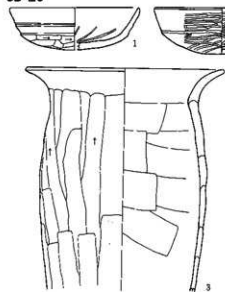
SB 18



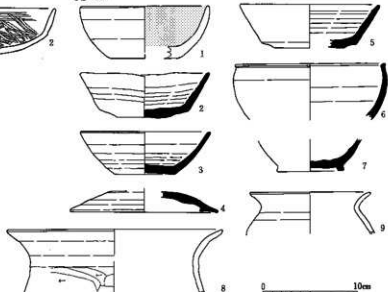
SB 19



SB 20

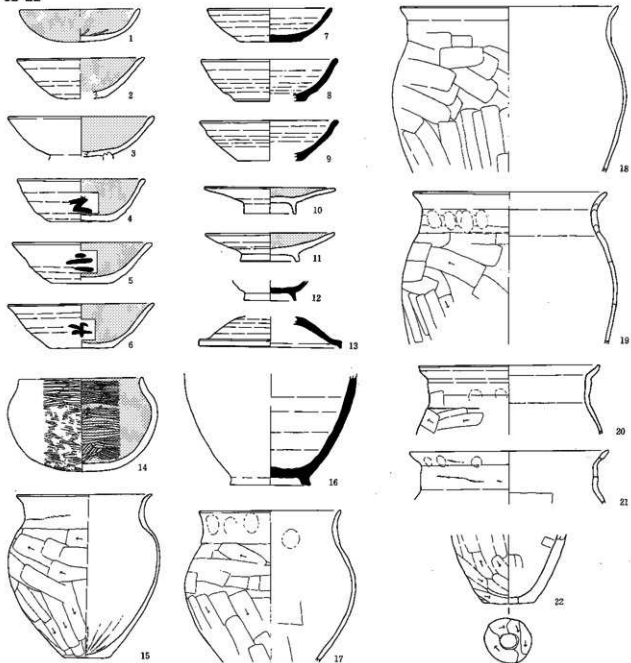


SB 21

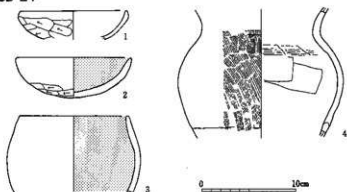


第137图 16・18~21号壑穴住居跡出土遺物

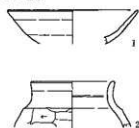
SB 22



SB 24

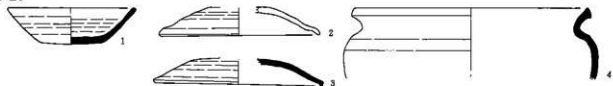


SB 26

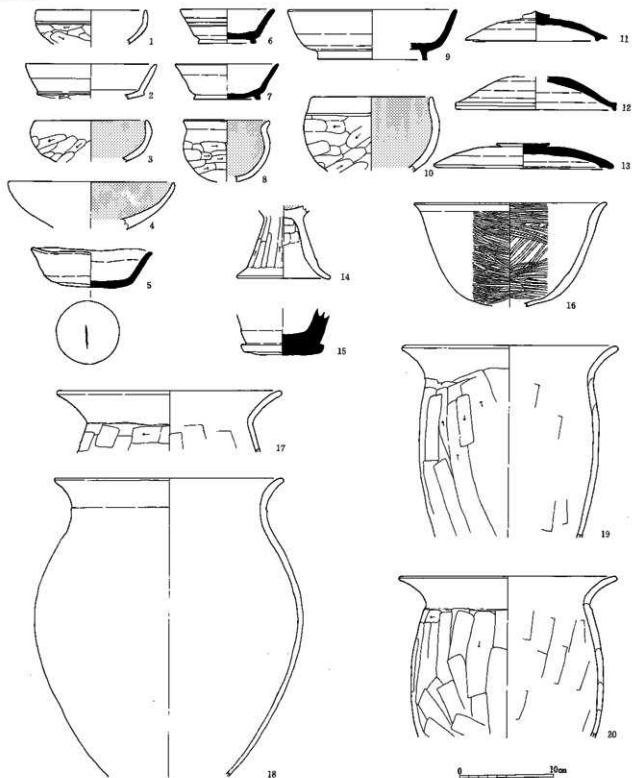


第138図 22・24・26号竪穴住居跡出土遺物

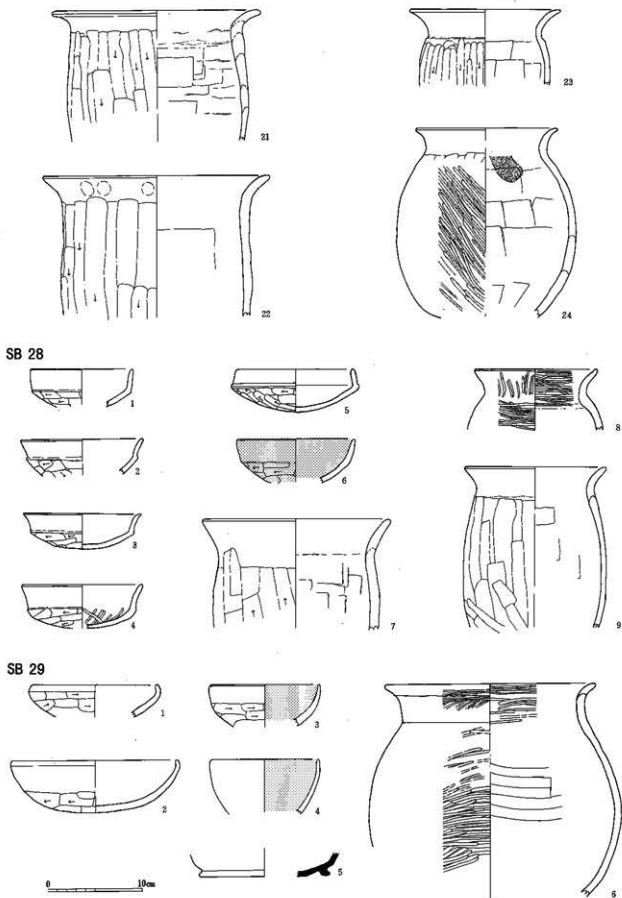
SB 25



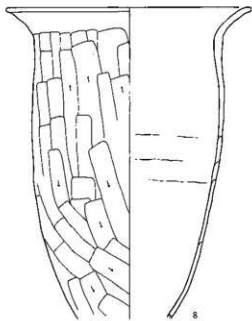
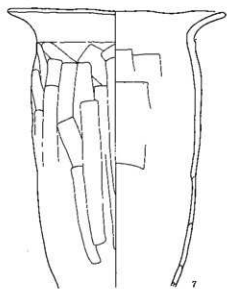
SB 27



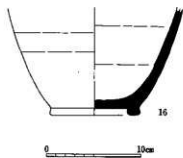
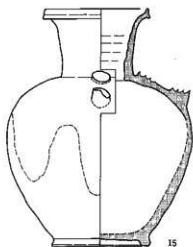
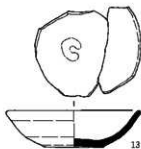
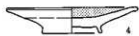
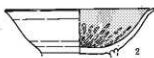
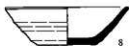
第139图 25・27号竪穴住居跡出土土遺物



第140图 27・28・29号竪穴住居跡出土遺物

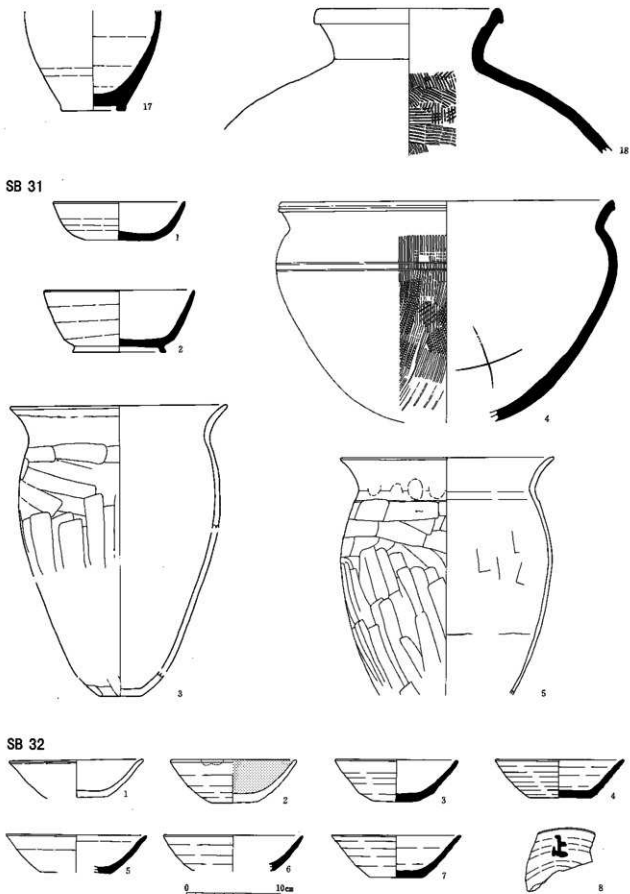


SB 30

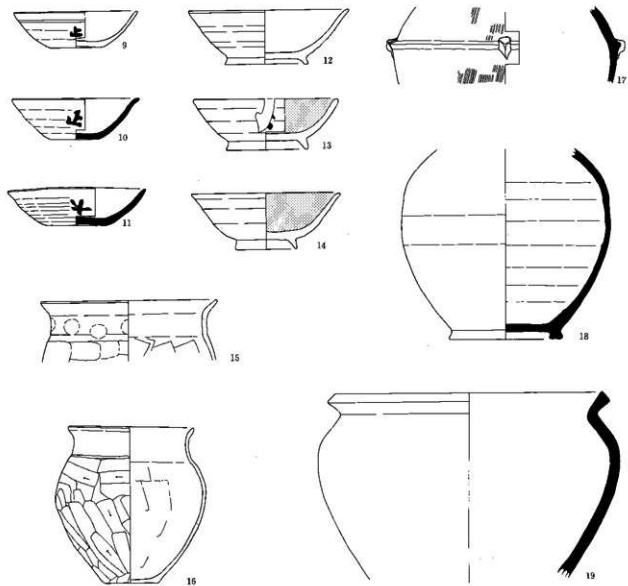


0 10cm

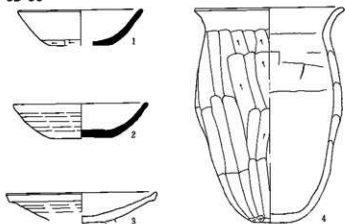
第141图 29・30号整穴住居跡出土遺物



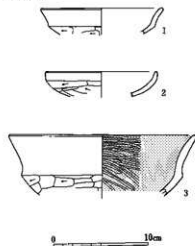
第142图 30・31・32号竖穴住居跡出土遺物



SB 33

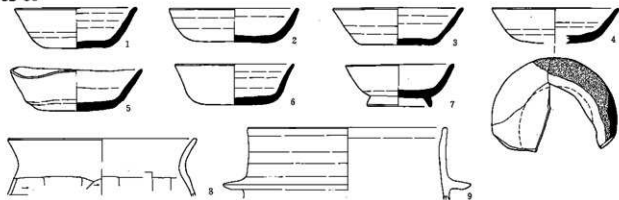


SB 34

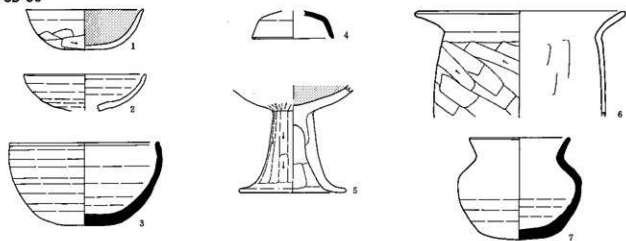


第143图 32・33・34号竪穴住居跡出土遺物

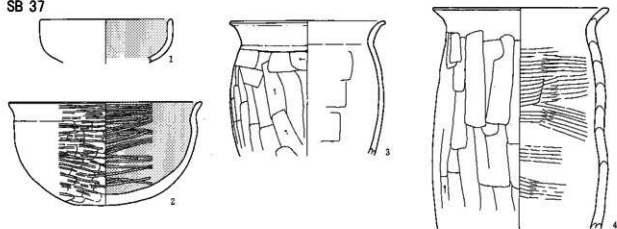
SB 35



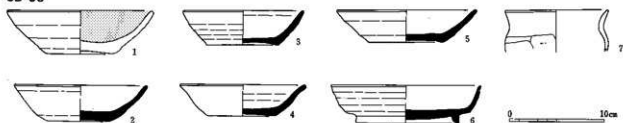
SB 36



SB 37



SB 38

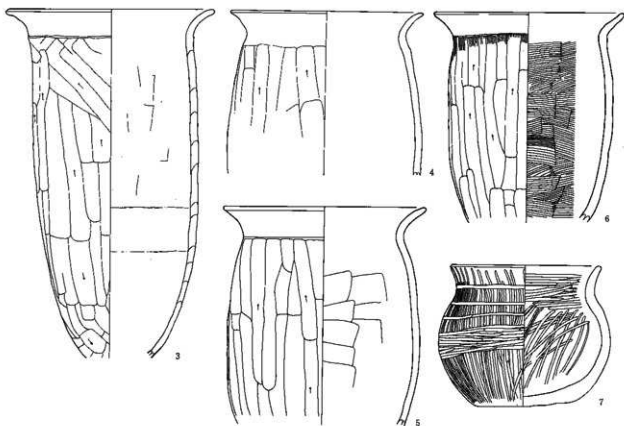
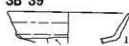


第144图 35~38号竪穴住居跡山土遺物

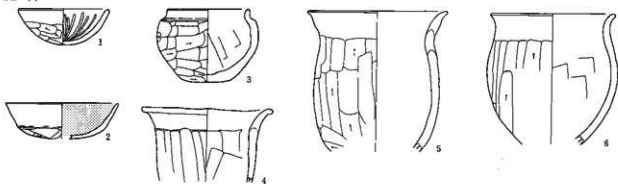
SB 40



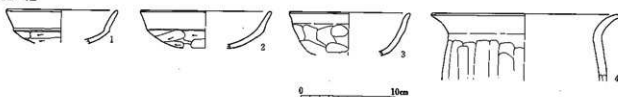
SB 39



SB 41



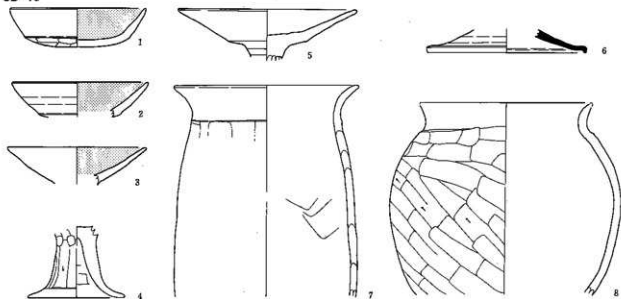
SB 42



0 10cm

第145图 39~42号整穴住居跡出土遺物

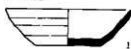
SB 43



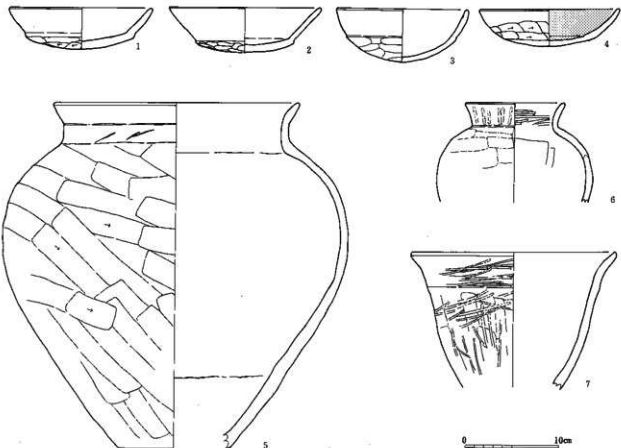
SB 44



SB 46

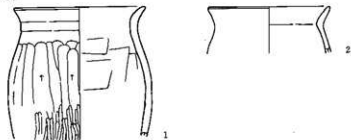


SB 45

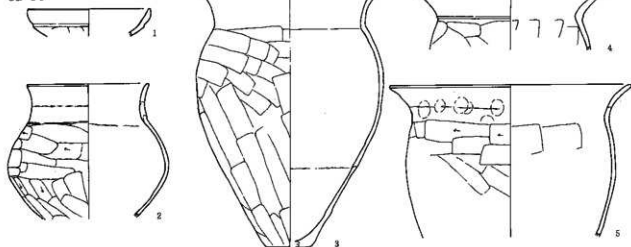


第146图 43~46号竖穴住居跡出土遺物

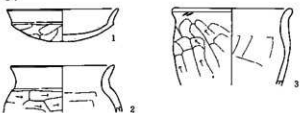
SB 48



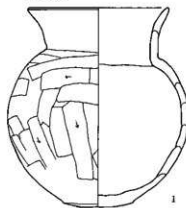
SB 50



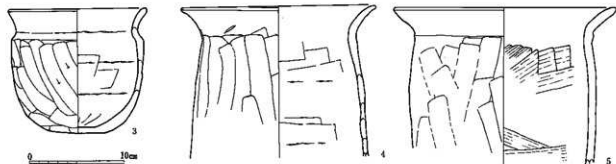
SB 51



SB 52

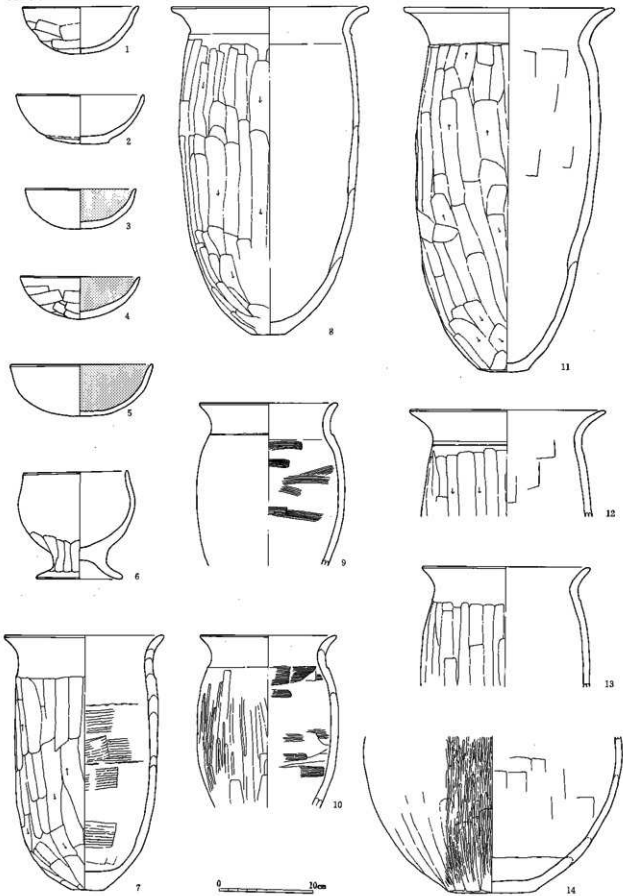


SB 53



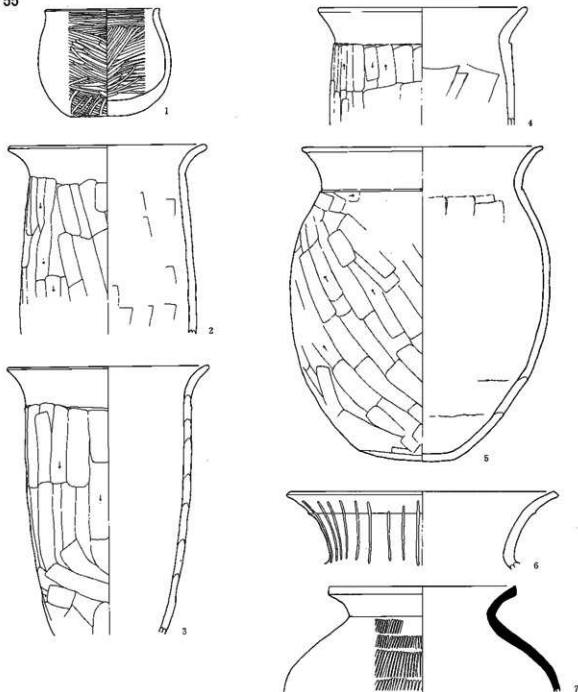
第147图 48・50～53号竪穴住居跡出土遺物

SB 54

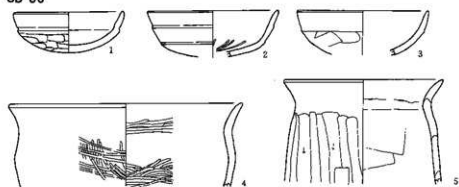


第148图 54号壁穴住居跡出土遺物

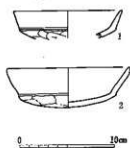
SB 55



SB 56

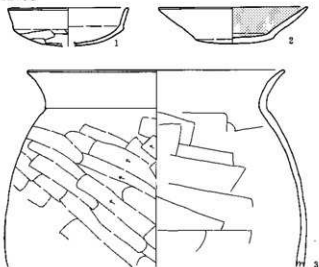


SB 57

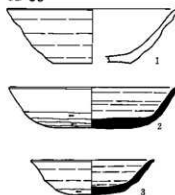


第149图 55・56・57号竖穴住居跡出土遺物

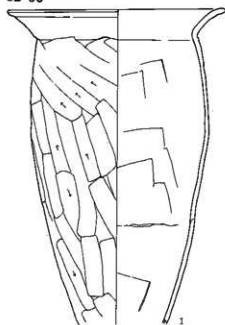
SB 58



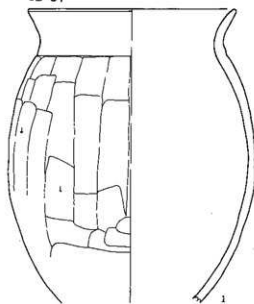
SB 59



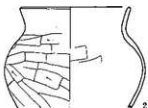
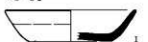
SB 60



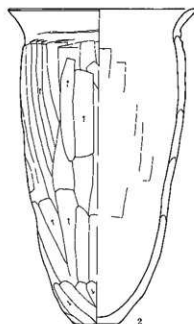
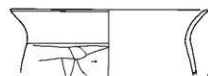
SB 61



SB 63



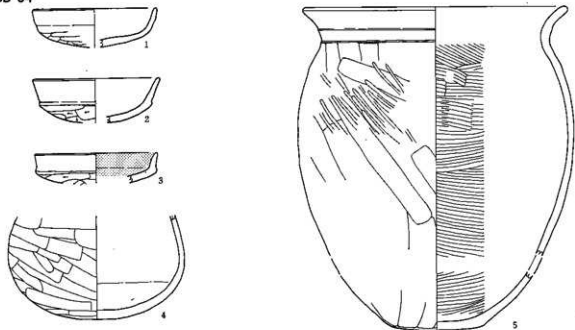
SB 62



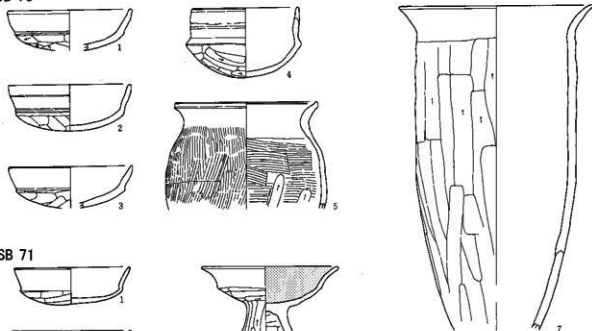
0 10cm

第150図 58~63号竪穴住居跡出土遺物

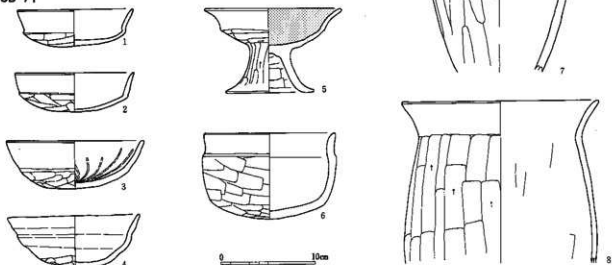
SB 64



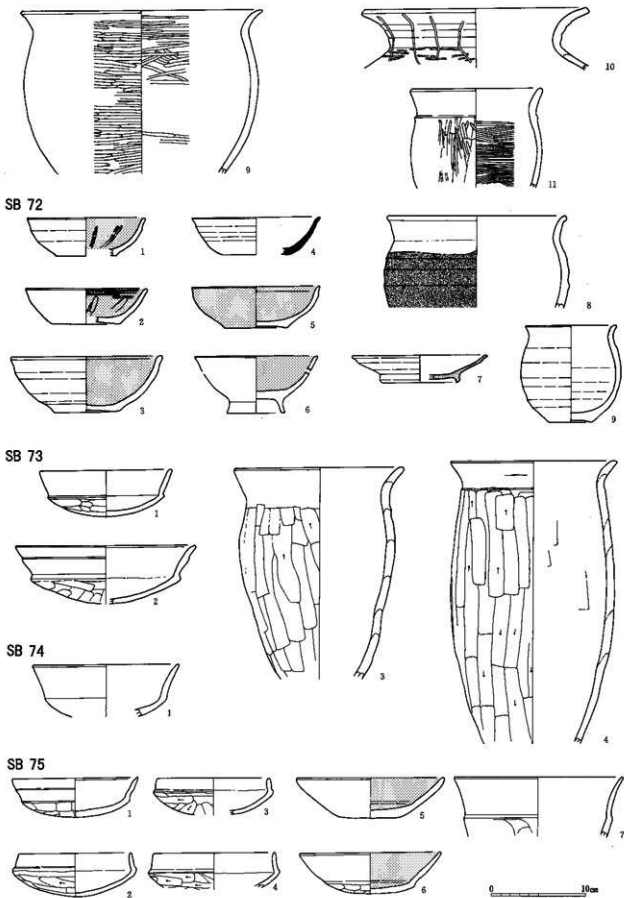
SB 70



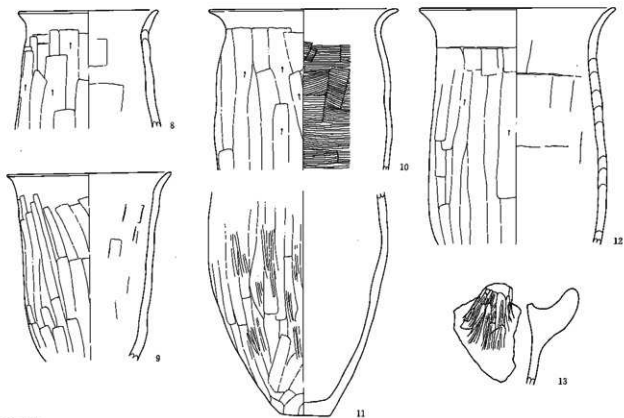
SB 71



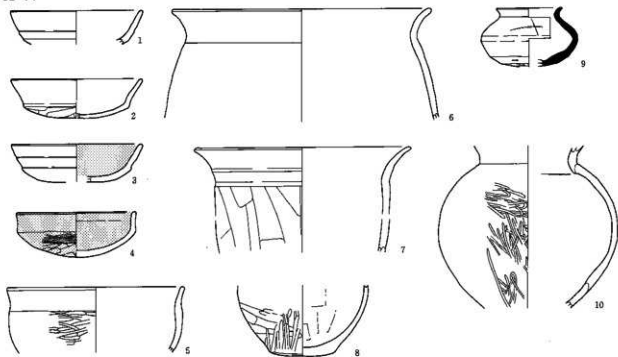
第151图 64・70・71号竪穴住居跡出土遺物



第152图 71~75号竖穴住居跡出土遺物



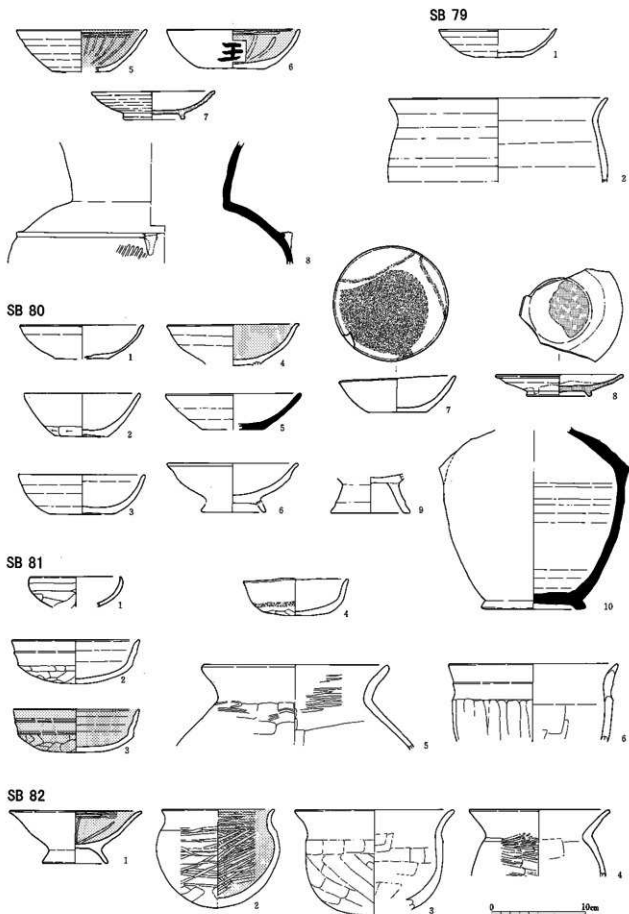
SB 77



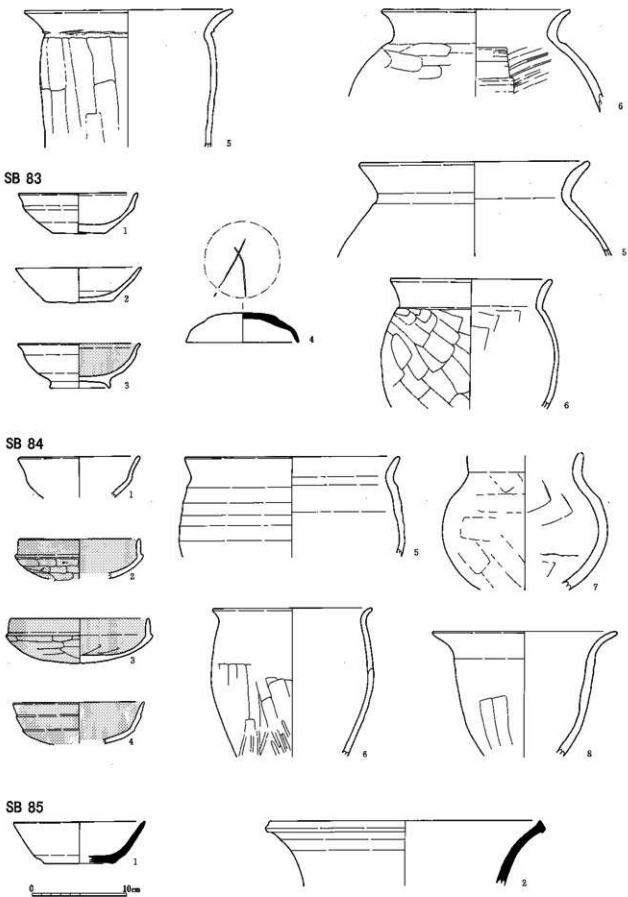
SB 78



第 153 図 75・77・78号塚穴住居跡出土遺物



第154図 78~82号壑穴住居跡出土遺物



第155图 82~85号竖穴住居跡出土遺物

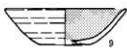
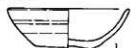
SB 86



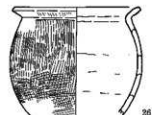
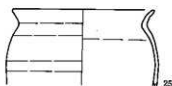
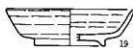
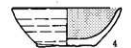
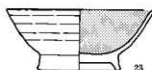
SB 87



SB 89

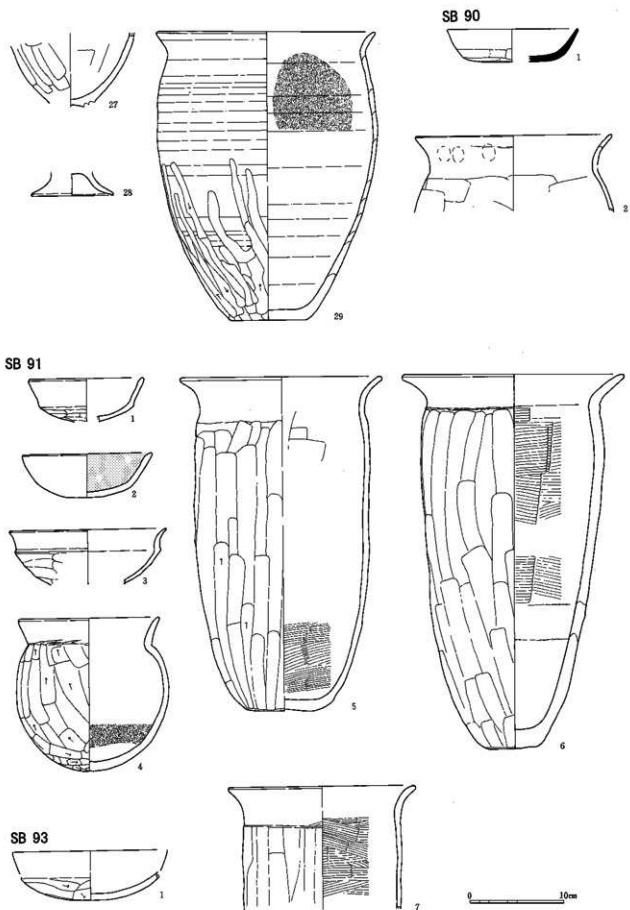


SB 88



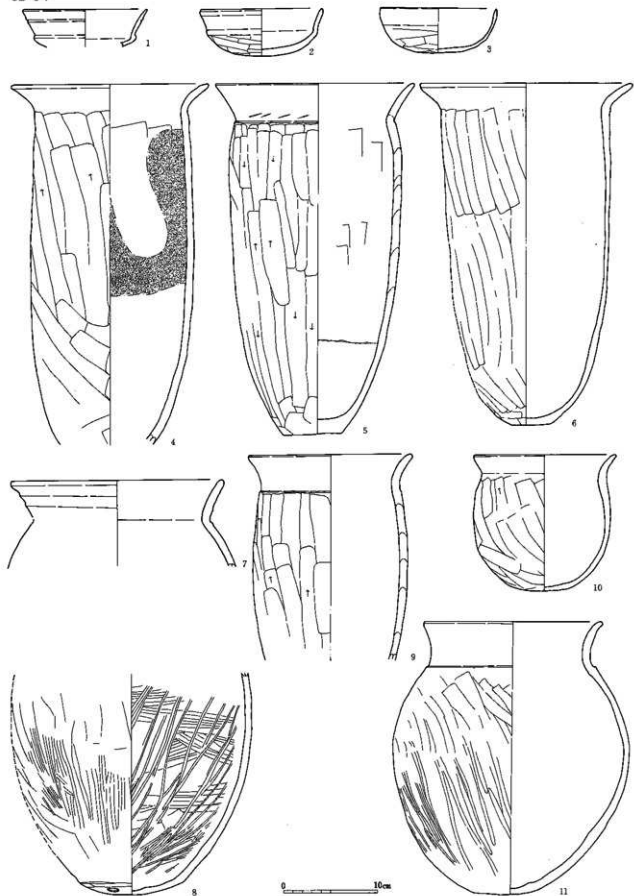
0 10cm

第156图 86~89号鄂穴住居跡出土遺物



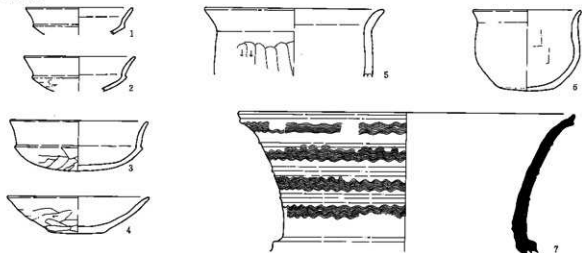
第157图 89~91・93号竪穴住居跡出土遺物

SB 94

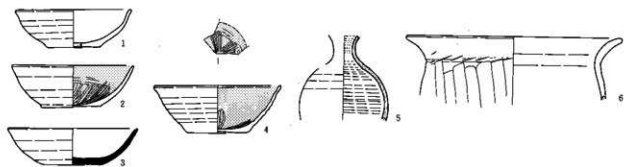


第158图 94号聚穴住居跡出土遺物

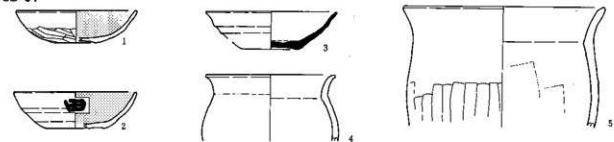
SB 95



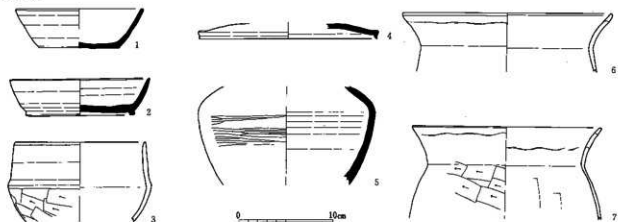
SB 96



SB 97

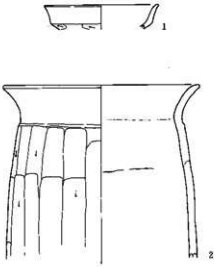


SB 98

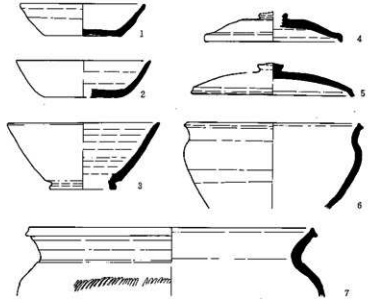


第159图 95~98号竪穴住居跡出土遺物

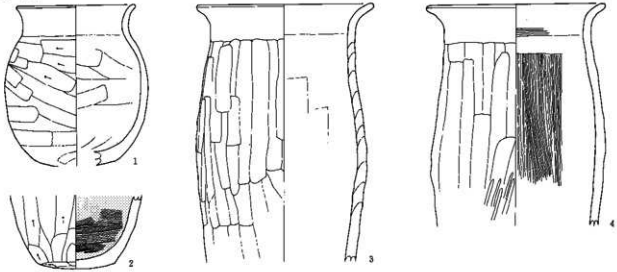
SB 99



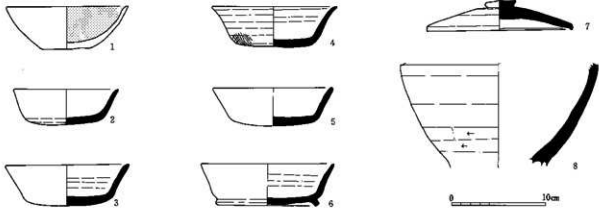
SB 100



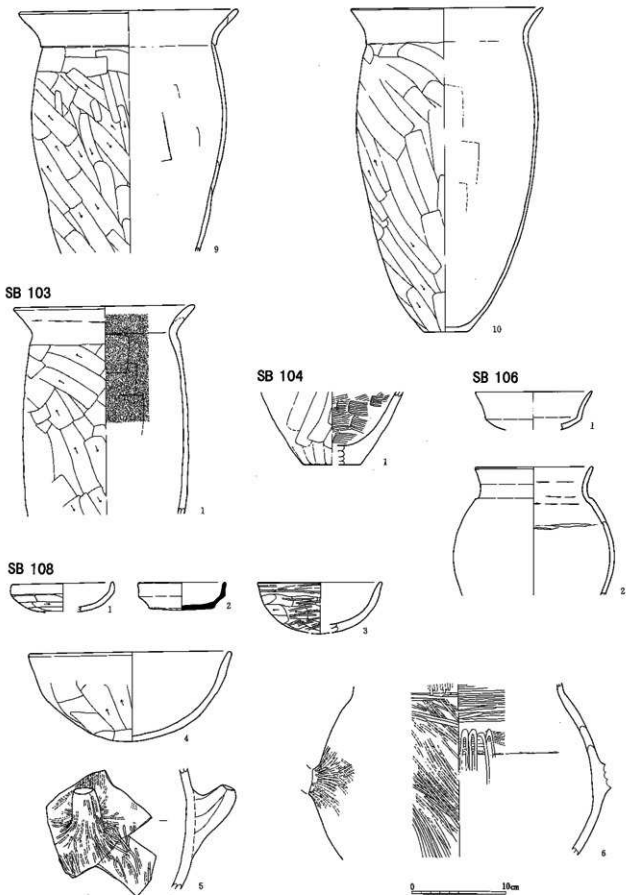
SB 101



SB 102

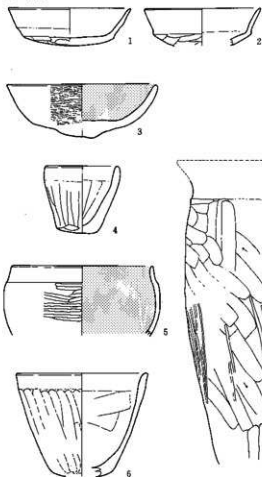


第160図 99~102号竪穴住居跡出土遺物

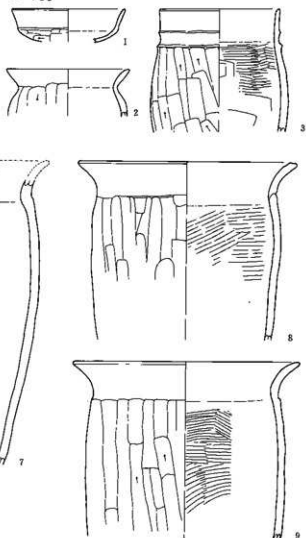


第161图 102~104・106・108号竪穴住居跡出土遺物

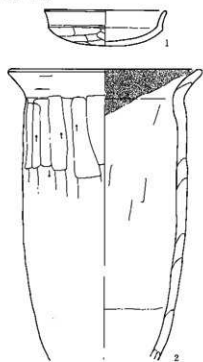
SB 110



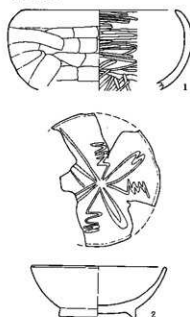
SB 109



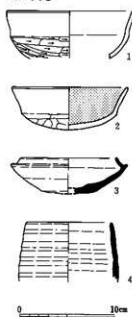
SB 111



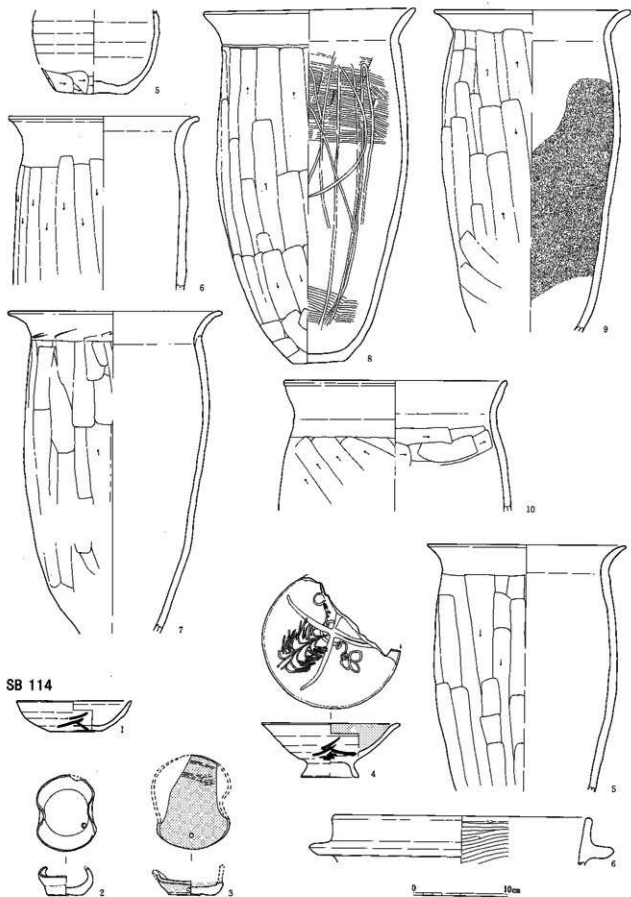
SB 112



SB 113



第 162 図 109~113号竪穴住居跡出土遺物



SB 114

第163图 113·114号竖穴住居出土遗物

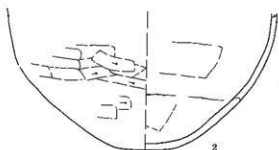
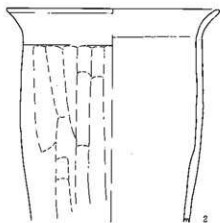
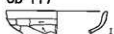
SB 115



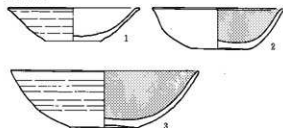
SB 116



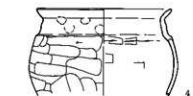
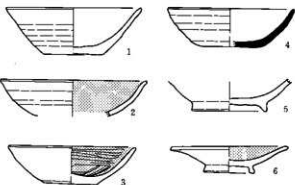
SB 117



SB 118



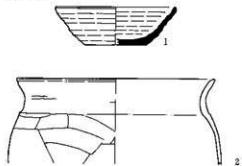
SB 119



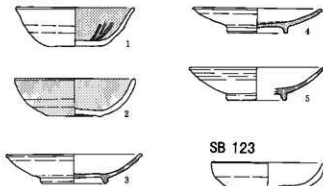
SB 120



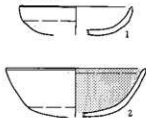
SB 121



SB 122



SB 123



SB 124



SB 125



SB 127



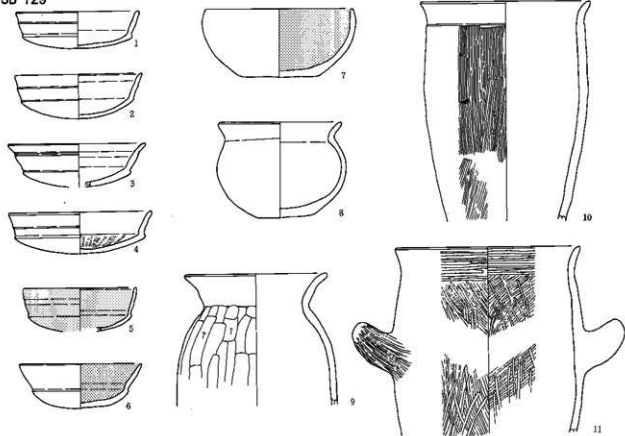
0 10cm

第164图 115~125・127号竪穴住居跡出土遺物

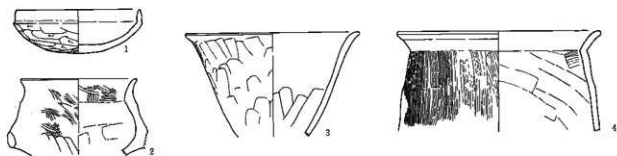
SB 128



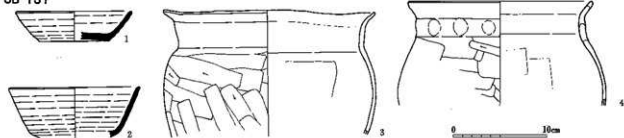
SB 129



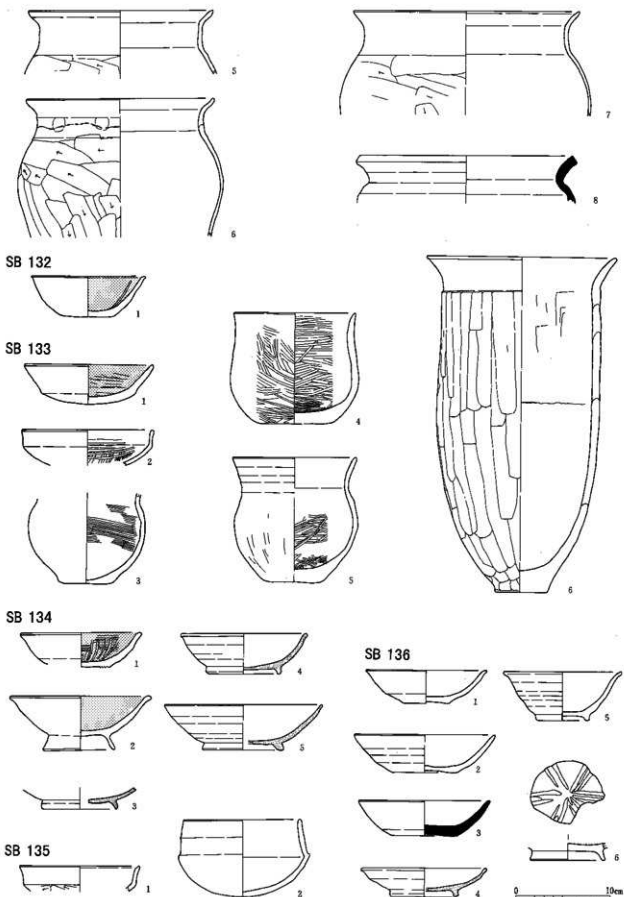
SB 130



SB 131

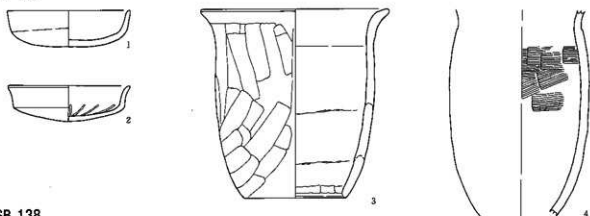


第165图 128~131号窖穴住周跡出土遺物

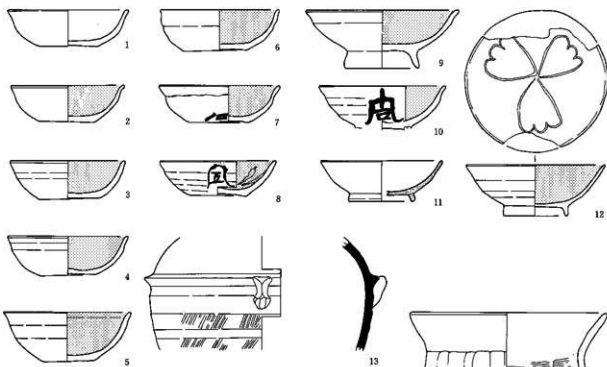


第166图 131~136号整穴住居跡出土遺物

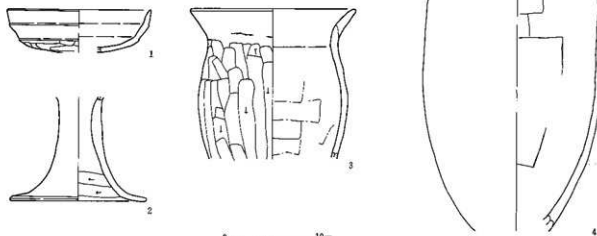
SB 137



SB 138

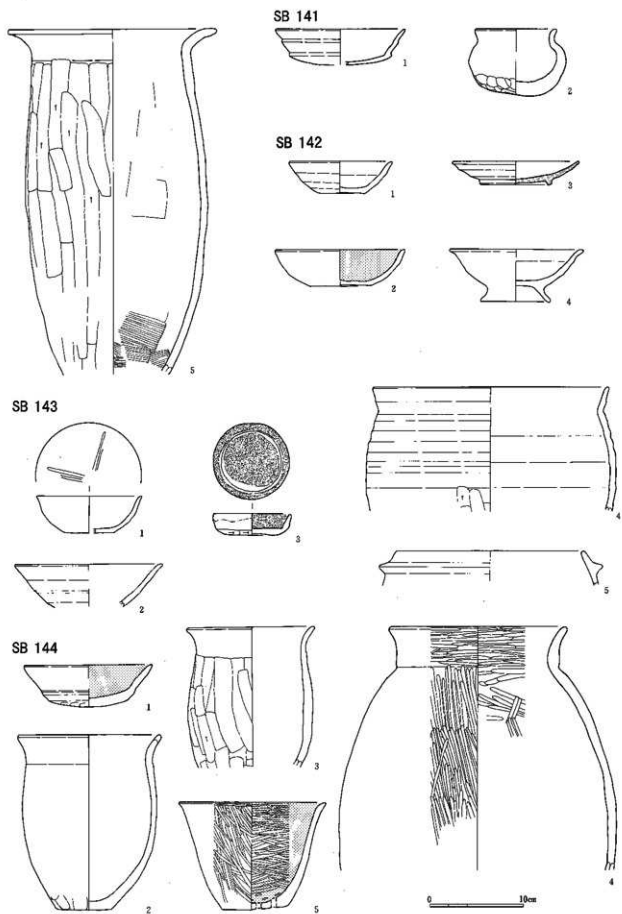


SB 140

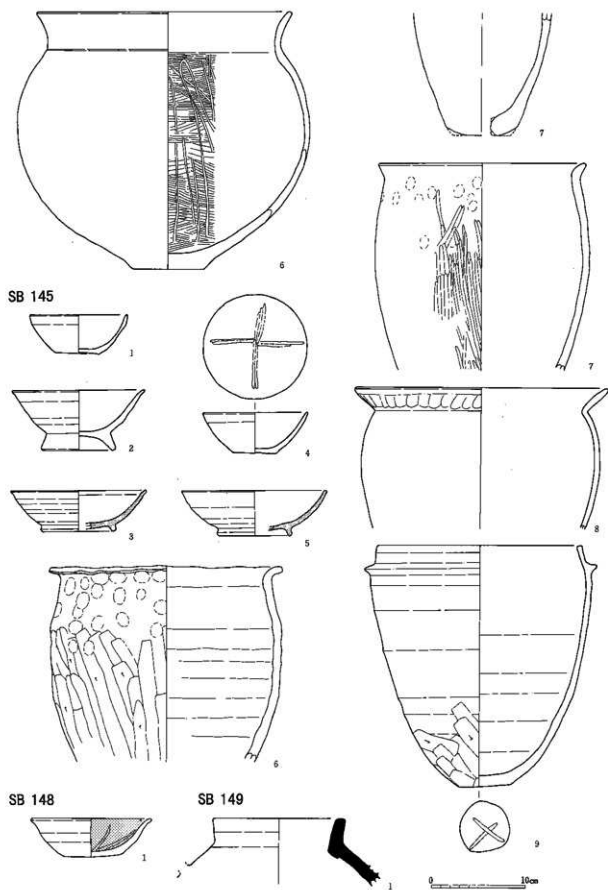


0 10cm

第167図 137・138・140号竪穴住居跡出土遺物

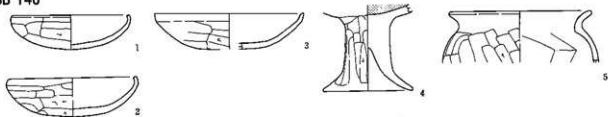


第168图 140~144号竪穴住居跡出土遺物

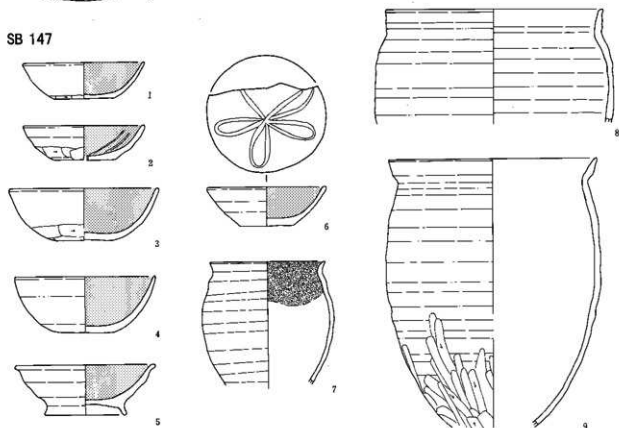


第169図 144・145・148・149号竪穴住居跡出土遺物

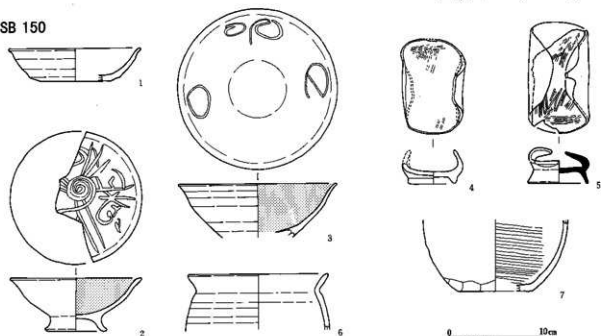
SB 146



SB 147



SB 150

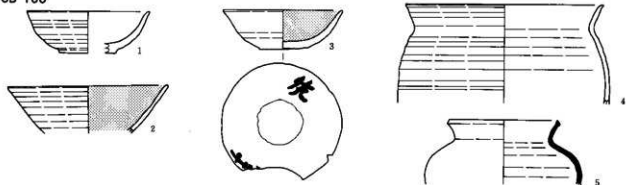


第170图 146・147・150号竖穴住居跡出土遺物

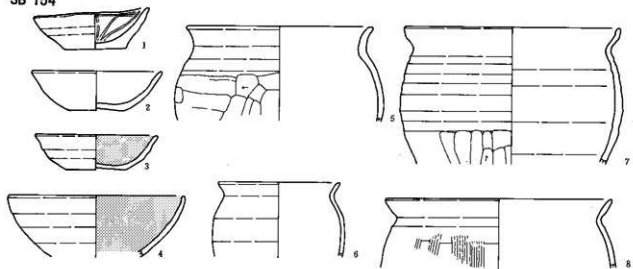
SB 151



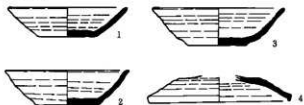
SB 153



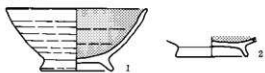
SB 154



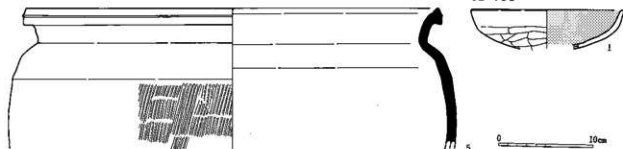
SB 155



SB 156

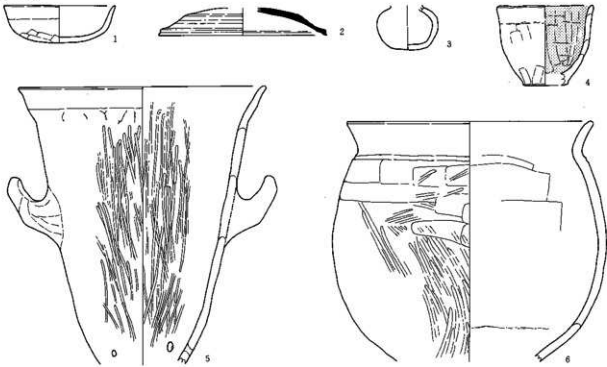


SB 158

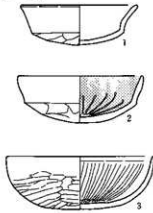


第171图 151・153~156・158号竪穴住居跡出土遺物

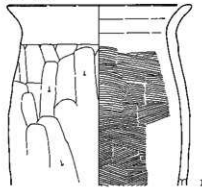
SB 170



SB 171



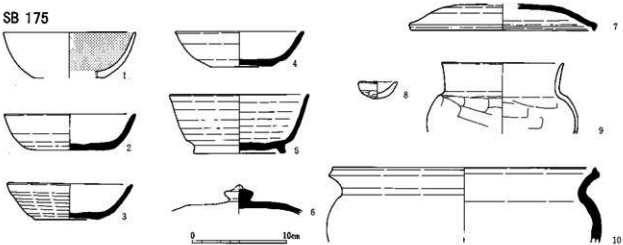
SB 172



SB 174

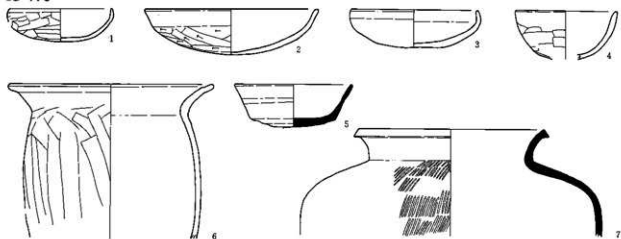


SB 175

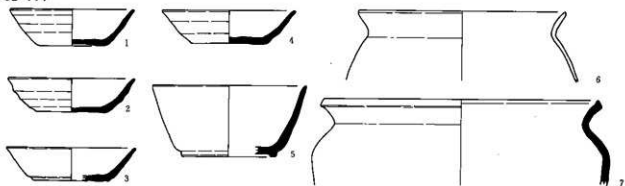


第172图 170~172・174・175号塚穴住居跡出土遺物

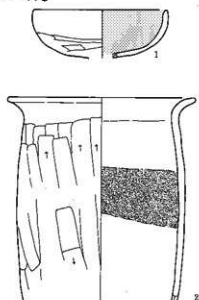
SB 176



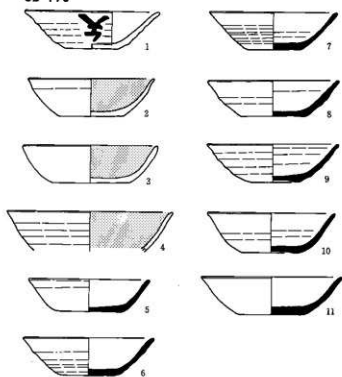
SB 177



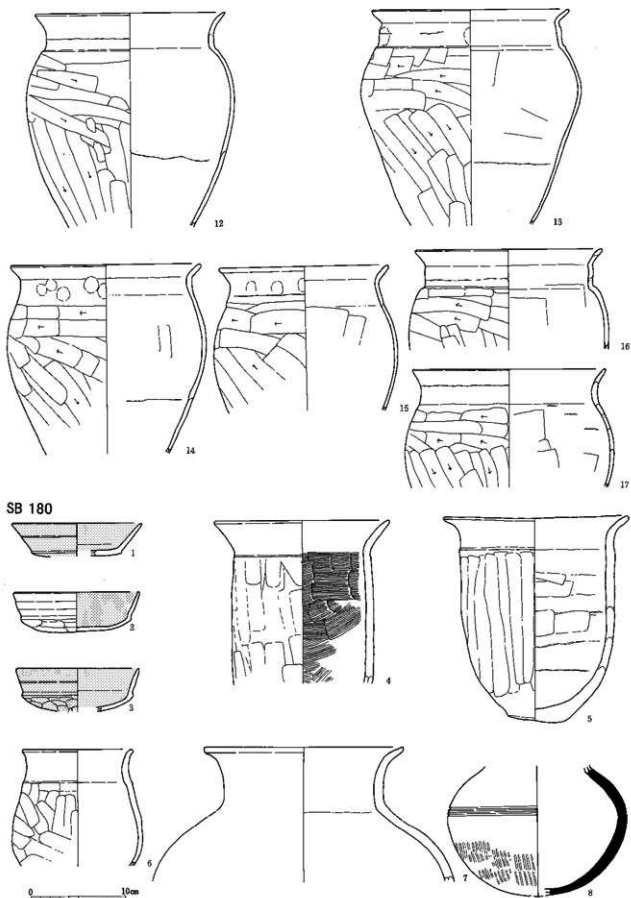
SB 178



SB 179

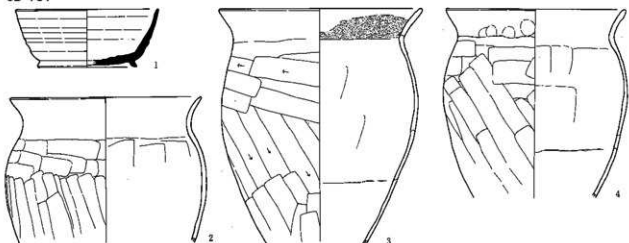


第173图 176~179号竖穴住居跡出土遺物



第174图 179・180号竪穴住居跡出土遺物

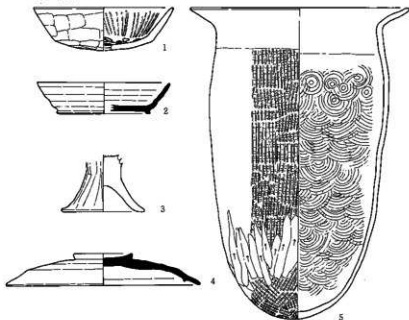
SB 181



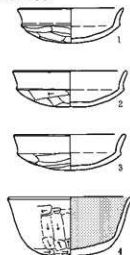
SB 182



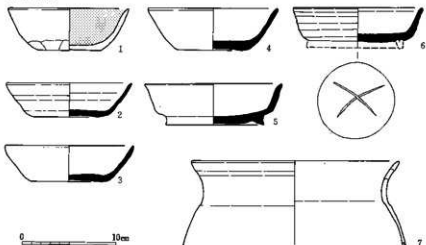
SB 184



SB 185



SB 190



SB 186

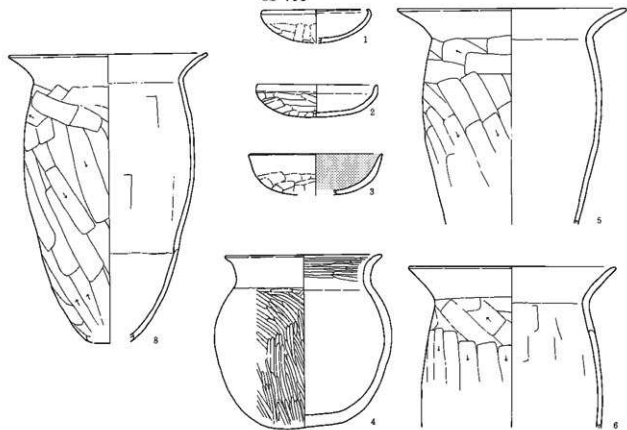


SB 188

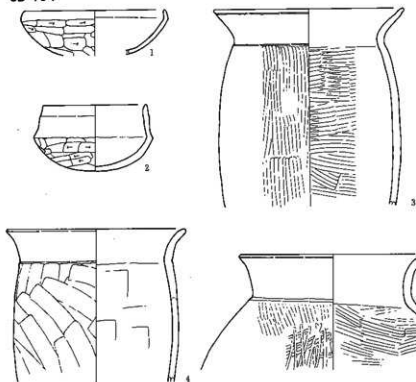


第175图 181・182・184~186・188・190号竪穴住居跡出土遺物

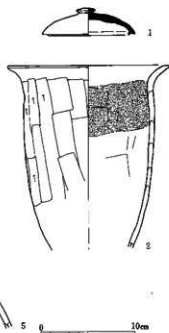
SB 193



SB 194

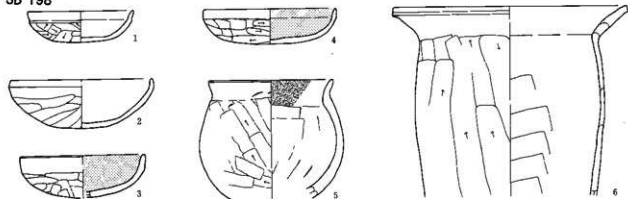


SB 195

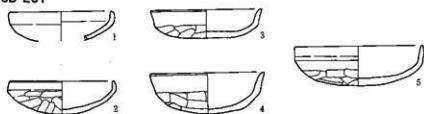


第176図 190・193～195号竪穴住居跡出土遺物

SB 198



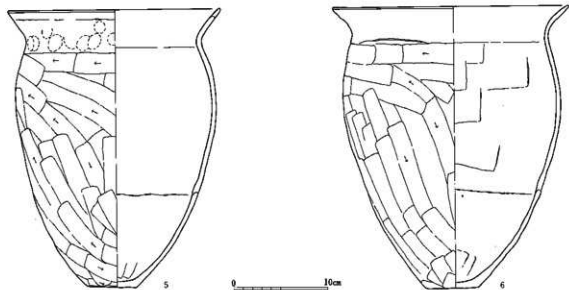
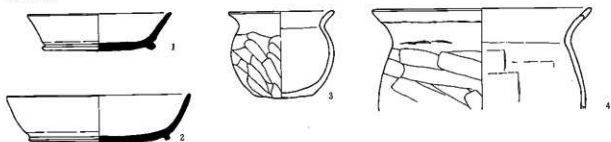
SB 201



SB 202

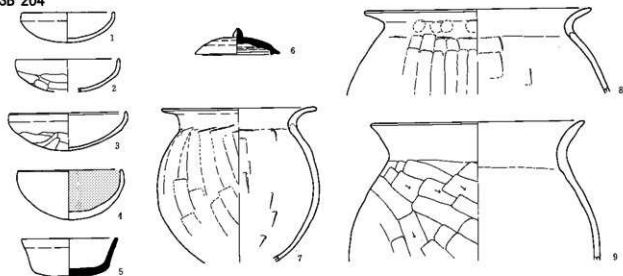


SB 203



第177图 198・201~203号整穴住居跡出土遺物

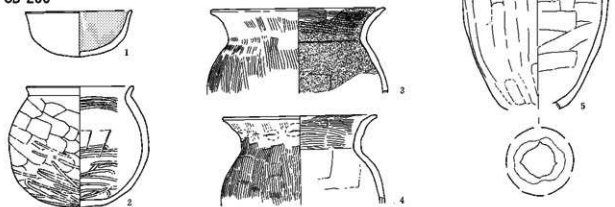
SB 204



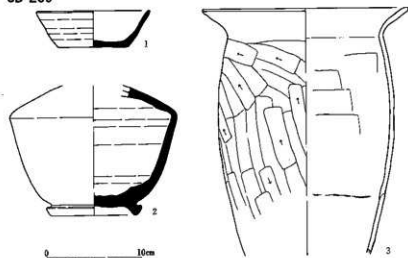
SB 205



SB 206



SB 209

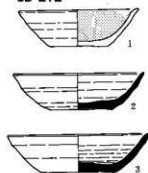


0 10cm

SB 210

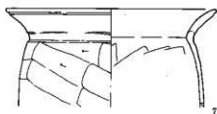
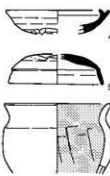
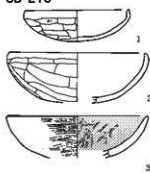


SB 212

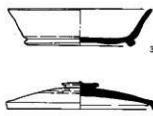


第178图 204~206・209・210・212号竪穴住居跡出土遺物

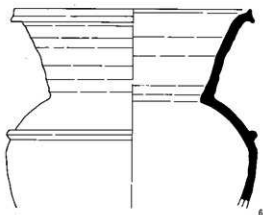
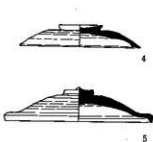
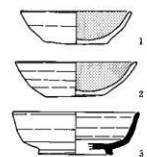
SB 213



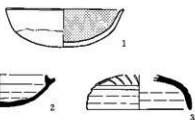
SB 214



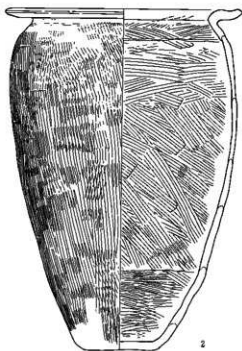
SB 216



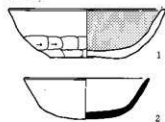
SB 215



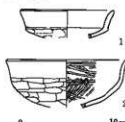
SB 219



SB 217



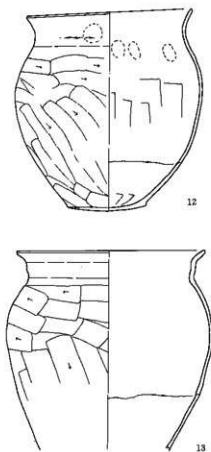
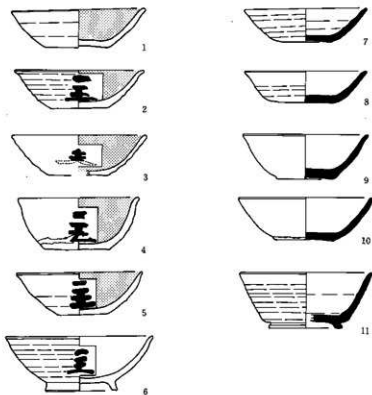
SB 218



0 10cm

第179图 213~219号壑穴住居跡出土遺物

SB 220



SB 221



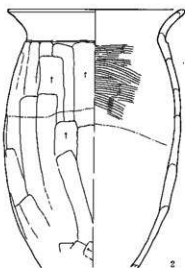
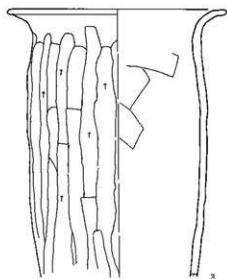
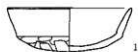
SB 223



SB 224



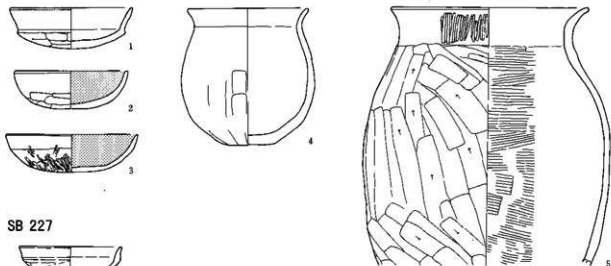
SB 225



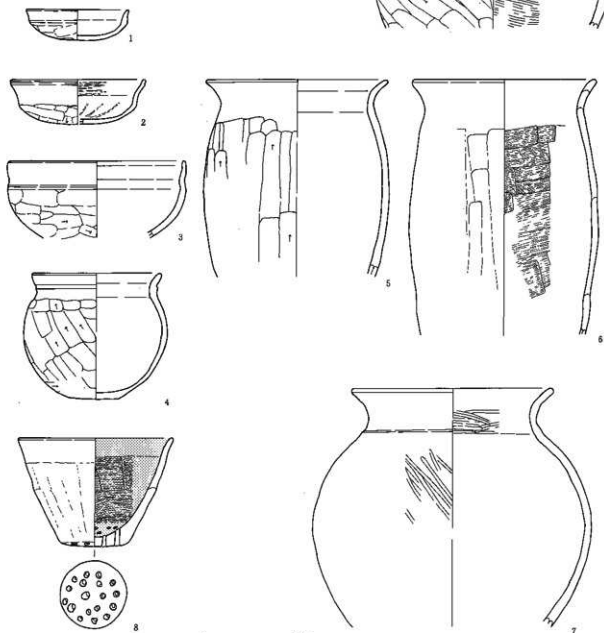
0 10cm

第180图 220・221・223~225号塚穴住居跡出土遺物

SB 226



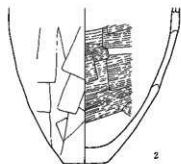
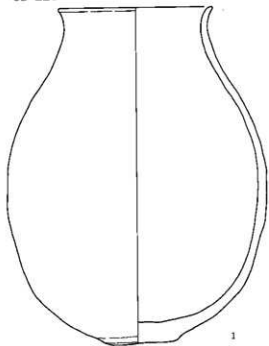
SB 227



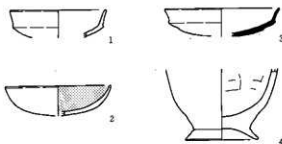
0 10cm

第181图 226・227号竪穴住居跡出土遺物

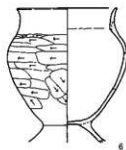
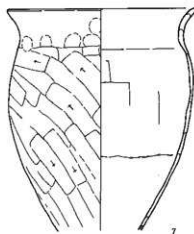
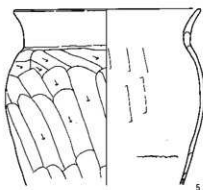
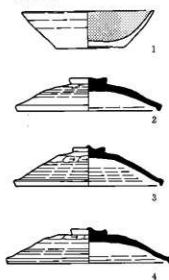
SB 228



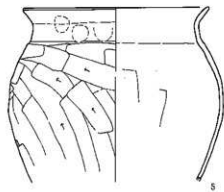
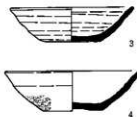
SB 230



SB 231

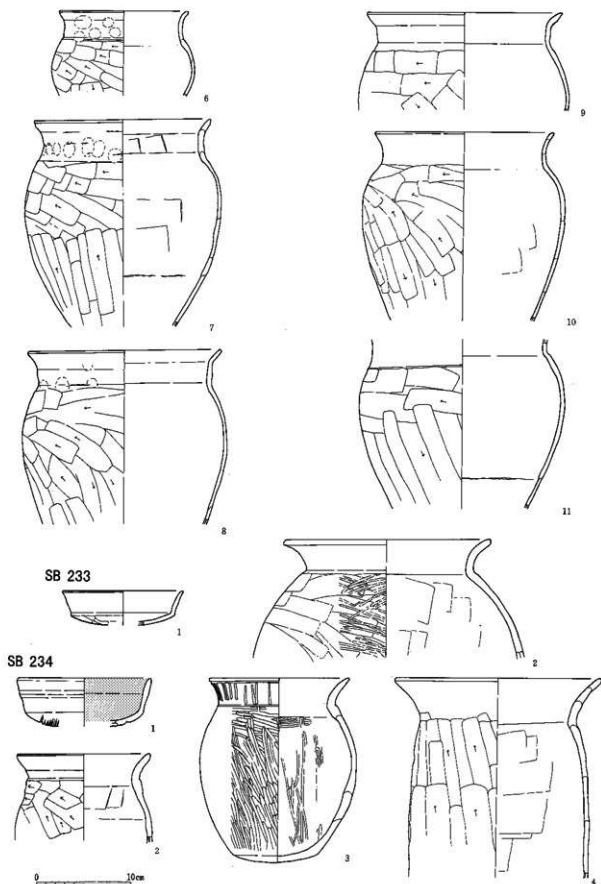


SB 232

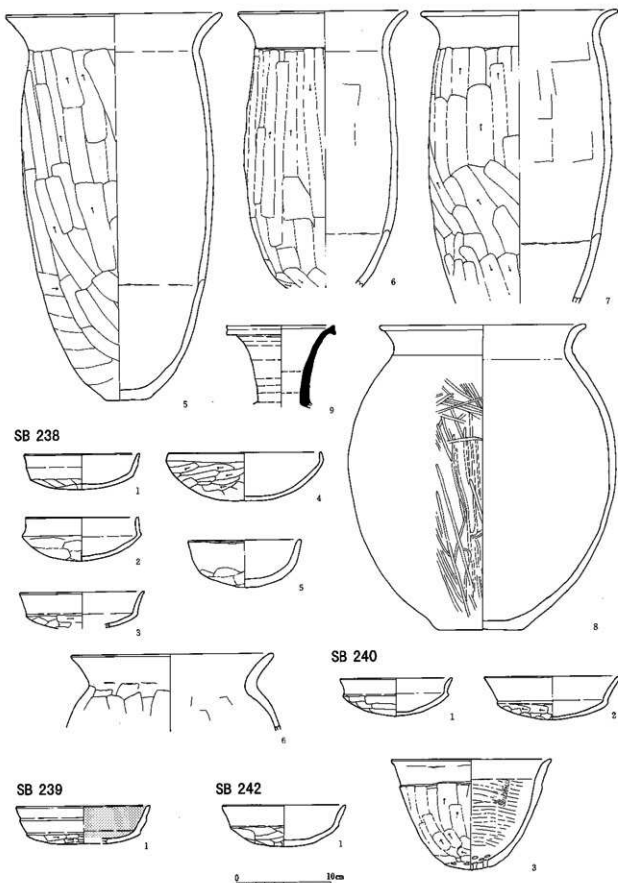


0 10cm

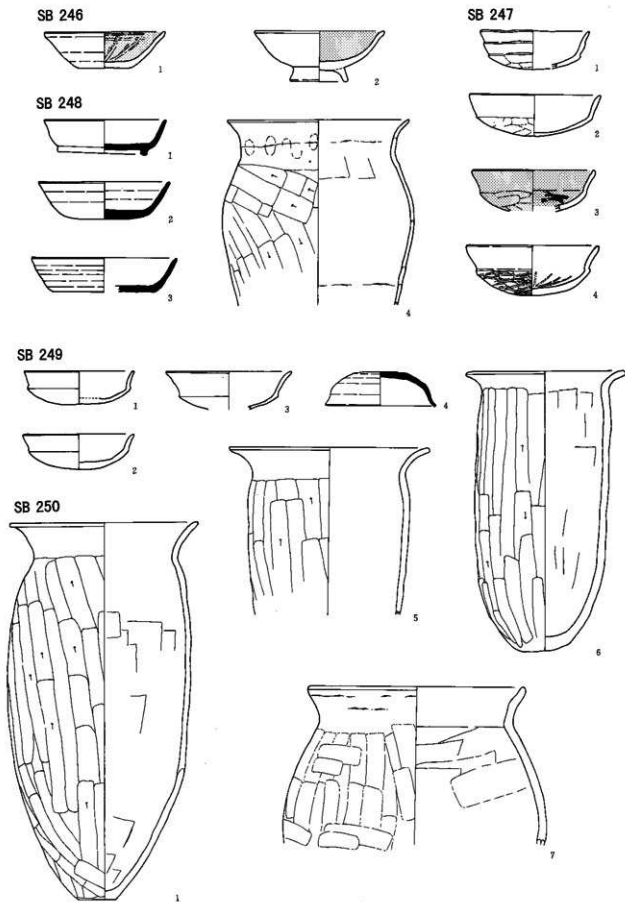
第182图 228・230~232号竖穴住居跡出土遺物



第183图 232~234号竖穴住居跡出土遺物

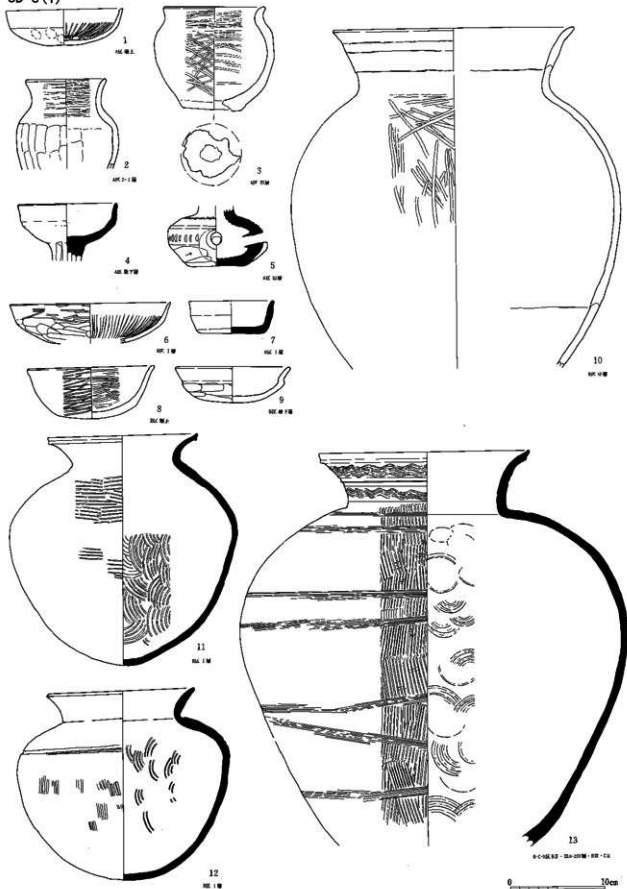


第184图 234・238・239・240・242号竪穴住居跡出土遺物



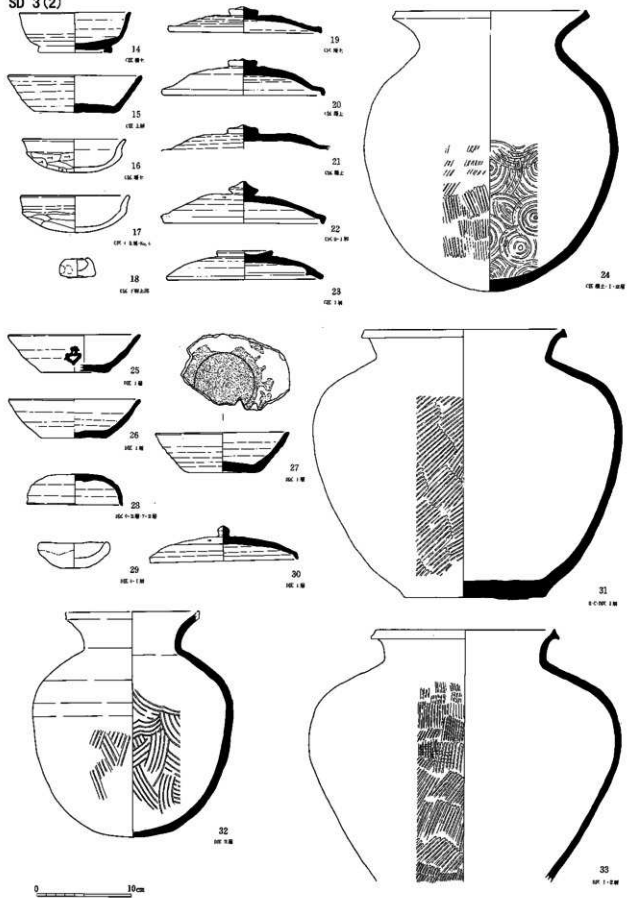
第185图 246~250号竪穴住居跡出土遺物

SD 3(1)



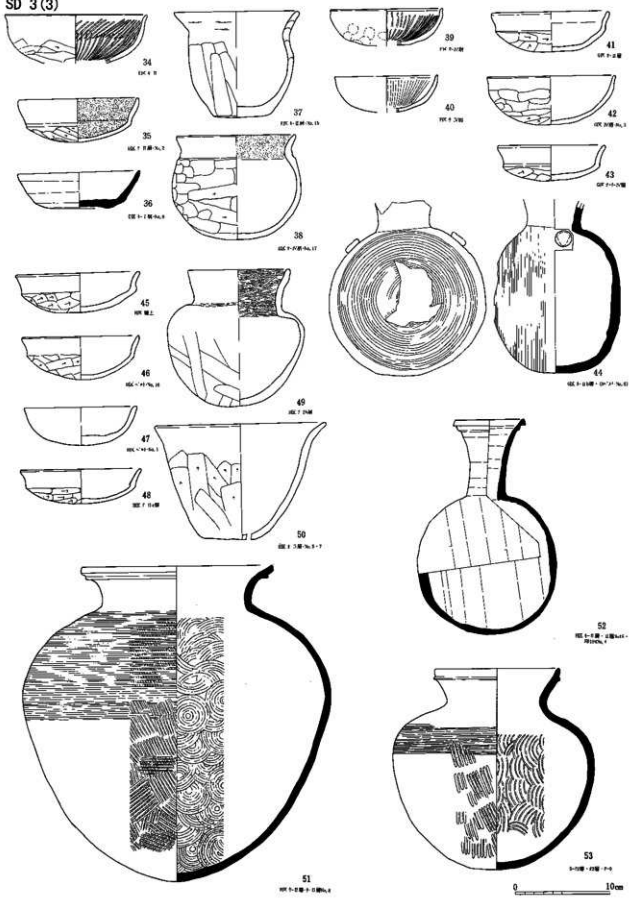
第186图 3号溝出土土器(1)

SD 3(2)



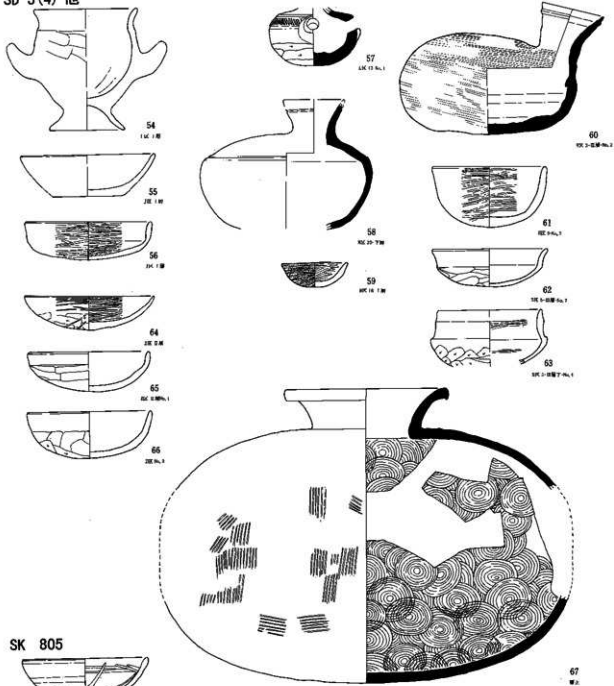
第187图 3号清出土器(2)

SD 3(3)



第188图 3号清出土土器(3)

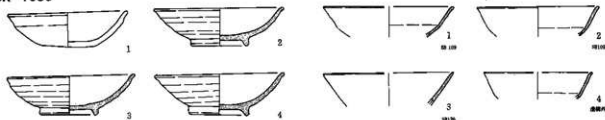
SD 3(4)·他



SK 805



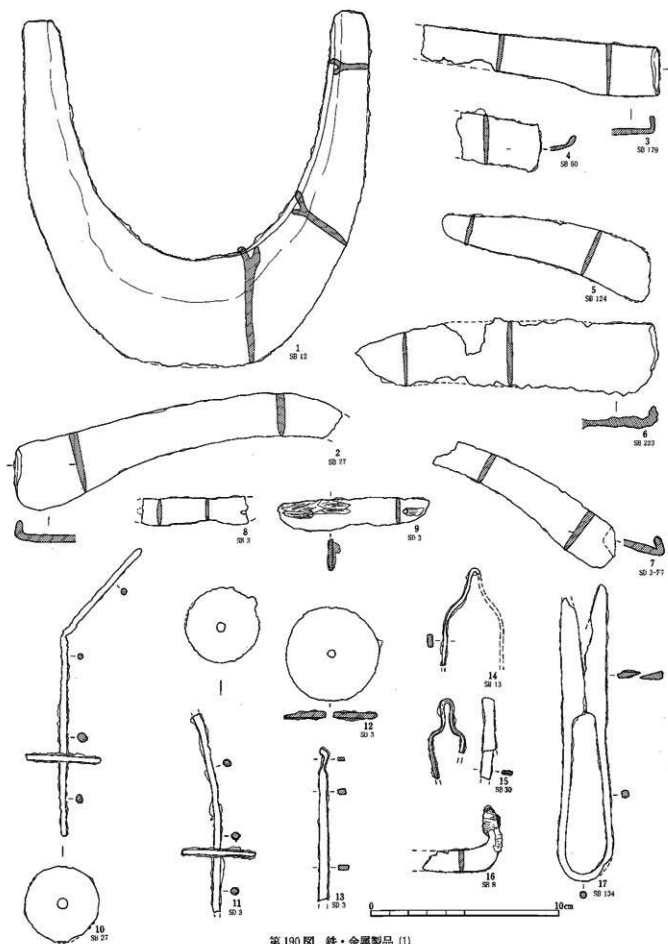
SK 1080



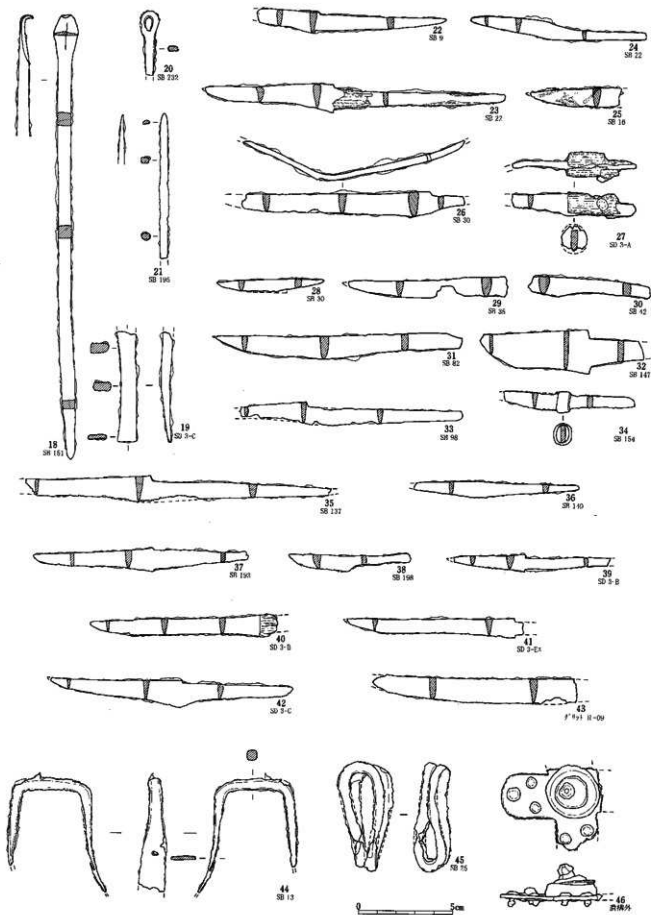
越州窯系青磁

0 10cm

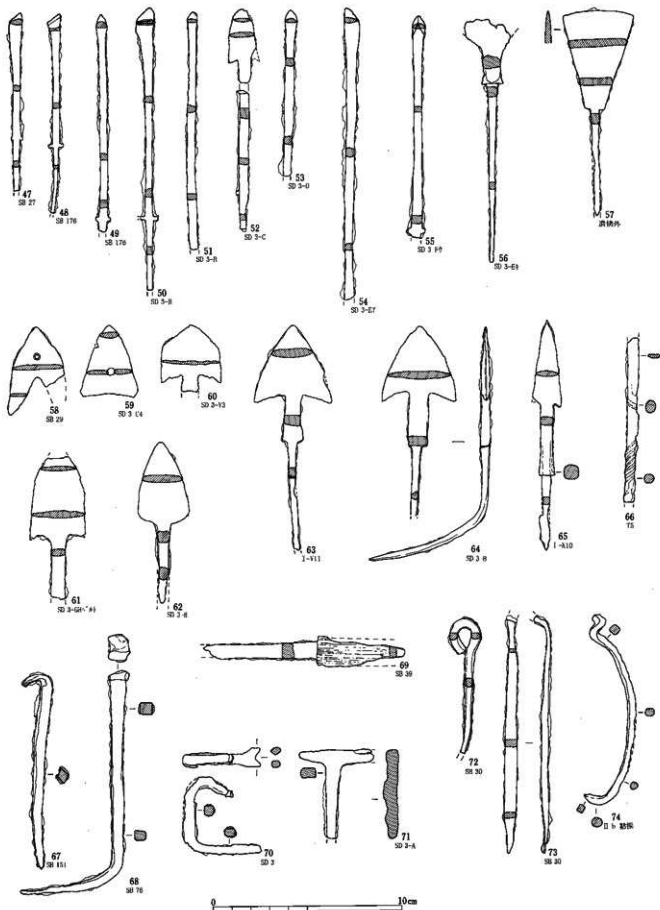
第189号 3号溝、他出土土器(4)



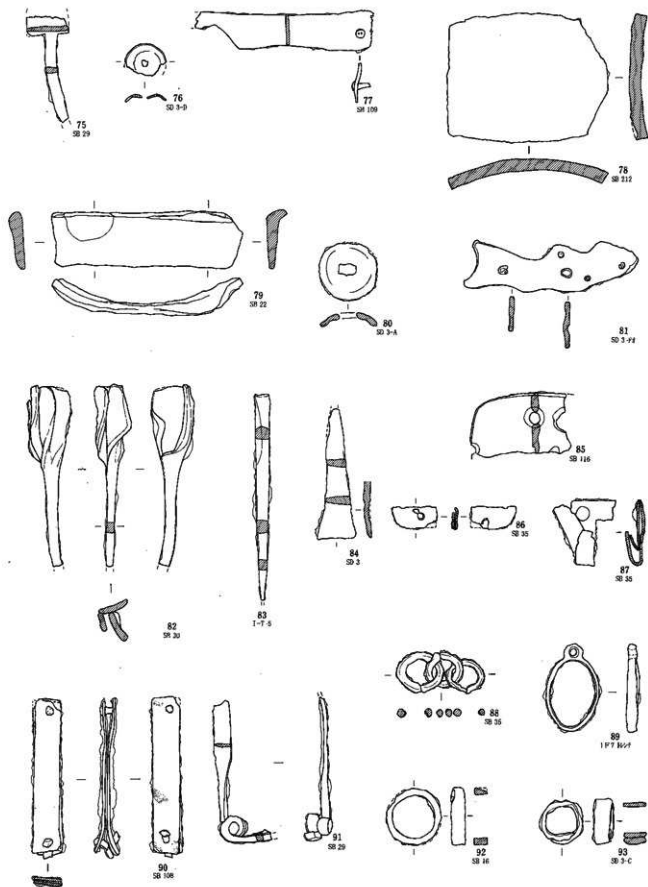
第190図 鉄・金属製品 (1)



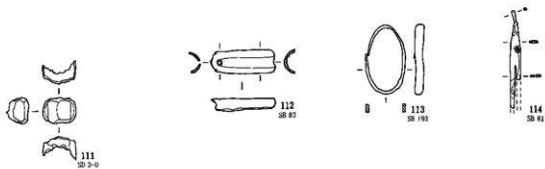
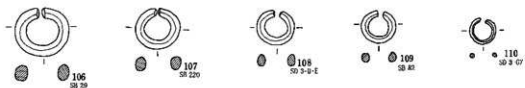
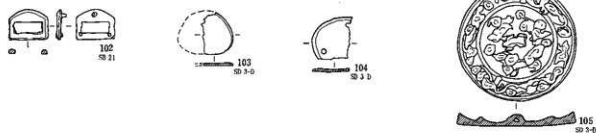
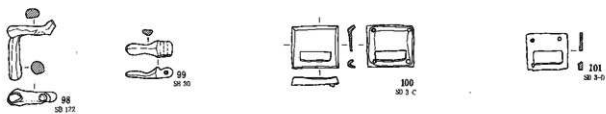
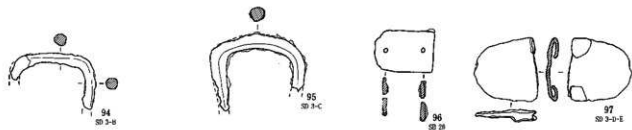
第191图 鉄・金属製品(2)



第192図 鉄・金属製品(3)



第198图 鉄・金属製品(4)



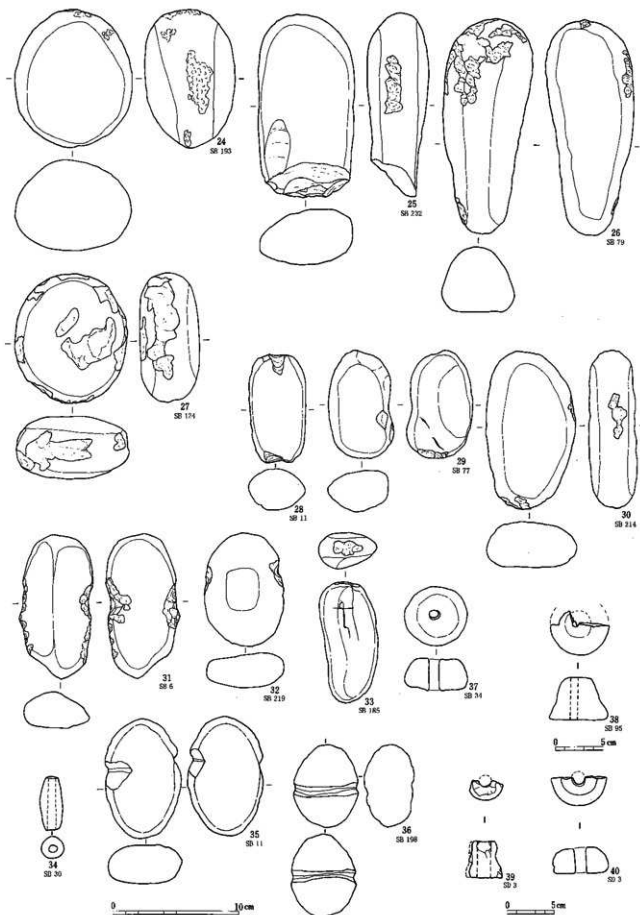
第194図 鉄・金属製品(5)



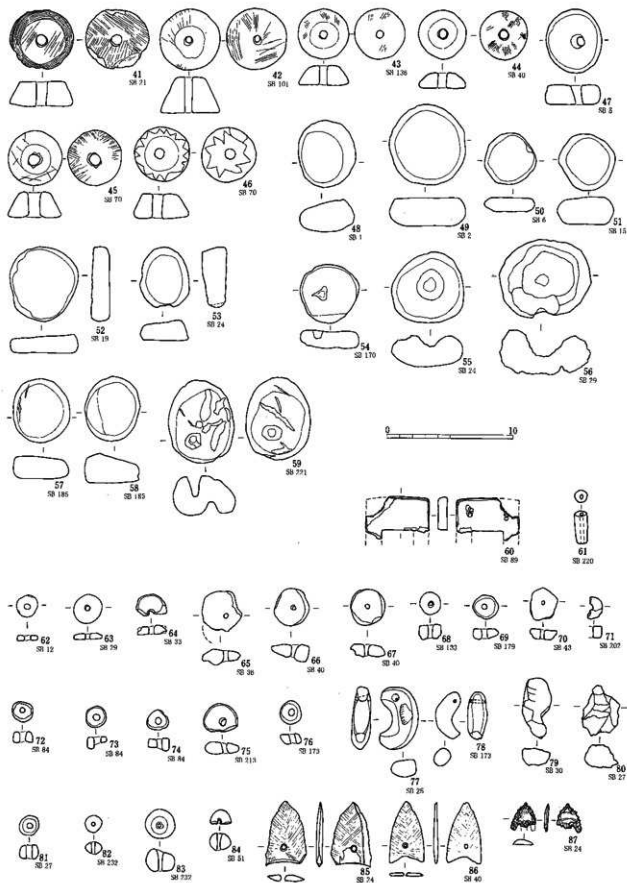
第195図 石・土製品 (I)



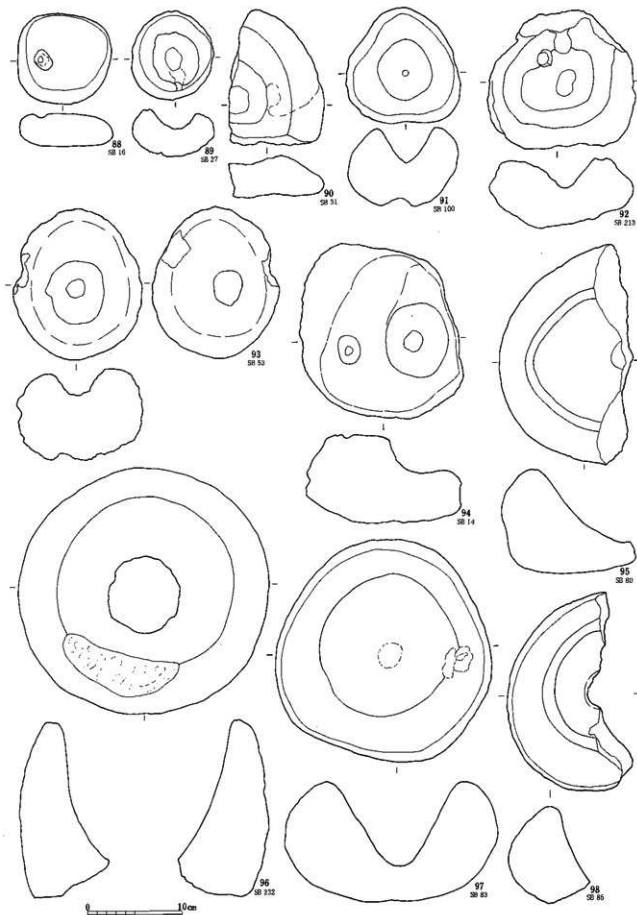
第196圖 石・土製品(2)



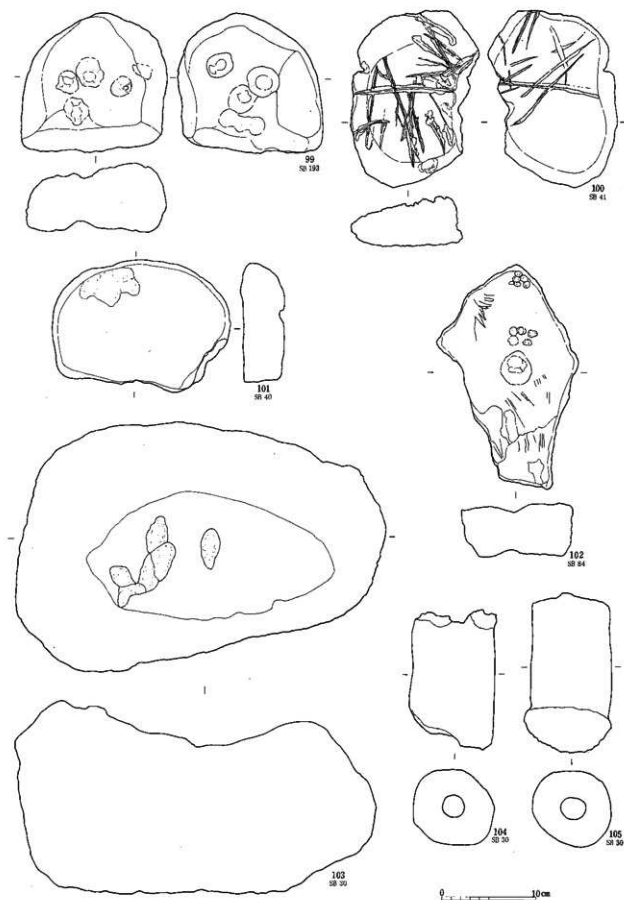
第197图 石・土製品(3)



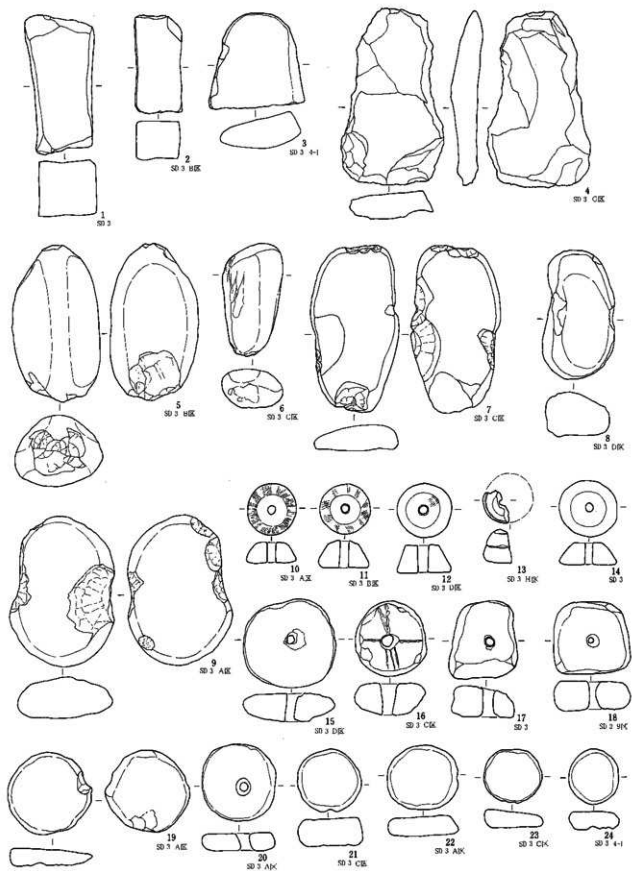
第198図 石・土製品(4)



第199図 石・土製品(5)

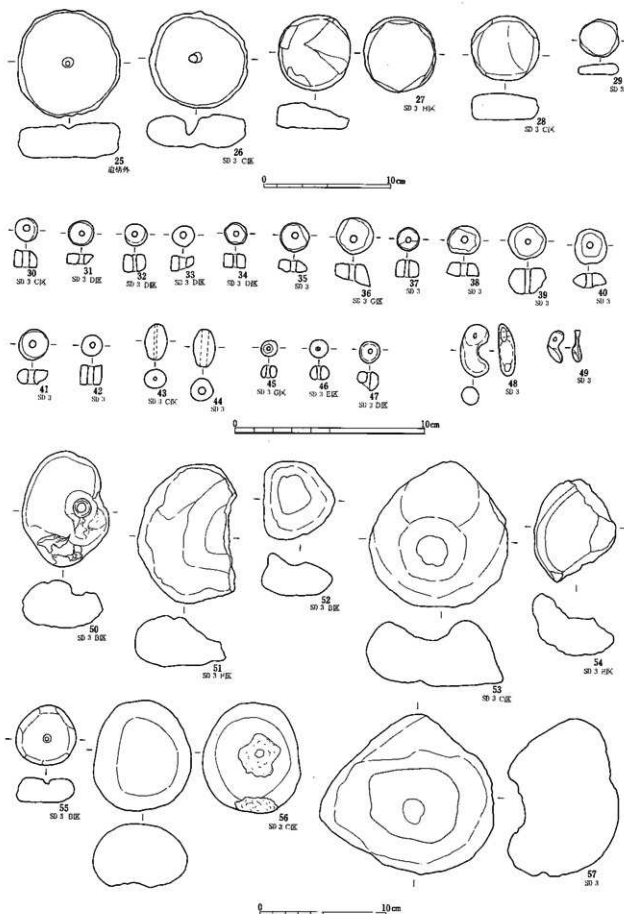


第200図 石・土製品(6)

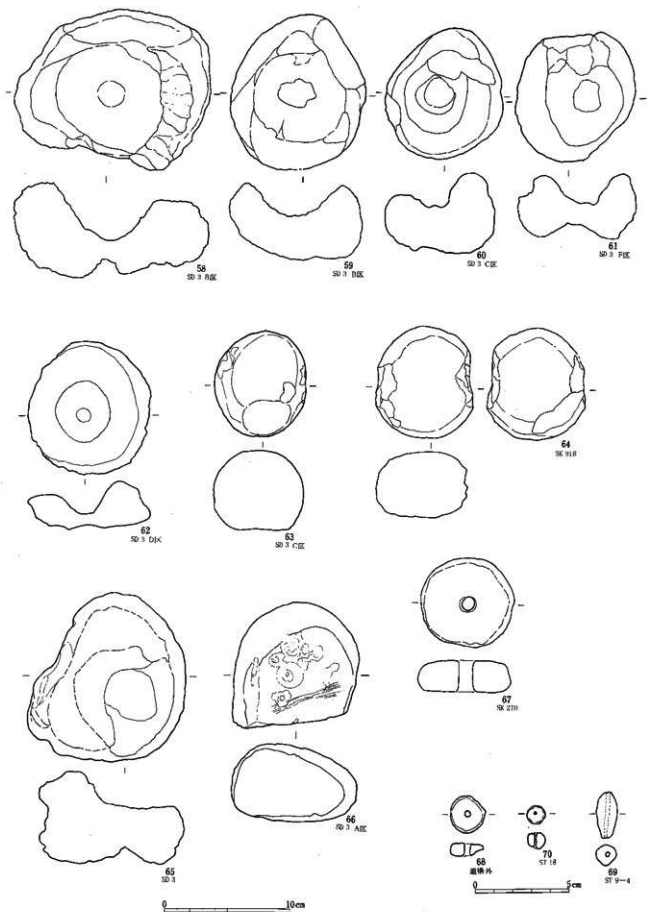


0 10cm

第201图 3号溝、他出土石・土製品(1)



第202図 3号溝、他出土 石・土製品(2)



第203图 3号溝、他出土 石・土製品(3)

第4章 中原遺跡群

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

中原遺跡群は浅間火山を北に望む広大で平坦な台地上に位置し、発掘調査以前は畑作地帯であった。遺跡は佐久市教育委員会が調査した聖原遺跡群の北、小諸市教育委員会・佐久市教育委員会・御代田町教育委員会が調査した銚師屋遺跡群前田遺跡を始めとする古墳時代から平安時代にいたる大規模な集落遺跡群の南方にある。

2 調査の概要

本遺跡の発掘調査は、調査面積12360㎡（本線部分11000㎡・小諸市側道拡幅部分1360㎡）を対象に、平成4年8月3日に本格的に着手した。

これに先立ち、調査準備段階で現場への進入路を確保するため、調査区域北端の一部を掘削したところ、竪穴住居跡の落ち込みを確認したため、急きょ7月15日から4日間この部分の発掘調査を実施した結果、古墳時代後期の住居跡であることが判明し、調査区域全体に集落の跡が展開するものと予想された。

調査区は南部から北部へ向けて便宜的に1～4区設定し、芝宮遺跡寄りの1区から順次調査を進めたが、予想をはるかに越える遺構密度であって重複関係も著しく、調査が難行した。このため、当初計画では半年度で調査を完了する予定であったが、計画変更を余儀なくされ、平成4年度は1・2区を中心に7360㎡、翌5年度は1・2区の残りとして3・4区を中心に5000㎡を対象に発掘調査を実施した。

2か年におよぶ発掘調査で検出された遺構は、古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡140軒・掘立柱建物跡100棟・溝6条・土坑35基・粘土採掘坑8基・ピット約400基である。

遺物は、土器類（土師器・須恵器・灰釉陶器）・石製品（勾玉・白玉・紡錘車・砥石）・金属製品（鉄鏃・刀子・紡錘車・金環・銭貨・鉄鐙）・動物骨などが出土した。

調査日記抄

平成4年度

8月1日 表土剥ぎ開始
8月3日 調査開始
10月15日 現地説明会
12月10日 1区の空撮・空測を実施
12月24日 調査終了

平成5年度

4月5日 調査開始
8月20日 空撮実施
9月10日 調査終了



第204図 調査範囲

第2節 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第205・14図、P L69）位置 VO-3

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、炊き口付近に石の抜き取り痕が見られることから、袖の先端に石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。燃焼部の中央には支脚の抜き取り根が認められるが、支脚は検出されなかった。

施設：床面は平坦で、南西コーナーは軟弱であったがそれ以外は非常に硬化していた。南壁中央の床面には1基の入り口に伴うと考えられるPitが検出されている。掘形は東壁近くをやや深く掘り込む以外は全面を均一に掘り込んでいる。柱穴・周溝・貯蔵穴は検出されていない。

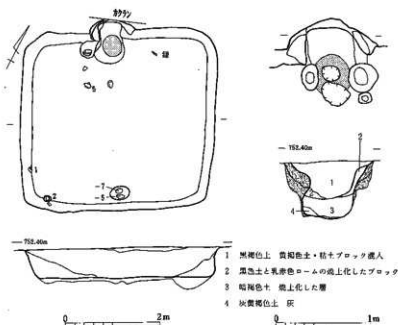
遺物と時期：鉄製品は鎌（353図1）が出土している。土器は南西コーナー床上10cmから（316図1）須恵坏・（2）須恵高台坏が、床面から（5）須恵甕が出土している。遺構の時期は8末と考えられる。

2号竪穴住居跡（第207・297図、PL69）

位置 VO-8

61号住居跡・216・355・676号土坑より新しい。

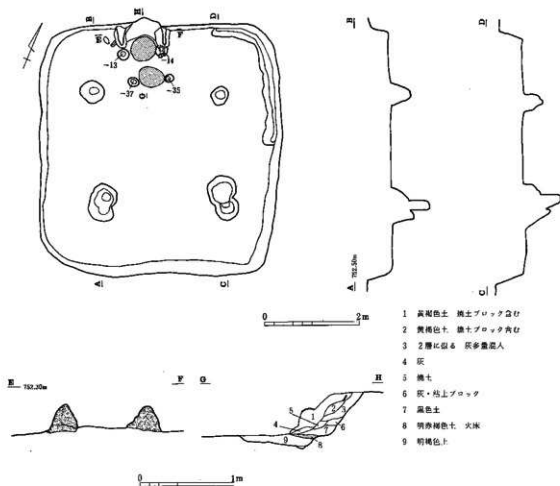
カマド：北壁の中央に位置し、右袖部分には石が残り、左袖には抜き取り痕が検出されたことから、袖の先端に石を用いて粘土で構築されたものと思われる。火床は焚き口と床面中央寄りに2箇所検出された。床面中央よりの火床は本跡建て替え前の可能性が考えられる。



第205図 1号竪穴住居跡



第206図 3号竪穴住居跡



第207図 2号堅穴住居跡

施設：床面は平坦で、中央部に硬化が認められている。柱穴は4基、周溝は北東コーナーの一部で確認されている。入り口・貯蔵穴は認められない。掘形の調査では本跡床面の下に硬化面が認められ、さらに南側の2基の柱穴に重複の痕跡が検出された。カマドの火床が2箇所認められた事などと考えると、建て替え前の住居跡が残存していたものと思われる。

遺物と時期：鉄製品は刀子(354図13)が出土している。土器は、カマドから須恵環・甕(353図2・5・7)、カマド手前の床面から須恵環(1)が出土している。遺構の時期は8c前半の後葉と考えられる。

3号堅穴住居跡(第206・303図、PL69) 位置 VY-5

53号住居跡・1号溝より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端と思われる位置に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。

施設：床面は平坦で、中央部は非常に硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴が4基、壁柱穴が5基検出された。周溝は東壁と南西コーナーの一部に確認され、入り口・貯蔵穴は認められなかった。掘形は高低差があまりなく中央が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は鎌(353図2)が、石製品では勾玉(355図15)が出土している。土器は、床面から(316図2)須恵環・00須恵高台環、北西コーナーとカマドから00須恵把手付人甕が出土している。遺構の時期は9c初頭と考えられる。炭化樹種はアカマツ・クリが検出されている。

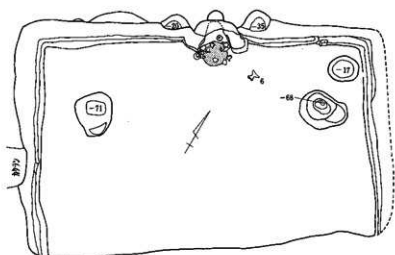
4号竪穴住居跡（第208・305図、P L69） 位置 VY-8

25号住居跡・1・4号建物跡・10号土坑より古い。本跡南半は田切り谷によって削られ欠落する。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。柱穴が2基、北西コーナーには貯蔵穴と考えられるPitが検出され、周溝は残存する部分で認められた。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は鉄錘（354図27）が出土している。土器では、鉢（318図5）がカマドから、高環(6)が床面から出土している。(8)の小型甕は内面上部に煤の付着が認められた。(2)の環は時期的に附合しない。遺構の時期は7C後半と考えられる。カマドの灰からは魚類（コイ科）・タニシが検出されている。



第208図 4号竪穴住居跡

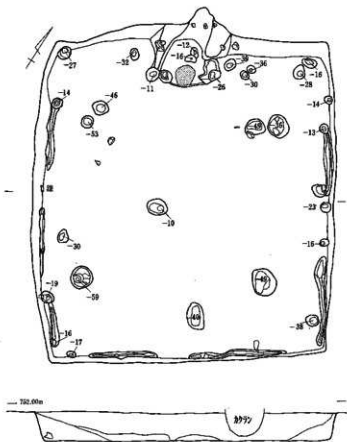
5号竪穴住居跡（第296図、PL69） 位置 VO-21

49・50号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、左袖には芯材に利用されたとみられる軽石が残っていたことから、袖には石（軽石）を芯材として粘土で覆ったものと考えられる。煙道部で煙出しに利用したと思われる武蔵甕の破片が検出されている。

施設：床面は全体に軟弱であり、49号住居跡との重複部分では基盤が軟弱であったのか貼床が認められる。主柱穴と考えられるPitが4基、東壁と西壁には壁柱穴がそれぞれ1基検出された。周溝は全周すると考えられるが、北東コーナーでは掘り過ぎにより確認することが出来なかった。本跡床下はカマド構築粘土の採取が行われたものと考えられ、掘形は乱雑に掘り凹められていた。入り口・貯蔵穴は認められなかった。

遺物と時期：土器では、環・甕共に多量に出土し、環は須恵器主体である。甕の口縁部の形態が「コ」の字状を呈し始めている。



第209図 7号竪穴住居跡

遺構の時期は9c初頭と考えられる。

6号竪穴住居跡（第305図） 位置 VY-12

2・5号建物跡より古い。

カマド：北壁に位置したものと予想されるが、調査区外のため不明。

施設：床面は平坦で、中央部は非常に硬く、周辺部は軟弱であった。柱穴は3基、東壁に壁柱穴が5基確認された。入り口は南壁中央で遺構外に張り出す壁の屈曲が認められたが、ほとんどは攪乱により破壊されている。周溝は南壁の西半で検出された。掘形は中央部は掘らず、周囲を20cmほど掘り凹めていた。遺物と時期：出土した坏・蓋には時期的な開きが認められ、(319図6)の坏は前代7c前半とされるものがある。(2・3・5)の半球形状の坏が主体をしめることから、遺構の時期は7c末～8c初頭と考えられる。

7号竪穴住居跡（第209・302・303図、PL69） 位置 VT-24

39・43・53・56号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端と思われる箇所に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。

施設：床面は平坦で、中央部は非常に硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは4基、東・西壁に壁柱穴が認められる他、床面中央に1基のPitが検出されている。周溝は東・西・南壁に断片的に認められる。入り口に伴うと考えられるPitが南壁寄り中央に検出された。掘形は中央は床面レベルで平坦に残し、周囲の壁の内側を20cmほど掘り凹めていた。

遺物と時期：鉄製品は鎌(353図3)・鉄鏃(354図30)が、石製品では凹石(355図1)、白玉(355図13)が出土している。出土した土器の坏は土師器・須恵器・須恵高台坏の割合はほぼ同じであった。(320図24・26)の甕の口縁部は「コ」の字状を呈している。遺構の時期は9c前半と考えられる。

8号竪穴住居跡（第210・297図、PL69） 位置 VO-19

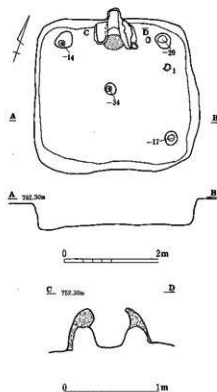
重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し、その先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは3基で、本来はあったと予想される南西隅では検出されず、床面中央に1基のPitが認められた。貯蔵穴・入り口・掘形は認められていない。

遺物と時期：カマドから出土した(320図2・3)の坏は両者とも法量・形状が同じである。遺構の時期は7c初頭と考えられる。

9号竪穴住居跡（第211・296図、PL70） 位置 VO-17



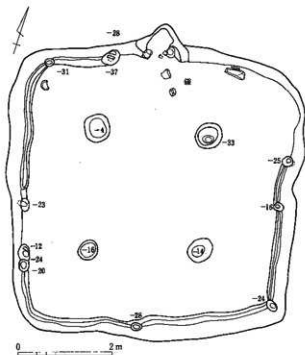
第210図 8号竪穴住居跡

29・40・65号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、燃焼部・煙道部は外側に掘り込まれやや突出している。袖には石を多用し粘土で覆ったものと考えられるが、崩落が著しく詳細は不明である。

施設：床面は平坦で、中央部とカマド周辺が硬く、周辺部は軟弱であった。周溝は北東コーナーと西壁中央部除く箇所で廻っている。主柱穴4基の他、周溝内に8基の壁柱穴が認められたが、主柱穴より補助的と考えられる壁柱穴の方が幾分深い傾向にある。南壁中央の周溝内に認められる小Pitは入り口に関わるものと考えられる。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は鎌（353図4）、板状不明品（354図42）が出土している。土師環は内黒主体で、須恵環とほぼ同じ割合で認められている。墨書「十二」が記された高台皿（320図11・15・19）が出土している。土師器の甕の口縁部の屈曲は「コ」の字状に明瞭に観察される。遺構の時期は9c後半と考えられる。



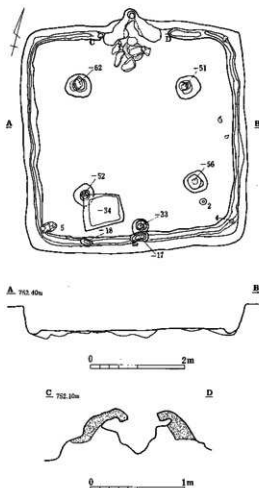
第211図 9号竪穴住居跡

10号竪穴住居跡（第212・299図、PL70） 位置 VO-23

重複はなく単独である。

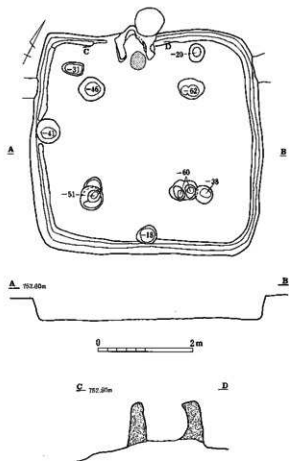
カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残すタイプである。天井部と袖に利用されたと考えられる石材がカマド手前の床面上に崩落していることから、石を芯材として粘土で覆ったものと考えられる。なお、袖先端に石を埋め込んだ痕跡は見られない。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。周溝は全周し、主柱穴は4基で柱痕も認められている。入り口に伴うPitが南壁の中央に2基検出され、その内の北側のPitには柱痕が検出された。掘形は地山を掘り残し床面とし、周囲の壁際を深く掘り下げている。遺物と時期：（321図3）の坏の口唇部は片口状につまみ出されている。（2・4）坏の外周、（5）長胴甕の外周胴部から底部には煤が付着している。遺構の時期は7c中葉と考えられる。炭化樹種ではクヌギが同定された。



第212図 10号竪穴住居跡

11号竪穴住居跡（第302図、PL70） 位置 VY-2



第213図 12号壁穴住居跡

の崩落が広い範囲で確認されたが、石材は認められなかったことから主に粘土で構築されていたと考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部とカマド周辺は硬く、周辺部は軟弱であった。4基の支柱穴と考えられるPitが検出されたが、南壁よりの2基はそれぞれ重複している。カマドの両側には貯蔵穴と考えられるPitが2基、南壁中央には入り口に伴うとみられるPitが1基検出された。西壁の中央に確認されたPitは本跡に伴うものか土坑か不明である。周溝は全周する。掘形は中央部からカマドにかけて高く、周囲が深いタイプであり、床面の硬化と位置的に対応している。

遺物と時期：環2点(322図1・2)と甕(3)が出土しているが、甕(3)は前代的な要素が強く本跡に伴うことはいないと思われる。遺構の時期は8c後半と考えられる。

13号壁穴住居跡(第301図、PL71) 位置 VIK-21

重複はなく単独である。16号建物跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。火床と支脚の抜き取り痕が認められたが、住居跡の床面・覆土から構築材はほとんど検出されなかった。住居外に持ち出したのであろうか。

施設：平面形は主軸に対して横長の長い長方形といえる。床面は平坦で、全体的に軟弱である。柱穴・貯蔵穴・周溝・入り口などは検出されていない。掘形は中央部が高く、周囲が深い、全体的に浅いものであった。

重複はなく単独である。北西コーナーは調査区外である。

カマド：北壁の中央に位置し、地山を掘り残した袖の先端に石を用い、上部を粘土で構築したものである。燃焼部中央には支脚の埋設痕のPitが検出されている。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。周溝は全周し、支柱穴が4基、南壁の中央には入り口に伴うPitが2基検出されている。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は鉄鏝(354図12)が出土している。土器は、環・高環・小型甕・甎が出土し、半球形の環(321図3・4・5)のうち(4・5)の内面には黒色処理が施されている。(3)の甎の底部の穿孔は10個施されようとしているが、貫通しているものは4個であり他6個は未貫通である。遺構の時期は7c後半と考えられる。

12号壁穴住居跡(第213・298図、PL70) 位置

VIK-21

88号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置する。床面上には構築材

遺物と時期：土器はほとんどなく、遺構の時期は不明である。

14号竪穴住居跡（第301図） 位置 VI P-1

79・51号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、面取りした軽石を芯材とした粘土先石タイプのカマドである。

施設：床面は平坦で、全体的に軟弱である。掘形は無く、柱穴・貯蔵穴・周溝・入り口などの施設は認められなかった。

遺物と時期：鉄製品は鉄鏝（354図34）が出土している。坏は須恵器主体で、甕の口縁形態は「コ」の字状を呈している。（322図7）の内黒坏には「天」と記された墨書が認められる。遺構の時期は9c初頭と考えられる。

15号竪穴住居跡（第299図、PL71） 位置 VT-13

88号建物跡・15号性格不明遺構・649・651号土坑より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端には石の抜き取り痕が認められ、燃焼部やその周辺に方形に面取りされた軽石が認められたことから袖先に石を用いて粘土で築いたものと思われるが、床面上には多くの軽石が散在することから石組みの可能性も考えられる。

施設：床面は平坦で、カマド周辺は硬く、それ以外は軟弱であった。主柱穴は4基確認された。周溝・入り口などは検出されていない。掘形は全体的に10cmほど掘り下げたものであった。

遺物と時期：鉄製品では鏝（353図15）、刀子（354図14）が出土している。坏は土師器主体で高台皿（322図5・7）が認められる。土師器甕（9～12）の口縁部は「コ」の字状を呈している。遺構の時期は9c前半と考えられる。

16号竪穴住居跡（第299図） 位置 VT-12

650・651号土坑より新しく、16号性格不明遺構より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したのと考えられる。石材や抜き取り痕は検出されていない。

施設：床面はやや凹凸があり、北東部は硬く、その他の箇所は軟弱であった。主柱穴は4基確認され、北西コーナー寄りには深さ18cmのPitが検出されたが、用途などは不明である。南壁中央には入り口と考えられる大きな張り出しが認められた。周溝は検出されていない。掘形は全体を均一に20～26cm掘り下げている。

遺物と時期：坏は有稜坏が主体で、須恵坏（323図7）が1点認められる。遺構の時期は7c後半と考えられる。

17号竪穴住居跡（第214・302図、PL71） 位置 VT-18

19号建物跡・15号性格不明遺構・204・206号土坑より新しく、14・17・207・208・209号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖には石（軽石）を多用し粘土で覆ったのと考えられる。煙道の煙出し部分は地山を溝状に60cmほど掘り込み、その両側には石が配置されていた。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴と考えられるPitは9基確認されている。それぞれ重複しているが、その配置関係から本跡の拡張に伴う建て替えが1ないし2度行われた結果と考えられ、一番外側のPit4基が最終的な主柱穴である。また、北・東・南壁際では壁柱穴が1基確認されている。周溝はカマド周囲と南東コーナーを除いてほぼ全周する。南壁中央付近には入り口に伴う小Pitが3基検

出されている。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：半球を呈する環(323図1～6)が主体で、(4・5・6)の内面には黒色処理が施されている。09の壺の器内は薄く武蔵薔への移行をうかがわせる。遺構の時期は8c初頭と考えられる。

18号竪穴住居跡(第215・299図、PL71) 位置 VO-22

31号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先に石を用いて粘土で築いたもので、燃焼部・煙道部は壁を箱型に掘り込んである。

施設：床面は平坦で、黄褐色土の貼床が施され、壁際を除き全体に硬くしまっている。柱穴はカマドを挟んで西側と東側に2基、南壁中央付近には入り口に関わると考えられるPit 1基が確認された。貯蔵穴・周溝などは認められない。掘形は住居を一回り小さくした方形で、底面はほぼ平坦であった。

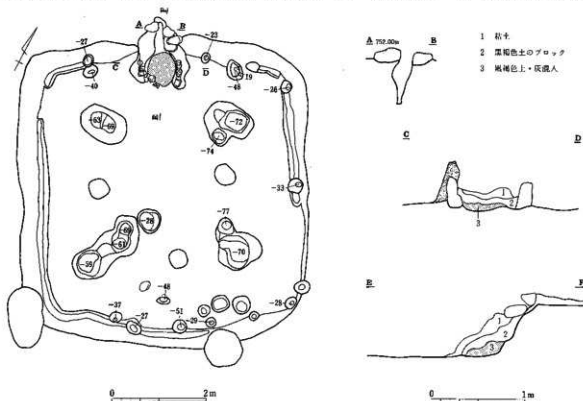
遺物と時期：環は須恵器主体(324図3～7)で、土師環の(1)は内面に放射状の暗文が観察され、(9)の底部には「寧なへラケズリ」の後に「×」字状の線刻が施されている。遺構の時期は9c初頭と考えられる。カマドの灰からは炭化種実のオニグルミの小片が得られた。

19号竪穴住居跡(第304図) 位置 VIP-16

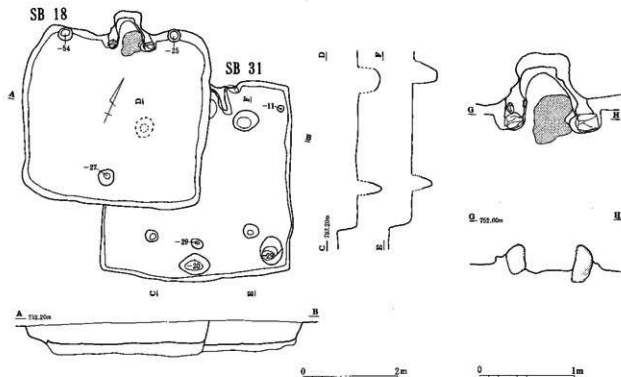
77号住居跡・430・438号上坑より新しく、10号性格不明遺構より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されたものと考えられる。支脚の抜き取り痕は認められず、火床上部には崩落による多量の粘土が堆積していた。

施設：床面は平坦で、全体に硬いが北半に比べ南半はさらに硬くしまっている。主柱穴と考えられるPitは4基検出されたが、南西のPitは住居廃絶時の粘土採掘により一部削られている。掘形はなく、貯蔵穴・



第214図 17号竪穴住居跡



第215図 18・31号竪穴住居跡

周溝・入り口などの施設は認められない。

遺物と時期：ロクロ整形された土師・須恵器の坏（324図1～7）が出土している。04の甕は本跡に伴うものかどうか疑問である。遺構の時期は9c初頭と考えられる。

21号竪穴住居跡（第216・299図、PL71） 位置 VT-7

33号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと考えられる。煙道は比較的長く、燃烧部から急激に立ち上がり、上部には煙出しに利用されたと考えられる長胴甕が検出されている。

施設：床面は平坦で、カマド付近・中央部・南壁付近は非常に硬く、西壁寄りは軟弱であった。主柱穴は4基、入り口に伴うと考えられるPitが南壁中央に1基、他に補助穴が3基検出された。貯蔵穴・周溝は認められなかった。掘形はカマド周囲と中央部が高く、周囲が深いタイプである。

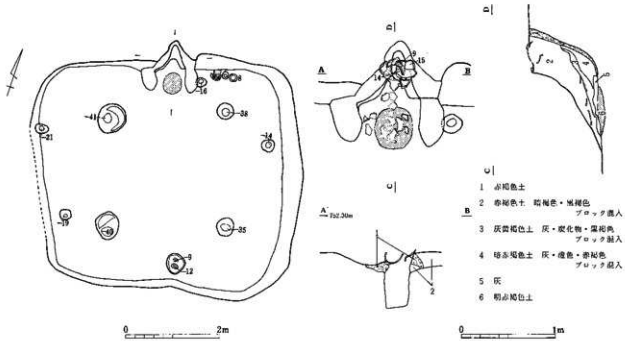
遺物と時期：（325図9・14・15）の甕は煙道部から出土し煙出しに用いられていたものと考えられる。（8・10）の甕はカマド右袖の床面上に置かれた状態で認められている。遺構の時期は7c中葉と考えられる。カマドの灰からはタニシが検出されている。

22号竪穴住居跡（第217・300・301図、PL71・72） 位置 VT-15

416号土坑より新しく、117号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。また炊き口の床面上には天井に用いられた石材が検出されたことから、袖先にも石が使用されていた可能性もある。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっている。周溝は北西コーナー付近を除き全周する。柱穴は床面上では確認できず、掘形の調査で住居跡の中央に1基のPit状の凹みが検出されているが、本跡に伴うも



第216図 21号壑穴住居跡

のか不明である。貯蔵穴・周溝・入り口は検出されていない。掘形は中央に掘り込まれた1基のPit以外は極めて浅く平坦なものであった。

遺物と時期：環は口縁中位に段のある有段環(325図1～6)、環身を模倣した(2・4)が出土している。遺構の時期は6後半と考えられる。カマドの灰からは石貝と考えられる貝類が検出されている。

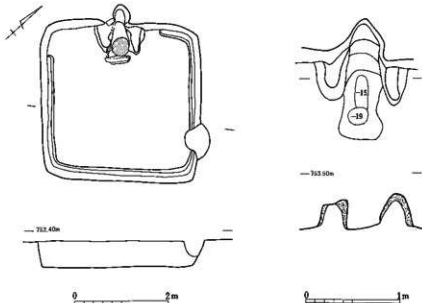
23号壑穴住居跡(第218・301図、PL72) 位置 VIP-6

28・52号住居跡・413号土坑より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したもので、袖の先端部には石材を埋設した痕跡は認められていない。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部の硬化は弱いもので、特に南壁際は軟弱であった。Pitは南西コーナーと南東コーナーに2基検出されたが、その位置や規模から柱穴とするにはやや疑問が残る。貯蔵穴・周溝・入り口は認められない。掘形は全体に浅いが、中央部が高く、周囲が深いタイプといえる。

遺物と時期：環が2点図化できた。遺構の時期は



第217図 22号壑穴住居跡

8c後半と考えられる。

24号竪穴住居跡(第219・301図、PL72) 位置 VT-10

70号住居跡・4号性格不明遺構・638号土坑より新しい。
カマド：北壁の中央に位置し、袖には軽石主体として石を組み粘土で覆ったものと考えられる。粘土はほとんど流失し少量石材の間に確認できる程度であったが、構築に使われたと思われる石材は床面上に多数散在していた。支脚の痕跡や火床は確認できなかった。

施設：床面は平坦で、ほぼ全体に硬くしまっているといえるが、周辺部はやや軟質であった。周溝は南東コーナーのみ確認できた。柱穴・貯蔵穴・周溝・入り口などは認められなかった。掘形は全体を均一に20cmほど掘り下げている。

遺物と時期：須恵環・土師甕(325図)などが出土している。遺構の時期は9c中葉と考えられる。

25号竪穴住居跡(第305図) 位置 VY-13

4号住居跡より新しい。両側は田切り岸の侵食で本跡の1/2以上が欠落している。

カマド：北壁の中央に位置する。構築に使われた粘土が床面上で多量に流失し、そのためか本体部分の残存状態は悪い。袖先端部に石の抜き取り痕が認められないことから、粘土を主体に構築されていたと考えられる。

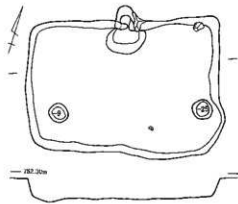
施設：床面は平坦で、硬化は全体に弱く覆土に比べやや硬度がある程度であった。Pitが1基北東コーナーで検出された。柱穴・貯蔵穴・周溝・入り口などの施設や掘形は認められない。

遺物と時期：甕(326図2・3・4)が3点見られ、器肉の薄くなる傾向にあり、口縁の屈曲が強い。(1)の環は前代的であり、あるいは他から混入したものであろうか。遺構の時期は8c初頭と考えられる。

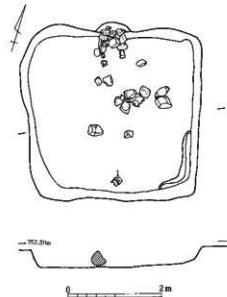
26号竪穴住居跡(第220・301図、PL72) 位置 VIK-21

16号建物跡より新しく、87号建物跡より古い。

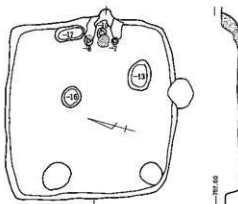
カマド：東壁の中央のやや南寄りに位置する。両袖先に石の抜き取り痕が認められたことから、炊き口に石を用いて粘土で築いたものと思われる。燃焼部には支脚の抜き取り痕が検出された。



第218図 23号竪穴住居跡



第219図 24号竪穴住居跡



第220図 26号竪穴住居跡

施設：床面は平坦で、北壁よりとカマド周辺では硬化が認められるが、南・西壁側は軟弱であった。柱穴状のPitは2基確認されたが、位置や規模から柱穴とは考え難い。貯蔵穴と考えられるPitがカマド左袖に接して検出されている。周溝・入り口などの施設や掘形は認められなかった。

遺物と時期：凶化可能な土器の出土はなかった。破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

27号竪穴住居跡（第221・301図、PL72） 位置 VT-5

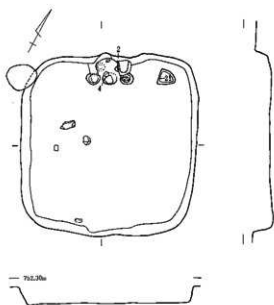
21号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置する。床面上には構築に使われた石材が散乱し、本体は旧状を留めていないが、袖先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと考えられる。

施設：床面は平坦で、全体が非常に硬くしまっていた。

カマドの東側にはPitが認められ、位置からすると貯蔵穴と考えられるが不整形であり用途は不明である。南壁の中央付近には顕著な張り出しと梯子穴状のPitは認められないが、床面が若干張り出ししている箇所が認められることから入り口施設の可能性が考えられる。柱穴・周溝は認められていない。掘形は周囲が高く、中央部が深いタイプであった。

遺物と時期：（326図1・2）は内黒環、（3～4）須恵環、（6・7）は口縁部が「コ」の字状に屈曲している。遺構の時期は9c中葉と考えられる。カマドの灰からは炭化種実のオニグルミの小片が得られた。



第221図 27号竪穴住居跡

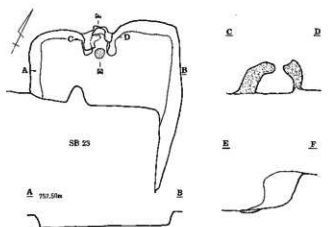
28号竪穴住居跡（第222・301図） 位置 VIP-6

455・456号土坑より新しく、23号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、粘土を主体的に用いて構築されていると考えられる。燃焼部上部には天井の一部が残っていたが、粘土以外の構築材や石材・支脚の抜き取り痕は認められなかった。

施設：床面は平坦で、全体に硬化が認められるが硬化の程度は比較的弱い方であった。柱穴・周溝など他の施設や掘形は認められなかった。

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

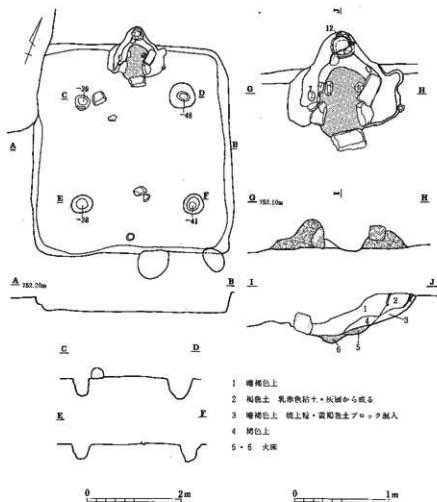


第222図 28号竪穴住居跡

29号竪穴住居跡（第223・247図、PL72）
位置 VO-18

92号建物跡より新しく、9号住居跡・6・7号建物跡・643号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、炊き口と左袖上部に天井石と思われる煉瓦状に面取りされた軽石が出土し、粘土袖の内部には芯材と考えられる軽石が数個確認された。またカマド周辺の床面上にも、構築材に用いられたと考えられる石が散見されることから、基本的には袖先端に石を用いて粘土で覆った構造といえるが、石を多用していることから石組み構造的な色合いも有している。燃焼部には面取りされた軽石製の2本の支脚が並列の状態に旧状を留めており、いわゆる「東日本型」である。煙道上部には煙出しに再利用された2個体分の武蔵甕が逆位の状態で残されていた。



第223図 29号壁穴住居跡

施設：床面は平坦で、硬化の範囲は壁際を除き中央部で認められ非常に硬くしまっていた。主柱穴と考えられるPitは4基で、南西のPit以外では柱の痕跡が認められている。また、掘形の調査によってカマドの両側の一つずつ補助穴と考えられる2基のPitが確認されている。貯蔵穴・周溝・入り口は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は刀子(354図15)、銅銭の万年通寶(273図)が出土している。出土した坏類は(326図1)の内黒坏以外は須恵器でしめられる。(12・13)の甕は煙出しに使用されたものと思われカマドの煙道上部から出土している。遺構の時期は9c初頭と考えられる。カマドの灰からは炭化種実のイネが得られた。

30号壁穴住居跡(第298図、PL72・73) 位置 VIK-6

64・68号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央のやや西寄りに位置する。地山を掘り残し石をいくつか芯材として配置し、その上に粘土で袖・天井を構築している。また、住居跡床面上には大小の隙が散在していることから、これらがカマドの構築材として利用されていた可能性が高い。燃焼部内には六角柱状に加工された2本の支脚が並列の状態に残されていたことから、いわゆる「東日本型」と考えられる。煙道部には甕の口縁部が逆位の形で埋設されていたと思われるが、崩落により旧状より火床方向にやや移動した状態で検出された。

施設：床面は平坦で、ほぼ全体が硬くしまっていた。柱穴・周溝など他の施設は検出されなかった。掘

形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：(327図3)の環・(7)台付甕は床面から出土している。甕口縁部の屈曲は「く」の字状(6・7・8・9)のものと「コ」の字状(5)のものが見受けられる。遺構の時期は9c初頭と考えられる。カマドの灰からは哺乳類の小片骨が検出されている。

31号竪穴住居跡(第299図、PL73) 位置 VO-22

2号性格不明遺構より新しく、18号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、煙道部分と西側は18号住居跡により破壊され不明であるが、残存する右袖の状況から粘土を主体的に用いて構築されていると考えられる。袖の内面は被熱により暗褐色に変色し硬化している。

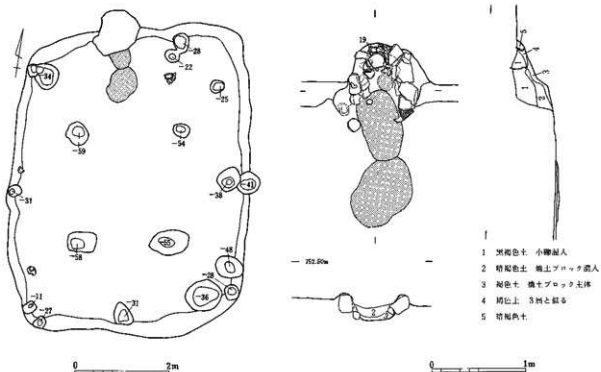
施設：床面は平坦で、硬化の度合いは低く軟弱であったため、覆土との色調の違いで判断した。Pitは主柱穴と考えられる4基、北東・南東コーナーの壁際には補助穴がそれぞれ1基、南壁中央付近には入り口施設に伴うと思われる2基が検出された。貯蔵穴・周溝は認められない。掘形は多少起伏があるが全体に平坦である。

遺物と時期：環は内黒が主体をしめ、他に須恵環が2点認められる。(327図8)の環は内面に螺旋の暗文が施されている。遺構の時期は7c末～8c初頭と考えられる。カマドの灰からは哺乳類の小骨片、炭化種実ではオニグルミ・イネが検出された。

32号竪穴住居跡(第224・297図、PL73) 位置 VO-15

63・64・66号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置する。燃焼部・煙道は壁面を掘り込み張り出して形成され、石を多用して粘土で覆った石組みの構造である。火床は南北に長く、炊き口の位置が確定できないため推測であるが、カマ



第224図 32号竪穴住居跡

ト全体の南北の長さは煙道部先端から火床南端までではば1mを測る。また、その火床の南側にはさらにもう一つの火床が検出されている。おそらく建て替え前の旧住居跡のカマドと考えられる。煙道部の上部からは逆位に置かれた武蔵甕が出土している。

施設：本跡は主軸方向に長い長方形を呈している。床面は平坦で、中央部とカマド周辺部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは4基、南壁中央には入り口に関わると思われるPitが1基確認されている。その他に壁柱穴と考えられるPit1基が検出されている。貯蔵穴・周溝は認められない。掘形の調査では内側に建て替え前の旧住居が認められ、北・西・南方向へ50～100cm程拡張していることが推測される。

遺物と時期：坏は須恵器が主体をしめ、土師器の高台皿（328図13・14）が認められる。06の甕はカマド内部から、09は煙道部上部から出土している。遺構の時期は9c後半と考えられる。

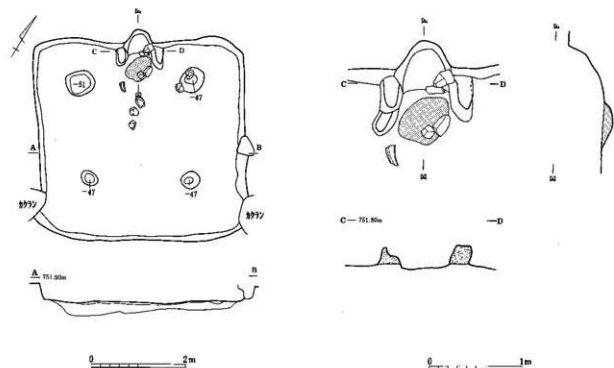
33号竪穴住居跡（第299図、PL73） 位置 VT-7

21号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖・燃燒部には8個ほどの面取りされた石材が認められたことから、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。また、右袖脇の床面上には天井石に使用されたと考えられる平坦な石材が認められている。

施設：本跡の北東部には住居廃絶後の粘土採掘行為によって掘り込まれ、平面形は北東方向に張り出した不整形である。床面は平坦で、全体に軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが4基と補助穴が2基確認されている。周溝は南半部で確認されたが、北半では認められない。貯蔵穴・入り口は検出されなかった。掘形は中央部が高く、周溝が深いタイプである。

遺物と時期：坏身模倣坏（328図1・2・6）と蓋模倣坏（3・4）が見られ(6)の底部には線刻が施されている。カマドからは(6)の坏・甕（10・11）・甕02が出土している。遺構の時期は6c末～7c初頭と考



第225図 35号竪穴住居跡

えられる。カマドの灰からは海産種の可能性のある貝類とイノシシ・タニシ・哺乳類の小骨片が検出されている。

35号竪穴住居跡（第225・303図） 位置 VY-4

56・57号住居跡より新しく、29号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端をはじめとして石を芯材として多用し粘土で補強した構造で、床面上には芯材に使用されたと考えられる軽石が散在していた。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴が4基確認されたているが、他の貯蔵穴・周溝などの施設は検出されなかった。掘形は重複のため不明瞭であるが、重複の無い箇所を観察では中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：石製品は（355図19）が出土している。（329図5）の甕は床面、(1)の坏は床下から、他は覆土出土である。遺構の時期は8c初頭と考えられる。

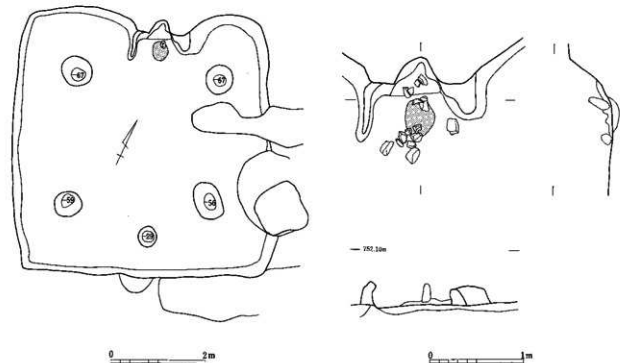
36号竪穴住居跡（第226・303図、PL74） 位置 VIP-16

302号建物跡・46号土坑より新しく、177・2004号土坑より古い。

カマド：北壁の中央のやや東寄りに位置し、北壁より住居内側にせり出している。本体は袖先に面取りした軽石を用いて粘土で築いたものと思われる。燃焼部には面取りされた軽石の支脚が口状を留め、炊き口前面の床面上に面取りされ天井に使用したと思われる石材が出土している。また、右袖の脇には硬くしまった棚状の部分が確認されたが、棚状施設かどうかは不明である。

施設：床面は平坦で、南壁よりが軟弱であった他はほぼ全体に硬くしまっていた。Pitは主柱穴の4基、南壁の中央付近には入り口に関わると考えられる1基が検出されている。その他の施設は認められていない。掘形は中央部とカマド付近が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：（329図3）の甕がカマドから、円面硯(2)は覆土から出土している。遺構の時期は7c末～



第226図 36号竪穴住居跡

8c初頭と考えられる。

37号竪穴住居跡 (第300図、PL74) 位置 VO-25

38号住居跡より新しく、19号土坑・3号性格不明遺構より古い。

カマド：北壁の中央のやや東寄りに位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。天井は燃焼部では崩落しているが、煙道部上では旧状を留め、支脚は面取りされた軽石が燃焼部の奥壁寄りに置かれた状態で検出された。現火床の南側にはさらにもう一つの火床が認められたことから造り替えが行われたものと思われるが、カマド全体が造り替えられたかどうかは明らかに出来なかった。

施設：床面は平坦で、全体が硬く特に中央部は堅牢な状態であった。周溝は南壁の一部を除いてみとめられ、主柱穴は4基確認されている。貯蔵穴・入り口は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

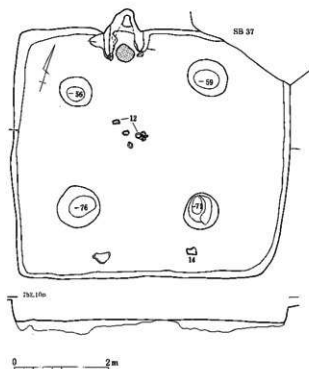
遺物と時期：鉄製品は鉄鎌(354図33)が出上している。環類(329図1・2・3)・鉢(4)が覆土から、壺(5)がカマドから出土している。遺構の時期は7c末と考えられる。カマドの灰からは哺乳類の小骨片が検出されている。

38号竪穴住居跡 (第227・300図、PL74・75) 位置 VO-24

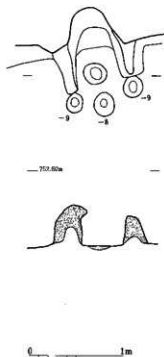
203号土坑より新しく、37号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央のやや西寄りに位置し、袖先に石を用いて粘土で築いたものと思われる。天井は燃焼部付近では崩落しているが、煙道部上では旧状を留めていた。また、支脚の痕跡が掘形調査で燃焼部から検出されている。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴が4基認められたが、他の施設は検出されなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。



第227図 38号竪穴住居跡



遺物と時期：甕（330図14）が兩壁際の床面、⑫の甕は中央の床面から、（10・13）はカマド内から出土した。遺構の時期は7c後半と考えられる。覆土からは炭化樹種のナラが検出された。

39号竪穴住居跡（第303図、PL75） 位置 VT-24

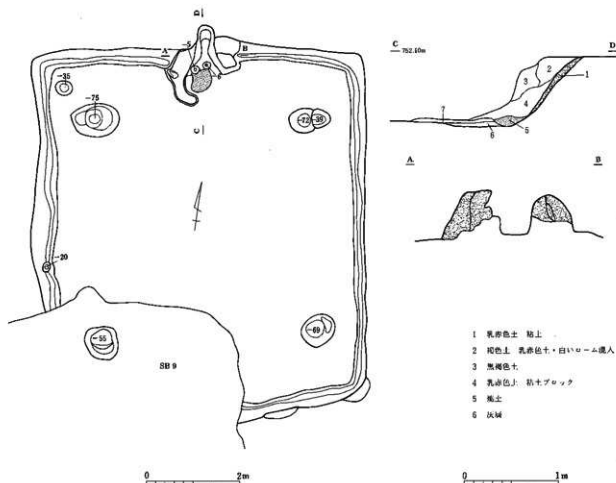
302号建物跡・621・623号土坑より新しく、7・53号住居跡・41号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し、その先端には石を芯材として用いて粘土で構築したものと考えられる。煙道は本遺跡では比較的長さを有し、壁のラインから先端まで38cmを測る。支脚には熔岩を用いている。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが4基確認されているが、それらはいずれも重複のため不整形である。Pitの重複が建て替えによるものか、単なる柱の抜き取り痕かは明らかではない。貯蔵穴状のPitがカマドの右脇に検出されたが、柱穴と重複しているため旧状を留めていない。周溝・入り口は認められなかった。掘形は10cm程掘り下げた平坦なものであった。遺物と時期：鉄製品は鎌（353図6）、金環（354図46）が、石製品では紡錘車（355図9）が出土している。床面直上から鉢（330図9）・甕⑫・瓶（16・18）が出土している。（7）の坏口縁部の外面に煤が付着し、⑩小形甕内面全体には煮焦げ痕が認められる。⑩の甕の胴部下端の対峙する位置に小孔が2つ施されている。遺構の時期は7c前半と考えられる。

40号竪穴住居跡（第228・296図） 位置 VO-12

660・2019号土坑より新しく、9号住居跡・24・25・27・55号土坑・57・70号建物跡より古い。



第228図 40号竪穴住居跡

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。燃焼部の奥壁は大きく箱状に掘り込まれ幅がある。また、支脚の抜き取り痕が並列して検出されたことから横置き二つ掛けのいわゆる「東日本型」の可能性はある。

施設：床面は平坦で、支柱穴に囲まれた範囲を中心として、かなり硬化していた。支柱穴と考えられる4基のPitの他に、北西コーナーと西壁中央の周溝内にそれぞれ1基のPitが検出された。貯蔵穴・入り口は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：坏3点(331図1・2・3)と須恵蓋(4)が出土している。遺構の時期は7c末～8c初頭と考えられる。

41号竪穴住居跡(第229・297図、PL75) 位置 VO-4

62号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置する。燃焼部は壁を大きく箱状に掘り込んでおり、住居の上場から煙道先端まで70cm外に張り出して造られている。袖先端に石の抜き取り痕が見られ、煙道部分には構築材に使われたと見られる数個の礫が潰れた状態で検出されていることから、石組みの構造であったと考えられる。また、床面中央からカマド前面にかけて多量の面取りされた礫が検出され、石組みカマドを裏付けるものといえる。

施設：床面は平坦で、壁際を除いて非常に硬化していた。柱穴と思われる4基のPit以外、他の施設は認められていない。掘形は凹凸があり、規則性は認められない。

遺物と時期：鉄製品はで板状不明品など(354図23・24)が出土している。(図1)の坏体部には「L」?・「宮」と記された墨書土器が床面直上で出土している。坏の主体は須恵器で、(6)の高台皿は他遺構からの混入品と思われる。遺構の時期は8c中葉と考えられる。カマドの灰からは炭化種実のオニグルミの小片が検出された。

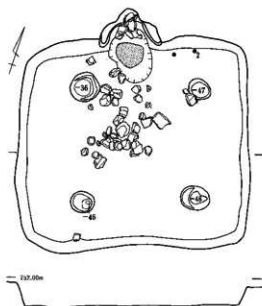
42号竪穴住居跡(第230・301図、PL75) 位置 VIP-1

55号住居跡・87号建物跡・30・34・91号土坑より新しく、63・64号建物跡より古い。

カマド：北壁の中央のやや西寄りに位置する。天井部は崩落しているが残存状況は良好で、袖先端には面取りされた軽石が立てられ、その周囲を粘土で覆っている状態が検出された。

施設：床面は平坦で、中央部とカマド周辺が硬く、周辺部は軟弱であった。支柱穴と思われるPitが4基、南壁中央には入り口に伴うと考えられるPitが1基確認されている。また、カマドの右袖内には貯蔵穴と考えられる深さ24cmのPitが1基検出されている。周溝は北東コーナーの一部を除き全周する。掘形は浅く顕著なものではなかった。

遺物と時期：カマド右脇の北壁際には(332図9・12・14・15)の甕が置かれた状態で認められ、(8・10・11)



第229図 41号竪穴住居跡

の甕がカマド内から出土している。(1)の環には「吉」が記されている。遺構の時期は7c後半と考えられる。

43号竪穴住居跡(第302図、PL76) 位置 VT-23

73号住居跡・26号建物跡・582号土坑より新しく、7号住居跡・40号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、掘り残した袖の先端には石が用いられ粘土で構築されている。燃焼部・煙道は外に大きく張り出し、火床には横幅があることから横置き二つ掛けの可能性が考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と思われるPitが4基確認され、周溝は全周する。貯蔵穴・入り口は認められていない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：金属製品では銀環(354図45)が出土している。床面直上から須恵環(333図8)・甕02、カマドから甕00が出土している。環は半球形の土師環が主体をしめている。遺構の時期は7c末と考えられる。カマドの灰からはタニシの小片が検出され、覆土からは炭化樹種のクヌギ・ヨシが認められた。

44号竪穴住居跡(第231・298図) 位置 VI K-7

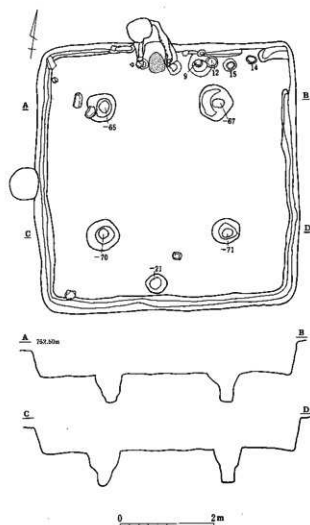
重複はなく単独である。

カマド：北壁で新旧二つのカマドが隣接して検出されている。調査の結果東側のカマドが古く、廃棄時ま

だ使用されたのは西側のものである。新カマドの袖先端には煉瓦状の土製品を芯材として粘土で築いたものと思われる。また、右袖は旧カマドの左袖を利用していただようである。旧カマドの構造は新カマドとほとんど同じであるが、袖先端には土製の芯材ではなく軽石が使用されている。

施設：本跡の東半は調査区外で不明である。床面にはやや凹凸があり、硬化面は壁を除き全面に認められた。床面には多量の炭化物・炭化材が認められ焼失住居の可能性が考えられたが、覆土中にも多量の炭化物が認められたことや被熱した須恵器が出土していることから、火災あるいは意図的な出火の後、二次的な埋没をしたものと考えられる。北西コーナーには地山の粘土を採取した掘り込みが認められている。周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は鎌(353図7・8)、鉄鍬は(354図31)、丸鋸(354図43)が出土している。カマド周辺から多くの土器が出土している。カマドの東脇から出土したハケ甕(333図12)は口縁端部が摘み上げられ、東海地方に広く認められる甕に類似している。6個体の甕(13~18)は、口縁部の屈曲が「コ」の字状を呈する(16・18)と



第230図 42号竪穴住居跡

「く」の字状に屈曲する(13・14・15・17)の2種が認められる。遺構の時期は8c末～9c初頭と考えられる。炭化樹種では床面・覆土からクスギ、クリ、ケヤキ、ミズキ、スギなどが検出された。

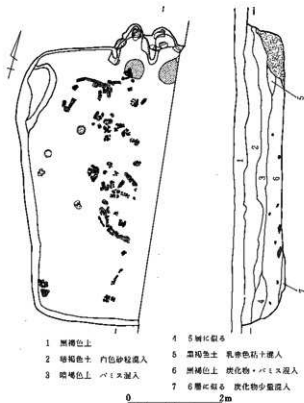
45号竪穴住居跡(第232・298図、PL76) 位置 VI K-16

64・67・68号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央のやや西寄りに位置し、袖は地山を掘り残し、石(主に軽石)を多用し粘土で覆った石組みで、燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの構造が考えられる。煙道部には煙出しに利用されたと考えられる須恵器の甕の破片が認められている。

施設：床面にはやや凹凸があり、硬化面は認められなかった。柱穴・貯蔵穴・周溝・入り口などの施設は検出されていない。掘形は不規則な凹凸が認められたが、埋め戻された土と地山の区別が不明瞭であったため正確な形状はつかめなかった。

遺物と時期：石製品は紡錘車(355図10)が出土している。坏類は須恵器を主体として認められる。(9)の鉢は口唇部が内側に屈曲する鉄鉢型である。遺構の時期は8c末～9c初頭と考えられる。



第231図 44号竪穴住居跡

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 黒褐色土 | 4 5層に似る |
| 2 暗褐色土 白色砂粒混入 | 5 黒褐色土 乳白色粘土混入 |
| 3 暗褐色土 ベニス混入 | 6 黒褐色土 炭化物・ベニス混入 |
| | 7 6層に似る 炭化物少量混入 |

46号竪穴住居跡(第300図、PL76) 位置 VT-9

632・2049号土坑より新しく、14・15・65号建物跡・4号槽列より古い。

カマド：北壁の中央のやや東寄りに位置する。袖は地山を掘り残し、その先端には石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。燃焼部には支脚の抜き取り痕が認められた。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。Pitは南東コーナーに1基、北東コーナーに1基検出されたが、主柱穴と考えられるPitは認められなかった。周溝・入り口は検出されていない。掘形は全体に浅く均一に掘り下げたものであった。

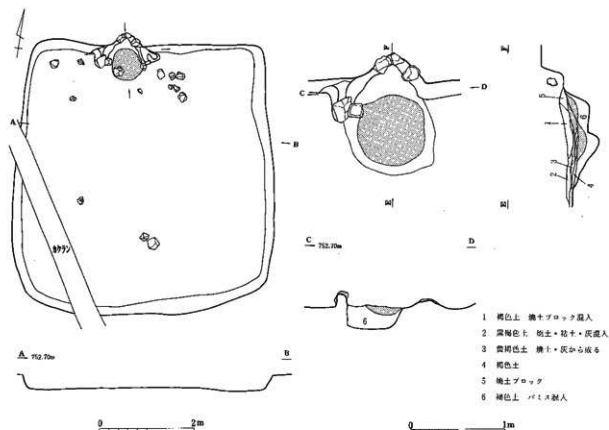
遺物と時期：図化できた土器は甕の底部(335図1)のみである。遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

47号竪穴住居跡(第297図、PL76) 位置 VO-19

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置する。石を抜き取った跡や面取りされ被熱した軽石などの破片がいくつか見受けられることから、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。Pitは主柱穴と考えられる4基と南壁の中央に入り口に関わりと考えられる1基が認められるが、主柱穴のうち南壁側の2基は掘形で認められた。貯蔵穴・周溝は認められない。掘形は壁際が浅く、中央部を深く掘り込んでいる。



第232図 45号竪穴住居跡

遺物と時期：鉄製品は鎌（353図9・10）、紡錘車（354図21）が出土している。墨書土器が2点（335図6・7）認められ、(6)は「本」・(7)には「十二」が記されている。遺構の時期は9c後半の前葉と考えられる。

48号竪穴住居跡（第300図、PL47） 位置 VT-4

86・635号土坑・67・68号建物跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先端の抜き取り痕や周囲に軽石が見られることから袖先に石を用いて粘土で築いたものと思われる。燃焼部には軽石の支脚が元位置で残っていた。

施設：床面は平坦で、カマド周囲と中央部が硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と思われるPitは4基、周溝は南壁と東壁の南半で確認されている。貯蔵穴・入り口は見られなかった。掘形は全体に浅く均一に掘り下げたものであった。

遺物と時期：出土した甕（335図6・8）の器肉は厚く、須恵器の蓋（3・4）には宝珠のつまみと顕著なかえりが認められる。遺構の時期は7c末と考えられる。

49号竪穴住居跡（第296図） 位置 VO-17

65号住居跡より新しく、5号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端と思われる位置に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。燃焼部内から甕が2個体分出土したが、煙道に用いられたものか煮炊きに使用されていたものであったのか、崩落により原位置を留めないため明確に出来なかった。

施設：床面は平坦で、カマド前から中央部が硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴は4基あったものと考えられるが、南東の1基は確認できなかった。南東部では床面が見られないことから、おそらく住居廃絶後の粘土採取により消滅したものと思われる。貯蔵穴・周溝・入り口は認められない。掘形は壁際に

比べ中央部が深いものと思われるが、再三の粘土採掘により乱されており明確ではなかった。
遺物と時期：(2)の土師坯の体部には「十」の刻書が認められる。8個の須恵坯の底部調整は糸切り（336図5・12）、回転ヘラ切り（6・7・8・9）、ナデ（10・11）が混在している。遺構の時期は8c前半の後葉と考えられる。

50号竪穴住居跡（第296図、PL76） 位置 VO-21

5号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し、炊き口の両側には石を立てその上を粘土で覆って構築したものと考えられる。燃焼部には長さ30cm程の扁平な石が検出されたことから、天井石の崩落と考えられる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴は3基が確認されているが、もう1基は北西部が調査区外のため不明である。本来4基存在したものと推測される。周溝・入り口は認められず、貯蔵穴は他遺構の重複と調査区外ということにより存否は不明である。掘形は浅い凹凸が見られる程度である。
遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

51号竪穴住居跡（第300・301図、PL77） 位置 VT-10

14・79号住居跡・67・68号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残り粘土で構築したものと考えられる。石材使用の痕跡は見られなかった。

施設：床面は平坦で、南西部を除いて全体に硬くしまっていた。Pitは4基の主柱穴とカマド東側の貯蔵穴と考えられる1基が確認されている。周溝は残存部では全周する。入り口は認められていない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は7c後半と考えられる。

52号竪穴住居跡（第301図、PL76） 位置 VIP-6

376・377・378・382・396号土坑より新しく、23号住居跡・81・82・83・639号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置する。袖は地山を掘り残り、その上に土器片を補強のための芯として使用し粘土で構築したものと考えられる。燃焼部には支脚を抜き取った痕跡が確認されている。

施設：床面は平坦で、壁際でやや軟弱であるが、全体に硬くしまっていたといえる。主柱穴と考えられるPitが4基、東壁際には壁柱穴が3基検出された。南壁中央には入り口に関わると考えられるPitが1基認められた。貯蔵穴・周溝は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：須恵坯蓋模倣タイプの坯が主体をしめる。床面出土の甕（337図10）の口縁部外面には煤の付着が観察された。遺構の時期は7c前半と考えられる。

53号竪穴住居跡（第303図） 位置 VT-25

39号住居跡より新しく、3・7号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、西側半分は7号住居跡との重複により欠落している。残る右袖は乳赤色の粘土で大まかな形を作り、さらにその表面に白色の粘土を貼っているのが観察された。また、煙道部・燃焼部奥壁にも乳白色の粘土を貼り付けて補強としていたようである。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴は4基、周溝は残存部では全てに認められた。

貯蔵穴・入り口は不明である。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は鉄鏃(354図36・37)が出土している。須恵坏身(337図5・6)・蓋(7)が出土し、口縁中位から外反する坏(9)が見られ、床面直上から外面が丁寧に磨かれた胴張りの甕(10)が出土している。遺構の時期は7c中葉と考えられる。

55号竪穴住居跡(第301図) 位置 VIP-2

42号住居跡より古い。42号との重複、調査区外のため全貌は不明。

カマド：不明

施設：平坦な床面に柱穴状のPitを1基検出した。他は不明。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

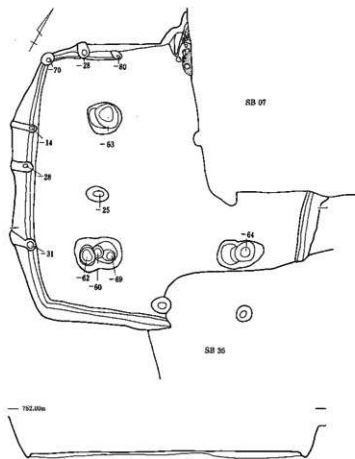
56号竪穴住居跡(第233・302図、PL77) 位置 VY-4

73号住居跡・392・364号土坑より新しく、7・35号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、粘土主体で燃焼部・煙道は壁面を掘り込んで構築されている。東側を7号住居跡に壊されており詳細は不明である。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴は3基、西壁・北壁には壁柱穴が6基、南壁中央には入り口に伴うと考えられる深さ40cmのPitが1基検出された。主柱穴の3基はそれぞれ重複の痕跡が認められ、建て替えの可能性が考えられる。周溝は北壁の中央を除き全周する。掘形は全体に浅いが中央部が高く、周囲が深いタイプといえる。

遺物と時期：(338図8)の須恵蓋の外面には線刻が施され、(9)の長胴甕の外面には多量の粘土が付着していた。甕の甕の胴部には内部から穿たれた穿孔が一つ観察される。遺構の時期は7c末と考えられる。



第233図 56号竪穴住居跡

57号竪穴住居跡(第303図) 位置

VY-9

1号溝より新しく、35号住居跡・28号土坑より古い。本跡南半は田切り谷によって削られている。

カマド：北壁の中央に位置し、明瞭に確認できたのは火床のみで、本体上部は崩落し右袖・燃焼部にあたる箇所には構築材の粘土が散在し、左袖は35号住居跡に壊されている。

施設：床面は平坦で、全体に硬化は弱い。主柱穴と考えられるPitは2基

確認され、周溝は残存する部分全てで検出されている。他の施設については不明である。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

58号竪穴住居跡（第304図） 位置 VIP-21

1号溝・9号性格不明遺構より新しい。南側の田切り谷によってかなりの部分を削り取られている。

カマド：不明。

施設：床面は平坦で、硬化は断面で認められたが面的な広がり確認できなかった。Pit 1基と東壁の一部に周溝が認められている。他の施設については不明である。掘形は浅く不規則なもので、地山との境が不明瞭であった。

遺物と時期：坏が2点（338図1・2）と須恵製の小片が図化できた。遺構の時期は6c後半～7c初頭と考えられる。

59号竪穴住居跡（第304図、PL77） 位置 VIP-17

6号性格不明遺構より新しく、58号住居跡・9号性格不明遺構より古い。東半は田切り谷、南側は58号住居跡に削られ全貌は不明である。

カマド：北壁の中央のやや東寄りに位置し、袖の先に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されていたものと思われる。崩落した粘土が右袖周辺に確認され、旧状を留めた粘土はわずかであった。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。支柱穴と考えられるPitは3基、建て替え前のものと思われるPitが2基検出されている。周溝は残存する西・北壁際に認められた。他の施設については不明である。掘形は認められない。

遺物と時期：内面に放射状の暗文の施された坏（339図2）と須恵器を模倣したと考えられる坏(3)が出土していることから、遺構の時期は6c後半と考えられる。

60号竪穴住居跡（第296図） 位置 VO-16

336号土坑より古い。西側は調査区外で全貌は不明である。

カマド：北壁の中央に位置し、粘土を主体に構築されている。

施設：床面は平坦で、全体に軟弱である。支柱穴は2基確認されたが、周溝は認められず、他の貯蔵穴・入り口などの施設は不明である。掘形は認められない。

遺物と時期：土器の出土は少なく、坏（339図1）・甕類（2・3・4）が図化できた。遺構の時期はミガキの施された坏(1)、底部が張り出す甕(2)から6c代と考えられる。

61号竪穴住居跡（第297図） 位置 VO-9

2号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置する。左袖は崩落が著しく、右袖の残存状況から粘土を主体的に使用して構築されたものと考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部はやや硬く、周辺部は軟弱であった。北東コーナーに貯蔵穴と思われるPitが1基確認されている。周溝は北東コーナーを除き残存部で認められる。他の施設・掘形は認められない。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

62号竪穴住居跡（第297図） 位置 VO-5

63号住居跡より新しく、41号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、石を多用した石組みの構造と考えられる。燃焼部には加工した二つの軽石製の支脚が縦列の状態で見出されていることから、二つの煮沸具を横に並列する、いわゆる「東日本型」とは異なり、縦に並べて使用されていたものと考えられる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴と思われるPitは3基で、北東部のPitは攪乱により消滅したものと思われ検出できなかった。貯蔵穴・周溝・入り口は認められていない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：須恵坏（339図1・2・3）・須恵高台坏（4・5）・長頸壺(6)・大甕(7)が出土している。遺構の時期は9c初頭と考えられる。カマドの灰からは哺乳類の小骨片が見出されている。

63号竪穴住居跡（第298図） 位置 VO-10

32・62号住居跡より古い。

カマド：不明。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。基主柱穴と思われるPitは3基で、北東部のPitは攪乱により消滅したものと思われ検出できなかった。南壁中央には入り口に関係すると思われる方形のPitが見出されている。周溝・貯蔵穴は認められない。掘形は中央部がやや高く、周囲が深いタイプである。

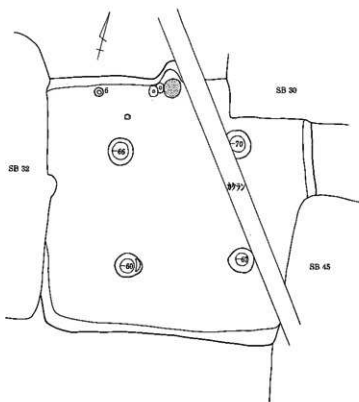
遺物と時期：石製品は紡錘車（355図8）が出土している。須恵坏（340図1・2）・蓋(3)などが出土している。遺構の時期は9c初頭と考えられる。

64号竪穴住居跡（第234・298図、PL77） 位置 VO-15

66号住居跡より新しく、30・32・45・67号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、右袖は攪乱によって壊され不明である。左袖の先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で覆って構築されたものと思われる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴と考えられるPitが4基認められている。貯蔵穴・周溝・入り口については認められなかった。



第234図 64号竪穴住居跡

掘形は全体に不規則な凹凸が認められる。

遺物と時期：石製品は敲石（355図4）が出土している。内黒の坏（340図1）・鉢(6)、須恵环（2・3・4）などが出土している。遺構の時期は8c中葉と考えられる。

65号竪穴住居跡（第296図） 位置 VO-17

9・49号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置する。袖は地山を掘り残し、先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を用いて粘土で構築されたものと思われる。支脚は燃焼部のやや奥壁寄りに残されていた。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。Pitは主柱穴が4基、北東コーナーには貯蔵穴と思われる1基が検出できた。周溝・入り口は認められなかった。掘形は中央部をわずかに掘り込んだものである。

遺物と時期：須恵环（340図1・2）の底部にはヘラケズリが施されている。カマドから甕（4・5）が出土し、(5)の甕の底部には木葉痕が施されていた。須恵环(1)と土師器甕(5)には時間的な開きが感じられるが、遺構の時期は7c後半～8c初頭と位置づけられる。

66号竪穴住居跡（第298図） 位置 VO-15

32・64号住居跡・27号建物跡より古い。

カマド：32・64号住居跡との重複により消失している。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは4基確認された。周溝は残存部で全周している。貯蔵穴・周溝・入り口は認められない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：坏（340図1・2）から遺構の時期は6c後半と考えられる。

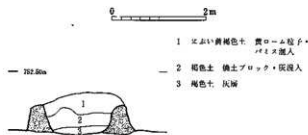
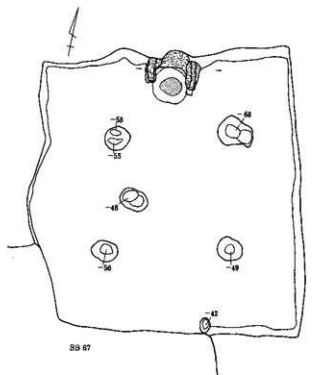
67号竪穴住居跡（第298図） 位置 VIK-11

64号住居跡より新しく、45・68号住居跡（68）より古い。

カマド：45・68号住居跡との重複により消失している。

施設：主柱穴が4基、入り口に関わると考えられるPitが南壁中央に1基、南西コーナー付近には補助穴2基が検出されている。周溝は北壁を除き認められる。掘形は中央部が周囲より深い形状である。

遺物と時期：坏（340図1・2）が出土しており、(2)はいわゆる畿内系暗文坏と考えられる。遺構の



第235図 68号竪穴住居跡

時期は7c末～8c初頭と考えられる。

68号竪穴住居跡（第235・298図、PL77） 位置 VIK-11、

67号住居跡より新しく、30・45号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端に石（軽石）を置いて粘土で構築されたものと思われる。

施設：床面は平坦で、カマド周辺と中央部が硬く、周辺部は軟弱であった。支柱穴が4基、南壁中央の東寄りには入り口に関わりと考えられるPitが1基検出されている。また、床面中央の西寄りに1基のPitが認められたが、用途は不明である。貯蔵穴・周溝は認められない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。掘形の調査で北東部に粘土を採取した跡が検出されたが、本跡に伴うものか古いものか不明である。いずれにしても本跡より新しい時期のものではない。

遺物と時期：半球形の坏（340図1）・薄手の甕（2・3）が出土している。遺構の時期は8c前半と考えられる。

69号竪穴住居跡（第298図、PL77） 位置 VIK-6

37・91号建物跡・652・653・654号土坑より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端と思われる位置に石の抜き取り痕が認められることから、石を用いて粘土覆って構築されたものと思われる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。柱穴や周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：厚手で口縁部の外反の少ない甕（340図1）が図化できた。遺構の時期は7c後半と考えられる。

70号竪穴住居跡（第300・301図） 位置 VT-15

47号建物跡より新しく、24号住居跡・4号性格不明遺構より古い。

カマド：北壁の中央に位置したものと考えられるが、24号住居跡4号性格不明遺構により大部分が破壊され左袖の一部を認めただけである。残存する箇所から袖は地山を掘り残し、本体は粘土で構築したものと考えられる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。支柱穴と考えられるPitは3基確認されている。本来は北東部にも1基存在したと予想されるが、4号性格不明遺構との重複で消失している。周溝・入り口などは認められず、掘形は施されていない。

遺物と時期：石製品は白玉（355図14）が出土している。坏は稜の明瞭な（340図1・2・3・4）、器高のある(5)が出土している。遺構の時期は6c後半と考えられる。

71号竪穴住居跡（第296図） 位置 VO-11

36号建物跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し上部は粘土で構築したものと考えられる。袖石などの芯材やその痕跡は認められていない。両袖の間隔が比較的広いことから、煮沸具を横に並列させて使用する「東日本型」のカマドの可能性が考えられる。

施設：床面は平坦で、硬化は全体に軟弱なものであった。柱穴・周溝などの施設は認められなかった。掘形は全体に浅く規則性のないものであった。

遺物と時期：カマドから出土した甕（341図1）のみ図化できた。この甕は器肉が薄く、口縁部の屈曲は

強い「く」の字状を呈している。遺構の時期は8c末～9c初頭と考えられる。

72号竪穴住居跡(第304図) 位置 VIP-16

76号住居跡・210・421・448・449号土坑より古い。

カマド:北壁の西寄りに位置するが、左袖・煙道は重複する土坑に破壊された旧状は不明である。残された火床・右袖から粘土主体に構築されたものと考えられる。

施設:床面は平坦で、硬化は全体に軟弱である。柱穴・周溝などの施設は認められず、掘形も確認できなかった。

遺物と時期:図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

73号竪穴住居跡(第302図、PL78) 位置 VY-3

390・391号土坑より新しく、43・56号住居跡121・120・554・556号土坑より古い。

カマド:北壁の中央のやや東寄りに位置し、袖は地山を掘り残し、先端には石を立て上部を粘土で覆って築いたものと思われる。燃焼部中央には支脚を抜き取った痕跡が認められた。

施設:床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。主柱穴が4基、カマドの右脇には貯蔵穴と考えられるPitが1基検出されている。周溝は西・北・東・南壁の各壁際の一部に認められるがコーナーでは検出されない。掘形はカマド周辺が高く、他は全面を10～20cm掘り下げている。

遺物と時期:床面から環(341図1)・小型甕(2)・鉢(3)が出土している。遺構の時期は6c末～7c初頭と考えられる。カマドの灰からはフナ、コイ科、鳥類の小骨片が検出されている。

74号竪穴住居跡(第303図、PL78) 位置 VT-20

47・66・80号建物跡・66号土坑より古い。

カマド:北壁の中央に位置している。住居廃絶時の壊し方が念入りであったと思われる、右袖の一部は検出できたが左袖・燃焼部・煙道の旧状は不明である。残存箇所から粘土を主体に構築されたものと考えられる。

施設:床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。南壁中央の床面にPitが認められたが、入り口に伴うものとは考えられず用途は不明である。周溝は東壁と南壁の際で確認できたが、北壁・西壁では見られなかった。掘形は全体を20cmほど掘り下げた平坦な底面である。

遺物と時期:カマドから出土した環(341図1)から、遺構の時期は7c前半と考えられる。

76号竪穴住居跡(第303・304図) 位置 VIP-16

72号住居跡・447号土坑より新しい。

カマド:崩落の痕跡も認められなかったことから、意図的に設けられなかったものと判断される。

施設:床面は平坦で、硬化は覆土よりやや硬い程度であった。Pitは南東コーナーの壁中に1基確認された。周溝・入り口などの施設は認められない。掘形は認められなかったが、床面下に本跡構築以前の粘土探掘を行ったと見られる土坑状の凹が検出された。

遺物と時期:須恵器大甕(341図1)の口縁部が出土している。遺構の時期は9c初頭と考えられる。

77号竪穴住居跡(第304図) 位置 VIP-11

394号土坑より新しく、19号住居跡・8号性格不明遺構・371・384・386号土坑より古い。

カマド:北壁の中央に位置し、粘土を主体的に使用し構築されたものと考えられる。煙道は本遺跡では比

較的長さがあるが、先端部は土坑との重複で不明である。

施設：床面は平坦で、ほぼ全面が硬化している。主柱穴と考えられるPitは4基、カマドの左脇には貯蔵穴であろうか1基のPitが検出されている。周溝・入り口は認められない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：石製品の紡錘車(355図7)は南東コーナーの床面から出土している。土器では半球形の坏(341図1)やや厚手の甕(2・3)が出土している。遺構の時期は7c後半と考えられる。カマドの灰からはニシン科、海産種の可能性の高い貝類、鳥類の小骨片が、覆土からは炭化樹種のクヌギが検出された。

78号竪穴住居跡(第295図) 位置 VJ-25

重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央のやや東寄りに位置し、左袖先端に石が認められたことから、袖先に石を立て上部に粘土を用いて構築されたものと思われる。煙道部は攪乱により不明である。

施設：壁面の傾斜は緩やかである。壁面近くの土層は地山をブロック状に混入することから、住居廃棄時に意図的に壁を崩したものと考えられる。本遺跡の竪穴住居跡の壁面は垂直あるいは垂直に近いものが多く、緩やかな例は極希である。柱穴・周溝などの施設は認められない。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプで凹凸が著しい。

遺物と時期：鉄製品は穂摘み具(353図12)が出土している。図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は7c末～8c初頭と考えられる。

79号竪穴住居跡(第301図) 位置 VT-10

14・51号住居跡より古い。

カマド：検出されなかった。

施設：本跡は上部を14・51号住居跡に壊されているため、検出できたのは両住居跡より深さのあった方形を呈する掘形部分と一部の壁である。掘形は高低差は少ないが中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は古墳時代後期と考えられる。

84号竪穴住居跡(第298図) 位置 VIK-12

68号住居跡・25号建物跡より古い。東側のほとんどは調査区外である。

カマド：検出されていない。

施設：床面はやや凹凸があり、硬化は全体に弱い。周溝は西壁と南壁の一部で検出された。柱穴・入り口などの施設は認められない。掘形は施されていない。

遺物と時期：時期を確定できる土器は見られず、遺構の時期は不明である。

101号竪穴住居跡(第236・290・293図、PL78) 位置 VI-15

188・192号建物跡より新しく、182号建物跡・1035・2022号土坑より古い。

カマド：北壁中央の東寄りに位置し、石の抜き取り痕が認められないことから、粘土を主体的に用いて構築されたものと思われる。燃焼部・煙道は壁を掘り込み遺構外に張り出した形状で、袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けのいわゆる「東日本型」と考えられる。

施設：床面にはやや凹凸があり、硬化は全体にやや軟弱であった。主柱穴は4基、それ以外に各コーナーには4基のPitが認められたが、深さが浅く形状も柱穴とするには疑問があり用途は不明である。カマド

右脇には貯蔵穴と考えられるPitが1基検出されている。周溝は南壁中央と南東・南西・北西コーナーを除いて確認された。南壁中央の壁際には入り口に伴うと思われる3基のPitが認められている。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品は刀子(354図16)が出土している。石は砥石。土器は薄手で口縁部の屈曲の強い甕(341図3・4)が認められる。遺構の時期は8c末と考えられる。

102号竪穴住居跡(第237・290図、PL78) 位置 V J -6

127・178号建物跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。火床部の上には天井に使用されたと考えられる面取りされたレンガ状の軽石が検出されている。

施設：床面は平坦で、全体に硬く特に東側は堅牢であった。主柱穴と考えられる4基のPitが各コーナーで検出されているが、深さは21~33cmと浅く補助的な柱穴であった可能性が考えられる。周溝・入り口などの施設は認められない。掘形は凹凸が著しく、規則性は認められない。

遺物と時期：鉄製品は錘(354図38)が出土している。高台杯(341図3)が床面直上で出土し、やや大形の蓋(4・5)が認められている。遺構の時期は8c末~9c初頭と考えられる。

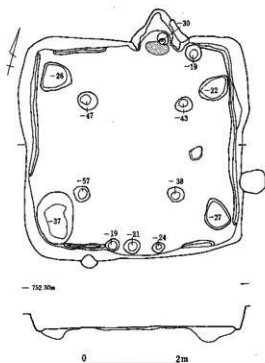
103号竪穴住居跡(第238・290図、PL78) 位置 VI-5

142号住居跡・1570号土坑より新しい。

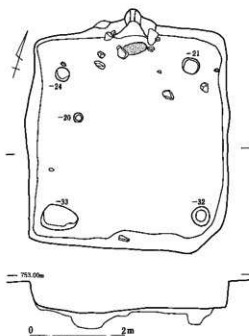
カマド：北壁の中央に位置し、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴のPitが4基、南壁中央には入り口に伴うと考えられるPitが1基検出されている。周溝は南壁と西壁の南半分で確認されたが、他の箇所では認められなかった。貯蔵穴に相当する施設は認められなかった。掘形は東側に比べ西側の方が深く掘られているが規則性のあるものではない。

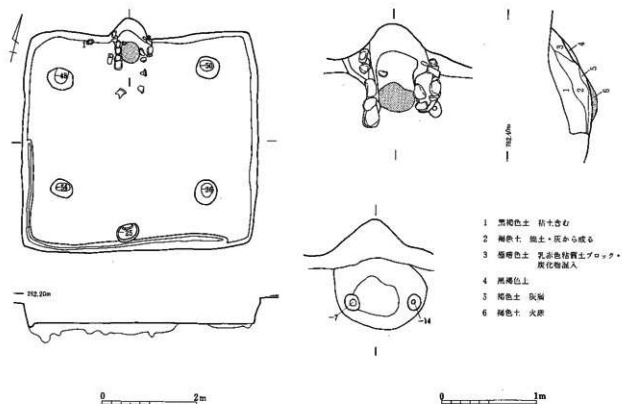
遺物と時期：鉄製品は刀子(354図17)が、石製品は砥石(355図3)が出土している。半球形の杯(341図1)と口縁部が強く屈曲する甕(2)が認められている。遺構の時期は7c末と考えられる。



第236図 101号竪穴住居跡



第237図 102号竪穴住居跡



第238図 103号竪穴住居跡

104号竪穴住居跡 (第239・291図) 位置 V J-12

118・119号住居跡・181号建物跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先に石を用いて粘土で築いたものと思われる。燃烧部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けのいわゆる「東日本型」と考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは4基、南東・南西部にはそれぞれ1基の補助穴と思われるPitが検出されている。また、貯蔵穴と考えられるPitが北東コーナーの床面から、入り口に伴うPitが南壁中央で確認された。周溝は東壁中央の一部で認められた。掘形の底面は凹凸があるが、壁際は浅く、内側には本跡より一回り小さな方形の住居跡を入れ子状にしたような凹が見られ、東壁と南壁際には6基の補助穴と考えられるPitが検出された。本跡建て替え前の痕跡と考えられる。

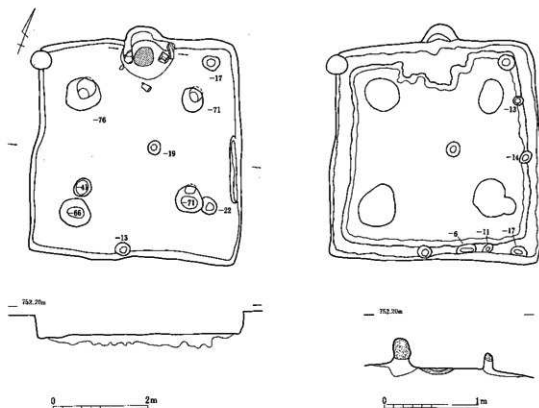
遺物と時期：鉄製品では釘(354図24)が出土している。坏は須恵主体(342図1～4)で口縁部の屈曲の強い壺(8・9)、須恵器の蓋(5)・小形の壺(7)が出土している。遺構の時期は8c末と考えられる。

105号竪穴住居跡 (第240・294図、PL78) 位置 V J-18

127・130・135・136号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、残存する袖内部・上部には数個の石材が残り、周辺の床面にも構築材と思われる石材が散在していたことから、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。燃烧部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの「東日本型」の可能性が考えられる。煙道の先端には長胴壺が使用されていた。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPit4基の他に6基のPitが検出されている。その内南壁の中央寄りに認められた2基は入り口に関わるものと思われる。北



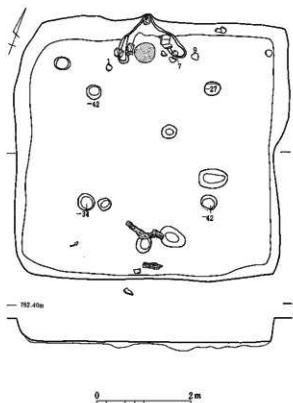
第239図 104号堅穴住居跡

西コーナーの1基は貯蔵穴とするには小形で設置場所にも疑問がある。残りの3基と共に用途は不明である。周溝は認められなかった。掘形は全体的に浅いが、中央部が高く、周囲がやや深いものと捉えられる。

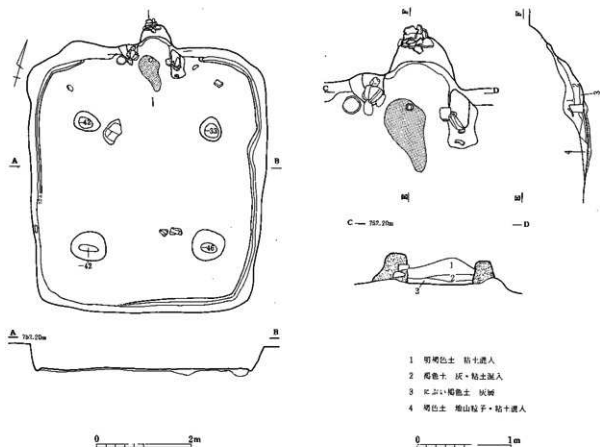
遺物と時期：鉄製品では不明刃物(354図29)が出土している。土師・須恵器の坏の他、小型甕342図(7)・台付甕(9)・中型甕(8)・大形甕00など甕にバリエーションが認められる。遺構の時期は8c末～9c初頭と考えられる。南壁中央の床面上からスギ、クヌギ、クリ、ナラが出土している。

106号堅穴住居跡(第241・294図、PL 78) 位置 VJ-17

134・138・139号住居跡より新しい。カマド：北壁の中央に位置し、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。煙道は燃焼部から緩やかな傾斜で立ち上がり、北壁のラインより約70cm外側に掘り込んで作られ、先端は長胴甕を埋めて使用されている。燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置



第240図 105号堅穴住居跡



第241図 106号竪穴住居跡

き二つ掛けの「東口本型」の可能性が考えられるが、支脚の出土は1個であった。左袖の脇には深さ10cmのPitが認められ、その覆土は灰を主体としている。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。支柱穴と考えられるPitは4基認められ、周溝は南西コーナーを除き全周している。貯蔵穴・入り口などは認められていない。本跡周辺の地山は他に比べ硬いためか、掘形は施されていない。

遺物と時期：炭化したクヌギ覆土で認められている。須恵環(342図1～7)が主体的に見られた他、口縁部が「コ」の字状に屈曲する甕(13・14)・突帯付四耳壺の胴部が認められる。遺構の時期は9c初頭と考えられる。

107号竪穴住居跡(第291図) 位置 V J-13

重複はなく単独である。

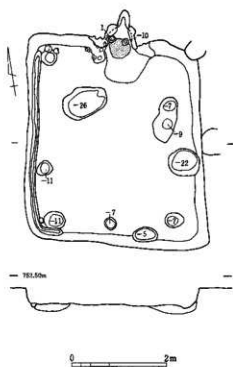
カマド：検出されていない。設置されていないものと考えられる。

施設：床面にはやや凹凸があり、軟弱であった。柱穴・周溝などの施設は認められない。掘形は深さ5～15cmの不規則なものであった。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は8c中葉と考えられる。

108号竪穴住居跡(第242・290図、PL79) 位置 V J-7

175号建物跡・1362号土坑より新しく、180号建物跡より古い。



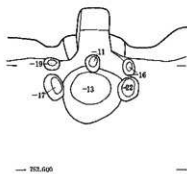
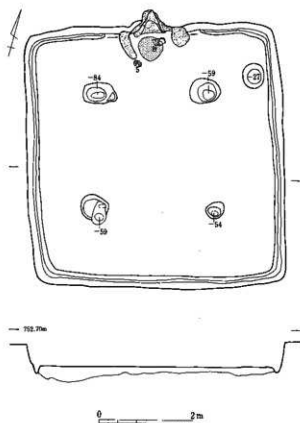
第242図 108号竪穴住居跡

カマド：北壁の中央に位置し、粘土を主体的に用いて構築されたものと考えられる。燃焼部・煙道は外側に張り出している。燃焼部の幅・袖の間隔が広いことから横置き二つ掛けの「東日本型」と考えられ、火床の奥壁側には2基の支脚の抜き取り痕が認められている。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。Pitは9基認められ、入り口に伴うと考えられる南壁中央の1基以外は、規則性を認めることが難しく主柱穴・補助穴の特定が出来なかった。貯蔵穴は北西コーナーのPitが考えられるが、位置や規模から可能性としては低いと捉えたい。周溝は西壁で認められたが、他の箇所では認められなかった。掘形は中央部は掘り込んでおらず、周囲のみ掘り込んでいる。

遺物と時期：鉄製品は毛抜き形製品（354図26）

が出土している。床面直上から出土した坏（343図1）には「大伴」の墨書が記されていた。遺構の時期は8c末と考えられる。



173.60m



0 2m

第243図 109号竪穴住居跡

109号竪穴住居跡（第243・295図、PL79）位置 V J-15

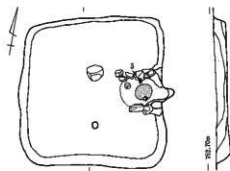
重複はなく単独である。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の掘形から石の抜き取り痕が認められたことから、石を芯材とし粘土で

覆って構築されたものと思われる。火床の奥壁寄りには支脚の抜き取り痕が1基確認された。

施設：床面は平坦で、硬化は全体に認められ、貼床に黄褐色土を用いていた。主柱穴と考えられるPitは4基、北東コーナー寄りには1基のPitが検出されている。周溝は壁際の全てで確認された。入り口は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：金属製品では蛇尾(354図44)が出土している。3点の須恵坏のうち(343図2・3)の底部にはナデが施されている。遺構の時期は8c初頭と考えられる。



第244図 110号竈穴住居跡

110号竈穴住居跡(第244・292図、PL79) 位置 VE-25

重複はなく単独である。

カマド：東壁の中央に位置し、左袖に3個、右袖に6個の石が認められたことから、石組みの構造と考えられる。燃焼部には面取りされた軽石製の支脚が認められた。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。柱穴・貯蔵穴・周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は規則性がなく浅い凹凸が認められた。

遺物と時期：須恵坏(343図1・2)と甕(3・4)が出土し、(2)の坏には墨書が認められる。遺構の時期は9c末と考えられる。

111号竈穴住居跡(第287図、PL79) 位置 VE-6

重複はなく単独で、北側は谷の侵食により削られている。

カマド：検出されなかった。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPit4基と補助穴2基が確認された。周溝は南壁中央と東壁の中央部分を除き確認された。貯蔵穴・入り口は認められなかった。掘形は中央部と南壁側が高く、北半の壁際が深いタイプである。

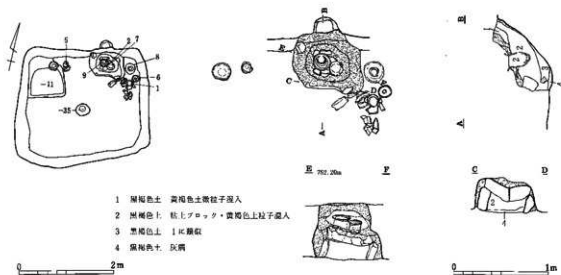
遺物と時期：須恵器の蓋(343図1)と甕(2)が認められ、(1)の蓋天井石には糸切り痕が認められる。遺構の時期は9c後半と考えられる。

112号竈穴住居跡(第245・287図、PL79・80) 位置 VE-12

重複はなく単独である。

カマド：北壁の東寄りに位置し、左右の袖先端には面取りした石を立て、その上には天井石がのせられ、本体を粘土で覆って築かれている。その本体は崩落を免れ旧状を良好に留めている。燃焼部には二つの甕が横に掛けられたままの状態で残っていることから、横置き二つ掛けのいわゆる「東日本型」の構造である。支脚の痕跡が燃焼部の奥壁寄りに認められ、炊き口近くの床面上には六角に面取りされた支脚石が出土している。

施設：床面は平坦で、硬化は壁際を除いたカマド前面と中央部が非常に硬い。柱穴は床面上では検出されなかったが、掘形の調査で中央部に深さ35cmのPitが認められている。北西コーナーには方形の貯蔵穴と考えられる深さ11cmの掘り込みが検出されている。周溝・入り口は認められない。掘形は壁際が平坦で、中央部分は周囲より10cm程深く不規則に掘り込んでいる。



第245図 112号竪穴住居跡

遺物と時期：石製品ではこも編み石(355図5)が出土している。土器ではカマド燃焼部に長胴甕(343図9)と小型甕(7)が掛けられたままの状態に残り、住居廃棄時の旧状を留めていると考えられる。長胴甕の内部には内黒の暗文環(3)が見られ、小型甕の上には内黒環(2)が蓋をしたような状態で置かれ内部は空洞の状態であった。カマドの右脇には(8)の胴張り甕が底部を打ち欠かれた状態で床面上に置かれていた。遺構の時期は6c後半と考えられる。カマドの灰からは石貝と同定された貝類の小片が検出されている。

113号竪穴住居跡(第246・288図、PL80) 位置 VE-13

101号建物跡より古い。

カマド：北壁の中央の西寄りに位置し、袖先端の炊き口には芯材の石が立てられ、その上には天井石が旧状を留めていた。袖の基部は地山掘り残して、本体は粘土を主体的に用いて築かれている。煙道は管状に残り、煮沸具の掛け口もほぼ旧状を留めた状態が検出できた。支脚の痕跡は認められなかった。

施設：床面は平坦で、全体に軟弱であった。柱穴・周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は全体に中央部が高く、周囲が深い凸レンズ状の形状であった。

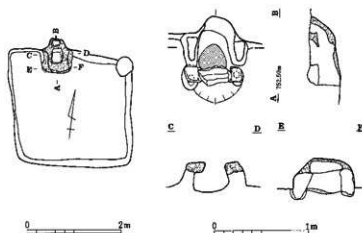
遺物と時期：図化できたのは環(344図1)の1点である。遺構の時期は7c後半と考えられる。

114号竪穴住居跡(第247・292図、

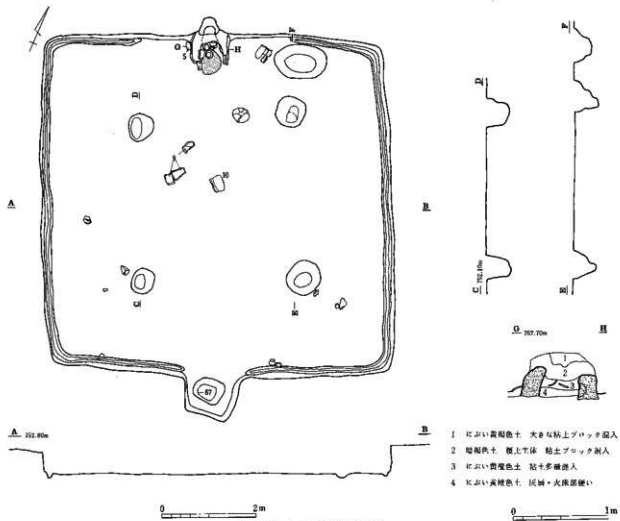
PL80) 位置 VE-25

2006号土坑より新しく、117号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端には石を芯材として立て、粘土主体に構築されている。天井は炊き口では崩落により認められなかったが、煙道側では一部が旧状を留めていた。燃焼部の火床面上には灰層が10cmほどの厚さで堆積し、奥壁側では



第246図 113号竪穴住居跡



第247図 114号壁穴住居跡

支脚の抜き取り痕が認められている。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが4基、カマドの右脇には貯蔵穴が1基確認されている。南壁中央部には外側に方形に突出した入り口が認められ、その突出部の床には深さ67cmのPitが認められている。周溝はカマド周辺と入り口部分を除き検出された。掘形は認められず、地山の上に薄い貼床が施されていた。

遺物と時期：坏4点(344図1～4)、甕・瓶(5～11)が出土している。遺構の時期は6c後半と考えられる。

115号壁穴住居跡(第248・288図、PL80) 位置 VE-14

133号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の芯材に軽石を多用し、粘土で覆った石組みの構造と考えられる。右袖の上部には炊き口の天井に使われたと考えられる面取りされた軽石が検出されている。支脚は認められなかったが、抜き取った痕跡が燃焼部の奥壁側で確認された。

施設：床面は平坦で、硬化は中央部とカマド前面で顕著であったが、周辺部は軟弱であった。柱穴・周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は全体を均一に掘り凹めた平坦なものであった。

遺物と時期：坏(344図1)・小型甕(2)・甕(3・5)・須恵器大甕(4)が出土している。遺構の時期は7c

末と考えられる。炭化樹種のスギが検出されている。

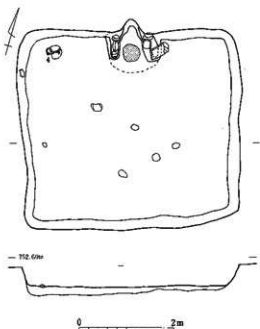
116号竪穴住居跡(第249・288図、PL80・81) 位置 VE-19

62号性格不明遺構より新しい。

カマド：北壁の中央西寄りに位置し、本体は壁を掘り込んで構築され、外側に突出した形状である。袖先端の炊き口にあたる箇所には袖石が立てられ、その上には天井石が乗せられた状態で認められ、燃焼部には支脚を抜き取った痕跡が検出できた。

施設：床面にはやや凹凸があり、硬化は中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが4基検出されたが、貯蔵穴・周溝・入り口などは認められなかった。掘形は全体を均一に掘り進めたものであった。床面下から周溝状の溝が認められたが、建て替え前のものと考えられる。

遺物と時期：須恵蓋(345図1)・土師坏(2)・須恵大甕(3)の口縁部が出土している。須恵蓋(1)から遺構の時期は7c末～8c初頭と考えられる。



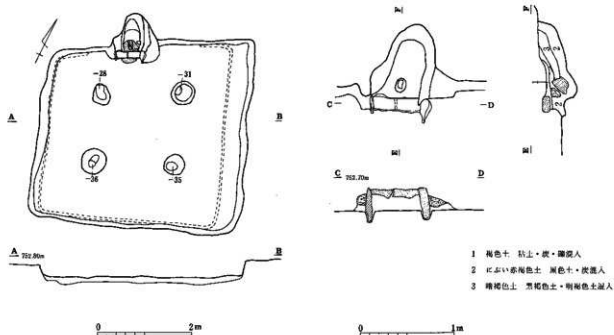
第248図 115号竪穴住居跡

117号竪穴住居跡(第292図) 位置 VJ-5

114号住居跡より新しい。

カマド：南東コーナーに位置する。崩壊が著しく焼土と構築材の石が数個検出されたが、上部の構造などは不明である。

施設：床面には凹凸が見られ、硬化は全体的に軟弱なものである。柱穴と考えられるPitは9基認めら



第249図 116号竪穴住居跡

れ、その内主柱穴と考えられるPitは北壁側の2基と南壁側の2基が相当すると思われ、他の中央部に見られる5基については不明である。残りの6基は壁柱穴と考えるのが妥当と考えられる。周溝・入り口については検出されていない。掘形は浅く、不規則な凹凸が見られた。

遺物と時期：「十二」と記された墨書土器(345図1)が認められるが、図化出来なかった他の破片から遺構の時期は11c中葉と考えられる。

118号竪穴住居跡(第250・291図、PL81) 位置 V J-12

1289・1292号土坑より新しく、104号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先に石の芯材を抜き取った痕跡が認められたことから、石を芯とし粘土主体に構築されたものと考えられる。現カマドの掘形調査でもう一つの火床が床面の中央寄りに確認されたことから、造り替えが考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが4基確認され、南西コーナーには深さ20cmの補助穴が1基、西壁と東壁際の周溝内には壁柱穴と考えられる13基の小Pitが認められている。また、カマドの左袖の脇には深さ12cmのPitが検出されている。周溝は北壁には認められないが、東・南・西壁で検出されている。入り口は認められなかった。掘形は比較的浅く平坦なものであった。

遺物と時期：環類(345図1・2)・甕(3)・須恵大甕(4)が出土している。遺構の時期は8c前半の後葉と考えられる。

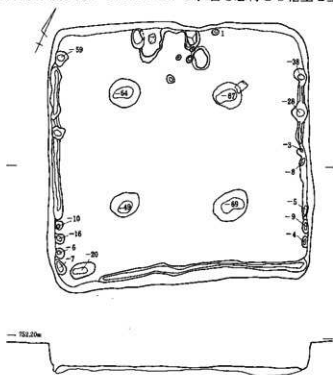
119号竪穴住居跡(第290図、PL81) 位置 V J-11

104号住居跡・181号建物跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖の先端に石の抜き取り痕が認められたことから、石を芯材とし粘土を主体に構築されたものと思われる。燃焼部の奥壁側には面取りされた軽石製の支脚が検出してきた。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは4基確認されている。貯蔵穴・周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は全体に凹凸が著しが、中央部が高く、周囲が深いタイプと考えられる。

遺物と時期：扁平な半球形の環(345図1)・須恵蓋(2)・甕(3・4)が出土している。遺構の時期は7c末～8c初頭と考えられる。



第250図 118号竪穴住居跡

120号竪穴住居跡(第251・292図、PL81)

位置 VIF-6

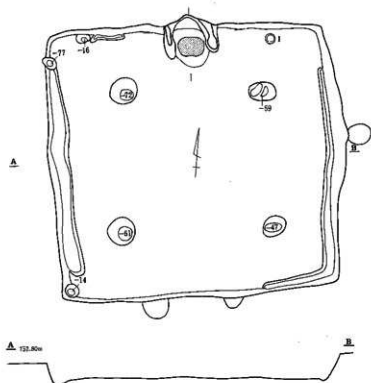
169・170号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。石

の抜き取り痕・周囲から石材の出土は認められない。火床の上面には灰層が薄く堆積していた。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが4基、南西・北西コーナーに壁柱穴であろうか補助的な機能の考えられるPitが3基検出されている。周溝は北東・北西コーナーと南壁の西側を除いてみとめられた。入り口・貯蔵穴は認められない。掘形の調査は行っていないため不明である。

遺物と時期：須恵環(345図1)・甕(2・3)が出土している。遺構の時期は8c前半の後葉と考えられる。カマドの灰からはタニシの小片が、炭化種実ではイネの小片が検出されている。



121号竪穴住居跡 (第289図、PL81)

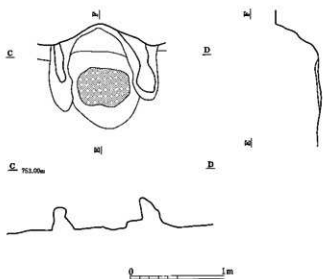
位置 VIA-11

140号住居跡より新しい。本跡東半は調査区外。

カマド：北壁の中央に位置し、粘土を主体的に使用し構築されたものと考えられ、石の抜き取り痕などは検出されていない。煙道は比較的長いものである。

施設：床面にはやや凹凸が見られ、硬化は地山を利用した中央部では顕著であったが、周辺部は軟弱であった。主柱穴は西半部の2基が確認され、調査区外の東半部に残る2基が存在するものと思われるが不明である。補助穴がカマドの手前と北西部に認められている。周溝は南壁際では認められず、北壁・西壁際で確認された。入り口・貯蔵穴は認められず、存否は不明である。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：環(345図1)・甕(2)が出土している。遺構の時期は7c後半と考えられる。



第251図 120号竪穴住居跡

122号竪穴住居跡 (第252・289図、PL81) 位置 VIA-1

141号住居跡より新しい。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先端に石の抜き取り痕が認められたことから、炊き口に石を芯材として用いて粘土で覆って構築されたものと思われる。支脚の抜き取り痕は検出されたが、支脚石は認められなかった。

施設：平面形は主軸に対して横に幅のある長方形を呈している。床面は平坦で、硬化は全体にやや弱いものであった。柱穴・周溝・入り口などの施設は認められていない。掘形は施されていない。遺物と時期：鉢(346図1)・甕(2)・甕(3・4)が出土している。(3・4)の甕などから遺構の時期は7c後半と考えられる。

123号竪穴住居跡(第289図) 位置 VE-20

157号建物跡より古い。

カマド：平面形は主軸に対して横幅のある長方形を呈している。北壁中央の西寄りに位置し、煙道・燃焼部は壁を外側に掘り込み張り出している。本体は粘土を主体的に使用し構築されている。火床の裏壁側には面取りされた軽石製の支脚が旧状を留めていた。

施設：床面にはやや凹凸があり、全体に軟弱であった。柱穴・周溝・入り口などの施設は不明であり、掘形は認められない。本跡西側には住居廃棄後に粘土採掘が行われ、西壁が大きく壊されている。

遺物と時期：環(346図1・2)が出土している。遺構の時期は7c初頭と考えられる。

124号竪穴住居跡(第253・289図、PL.81) 位置 VE-15

136号建物跡・1312・1314・1319・1320号土坑より新しく、51号性格不明遺構より古い。

カマド：平面形は主軸に対して横幅のある長方形を呈している。北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。

施設：床面は平坦で、全体に硬くしまっていた。南東コーナーに「コ」の字状の張り出しが検出されたが、本跡より新しい1320号土坑と判明した。周溝・入り口などの施設は認められなかった。掘形は不明である。

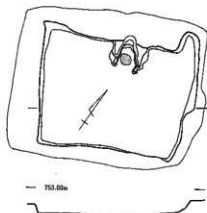
遺物と時期：環(346図1)が出土している。遺構の時期は7c代と考えられる。

125号竪穴住居跡(第284図) 位置 VIF-1

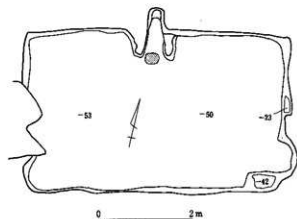
1169号性格不明遺構より新しく、65号性格不明遺構より古い。本跡の東壁は調査区外である。

カマド：北壁の中央に位置し、石を多用し粘土で覆った石組みの構造と考えられる。内部に構築材の石は見られるが旧状は留めていなかった。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitは4基確認されている。貯蔵穴・周溝・入り口などの施設は認められていない。掘形は全体に浅いが中央部が高く、周囲が深いタイプと考えられる。



第252図 123号竪穴住居跡



第253図 124号竪穴住居跡

遺物と時期：石製品は打製石斧（355図2）、ドーナツ状の石臼（355図20）が出土している。甕類（346図1・2・3）が出土し、そのうちの(1)の甕から遺構の時期は8c後半と考えられる。カマドの灰からは炭化種実のオオムギ、イネ類の小片が、覆土からは炭化樹種のアカマツが検出されている。

127号竪穴住居跡（第254・294図、PL82） 位置 V J-14

130・132・135号住居跡より新しく、105号住居跡より古い。

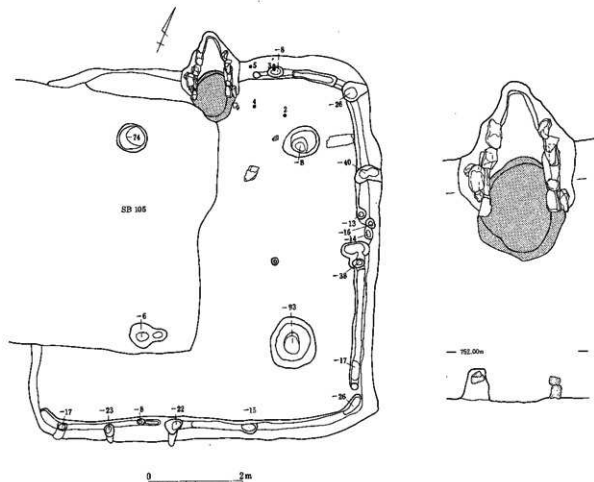
カマド：北壁の中央に位置し、燃焼部・煙道は外側に大きく張り出している。袖には石を多用し芯材とし粘土で覆って構築されていたものと考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴が4基確認された他、壁柱穴が14基認められている。周溝は北壁西半と東壁中央の一部を除き検出されている。入り口・貯蔵穴は認められなかった。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：鉄製品では鎌（353図11）が出土している。坏類では暗文坏（347図1・2）・須恵坏(3)が出土し、他に須恵蓋(4)・甕（5・6）が得られた。(1・2)の暗文坏は畿内系を模倣した在地産暗文坏と考えられる。遺構の時期は8c前半の後葉と考えられる。カマドの灰からは哺乳類、カエルの小骨片が検出されている。

128号竪穴住居跡（第255・293図、PL82） 位置 V J-21

137号住居跡・57号性格不明遺構より新しい。



第 254 図 127号竪穴住居跡

カマド：北壁の中央に位置し、袖は地山を掘り残し粘土で構築したものと考えられる。周囲に石が散見されることから芯材として用いられた可能性が考えられるが、石の抜き取り痕などは見られないため不明である。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴が4基、北東・北西コーナー寄りには2基の補助穴と考えられるPitが確認され、南壁中央には入り口に関わるPitが1基認められている。周溝は認められない。掘形は全体的に浅いが中央部が高く、周囲が深いタイプと捉えられる。

遺物と時期：図化可能な土器の出土はなかったが、破片から遺構の時期は9c初頭と考えられる。炭化樹種のスギ、ケヤキが覆土から検出された。

129号竪穴住居跡（第289図） 位置 VIA-6

1037・1074号土坑・粘採より古い。本跡東側は調査区外で全貌は不明。

カマド：粘土の崩落が北壁周辺の床面上に見られたことから北壁に位置すると考えられる。

施設：床面には凹凸があり、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。主柱穴と考えられるPitが2基、周溝は南壁・西壁で認められている。貯蔵穴・入り口については不明である。掘形は凹凸が著しく規則性は認められない。

遺物と時期：環（347図1）のみ図化できた。遺構の時期は7c末と考えられる。

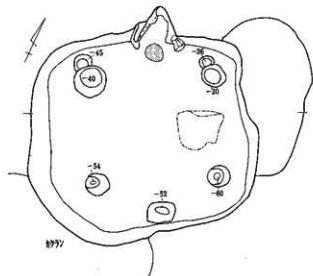
130号竪穴住居跡（第256・257・294図、PL82） 位置 V J-13

105・127・136号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、左袖の先端に石が認められたことから、石を芯材として用い粘土で覆って構築されたものと思われる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。Pitは9基検出され、そのうち柱穴と考えられるものは6基で、カマド両側の2基は補助穴、北東コーナーの1基は貯蔵穴と考えられる。周溝は残存部で全周している。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：金属製品では金環（354図47）が出土している。環（347図1・2・3）・高環（4・5）・甕類（6・7・8・9・10・11）が出土し、そのうちカマド・カマド周辺からは（2・5・6・7・9・10）がえられている。遺構の時期は7c前半と考えられる。カマドの灰からはタニシの小片が検出されている。

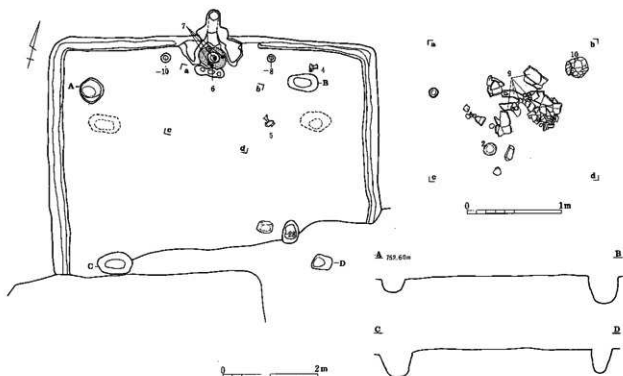


131号竪穴住居跡（第258・293図、PL82） 位置 V J-16

104・105・109・182号建物跡・1002・1012・1013・1014・1015・1019・1020・1031・1032・2024・2026号土坑より古い。



第256図 128号竪穴住居跡



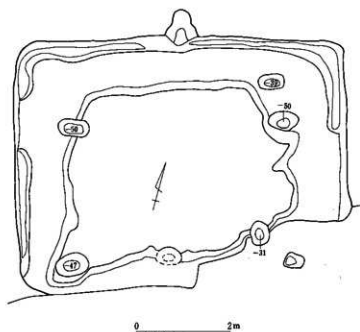
第256図 130号堅穴住居跡

カマド：北壁の中央に位置し、袖内部には芯材として機能していた石が残り、先端部には石の抜き取り痕が認められることから、袖の芯に石を用いて粘土で覆って築いたものと思われる。燃焼部には支脚を抜き取った痕跡が2箇所確認されたことから、二つ掛けのカマドの可能性が考えられる。

施設：床面は平坦で、中央部は硬く、周辺部は軟弱であった。支柱穴と考えられるPitが4基、南壁の中央部には入り口と考えられる張り出しがあり、その床面には1基のPitが検出されている。周溝は全周する。掘形は中央部が高く、周囲が深いタイプである。

遺物と時期：高台環(348図1)・甕(2)

が出土している。遺構の時期は8c中葉と考えられる。



第257図 130号堅穴住居跡 掘形

132号堅穴住居跡(第295図) 位置 V J-19

127号住居跡より古い。

カマド：北壁の中央に位置し、袖先に石を用いて粘土で築いたものと思われる。燃焼部の奥壁側には支脚の抜き取り痕が認められている。